

Niigata University of International and Information Studies

講
義
概
要

講 義 概 要

2013年度

二〇一三年度



新潟国際情報大学

目 次

<前期科目>

基礎科目

1 年基礎科目	5
2 年基礎科目	23
3 年基礎科目	41

共通科目

1 年共通科目	49
2 年共通科目	63
3 年共通科目	69

情報文化学科専門科目

2 年専門科目	75
3 年専門科目	99
4 年専門科目	125

情報システム学科専門科目

1 年専門科目	131
2 年専門科目	137
3・4 年専門科目	149

<後期科目>

基礎科目

1 年基礎科目	171
2 年基礎科目	187
3 年基礎科目	199

共通科目

1 年共通科目	207
2 年共通科目	217
3 年共通科目	221

情報文化学科専門科目

1 年専門科目	227
2 年専門科目	243
3 年専門科目	263
4 年専門科目	289

情報システム学科専門科目

1 年専門科目	295
2 年専門科目	307
3・4 年専門科目	319

文化演習・ゼミナール	329
------------	-----

システム演習	365
システム卒業研究	385

履修登録手続き

1. カリキュラムと履修登録

カリキュラムとは、教育目的にしたがって科目を編成したものです。履修登録とはカリキュラムにしたがい個々の学生が履修したい授業科目を前期と後期に登録する手続きです。大学はこの登録に基づき、各授業の受講者名簿を作成して、授業担当の教員に知らせるとともに各種事務手続きを進めます。履修登録されていない科目は単位修得資格がありませんので、登録手続きの際には、登録漏れや誤登録などがないよう注意して下さい。

2. 履修登録期限

履修登録は、ポータルサイトで前期は4月17日(水)12:00、後期は10月7日(月)12:00までに手続きしてください。期限までに手続きがない場合、その学期での履修は認められません。

3. キャップ制（平成25年度入学生のみ）

各学期中に履修登録できる単位数を制限することで、学生に一つひとつの科目に十分な自己学習時間（予習・復習）を求めることを目的とするため、キャップ制を導入します。

半期（1セメスター）の履修登録上限を22単位とし、4年次は制限を設けません。

定期試験

1. 試験

前期定期試験は7月末、後期定期試験は1月末に行われます。

授業最終日に実施される試験も含まれます。

試験の時間割は掲示によって発表されます。

試験の方法は授業科目により異なり、筆記・レポート・口述・実技等により実施されます。担当教員の指示および掲示に従い受験してください。

なお、次のような場合、受験資格はありません（学則第29・30・31条）。

1) 履修登録を行っていない場合

2) 授業回数15回に対して5回（1／3）以上欠席している場合（成績評価はFになります）。

2. 受験上の注意

試験に際しては、学生証を机上に明示し、次の事項に注意してください。

1) 定期試験の時間は、平常の授業時間表（曜日・教室・時限）とは違う場合があります。担当教員の指示および掲示をよく確認してください。

2) レポートの場合は、大学指定の「レポート提出票」を学務課で受領し、記載のうえ、指定された期限までに提出してください。レポート提出の際に「レポート受領書」を受け取り、成績が確定するまで保管してください。

3) 口述試験・実技試験の場合は、集合場所と実施場所が異なる場合があります。担当教員の指示および掲示をよく確認してください。

4) 受験の際は不正行為のないように真面目にとりくんでください。不正行為の事実が確認され

た場合は、学則に定める懲戒処分に加えて、演習・実習を除き、その学期の全科目の単位取得を認めません。

5) 定期試験期間中に、悪天候による交通機関不通等の事態が発生した場合の処置を次のようにします。

- ①試験開始定刻後30分以内に教員が到着できない場合、試験を延期します。
- ②試験開始定刻後30分の時点で受験予定者が半数に満たない場合、試験を延期します。
- ③試験開始定刻後30分以内に、受験予定者が半数を超えた場合は試験を実施し、受験できなかった学生には別途試験・レポート等で採点します。
- ④当日、すべての試験を中止する場合は、決定時点で大学のホームページに掲載します。

3. 課題レポート

授業中の課題として授業担当教員からレポート提示の指示があった場合は、次の事項に注意してください。

- 1) 特に指定のない限り A4版の用紙を使用し、科目名、担当教員名、提出者の氏名及び学籍番号を明記した表紙をつけ、必ず綴じてください。
- 2) 提出の方法、日時（締め切り）、場所等については、担当教員の指示にしたがってください。
- 3) 一度提出されたレポートの変更・訂正は認められません。

4. 追試験

病気・就職試験・忌引・災害・電車の遅延等の真にやむを得ない理由（※ 自家用車通学の場合、学生本人が交通事故の当事者になった場合を除き、全て対象外）により定期試験を受験できなかった者に対して行われる試験です。

※追試験願が提出されなかった場合には、試験放棄と見なされ単位は認定されません。

※追試験が不合格となった場合、再試験は行いません。

・追試験願の申請手順は次のとおりです。

当該授業科目の試験実施日の翌日までに行ってください（来学出来ない場合は電話で連絡のこと）。大学指定の「追試験願」に記載のうえ、その理由を証明するもの（交通機関遅延証明書・医師の診断書・就職試験受験票など）を添えて、学務課へ願い出てください。

欠席の理由が正当と判断された場合、追試験の受験が認められます。

追試験は、前期にあつては8月上旬に、後期にあつては2月上旬に一定の期間を定めて実施されます。それぞれの学期の追試験期間については、当該期の定期試験期日・時間割が公示される際に、併せて公示されます。公示された追試験期間に追試験を受験しない場合は、追試験の受験資格を失います。

5. 再試験

卒業見込の学生がその学期に履修した科目のうち不合格（D）となった授業科目について1回に限り、再試験（1科目につき2,000円）を願い出ることができます。再試験は前期・後期とも行われます。なお、次の科目については再試験を願い出ることができません。

- ・情報処理演習
- ・情報文化学科専門科目「ゼミナール関連」（卒業論文を含む）科目
- ・情報システム学科専門科目「演習」「卒業研究」（卒業論文を含む）科目
- ・当該年度に不正行為を行ったため不合格となった科目

※ 再試験願が提出されなかった場合は不合格が確定し、単位は認定されません。

・再試験願いの申請については毎回学務課掲示板にてお知らせします。

6. 成績評価

成績の評価は次のとおりです。

平成24年度以前入学者	平成25年度入学者
A (80～100点)	S (90～100点)
B (70～79点)	A (80～89点)
C (60～69点)	B (70～79点)
D (59点以下)	C (60～69点)
E 試験欠席	D (59点以下)
F 受験資格なし	E 試験欠席
	F 受験資格なし

試験を欠席した者、出席不足等により受験資格がない者については、EあるいはFが「学業成績通知書」に記載されます。

「学業成績通知書」は保証人宛に郵送します。郵送時期は次のとおりです。なお、「学業成績通知書」の再発行は1通につき200円の手数料がかかります。紛失しないよう注意してください。

●前期：1～4年：9月上旬

●後期：1～3年：3月下旬

4年：3月上旬

7. 成績確認

当該学期の定期試験の成績に疑問等がある場合には、成績について確認を求めることができます。確認の受付期間は成績が送付されてから1週間以内とします。詳細については、学務課に問い合わせてください。

レポート・論文作成時の盗用・剽窃について

大学での学業を進める上で、書籍や雑誌などの紙媒体の資料に加え、インターネットやデジタルデータを活用して文献や資料を収集することが必要不可欠です。本学学生もこれらの諸資料を活用してレポートを作成する機会が多く、両学科とも卒業論文を卒業要件として義務づけています。しかしながら、資料・情報の一部または全部をそのまま利用すると、「盗用」ないし「剽窃」行為とされてしまいます。

著作権は作者の財産であり、人権です。私たちは、著作物（著作権法第2条第1項：思想又は感情を創作的に表現したものであつて、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの）を利用するとき、著作権を尊重しなければなりません。また、日本では著作権保護期間が50年とされていますが、その期間を過ぎた著作物であっても、上記の「盗用」ないし「剽窃」行為は情報倫理、学術倫理に反するものです。

著作権法第32条第1項には「公表された著作物は、引用して利用することができる。この場合

において、その引用は、公正な慣行に合致するものであり、かつ、報道、批評、研究その他の引用の目的上正当な範囲内で行なわれるものでなければならない」とあります。ここでいう「公正な慣行」や「引用の目的上正当な範囲」として、次のような引用のルールがありますので、レポート・論文作成の際には十分注意してください。

(1) 出典を明示すること。

書籍・雑誌類については、出典（著者名、書名・雑誌名、該当ページ、（雑誌の場合は号数）、出版年など）を明示する必要があります。ウェブサイトから引用する場合は、アドレス（URL）とアクセスした日付を明示することが一般的です。それを見た人が図書館などで検索できるだけの正確かつ十分な情報を提供していることが、最低限のルールです。

(2) 自分の文章と引用部分を明確に区分すること。

引用する部分は「 」でくくったり、行間を空けるなどして、本文と明確に区別できるようにします。文章をそのまま利用しなくても、内容をまとめ直して利用した場合も必ず出典を明らかにしなければなりません。

※引用部分および出典の記述例は大学ホームページを参考にしてください。

集中講義日程（予定）

科 目 名	配当年次	教 員 名	開 講 日
日本政治論	1 年次	椎橋 勝信	8 月 5 日（月）～8 月 9 日（金）
日本の思想	2 年次	今井 修	
比較宗教論	2 年次	鈴木 晋介	

※集中講義を履修する場合は、前期履修登録期間に手続きをしてください。

※講義日程は変更する場合があるので、必ず開講前に掲示板を確認してください。

平成25年度 情報文化学科開講科目一覧

		1 年 次		2 年 次		3 年 次		4 年 次																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
		前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
基 礎 科 目	講義 科目	*政治学 (マクロ)	6	*経済学 (ミクロ)	172	*比較宗教論	24	*社会調査	200																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		*経済学	7	*社会学	173	*社会思想史 (文化)	25	*新潟研究 (政治と経済)	201																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		*哲学	8	*歴史学	174	*文化人類学	26	*新潟研究 (経済)	202																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		*世界地誌	9	*地球環境論	175	*憲法	27	*福祉社会論	203																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
基 礎 科 目	*法学	10	*科学と技術	176	*金融論	28	*ジャーナリズム論	191																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
		11	コミュニケーション論	177	情報文化	29	心理と行動	192																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
		12	論理と数理	178	*言語学	30																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
		13	統計と情報1		*ジェンダー論	31																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
基 礎 科 目	数学基礎	14	線形数学		32	文章表現																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
		15	◎CEP1	179																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
		21	◎CEP2	186																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
		体力診断と運動処方2	39	フィットネス理論及 び実習																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
基 礎 科 目	保健体育																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
基 礎 科 目	就職 関連																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
基 礎 科 目	国際 関連	◎地域研究概論	50	日本経済論	208	異文化理解	64	国際法	222																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		アジアと日本	51	国際政治学	209	平和学	65																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
		日本政治論	52	ワークショップ実践論2	210																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
		国際研究概論	53																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
基 礎 科 目	国際 関連	国際交流インストラ クター演習2	54																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
		情報システム	55	経営と組織	211	情報検索	66	情報社会論	223																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		コンピュータシステム	56	社会情報システム	212	マーケティング	67	情報メディア論	224																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		ネットワークコンピュータ 人間情報システム	57																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
基 礎 科 目	情報 関連	◎情報処理演習1	58																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
			59																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
		日本語1	60	日本語3	213																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
		日本語2	61	日本語4	214																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
基 礎 科 目	留学生 関連	日本語1	62	日本語2	215																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
		日本語事情1																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
		日本語事情2																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
		◎基礎演習1	330	◎基礎演習2	330	◎国際研究ゼミナール1	338	◎国際研究ゼミナール2※1	338	◎国際研究ゼミナール3	344	◎国際研究ゼミナール4	344	◎国際研究ゼミナール5	344	◎国際研究ゼミナール6	344	◎卒業論文																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
基 礎 科 目	演 ゼミナール			◎ロシア語1	228	◎ロシア語2	229	◎中国語1	230	◎中国語2	231	◎中国語3	232	◎中国語4	233	◎中国語5	234	◎中国語6	235	◎中国語7	236	◎中国語8	237	◎中国語9	238	◎中国語10	239	◎中国語11	240	◎中国語12	241	◎中国語13	242	◎中国語14	243	◎中国語15	244	◎中国語16	245	◎中国語17	246	◎中国語18	247	◎中国語19	248	◎中国語20	249	◎中国語21	250	◎中国語22	251	◎中国語23	252	◎中国語24	253	◎中国語25	254	◎中国語26	255	◎中国語27	256	◎中国語28	257	◎中国語29	258	◎中国語30	259	◎中国語31	260	◎中国語32	261	◎中国語33	262	◎中国語34	263	◎中国語35	264	◎中国語36	265	◎中国語37	266	◎中国語38	267	◎中国語39	268	◎中国語40	269	◎中国語41	270	◎中国語42	271	◎中国語43	272	◎中国語44	273	◎中国語45	274	◎中国語46	275	◎中国語47	276	◎中国語48	277	◎中国語49	278	◎中国語50	279	◎中国語51	280	◎中国語52	281	◎中国語53	282	◎中国語54	283	◎中国語55	284	◎中国語56	285	◎中国語57	286	◎中国語58	287	◎中国語59	288	◎中国語60	289	◎中国語61	290	◎中国語62	291	◎中国語63	292	◎中国語64	293	◎中国語65	294	◎中国語66	295	◎中国語67	296	◎中国語68	297	◎中国語69	298	◎中国語70	299	◎中国語71	300	◎中国語72	301	◎中国語73	302	◎中国語74	303	◎中国語75	304	◎中国語76	305	◎中国語77	306	◎中国語78	307	◎中国語79	308	◎中国語80	309	◎中国語81	310	◎中国語82	311	◎中国語83	312	◎中国語84	313	◎中国語85	314	◎中国語86	315	◎中国語87	316	◎中国語88	317	◎中国語89	318	◎中国語90	319	◎中国語91	320	◎中国語92	321	◎中国語93	322	◎中国語94	323	◎中国語95	324	◎中国語96	325	◎中国語97	326	◎中国語98	327	◎中国語99	328	◎中国語100	329	◎中国語101	330	◎中国語102	331	◎中国語103	332	◎中国語104	333	◎中国語105	334	◎中国語106	335	◎中国語107	336	◎中国語108	337	◎中国語109	338	◎中国語110	339	◎中国語111	340	◎中国語112	341	◎中国語113	342	◎中国語114	343	◎中国語115	344	◎中国語116	345	◎中国語117	346	◎中国語118	347	◎中国語119	348	◎中国語120	349	◎中国語121	350	◎中国語122	351	◎中国語123	352	◎中国語124	353	◎中国語125	354	◎中国語126	355	◎中国語127	356	◎中国語128	357	◎中国語129	358	◎中国語130	359	◎中国語131	360	◎中国語132	361	◎中国語133	362	◎中国語134	363	◎中国語135	364	◎中国語136	365	◎中国語137	366	◎中国語138	367	◎中国語139	368	◎中国語140	369	◎中国語141	370	◎中国語142	371	◎中国語143	372	◎中国語144	373	◎中国語145	374	◎中国語146	375	◎中国語147	376	◎中国語148	377	◎中国語149	378	◎中国語150	379	◎中国語151	380	◎中国語152	381	◎中国語153	382	◎中国語154	383	◎中国語155	384	◎中国語156	385	◎中国語157	386	◎中国語158	387	◎中国語159	388	◎中国語160	389	◎中国語161	390	◎中国語162	391	◎中国語163	392	◎中国語164	393	◎中国語165	394	◎中国語166	395	◎中国語167	396	◎中国語168	397	◎中国語169	398	◎中国語170	399	◎中国語171	400	◎中国語172	401	◎中国語173	402	◎中国語174	403	◎中国語175	404	◎中国語176	405	◎中国語177	406	◎中国語178	407	◎中国語179	408	◎中国語180	409	◎中国語181	410	◎中国語182	411	◎中国語183	412	◎中国語184	413	◎中国語185	414	◎中国語186	415	◎中国語187	416	◎中国語188	417	◎中国語189	418	◎中国語190	419	◎中国語191	420	◎中国語192	421	◎中国語193	422	◎中国語194	423	◎中国語195	424	◎中国語196	425	◎中国語197	426	◎中国語198	427	◎中国語199	428	◎中国語200	429	◎中国語201	430	◎中国語202	431	◎中国語203	432	◎中国語204	433	◎中国語205	434	◎中国語206	435	◎中国語207	436	◎中国語208	437	◎中国語209	438	◎中国語210	439	◎中国語211	440	◎中国語212	441	◎中国語213	442	◎中国語214	443	◎中国語215	444	◎中国語216	445	◎中国語217	446	◎中国語218	447	◎中国語219	448	◎中国語220	449	◎中国語221	450	◎中国語222	451	◎中国語223	452	◎中国語224	453	◎中国語225	454	◎中国語226	455	◎中国語227	456	◎中国語228	457	◎中国語229	458	◎中国語230	459	◎中国語231	460	◎中国語232	461	◎中国語233	462	◎中国語234	463	◎中国語235	464	◎中国語236	465	◎中国語237	466	◎中国語238	467	◎中国語239	468	◎中国語240	469	◎中国語241	470	◎中国語242	471	◎中国語243	472	◎中国語244	473	◎中国語245	474	◎中国語246	475	◎中国語247	476	◎中国語248	477	◎中国語249	478	◎中国語250	479	◎中国語251	480	◎中国語252	481	◎中国語253	482	◎中国語254	483	◎中国語255	484	◎中国語256	485	◎中国語257	486	◎中国語258	487	◎中国語259	488	◎中国語260	489	◎中国語261	490	◎中国語262	491	◎中国語263	492	◎中国語264	493	◎中国語265	494	◎中国語266	495	◎中国語267	496	◎中国語268	497	◎中国語269	498	◎中国語270	499	◎中国語271	500	◎中国語272	501	◎中国語273	502	◎中国語274	503	◎中国語275	504	◎中国語276	505	◎中国語277	506	◎中国語278	507	◎中国語279	508	◎中国語280	509	◎中国語281	510	◎中国語282	511	◎中国語283	512	◎中国語284	513	◎中国語285	514	◎中国語286	515	◎中国語287	516	◎中国語288	517	◎中国語289	518	◎中国語290	519	◎中国語291	520	◎中国語292	521	◎中国語293	522	◎中国語294	523	◎中国語295	524	◎中国語296	525	◎中国語297	526	◎中国語298	527	◎中国語299	528	◎中国語300	529	◎中国語301	530	◎中国語302	531	◎中国語303	532	◎中国語304	533	◎中国語305	534	◎中国語306	535	◎中国語307	536	◎中国語308	537	◎中国語309	538	◎中国語310	539	◎中国語311	540	◎中国語312	541	◎中国語313	542	◎中国語314	543	◎中国語315	544	◎中国語316	545	◎中国語317	546	◎中国語318	547	◎中国語319	548	◎中国語320	549	◎中国語321	550	◎中国語322	551	◎中国語323	552	◎中国語324	553	◎中国語325	554	◎中国語326	555	◎中国語327	556	◎中国語328	557	◎中国語329	558	◎中国語330	559	◎中国語331	560	◎中国語332	561	◎中国語333	562	◎中国語334	563	◎中国語335	564	◎中国語336	565	◎中国語337	566	◎中国語338	567	◎中国語339	568	◎中国語340	569	◎中国語341	570	◎中国語342	571	◎中国語343	572	◎中国語344	573	◎中国語345	574	◎中国語346	575	◎中国語347	576	◎中国語348	577	◎中国語349	578	◎中国語350	579	◎中国語351	580	◎中国語352	581	◎中国語353	582	◎中国語354	583	◎中国語355	584	◎中国語356	585	◎中国語357	586	◎中国語358	587	◎中国語359	588	◎中国語360	589	◎中国語361	590	◎中国語362	591	◎中国語363	592	◎中国語364	593	◎中国語365	594	◎中国語366	595	◎中国語367	596	◎中国語368	597	◎中国語369	598	◎中国語370	599	◎中国語371	600	◎中国語372	601	◎中国語373	602	◎中国語374	603	◎中国語375	604	◎中国語376	605	◎中国語377	606	◎中国語378	607	◎中国語379	608	◎中国語380	609	◎中国語381	610	◎中国語382	611	◎中国語383	612	◎中国語384	613	◎中国語385	614	◎中国語386	615	◎中国語387	616	◎中国語388	617	◎中国語389	618	◎中国語390	619	◎中国語391	620	◎中国語392	621	◎中国語393	622	◎中国語394	623	◎中国語395	624	◎中国語396	625	◎中国語397	626	◎中国語398	627	◎中国語399	628	◎中国語400	629	◎中国語401	630	◎中国語402	631	◎中国語403	632	◎中国語404	633	◎中国語405	634	◎中国語406	635	◎中国語407	636	◎中国語408	637	◎中国語409	638	◎中国語410	639	◎中国語411	640	◎中国語412	641	◎中国語413	642	◎中国語414	643	◎中国語415	644	◎中国語416	645	◎中国語417	646	◎中国語418	647	◎中国語419	648	◎中国語420	649	◎中国語421	650	◎中国語422	651	◎中国語423	652	◎中国語424	653	◎中国語425	654	◎中国語426	655	◎中国語427	656	◎中国語428	657	◎中国語429	658	◎中国語430	659	◎中国語431	660	◎中国語432	661	◎中国語433	662	◎中国語434	663	◎中国語435	664	◎中国語436	665	◎中国語437	666	◎中国語438	667	◎中国語439	668	◎中国語440	669	◎中国語441	670	◎中国語442	671	◎中国語443	672	◎中国語444	673	◎中国語445	674	◎中国語446	675	◎中国語447	676	◎中国語448	677	◎中国語449	678	◎中国語450	679	◎中国語451	680	◎中国語452	681	◎中国語453	682	◎中国語454	683	◎中国語455	684	◎中国語456	685	◎中国語457	686	◎中国語458	687	◎中国語459	688	◎中国語460	689	◎中国語461	690	◎中国語462	691	◎中国語463	692	◎中国語464	693	◎中国語465	694	◎中国語466	695	◎中国語467	696	◎中国語468	697	◎中国語469	698	◎中国語470	699	◎中国語471	700	◎中国語472	701	◎中国語473	702	◎中国語474	703	◎中国語475	704	◎中国語476	705	◎中国語477	706	◎中国語478	707	◎中国語479	708	◎中国語480	709	◎中国語481	710	◎中国語482	711	◎中国語483	712	◎中国語484	713	◎中国語485	714	◎中国語486	715	◎中国語487	716	◎中国語488	717	◎中国語489	718	◎中国語490	719	◎中国語491	720	◎中国語492	721	◎中国語493	722	◎中国語494	723	◎中国語495	724	◎中国語496	725	◎中国語497	726	◎中国語498	727	◎中国語499	728	◎中国語500	729	◎中国語501	730	◎中国語502	731	◎中国語503	732	◎中国語504	733	◎中国語505	734	◎中国語506	735	◎中国語507	736	◎中国語508	737	◎中国語509	738	◎中国語510	739	◎中国語511	740	◎中国語512	741	◎中国語513	742	◎中国語514	743	◎中国語515	744	◎中国語516	745	◎中国語517	746	◎中国語518	747	◎中国語519	748	◎中国語520	749	◎中国語521	750	◎中国語52

平成24年度以前 情報システム学科開講科目一覧

		1 年 次			2 年 次			3・4 年次			4 年 次		
	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	
基 礎 科 目	政治学 (マクロ)	6 経済学 (ミクロ)	172 比較宗教論	24 新潟研究 (自然と文化)	188 社会調査倫理学	42 市民社会論	200 新潟研究 (政治と経済)						
	経済学	7 社会学	173 社会思想史	25 民法	189 倫理学	43 福祉社会論	201 福祉社会論						
	哲学	8 歴史学	174 文化人類学	26 財政学	190 社会学	44 地域経営論	202 地域経営論						
	世界地誌	9 地球環境論	175 憲法	27 ジャーナリズム論	191 ジャーナリズム論								
	法学	10 *科学と技術	176 金融論	28 *心理と行動	192 *心理学								
専 門 科 目	*コミュニティ論	11 *コミュニケーション技術	177 *情報文化	29 *企業と経済	219 *情報社会論	71 *情報と法	224						
	*論理と数理	12 *コミュニケーション数学	178 ジェンダー論	66 *マーケティング	219 *情報メディア論	72	224						
	◎統計と情報 (平成21年以前入学者)	13 *統計と情報 (平成21年以前入学者)	179 *文章表現	67									
	数学基礎	14											
	英語	16 ◎英語1A・B・C	180 ◎英語3A・B・C	33 ◎英語4A・B・C	193								
共 通 科 目	保健体育	21 体力診断と運動処方1	186 フィットネス理論及び実習	39									
	就職関連												
	国際関連	50 日本経済論	208 異文化理解	64 国際経済学	198 キャリア開発1	44							
	国際関連	51 国際政治学	209 平和学	65 国際経済学	218 国際法	70 社会調査実習1・2	222						
	情報関連	52 ワークショップ実践論2	210										
専 門 科 目	◎情報システム	55 ◎経営と組織	211 ◎情報検索	66 *企業と経済	219 *情報社会論	71 *情報と法	224						
	◎コンピュータシステム	56 ◎社会情報システム	212 ◎マーケティング	67									
	◎ネットワークコンピュータ	57											
	◎人間情報システム	58											
	◎基礎演習1	366	◎情報システム演習1	374 ◎情報システム演習2	374								
専 門 科 目	◎情報処理演習F	367 ◎情報処理演習U1 (H)	369 ◎情報処理演習U1 (H)	369 ◎情報処理演習U1 (H)	369 ◎情報処理演習U1 (H)								
	◎情報処理演習U1 (新)	368 ◎情報処理演習U2 (H)	370 ◎情報処理演習U2 (H)	370 ◎情報処理演習U2 (H)	370 ◎情報処理演習U2 (H)								
	◎情報処理演習W	373 ◎情報処理演習W	373 ◎情報処理演習W	373 ◎情報処理演習W	373 ◎情報処理演習W								
	◎情報処理演習C1	372 ◎情報処理演習C1	372 ◎情報処理演習C1	372 ◎情報処理演習C1	372 ◎情報処理演習C1								
	◎情報処理演習C2	372 ◎情報処理演習C2	372 ◎情報処理演習C2	372 ◎情報処理演習C2	372 ◎情報処理演習C2								
専 門 科 目	情報産業情報リテラシーと倫理	情報産業情報リテラシーと倫理	296 システム論	138 情報論	308 情報システム特論	150 情報システム特論	320 情報システム特論						
	人間情報工学1	人間情報工学1	297 情報システムモデル	139	308 情報システム特論	151 情報システム特論	321 情報システム特論						
専 門 科 目	人間情報工学1	人間情報工学1	299 人間情報工学2	145 生理機能と情報行動科学	314 地域情報システム	160 社会理論と調査法	325 社会理論と調査法						
				生活統計/生活情報 (平成21年以前入学者)	315 地域情報システム	161 生活と法律	326 生活と法律						
				地域統計	316								
					317								
専 門 科 目	ビジネスモデル	ビジネスモデル	298 経営と情報財務会計	143 生産企画と管理	311 生産情報システム	156 ペンチャービジネス	324 ペンチャービジネス						
				流通と物流管理会計	144 流通と物流管理会計	157 企業と国際化	324 企業と国際化						
					145 経営と情報財務会計	158 商品企画	324 商品企画						
					146 経営と情報財務会計	159 経営と法律	324 経営と法律						
					147 経営と情報財務会計	160 経営と法律	324 経営と法律						
専 門 科 目	コンピュータソフトウェア	コンピュータソフトウェア	132 アルゴリズム	140 プログラミング環境	309 知識情報処理	153 人工知能	322 人工知能						
			テレコウェアエンジニアリング	141 テレコウェアエンジニアリング	310 コンピュータビジョン	154 データベース	323 データベース						
			モデリング数学	142 モデリング数学	310 マルティメディア情報処理	155 シミュレーション	323 シミュレーション						
			情報論理システム数学	143 情報論理システム数学	311 多変量解析	162 シミュレーション	327 シミュレーション						
			統計と情報2 (平成21年以前入学者)	301 統計と情報2 (平成21年以前入学者)	312 オペレーションリサーチ2	163 オペレーションリサーチ2	327 オペレーションリサーチ2						
他	基本情報処理特論1	133 基本情報処理特論1	303 基本情報処理特論1	148 基本情報処理特論1	303 基本情報処理特論1	164 基本情報処理特論1	328 基本情報処理特論1						

平成25年度入学者 情報システム学科 経営コースカリキュラム

			1 年 次		2 年 次		3 ・ 4 年次		年 次										
			前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期									
基礎科目	講義科目	政治学 (マクロ)	6	経済学 (ミクロ)	172	比較宗教論	24	新潟研究 (自然と文化)	188	社会調査	42	市民社会論	200						
		経済学	7	社会学	173	社会思想史	25	民法	189	倫理学	43	新潟研究 (政治と経済)	201						
		哲学	8	歴史学	174	文化人類学	26	財政学	190			福祉社会論	202						
		世界地誌	9	地球環境論	175	憲法	27	ジャーナリズム論	191			地域経営論	203						
基礎科目	講義科目	社会学	10	科学と技術	176	金融論	28	心理と行動	192										
		法社会学	11	コミュニケーション技術	177	情報文化	29												
		コミュニケーション論	12	線形数学	178	言語学	30												
		論理と数理	13	ジェンダー論	31														
基礎科目	講義科目	統計と情報1	14			文章表現	32												
		統計と情報2	15																
		数学基礎	16	英語2 A・B・C	180	英語3 A・B・C	33	英語4 A・B・C	193										
		体力診断と運動処方1	21	体力診断と運動処方2	186	フィットネス理論及び実習	39												
共通科目	保健体育	就職関連																	
		国際関連	50	日本経済論	208	異文化理解	64	キャリア開発1	198	キャリア開発2	44	社会調査実習1・2	222						
		国際関連	51	国際政治学	209	平和学	65		218	国際法	70								
		国際研究概論	52	ワークショップ実践論2	210														
共通科目	情報関連	国際交流インストラクター演習2	53																
		情報システム	54																
		情報システム	55	経営と組織	211	情報検索	66	企業と経済	219	情報社会論	71	情報と法	224						
		人間情報システム	56	社会情報システム	212	マーケティング	67												
共通科目	留学生関連	ネットワークコンピュティング	57																
		日本語1	60	日本語3	213														
		日本語2	61	日本語4	214														
		日本語事情1	62	日本語事情2	215														
専門科目	経営コース	基礎演習1	366	基礎演習2	367	情報システム演習(A分野)	377	情報システム演習(A分野)	377	卒業研究1 (経営)	386	卒業研究2	386	卒業研究3	386	卒業研究4	386	卒業論文	386
				情報システム演習(B分野)	378	情報システム演習(B分野)	378	情報システム演習(C分野)	379	情報システム演習(C分野)	379								
				情報システム演習(D分野)	379	情報システム演習(D分野)	379	情報システム演習(U1 (新))	368	情報システム演習(U1 (新))	368								
				情報システム演習(U2 (新))	370	情報システム演習(U2 (新))	370	情報システム演習(W)	371	情報システム演習(W)	371								
専門科目	経営コース	情報処理演習F	367	情報処理演習U1 (新)	368	情報処理演習U1 (新)	368	情報処理演習U1 (新)	368	情報処理演習U2 (新)	371	情報処理演習U2 (新)	371	情報処理演習W	373	情報処理演習W	373	情報処理演習C1	372
		情報処理演習U1 (新)	368	情報処理演習U2 (新)	370	情報処理演習U2 (新)	370	情報処理演習C1	372	情報処理演習C1	372	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	372		
		情報処理演習W	371	情報処理演習W	372	情報処理演習W	372	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	372		
		情報処理演習C1	372	情報処理演習C1	372	情報処理演習C1	372	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	373	情報処理演習C2	372		
専門科目	経営コース	人間情報工学1	299	人間情報工学2	299	人間情報工学2	145	生理機能と情報行動科学	314	認知科学	160	社会理論と調査法	325	社会理論と調査法	326				
専門科目	情報コース	ビジネスモデル	298	経営と情報財務会計	143	経営と情報財務会計	144	生産企画と管理	311	生産情報システム	156	ベンチャービジネス	324	ベンチャービジネス	324				
専門科目	情報コース	情報産業	296	情報リテラシーと倫理	297	情報システムモデル	138	情報論	308	情報システム特設									

◎：必修科目、○：選択必修科目

前期科目

基礎科目



1 年基礎科目（前期）

政治学
経済学（マクロ）
哲学
世界地誌
法学
コミュニケーション論
論理と数理
統計と情報1／統計と情報
数学基礎
CEP 1
英語 1
体力診断と運動処方 1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	政治学	2	前	越智敏夫（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

政治を人間によって繰り返される行動のひとつとして理解し、その政治の網の目の中で私たちはどのように認識し行動するべきか、その基本的な方法について考える。現実政治のなかの時事的な出来事についても言及しながら、「市民」概念の現代的意義を特に議論したい。

<各回毎の授業内容>

1	はじめに	1-1 日常世界の認識方法:主体としての市民	（講義1）
2	政治とは何か	2-1 政治の定義	(2)
		2-2 政治秩序	(3)
3	政治の認識方法	3-1 政治理論	(4)
		3-2 状況・制度・組織	(5)
		3-3 権力と支配	(6)
		3-4 権威とリーダーシップ	(7)
		3-5 シンボルとイデオロギー	(8)
4	国家とは何か	4-1 国家の概念	(9)
		4-2 ヨーロッパにおける古代と中世	(10)
		4-3 近代社会	(11)
		4-4 近代国民国家の変容:夜警国家と福祉国家	(12)
5	政治体制	5-1 民主主義と独裁	(13)
		5-2 政治システム	(14)
6	まとめ	6-1 市民の政治とは何か	(15)

<成績評価方法>

学期末筆記試験（持ち込み不可）のみで採点。

<教科書・参考文献>

教科書なし。参考文献は講義中に適宜指示する。また図書館のサイトの「指定図書リスト」を参照のこと。

<受講に当たっての留意事項>

講義ノートを本学のウェブページ上で公開する予定なので、受講前に各自でプリントアウトして教室に持参すること。U R L → http://www.nuis.ac.jp/~tochi/

また、本講義は全カリキュラムにおいて政治的現象を学ぶための基礎となるものである。「日本政治論」「日本政治史」「国際政治学」「国際政治史」などを受講予定の学生は履修しておくことが望ましい。

<学習到達目標>

政治学の基礎を身につけると同時に、市民としての自覚をもつこと。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	経済学（マクロ）	2	前	安藤 潤（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科：選択、情報システム学科経営コース：選択必修

<授業目的>

この講義の目的は、高校数学を復習しながら①マクロ経済学の重要用語の概念を理解すること、②マクロ経済学の中から国民所理論の基礎を学ぶこと、③深刻な不況時における財政政策と金融政策の役割を、講義内容だけでなく練習問題を通じて理解することである。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション
2. 国民所得①：企業の生産活動
3. 国民所得②：国内総生産
4. 国民所得③：国民所得、名目と実質
5. 国民所得水準の決定①：経済部門と総需要、消費需要の決定
6. 国民所得水準の決定②：投資需要の決定
7. 国民所得水準の決定③：二部門モデルによる均衡国民所得の決定
8. 国民所得水準の決定④：インフレ・ギャップとデフレ・ギャップ、乗数理論と投資乗数
9. 国民所得水準の決定⑤：三部門モデルによる均衡国民所得の決定
10. 貨幣市場①：貨幣の定義、貨幣供給
11. 貨幣市場②：貨幣需要
12. 貨幣市場③：貨幣市場の均衡
13. IS-LM分析①：財市場の均衡
14. IS-LM分析②：貨幣市場の均衡
15. IS-LM分析③：財市場と貨幣市場の同時均衡、財政政策・金融政策の効果
16. 定期試験

<成績評価方法>

試験（100％）。

<教科書・参考文献>

青木孝子・安藤潤・鎗田亨・塚原康博『入門 現代経済学要論 〔第2版〕』白桃書房、2,381円＋税

<受講に当たっての留意事項>

教科書は必ず購入し、授業の際に必ず持ってくる。スマートフォン・携帯電話・PHSの類は必ず電源を切ること。飲食禁止。以上のことを守れない学生は退出を願うこともある。また、教員の注意にもかかわらず繰り返す場合にはその場で定期試験受験資格をはく奪することもある。以上の点を踏まえて履修登録をすること。講義で数学（1次関数、等差数列とその和の公式）及びグラフの使用は避けられない。ただし微分・積分は用いない。

この授業を半期受講したからといってすぐに初級レベルのマクロ経済学すべてを理解できるようになるほど甘くはない。ただし資格試験は最終的に合格できればいいのだから、公務員試験などでマクロ経済学が必須の学生は、半期で理解できようができればこの授業を機に学習を継続し、一定レベルに達したらレベルを上げていくこと。

<学習到達目標>

国民所得決定理論の基礎を理解し、この授業では扱うことのできない労働市場のマクロ経済分析、総需要・総供給分析に進むための基礎を作ること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	哲学	2	前	阿部ふく子
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

西洋哲学の基本的な主題と思考方法をいくつか取り上げて講義します。講義内容は主題別の構成をとりますが、哲学史的な背景についても適宜説明を補いながら進めたいと思います。哲学の営みとは——自然、知、信仰、幸福、道徳、科学、心身、自我、経験、生、等々——人間が生きてゆくなかで直面するさまざまな普遍的な事柄について、「自分自身で」きめ細かく考えてみることにほかなりません。ただしこの営みは独りよがりなものであってはならず、二千数百年にも及ぶ哲学の歴史のなかですでに営まれてきたさまざまな思考の足跡をたどり、これらの知的遺産と対峙してみるなかではじめて私たちは自ら考える力を養うことができることにもなります。この講義では、<自分自身で考えること>・<歴史の所産を享受すること>という二つのアプローチを通じて、論理的・批判的思考力を養うとともに洞察力や解釈力を鍛え、個別性と普遍性とに豊かに開かれた精神を形成してゆくことをめざします。

<各回毎の授業内容>

01. イントロダクション——哲学的問いの射程

02. 哲学と常識はどう違うのか①——ソクラテスの<無知の知>

03. 哲学と常識はどう違うのか②——プラトンの<洞窟の比喩>

04. 哲学と常識はどう違うのか③——ヘーゲルの弁証法

05. 幸福とは何か①——アリストテレスの生

06. 幸福とは何か②——功利主義

07. 幸福とは何か③——カントの義務倫理学

08. 何かを認識するとはどういうことか①: デカルトの方法的懐疑

09. 何かを認識するとはどういうことか②: ロック、バークリ、ヒュームの経験論

10. 何かを認識するとはどういうことか③: カントの超越論的哲学

11. 私とは何か①——フィヒテの自我論

12. 私とは何か②——実存哲学

13. 私とは何か③——フロイトの欲望論

14. 価値とは何か——ニーチェ

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

毎回課されるコメントペーパー（30%）、および記述式の期末試験（70%）による。

※コメントペーパーは各回の講義内容に関連する簡単な質問に答えてもらう方式です。提出回数ではなく内容で評価します。

<教科書・参考文献>

貫成人『図説・標準哲学史』、新書館、2008年（1,575円）

（※講義は基本的にレジュメに即して進めますが、哲学史全体が概観でき、予習・復習にも役立つ資料として上記のテキストも適宜取り入れますので、購入のうえ授業に臨んでください。）

<受講に当たっての留意事項>

・上記テキスト等を用いて毎回予習のうえ授業に臨むこと。

・毎回の講義で配布した資料にはすべて目を通すこと。

・講義時に紹介する原典や参考文献等にも積極的に手を伸ばし、自主的に学習を進めることを望みます。

<学習到達目標>

・哲学の基本的な用語、主要な問い、議論を理解し説明することができる。

・上記の理解を、個人的・日常的な所感や出来事にも柔軟に適用し、自ら哲学的な問いを立て、見解を述べるができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	世界地誌	2	前	澤口晋一（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この授業では、前半1～7で地球環境、後半8～15で世界の地誌を扱う予定でいます。前半では純粹に地球の「自然環境」そのものを、地球誕生からとりあげることで惑星地球とその環境の特徴を理解します。後半は、世界の諸地域の地理的事象の基本を概説し、国際理解のための基礎的知識を身につけることを目的とします。

<各回毎の授業内容>

1. 太陽系の中の地球, 太陽系惑星の特徴と比較

2. 地球の誕生と進化

3. 地圏の成り立ち①（地殻の特徴と形成）

4. 地圏の成り立ち②（大陸と海洋の形成とその変遷—プレートテクトニクスの視点から）

5. 大気の大循環（その成因と分布）

6. 大気の大循環と気候帯の形成（ケッペンの気候区分を用いて）

7. 地球史と気候変動

8. ユーラシアの地誌

9. アジアの地誌①

10. アジアの地誌②

11. 北米の地誌

12. 南米の地誌

13. 欧州の地誌

14. アフリカの地誌

15. 日本の地誌

<成績評価方法>

中間レポート（10%）, 定期試験（90%）

<教科書・参考文献>

テキストは使用しませんが、高校で使用した地図帳を毎回持参してください。高校で地理を履修せず、地図帳を持っていない学生は、二宮書店『コンパクト地図帳』1600円を購入しておくことが望ましい。

<受講に当たっての留意事項>

授業中は私語・飲食（持ち込み）, ゲームは厳禁！

携帯電話については、毎回授業の最初に電源を（みなさんが）切ったことを確認してから始めます。

<学習到達目標>

この講義では、上記の授業内容を通じて地球という惑星の特徴を理解し、そのうえで世界の諸地域の地理的事象についての知識を身につけることを目標としています。

1～7:50%

8～12:50%

（関連する学習・教育目標:A）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	法学	2	前	熊谷 卓（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

人は、この世に生を受けてから死ぬまで、「法」と隣り合わせの関係にある。親から名前を授けられ、学校へ入学、卒業してからの就職、結婚や離婚といった事項についていえば、「法」が密接な関係を有しているということがいえる。本講義では、「法」というものがどのように機能していくのか、このことについて考察する。

<各回毎の授業内容>

1 オリエンテーション

2 法との遭遇—日常生活は「法」であふれている！

3 法とは何か

4 刑法とはなにか？－1

5 刑法とはなにか？－2

6 刑事責任論－1

7 刑事責任論－2

8 刑事責任論－3

9 犯罪とはなにか？－1

10 犯罪とはなにか？－2

11 量刑論－1

12 量刑論－2

13 犯罪者処遇論－3

14 残された問題—民事法も視野に入れて

15 まとめ

16 試験

<成績評価方法>

主として試験による成績評価

<教科書・参考文献>

「六法全書」を指定テキストとする。

<受講に当たっての留意事項>

プリントを配布することがある。欠席者には与えない。

<学習到達目標>

法学的思考の習得

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	コミュニケーション論	2	前	逸見龍生
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

コミュニケーションとは何か。情報化やグローバル化と言われる現代社会において、それはどのような意味をもっているのだろうか。この授業では、多様な広がりをもつコミュニケーションという言葉の軸に、われわれが日常世界のなかで無意識におこなっている様々なコミュニケーション行為を考察していく。

<各回毎の授業内容>

主に三つの観点からコミュニケーションを論じていく。

第一部：コミュニケーションの原点～パーソナルコミュニケーションを考える

第1回：授業オリエンテーション

第2回：日本語と欧米語におけるコミュニケーションの定義

第3回：情報共有態としてのコミュニケーション

第4回：アイデンティティの構築としてのコミュニケーション

第二部：メディア論としてのコミュニケーション

第5回：メディア史とコミュニケーション技術の進展①

第6回：メディア史とコミュニケーション技術の進展②

第7回：記号論の考え方（ソシュール、ロラン・バルトの議論の紹介）

第8回：記号論とメディア論

第9回：メディア分析の基礎

第10回：メディア分析の基礎と応用

第11回：メディア分析の基礎と応用②——アカデミック・ライティングの技術

第三部：メディア社会の中のコミュニケーションの諸相

第12回：レポート講評

第13回：メディア社会におけるコミュニケーション分析の現状と今後①

第14回：メディア社会におけるコミュニケーション分析の現状と今後②

第15回：まとめ

<成績評価方法>

平常点（出席＋アチーブメント・テスト＋授業後コメント）、小レポート、期末試験の総合

<教科書・参考文献>

授業で使用するテキストはコピーを配付する。参考文献は授業において指示。

<受講に当たっての留意事項>

- ・授業中の私語は禁止とする。開始20分以後の途中入室、および無断での途中退室は認めない。
- ・毎回出席を取る。公休ないしやむを得ない事情（就職活動、クラブ活動の大会、ゼミ等の特別授業）で欠席の際にはその旨届けること。講義全体の3分の1（おおよそ4回以上）を超えて無断欠席した場合には、期末試験受験資格をえられないものとする。
- ・毎回授業終了後を書くコメントカードは、評価の対象とする。また、公的な出席票の替わりとする。そのため、他人のコメントカードを代理記入するような行為は重大な不正行為と見なし、以後の講義・試験への出欠は、記入を依頼した者、実際に記入した者の双方ともに差し止める。

<学習到達目標>

現代社会におけるコミュニケーション概念の重要性を理解し、コミュニケーション学の基礎的な考え方をを用いて、実際の社会分析に応用する力を養うこと。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	論理と数理	2	前	石井忠夫（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

論理学は古代ギリシャのアリストテレス以来受け継がれて来た歴史の古い学問であるが、これに数学の中で用いられている記号を用いた形式化の手法を導入することにより、現代的な数理（記号）論理学が誕生した。本講義では、数理論理学の基礎を情報文化との関連を考慮しつつ解説する。

<各回毎の授業内容>

1. 論理学の入門（情報文化と論理、講義の位置付け）

2. 論理式と真偽（命題の表現、真偽表、同値な命題）

3. 否定命題と連言命題（命題関数と集合の入門）

4. 選言命題と双対原理

5. 基本的なトートロジー

6. 論理式の標準形

7. 含意命題と直観主義論理

8. 推論と推論規則

9～11. 自然的推論（NK、NJ）

12. 一階の述語論理（量化記号、束縛変数と自由変数）

13. 血族関係の表現

14. NK と NJ の述語論理

15. 有限幾何学

16. 定期試験

<成績評価方法>

毎回の小問が10点、レポート2回の合計が30点、および期末試験が60点の合計点で評価する。

<教科書・参考文献>

田村三朗、荒金憲一、平井崇晴共著:論理と思考（大阪教育図書、1999年）1,600円

<受講に当たっての留意事項>

(1)数学を学ぶ時と同じように、内容を理解するには自分でいくつかの演習問題を解くのが良い。よって、学習の便宜を図るために、数回の小問題を課す。

(2)教科書に沿って授業を進めるので、早めに教科書を購入しておくのが望ましい。

(3)基礎自由科目「数学基礎」の内容を修得していることが望ましい。

<学習到達目標>

論理的思考の基礎となる命題の組み立て方（30％）および論理式を用いた記号による表現（40％）を理解し、また、日常生活での正しい判断能力（30％）を習得する。

（関連する学習・教育目標：D）平成24年度生以前

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	統計と情報 1	2	前	伊村知子（情報システム）
22～24年						
21年度以前	基 礎	1 年	統計と情報			

情報文化学科選択 情報システム学科必修

<授業目的>

わたしたちの身の周りには、さまざまな情報があふれている。このような膨大な情報から意味のある情報を抽出し、その特徴や傾向を把握するためには、統計学のテクニックや知識が必要とされる。本講義では、統計学の基礎を習得し、基本的な概念と方法を理解することを目標とする。

<各回毎の授業内容>

1. 統計学とは

2. 度数分布表

3. ヒストグラム

4. 全体調査と一部調査

5. データの中心傾向を表す測度:平均値、中央値、最頻値

6. データのバラツキを表す測度:標準偏差、分散、範囲

7. 度数分布表からの平均値、分散、標準偏差

8. 散布図、相関分析

9. まとめ:中間試験

10. 母集団・標本・ランダムサンプリング

11. いろいろな分布①:二項分布・正規分布

12. いろいろな分布②:t分布・ χ^2 （カイ二乗）分布

13. 母数の推定①:母平均の推定、点推定、区間推定

14. 母数の推定②:母分散の推定、不偏分散

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に実施する確認問題（40%）と定期試験（60%）により、総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

教科書は指定しない。必要な資料は授業中に随時、配布する。

<受講に当たっての留意事項>

予習・復習をこころがけること。わからない点については授業中に積極的に質問すること。
計算機を用意すること。

<学習到達目標>

・日常生活における様々な現象をデータとして把握し、それらを見やすく要約、記述すること。

・データの中に規則性を見つけ、そこから有効な情報を取り出すための統計学的な考え方、手法を身につけること。

（関連する学習・教育到達目標:D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	数学基礎	2	前	玉木賢志 林 真男
22～24年度						
21年度以前						

選択、23年度以前自由（卒業要件に含まない）

<授業目的>

大学の数学では、「関数」という概念を理解することが重要です。このことは、単に、二次方程式を解くとか、不等式を解くといったことではありません。「関数」とは、例えば実数がある関数にマッピング（写像）した際得られるものであるという考えに基づくものです。このことを理解できれば、関数の掛け算、割り算、および、逆関数の理解に繋がります。さらには、高等数学で取り扱う汎関数の考えも理解できます。この授業を履修することによって、1年次後期からの数学の専門科目の理解に繋がる知識を習得することを目的とします。

<各回毎の授業内容>

1. 数の計算、分数の意味と比の関係、式の計算	9. 絶対値の意味と計算(方程式・不等式の解法)
2. 指数（指数法則・指数関数）	10. 1次関数・2次関数とそのグラフ
3. 対数(基本法則・対数関数・常用対数・自然対数)	11. 三角関数とそのグラフ
4. 三角比（定義・ラジアン)の理解)	12. 関数の意味と写像
5. 1次方程式、連立1次方程式	13. 関数の掛け算・割り算と逆関数
6. 立式の基礎（文章題から式を作る練習）	14. 補充問題
7. 2次方程式（解の公式や因数分解を用いて）	15. 補充問題・理解度確認演習
8. 1次不等式・2次不等式	

<成績評価方法>

毎回の演習80%、理解度確認演習20%

<教科書・参考文献>

指定の教科書は使用しません。講義時にオリジナルプリント（レジュメ）を配布します。

<受講に当たっての留意事項>

高校までの数学が苦手、嫌いな人でもこの授業でやることは、これから先で学ぶ専門科目の理解に必ず役立つものなので、短期間ですが集中して取り組んで下さい。授業ではノートをきちんと取って、その後必ず復習するようにして下さい。

なお、この授業科目では数学リテラシーチェックの結果によって担当教員が履修対象者を決定します。担当教員が指定した以外の学生は履修できません。

<学習到達目標>

1. 各単元の1つ1つの公式、定理をよく理解してそれらを応用する力を身に付けること。50%
2. 確実な計算力を養い、さらに順序を立てて論理的に考えることができるようになること。50%

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	CEP 1	3	前	Gregory Hadley (CEP コーディネーター)
22～24年						
21年度以前						

<現在の教育目標>

CEPは英語を楽しく集中的に学習するプログラムです。CEPで積極的に取り組んだ学生は、そのほとんどが学年末には自信を持って英語を話すことができるようになっていきます。CEPでは、国際英語を教えます。英語を自分のことばにして、日本人としての学生の視点から話します。CEPでは、学生が英語を話したくなるような、楽しいクラスを目指します。

<教育内容>

CEPプレイスメント・テストの結果によって、レベル別クラスが編成されます。Aクラスが最も難しく、Fクラスが基礎レベルです。しかし、このレベルの違いは学生の成績に影響しません。例えば、Fクラスだからという理由で悪い成績をとったり、Aクラスだからといって他のクラスの人より自動的に良い成績を修めるということはありません。レベル別にするのは、学習内容が簡単過ぎたり難し過ぎたりすることを避けるためです。適切なレベルから始めることで、学習効果が上がります。CEPで英語の力がつけば更に高度なクラスへ、また、あまり上達しないようなら基礎的なクラスに移動することも可能です。CEPでは毎回の出席と授業への積極的な取組みが要求されます。遅刻はしないこと。欠席回数（届出があり、やむをえないと認められた欠席を除く）が30％を超えると不合格となります。CEPでは、授業活動への参加に関してポイント・システムを採用しています。英語で質問をしたり、英語の授業活動を積極的に行ったり、教員の質問に英語で答えたりした学生は、そのつどコインがもらえます。白いコインは1ポイント、青いコインは2ポイント、赤いコインは3ポイントです。1回の授業につき最高ひとり5ポイントまで集めることができます。コインは授業終了時に教卓の箱に返却します。そのとき、自分の名前とポイントの数を教員に伝えてください。CEPには、スピーキング・リスニングの授業とリーディングの授業があります。リスニングとスピーキングのテストは3週間に1回あります。

<時間数>

週4回で45分、週1回で90分

<学習成果>

統計的な調査によると、情報文化学科の学生の学習成果として英語力が向上しているの重要な点。このほか、CEPでは学生に無欠席や、定期的な勉強や教室マナーなど学習態度を指導します。これらの学習態度は、学生が後で他の講座や授業においてや、就職するために必要とされる重要な社会的な技能です。

<問題点>

CEP1・2の後に、学生の言語能力は減少します。学生が4年生になるまでには、大半は英語を忘れてしまいます。現在のカリキュラムの余裕がないため、そして、CEP講師の人数が足りないため、CEPは2年もしくは3年プログラムができません。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 1 A（話す） P、R 1、R 3	1	前	ステファン デュルカ ランス レイサム グレゴリー ディック
<p><授業目的> 授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習する必要があります。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週:Chapter 1 To be: Introduction 第2週:つづき 第3週:Chapter 2 To be + Location 第4週:つづき 第5週:Chapter 3 Present Continuous Tense 第6週:つづき 第7週:Chapter 4 To be: Short Answers Possessive Adjectives 第8週:中間試験 第9週:Chapter 4 つづき 第10週:Chapter 5 To be: Yes/No Questions Short Answers Adjectives Possessive Nouns 第11週:つづき 第12週:Chapter 6 To be: Review 第13週:つづき 第14週:Chapter 7 Prepositions 第15週:つづき 第16週:期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト・授業参加度50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> Steven J. Molinsky, Bill Bliss, <i>Side by Side</i> Level 1 Student Book A with Workbook (Pearson Kiriara) 宍戸真、Steve Taylor-Knowels, Malcom Mann, <i>Supreme Reading 1</i> (成美堂) Masami Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (センゲージ ラーニング) (Pクラスのみ使用) (奇数章) 町田純子他、『楽しく学ぶ速読スキル演習』(南雲堂) (補習用:Pクラスのみ使用)</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業に積極的に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標:B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 1 B（読む） Q、R 2、R 4	1	前	福田一雄 土橋善仁 高橋正平
<p>＜授業目的＞</p> <p>現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も200～250語程度で、単語力の強化と英文を読む力を養成します。理解度確認の練習問題、リスニング問題及び簡単な文法問題も行います。</p> <p>＜各回毎の授業内容＞</p> <p>授業ではテキストの奇数章を扱います。</p> <p>第1週:Chapter 1 Moon exploration 第2週:Chapter 3 World population 第3週:Chapter 5 The sculptures of Rodin 第4週:Chapter 7 Esperanto 第5週:Chapter 9 Online language learning 第6週:Chapter 11 Life without technology 第7週:Chapter 13 Smart drugs 第8週:中間試験 第9週:Chapter 15 The first cities 第10週:Chapter 17 City gardens 第11週:Chapter 19 Climate change 第12週:Chapter 21 Pop art 第13週:Chapter 23 A short history of money 第14週:プリント使用 第15週:プリント使用 第16週:期末試験</p> <p>Qクラスではリーディング用テキスト（補習用）とTOEIC英語（月1回）用テキストをも使用します。</p> <p>＜成績評価方法＞</p> <p>中間試験25％、期末試験25％、小テスト等50％によって評価します。Qクラスでは中間試験20％、期末試験20％、TOEIC英語10％、補習用リーディング10％、小テスト等40％によって評価します</p> <p>＜教科書・参考文献＞</p> <p>Steven J. Molinsky, Bill Bliss, <i>Side by Side</i> Level 1 Student Book A with Workbook (Pearson Kiriara)</p> <p>宍戸真、Steve Taylor-Knowels, Malcom Mann, <i>Supreme Reading 1</i>（成美堂）</p> <p>Masami Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i>（センテージ ラーニング）（Qクラスのみ使用）</p> <p>町田純子他、『楽しく学ぶ速読スキル演習』（南雲堂）（補習用:Qクラスのみ使用）</p> <p>＜受講に当たっての留意事項＞</p> <p>授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらいます。授業は演習形式で行うので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失いますので、十分注意して下さい。</p> <p>＜学習到達目標＞</p> <p>英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。</p> <p>（関連する学習・教育到達目標:B）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 1 C（文法） P、Q、R 1、R 2、R 3、R 4	1	前	秋 孝道・辻 照彦 大竹芳夫・市橋孝道 高橋正平・本間多香子
<p><授業目的> 授業では英文法について学習します。中学、高校6年間文法を学んできているはずの皆さんは案外文法をわかっていません。文法がわからないと英語の読み、書き、話すことはできません。以上の理由からこの授業では基本的な英文法の習得を目指し、1年間英文法について学びます。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週: 1 be動詞 第2週: 2 現在形 第3週: 3 過去形 第4週: 4 代名詞 第5週: 5 前置詞 第6週: 6 進行形 第7週: 7 名詞と冠詞 第8週: 中間試験 第9週: 8 助動詞 第10週: 9 提案と命令 第11週: 10 未来形 第12週: 11 疑問文と付加疑問文 第13週: 12 形容詞 第14週: 13 比較 第15週: 14 副詞 第16週: 期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト等50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> アンドルー E. ベネット、『大学英語『文法・プラス』』（南雲堂）</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業では学ぶ項目が多いので、集中力をもって授業を受けて下さい。随時小テストを実施しますので、普段の勉強が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英文法を再学習することにより、英文法の基礎的知識の向上を目指します。</p> <p>（関連する学習・教育到達目標：B）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 1 A（話す） P、R 1、R 3	1	前	ジョセフ フィーコ ランス レイサム ダーリーン ヤマウチ
<p><授業目的> 授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習する必要があります。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。</p> <p><授業内容> 第1週:Unit 1 Hello ! 第2週:つづき 第3週:Unit 2 Your world 第4週:つづき 第5週:Unit 3 All about you 第6週:つづき 第7週:Unit 4 Family and friends 第8週:中間試験 第9週:Unit 4 つづき 第10週:Unit 5 The way I live 第11週:つづき 第12週:Unit 6 Every day 第13週:つづき 第14週:Unit 7 My favorites 第15週:つづき 第16週:期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト・授業参加度50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考書> John and Liz Soars, <i>American Headway STARTER</i> (Oxford) 穴戸真他, <i>Supreme Reading 1</i> (成美堂) (偶数章) Masumi Tanabe et al., <i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (センゲージ ラーニング) (Pクラスのみ使用) (偶数章) 町田淳子他『楽しく学ぶ速読スキル英語』(補習用:Pクラスのみ使用) (偶数章)</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。積極的に授業に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標:B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 1 B (読む) Q、R 2、R 4	1	前	大岩彩子 茅野潤一郎 高橋正平
<p>＜授業目的＞</p> <p>現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も200～250語程度で、単語力の強化と英文を読む力を養成します。理解度確認の練習問題、リスニング問題及び簡単な文法問題も行います。</p> <p>＜授業内容＞</p> <p>授業ではテキストの偶数章を扱います。</p> <p>第1週:Chapter 2 Stephen Spielberg 第2週:Chapter 4 Money and sport 第3週:Chapter 6 Positive thinkig 第4週:Chapter 8 Globalization 第5週:Chapter 10 Advertising 第6週:Chapter 12 Urban wildlife 第7週:Chapter 14 Disappearing language 第8週:中間試験 第9週:Chapter 16 Ergonomics 第10週:Chapter 18 Crim and sentencing 第11週:Chapter 20 Online commerce 第12週:Chapter 22 Steve Jobs 第13週:Chapter 24 The English Civil War 第14週:プリント使用 第15週:プリント使用 第16週:期末試験</p> <p>Qクラスではリーディング用テキスト（補習用）とTOEIC英語（月1回）用テキストをも使用します。</p> <p>＜成績評価方法＞</p> <p>中間試験40％、期末試験40％、小テスト等20％によって評価します。Qクラスでは中間試験20％、期末試験20％、補習用リーディング10％、TOEIC英語10％、小テスト等40％によって評価する</p> <p>＜教科書・参考書＞</p> <p>John and Liz Soars, <i>American Headway STARTER</i> (Oxford) 穴戸真他, <i>Supreme Reading 1</i> (成美堂) Masumi Tanabe et al., <i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (セングージ ラーニング) (Qクラスのみ使用) (偶数章) 町田淳子他『楽しく学ぶ速読スキル英語』(補習用: Qクラスのみ使用)</p> <p>＜受講に当たっての留意事項＞</p> <p>授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらいます。授業は演習形式で行うので聴講学生には十分な予習が必要とされます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p>＜学習到達目標＞</p> <p>英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標: B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	体力診断と運動処方 1	1	前	藤瀬 武彦（システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

日本は近い将来に約3人に1人が高齢者という極端な少子高齢社会を迎え（現在は約4人に1人）、医療費や介護費などが高騰して国民の負担が非常に重くなることが予想される（医療費は年間約37兆円でその半分近くが高齢者分）。従って、各人が健康体力づくりに関する知識や意識をもつことが必要であり、またその実践が重要であることは言うまでもない。この授業では、生涯にわたって健康体力を保持増進するために、日常生活に適度な運動を積極的に取り入れる能力の養成を主目的とする。前期は主に「屋外スポーツ種目」のルールや基本的技術などを理解してゲームを実践することにより運動不足の解消や基礎体力の向上を目指すものである。

<各回毎の授業内容>

実施可能な種目：ソフトボール、サッカー、テニス、フィットネス・トレーニング
（受講生の希望により1または2種目を決定する：雨天の場合は室内種目を実施する）

1. ガイダンス①……授業について、施設紹介とトレーニング機器の扱い方、希望種目の提出
2. ガイダンス② ……フリーウエイトの扱い方、種目決め
3. 基本練習（球技）……チーム分け、体育ルールの説明、チーム練習・練習試合など
4～8. スポーツ①～⑤…ゲーム①～⑤（チームや個人の成績を記録する）
9. フィットネス……エアロビック・ウエイトトレーニング
10～14. スポーツ⑥～⑩…ゲーム⑥～⑩（チームや個人の成績を記録する：種目変更可能）
15. スポーツ⑪……決勝トーナメント（種目数・チーム数により変更あり）

<成績評価方法>

この授業では、出席して積極的に運動を実践することが重視される。従って、評価（100点満点）については欠席1回につき10点減点とし、遅刻（授業開始30分まで）・見学・早退は計3回で1回欠席分の減点とする。また、規則やマナーの違反、あるいは教員の指示に従わなかったときには減点することがある。なお、出欠の確認は口頭で行うので、静粛にして教員によく聞こえるように元気よく返事すること（仮に出席していても返事が聞こえなかった場合は遅刻・欠席扱いになることがある）。

<受講に当たっての留意事項>

運動着と運動靴（下履き・上履き）が必要であり、上履きの紐は情報文化学科が赤色、情報システム学科が青色のものを着用すること。なお、体育館の更衣室は盗難が起りやすいので、貴重品の管理はコインロッカーを使用するなどして自己責任においてしっかり行うこと。

<学習到達目標>

競技や楽しみのための「スポーツ」と健康体力づくりのための「フィットネス」の内容を理解し、それぞれの運動を実践することによって運動不足を解消し、また基礎体力を保持増進させる。

2 年基礎科目（前期）

比較宗教論
社会思想史
文化人類学
憲法
金融論
情報文化
言語学
ジェンダー論
文章表現
英語 3
フィットネス理論及び実習

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	比較宗教論	2	前	鈴木晋介
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

「宗教」とは何か？「かみさまはいるのか？」、「来世は在るのか？」。これらの問いに即答することは難しい。そもそも「いる」・「在る」の意味すら考え始めるとこれは相当に泥沼だ。そこで私たちはアプローチの仕方を変えてみよう。少なくとも確かなことがある。それは、いま私たちが「宗教」と漠然と呼んでいる多様な事象を、人類が長い時間をかけて構築してきたということ。人類とはむろん他人事ではない。「困ったときの神頼み」なんて言ってみたり、正月に初詣に繰り出したかと思えばクリスマスにもなんだか特別な気分になり、法事となれば親族が集う...そう、人類とはわたしたちのことだ。「身の回り」に目を向けてみよう。そして世界が多様に築き上げてきた「身の回り」に比較の目を向けていこう。本講義の目的は大きく二つある。ひとつは世界の様々な宗教に関する基礎的知識を獲得すること。もうひとつは、私たちの素朴な宗教観を相対化し、宗教というものに対する視界を広げることである。本講義では、全体を大きく二つのパートに分けて講義を行う。第Ⅰ部では宗教現象にアプローチする社会科学的な視角を提示した後、いわゆる世界の三大宗教（キリスト教、イスラーム、仏教）を取り上げ、映像資料を用いながら多様な宗教世界を概説する。第Ⅱ部では「呪術」や「占い」などのトピックを取り上げながら、宗教現象の広がりを目を向けていく。

<各回毎の授業内容>

第Ⅰ部世界の宗教を探訪する

1. イントロダクション:宗教現象へのアプローチ
2. 宗教現象に対する社会科学的視角
3. 宗教の分類をめぐって
4. キリスト教の世界(1):歴史、教え、実践
5. キリスト教の世界(2):絵画でみる聖書の世界
6. イスラームの世界(1):歴史、教え、実践
7. イスラームの世界(2):日本に暮らすムスリムたち
8. 仏教の世界(1):歴史、教え、実践
9. 仏教の世界(2):「ブッダ」の生涯
10. 仏教の世界(3):上座部仏教の世界

第Ⅱ部 宗教現象の裾野の広がり

11. 宗教の原初形態をめぐって(1):考古学的考察
12. 宗教の原初形態をめぐって(2):人類学的考察
13. 科学・呪術・宗教
14. グローバル化と宗教:スリランカにおける布袋像の増殖
15. スリランカの占星術と生活世界
16. レポート

<成績評価方法>

（講義最終日のレポート70％、授業内小レポート15％、出席15％）

<教科書・参考文献>

教科書はとくに指定しない。参考文献は講義中に随時指示する。

<受講に当たっての留意事項>

本講義では講義に出席し、自分なりに思考するプロセスが最も重要となる。

<学習到達目標>

宗教現象を理解する社会科学的視角を養い、現代世界の諸宗教に関する基礎的知見を身につける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	社会思想史	2	前	向山恭一
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

自由であることはそれ自体善きことのように思われるが、私たちは他人と社会生活を営まざるをえない以上、みずからの自由を正しく行使することもとめられている。19世紀の西欧で生まれた自由主義の思想は、20世紀において大きく書きかえられながらも、そのための処方箋として今日もなお参照されつづけている。本講義では、近代から現代にいたる自由主義思想の展開を概説しながら、その今日的課題まで踏み込んで考察する。

<各回毎の授業内容>

1

ガイダンス

2

自由主義の起源と展開

3

自由主義の基本問題(1):「自由」であることの意味

4

自由主義の基本問題(2):「正義」の尺度はどこにあるのか

5

自由主義と民主主義(1):社会契約の思想

6

自由主義と民主主義(2):立憲主義の思想

7

古典的自由主義の思想(1):自然権思想と功利主義

8

古典的自由主義の思想(2):自由放任思想と社会ダーウィニズム

9

古典的自由主義の思想(3):補論「私を所有するのはだれか」

10

現代自由主義の思想(1):消極的自由から積極的自由へ

11

現代自由主義の思想(2):福祉国家と自由主義

12

現代自由主義の思想(3):補論「自由と平等は両立しうるか」

13

自由主義の新しい展開(1):新自由主義の台頭

14

自由主義の新しい展開(2):共同体主義との対話

15

まとめ

16

試験

<成績評価方法>

出席と期末試験による。

<教科書・参考文献>

講義プリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

毎回、講義内容に関するコメントを要求するので、積極的な態度で臨むこと。

<学習到達目標>

倫理的および政治経済的観点から「自由」の概念をとらえ、正しい生き方とはなにかを理解すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	文化人類学	2	前	松尾瑞穂
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

何気ない日常生活のなかでも、「なぜ?」「どうして?」と不思議に思う人や出来事に出会ったことはありませんか? その不可解さ（＝わからなさ）は、自分とはまったく異なるように思われる外国人や、言葉の通じない外国での経験であれば、なおさらです。そのような「他者」との差異を、われわれはどのように理解すればよいのでしょうか。本講義では、文化人類学の理論的系譜をたどりながら、異文化理解、他者理解の学問である文化人類学の視点と思想について学びます。18世紀から19世紀にかけて人類学が誕生した歴史的背景から、社会・文化を分析するための主要な理論やトピックを中心に学び、最後に、ジェンダーやセクシュアリティ、医療など人類学が扱う現代的課題について考えます。また、講義を補足、展開するために、映画やドキュメンタリーなどの映像資料も活用しながら授業を進めていきたいと思っています。

<各回毎の授業内容>

1. 1、イントロダクションー文化人類学とはどんな学問か
2. 文化人類学の手法ーフィールドワークと民族誌（エスノグラフィー）
3. 文化人類学前史ー探検家、宗教家と「他者」
4. 植民地主義と「野蛮人」の発見ー「ボカホンタス」は野蛮人か?
5. 社会進化論ー未開から文明へ
6. 日本社会における「異人」の扱い
7. 親族と家族論ー家族は普遍ではない
8. 父系制ーアフリカ・ヌアー社会
9. 母系制ーインド・ナール社会
10. 社会的つながりの多様性ーヘアー・インディアン
11. 日本のイエ制度
12. 現代の家族ー生殖医療と代理母
13. 身体の治療化ー出産と女子割礼（FGM）
14. 異文化を語ることの政治性ーオリエンタリズム批判
15. メディアにみる異文化表象
16. 期末試験

<成績評価方法>

授業出席（10％）、小テスト（20％）、期末試験（70％）

<教科書・参考文献>

特になし。授業中に必要な資料は配布する。

<受講に当たっての留意事項>

授業のコメントペーパーを提出するだけでなく、授業中には積極的な質問や発言を求めます。そのかわり私語は厳禁で、他の受講生の迷惑になる場合には退席してもらいますので気をつけること（当然その日の出席点はつきません）。また、学期中に簡単な小レポート、または小テストを課し、受講者の理解度を測りますのでそれらを提出しなければなりません。

<学習到達目標>

文化人類学の基本概念を理解し、他者理解の方法と視点についての自分の考えを説明できること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	憲法	2	前	熊谷 卓（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

日本国憲法という、中学校で学んで以来、見たこともないという人もいるだろう。しかし、私たちが生活していく上で、国や地方公共団体とかかわることも多く、日本国憲法の出番となることも少なくはないはずである。この講義では、私たちの人生と日本国憲法がどのようにかかわっているのか、この点を中核にすえて具体的に検討していく。このような観点から、可能な限り具体的な事例を通じて日本国憲法の重要事項、とりわけ、「基本的人権の保障」に重点をおいて講義をすすめていく。

<各回毎の授業内容>

1. オリエンテーション－憲法とは
2. 立憲主義
3. 国民主権
4. 平和主義
5. 人権総論
6. 人身の自由
7. 判例研究
8. 平等権
9. 判例研究
10. 民法規定の再婚禁止期間違憲性
11. 判例研究
12. 新しい人権
13. 信教の自由
14. 判例研究
15. 総括
16. 試験

<成績評価方法>

レポートもしくは筆記試験の成績および講義への参加度（質問・コメントなど）等を総合的に勘案。

<教科書・参考文献>

指定されたテキストをテキスト販売週間に買うこと。

<受講に当たっての留意事項>

なし。

<学習到達目標>

憲法学に関する一般的知識・理論を習得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	金融論	2	前	伊藤 隆康
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

金融論を学ぶ重要性がますます増加している。個人や企業の活動において、金融とのかかわり合いが強まっているためだ。この講義では貨幣の機能や金融制度、金融機関などを解説することから始める。その後、金融市場や金融政策、国際金融を講義する。金融の世界は動きが激しいため、日本経済新聞や東洋経済、エコノミストなどを読んで時事問題に関心を持つことが必要である。そのためにTVの経済番組等を授業中に見てもらい、金融問題に慣れ親しんでもらう予定である。

<授業計画>

1. ガイダンス 2. 貨幣と金融(1) 3. 貨幣と金融(2) 4. 金融機関(1) 5. 金融機関(2)
6. 金融市場(1) 7. 金融市場(2) 8. 金融市場(3) 9. 金融政策(1) 10. 金融政策(2) 11. 金融政策(3)
12. 国際金融(1) 13. 国際金融(2) 14. 金融の未来(1) 15. 金融の未来(2) 16. レポート提出

<成績評価方法>

期末に提出してもらうレポートで評価する。

<教科書・参考文献>

教科書
日経文庫ベーシック 金融入門（最新版） 日本経済新聞社編 1000円 + 税

参考文献
家森信善「図解 これだけでわかる日本の金融」(東洋経済新報社)
池尾和人「入門金融論」(ダイヤモンド社)
岡部光明「現代金融の基礎理論」(日本評論社)

<受講に当たっての留意事項>

私語は厳禁である。使用テキストだけでなく、参考文献も参照して理解を深めることが望ましい。

<学習到達目標>

金融に関する理論だけでなく、実際に生じている問題について理解できるようになることを目標とする。

具体的には

(1)用語を理解する

(2)実際の金融問題を理解する

の2点に関して、目標に達していない場合は不合格にする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	情報文化	2	前	高木義和（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

情報文化は、民族、国民、社会、組織が持つ、情報に関する意識・感性・関心・価値観・様式・しきたり・習慣と定義することができる。また、情報の収集・処理・活用など各種の情報行動に関する認識や態度・能力・実践・様式・しきたり・習慣と定義することもできる。授業では情報技術が実現した新しい文化（社会や個人の行動様式/生活様式/社会様式など）を情報文化として紹介する。情報が国民、社会、組織、個人に対してどのような影響を与えたり、変革を要請したりしているかを、自分の視点で考えることができるようになることをめざす。

<各回毎の授業内容>

- ・情報技術と社会の変化
 - 1 情報文化の枠組み
 - 2 情報技術・情報通信技術
 - 3 情報通信技術から生みだされた新しい行動様式と社会様式
 - 4 情報技術がライフスタイルに与える影響
 - 5 地域コミュニティとインターネットコミュニティ 1
 - 6 地域コミュニティとインターネットコミュニティ 2
- ・グローバル社会と情報
 - 7 グローバル化と情報技術
 - 8 経済のグローバル化とデジタルディバイド
 - 9 文化/政治のグローバル化
 - 10 英語による情報と文化の支配
 - 11 インターネットとドメイン
- ・情報社会と個人
 - 12 アイデンティティとグローバルコミュニケーション 1
 - 13 アイデンティティとグローバルコミュニケーション 2
 - 14 プライバシーと著作権
 - 15 情報に対する感性
 - 16 定期試験

<成績評価方法>

成績は定期試験の結果で評価する。学期末に行う筆記試験は、(1) 情報技術と社会の変化、(2) グローバル化と情報技術、(3) 情報社会と個人の3分野から1問ずつ、計3問を出題する。試験は資料の持ち込みは禁止。講義に基づいた問題を出題する。授業に1 / 3 以上欠席した場合は受験資格がありません。

<教科書・参考文献>

必要に応じて配布する。

<受講に当たっての留意事項>

ノートを良く整理すること。教室の後方で受講する場合に私語を慎むこと。

<学習到達目標>

(1) 情報技術が社会に大きな影響をあたえていることを理解する。	30 %
(2) グローバル化が情報技術と密接な関係を持って進展するとともに、地域社会の分断を生じさせていることを理解する。	30 %
(3) 自己を理解しグローバルな視点で情報に向きあうことの重要性を理解する。	40 %

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	言語学	2	前	三ツ井正孝
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

言語学——我々が日々用いていることばがもつありのままの姿を見つめ、その背後にある仕組みをうかび上がらせることを目的とする学問分野——の基本、すなわち、言語学上重要な概念と、その概念を用いて言語を分析する際の基本的な方法を学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1) イントロダクション

2) 言語とは:ミツバチの「ことば」も言葉？

3) 言語学とは:言葉にはいくつかのカオがある。

4) 世界の言語:日本語の「名前」は英語で「name」。音も発音も似てるけど……。

5) 音の問題(1):「さんまい（3枚）」と「さんかい（3回）」, ふたつの「ん」は発音が違う！

6) 〃 (2):そうはいつでも,「ん」は「ん」。

7) 語の問題(1):「本」は1語。「箱」も1語。だったら,「本箱」は2語？

8) 〃 (2):「NASA」「UNESCO」「NUIS」, 共通点は何？

9) 意味の問題(1):「上がる」の意味を聞かれたら？ 「上へ行く」？ では「登る」は？

10) 〃 (2):単語にも「ネットワーク」がある！

11) 文法の問題(1):「品詞」「活用」「5文型」だけが文法じゃない！

12) 〃 (2):「殴られだろうた」ってどうして言わないの？

13) 文をこえた文法:「この部屋暑いね」「そうだね」「……それだけ？」

14) 言語と社会:「俺が読むよ。」「私が読むわ。」「おらが読むだ。」「いや, わしが読むのじゃ！」

15) まとめ:いざ, ことばの海へ。

16) 試験

<成績評価方法>

学期末試験の成績, 出席, 受講態度, 授業中に課す（場合がある）小テストの成績を総合して評価する。

<教科書・参考文献>

教科書は, ジョージ・ユール（著）今井邦彦・中島平三（訳）『現代言語学20 章—ことばの科学—』（大修館書店）。参考文献は授業時に指示する。

<受講に当たっての留意事項>

データは基本的に日本語。したがって, 受講するにあたって外国語に堪能である必要はない。むしろ, 日本語に対して敏感であって欲しい。ただし, 「言葉の乱れ」や「美的な言葉」に敏感であれと言うのではない。この講義は「言葉の乱れ」の矯正や「美的センスのある言い回し」の習得を目的にはしていない。

一方で, 「言葉は生きているのだから変わるのは当然」というステレオタイプなものの見方もしない。この表現は思考停止でしかない。

日本語に敏感であれ, というのは, 「言葉の乱れ」や何の変哲もない日常の表現にひそむシステムを見出せる, 「言葉は生きているというのなら, どのように生きているのか」を問える, そのような態度であれ, ということである。

「授業目的」のとおり, この授業の（そして言語学の）目的は, 言葉がもつありのままの姿を見つめ、その背後にある仕組みをうかび上がらせることにある。この点を十分に念頭に置いておいてほしい。

<学習到達目標>

言語学の基本的な考え方を理解し, 基礎的な知識を習得すること。さらに, 実際の言語分析に応用できること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	ジェンダー論	2	前	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

ジェンダーの一般的定義は、生物学的・肉体的性差（セックス）と別に、文化的・社会的に構築される性差のことである。ジェンダー論とは、わかりやすくいうと、「男らしさ・女らしさ」と呼ばれたり「女性的・男性的」と分類される諸現象とその周辺の問題群を扱う学問である。ジェンダー論は1980年代以降一般化した比較的新しい学問領域だが、人として生まれた者であれば、性別・年齢・洋の東西を問わず誰もが関わらずにはいられない問題を多く含んでいる。

本講義では、ジェンダー論とは何かをできるだけわかりやすく、自分自身の問題として受け止め、考えてもらえるような授業を行いたい。最新の学問的傾向にも目を配りつつ、理論一辺倒にならないよう、理解の一助としてオーディオヴィジュアルな資料も適宜用いる予定。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション
2. ジェンダーとセクシュアリティ①
3. ジェンダーとセクシュアリティ②
4. 言葉とジェンダー
5. セクシュアル・ハラスメント
6. ドメスティック・ヴァイオレンス
7. メディアのなかのジェンダー①
8. メディアのなかのジェンダー②
9. 日本におけるジェンダー問題
10. 世界のなかのジェンダー問題
11. ジェンダーと暴力①
12. ジェンダーと暴力②
13. ジェンダーと表現①
14. ジェンダーと表現②
15. まとめ

<成績評価方法>

学期末試験および/あるいはレポートで評価する。

<教科書・参考文献>

授業中に指示する。

<受講に当たっての留意事項>

私語はくれぐれも慎んでほしい。出席のための出席は意味がない。自分が欠席した授業のなかで試験・レポートその他の指示が伝えられた場合、自分の責任で情報を収集すること。

<学習到達目標>

ジェンダー論の基礎概念・歴史的経緯を学ぶとともに、自分の生き方に関わる問題としての意識を獲得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	文章表現	2	前	大沼志津子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

大学という社会の中で生活する上で、なるべく効率よく、なるべく不快にさせないで、表現するにはどうしたらいいか、問題・ロールプレイ・タスクを通して、みんなで考えることを目的としています。双方向的な授業です。

<各回毎の授業内容>

1

問い合わせをするときの話し方を考える。

2

問い合わせのメールを作る。

3

手順よく説明する表現を考える

4

お知らせのメールを作る。

5

お願いをするときの話し方を考える

6

お願いのメールを作る。

7

お礼を言うときの話し方を考える

8

お礼のメールを作成する。

9

誘うときの話し方を考える

10

誘うときのメールを作成する

11

断る・謝るときの話し方を考える

12

謝るときのメールを作成する。

13

日本語弱者のことを考えて書く。

14

雑談の表現と掲示板を使うときの表現。

15

自己アピールをするときの話し方を考える。

16

自己アピールをする。

<成績評価方法>

レポート 50 %、授業内小テスト 10 %、成果発表 30 %、出席 10 %

<教科書・参考文献>

教科書

『日本語を書くトレーニング』野田尚史・森口稔 ひつじ書房

参考文献

『日本語を話すトレーニング』野田尚史・森口稔 ひつじ書房

『文章力の基本』阿部紘久 日本実業出版社

<学習到達目標>

聞き手、読み手の存在、その立場を意識して表現できる。

状況に応じて語や文体を使い分けることを理解し、使い分けを実践できる。

手順を考えて説明できる。

自己を冷静に分析して、どこを強調して伝えるか考えることができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 3 A（表現英語 1） X、Z 1、Z 3	1	前	ステファン デュルカ ランス レイサム グレゴリー ディック
21年度以前						

<授業目的>

授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習します。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。

<各回毎の授業内容>

第1週:Chapter 1 Review of Tenses
第2週:つづき
第3週:Chapter 2 Count/Non-Count Nouns
第4週:つづき
第5週:Chapter 3 Partives
第6週:つづき
第7週:Chapter 4 Future Tense
第8週:中間試験
第9週:Chapter 4 つづき
第10週:Chapter 5 Comparatives
第11週:つづき
第12週:Chapter 6 Superlatives
第13週:つづき
第14週:Chapter 7 Imperatives
第15週:つづき
第16週:期末試験

<成績評価方法>

中間試験25％、期末試験25％、小テスト等・授業参加度50％によって評価する。

<教科書・参考文献>

Steven J. Molinsky, Bill Bliss, *Side by Side* Level 2 Student Book A with Workbook (Pearson Kiriara)
宍戸真、Kai Nordyke, *Reading Expert 1*（成美堂）
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）（TOEIC 英語用:X クラスのみ使用）
渡辺節子他, *A World of Change on the Web*（南雲堂）（リーディング補習用:X クラスのみ使用）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。積極的に授業に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 3 B（TOEIC英語 1） Y、Z 2、Z 4	1	前	福田一雄 土橋善仁 高橋正平
21年度以前						

＜授業目的＞

現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も 230～280語程度で、単語力の強化と英文を読む力を養成します。

＜各回毎の授業内容＞

第1週:Lesson 1 Parties
第2週:Lesson 3 Laughter
第3週:Lesson 5 Back Injuries
第4週:Lesson 7 Blood Transfusion
第5週:Lesson 9 Bermuda Triangle
第6週:Lesson 11 Greek Food
第7週:Lesson 13 Banknotes
第8週:中間試験
第9週:Lesson 15 Asimo
第10週:Lesson 17 Babe Ruth
第11週:Lesson 19 Christopher Reeve
第12週:Lesson 21 Maneki Neko
第13週:Lesson 23 Liar
第14週:プリント使用
第15週:プリント使用
第16週:期末試験

＜成績評価方法＞

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト等 50 %によって評価する。3A クラスでは中間試験 20 %、期末試験 20 %、TOEIC 英語 10 %、補修用リーディング 10 %、小テスト等 40 %によって評価する

＜教科書・参考文献＞

Steven J. Molinsky, Bill Bliss, *Side by Side Level 2 Student Book A with Workbook* (Pearson Kiriara)
穴戸真、Kai Nordyke, *Reading Expert 1*（成美堂）
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）(TOEIC 英語用:Y クラスのみ使用)
渡辺節子他, *A World of Change on the Web*（南雲堂）(リーディング補習用:Y クラスのみ使用)

＜受講に当たっての留意事項＞

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行うので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。。

＜学習到達目標＞

英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標: B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 3 A（表現英語 1） X、Z 1、Z 3	1	前	ジョセフ フィコー ランス レイサム ダーリーン ヤマウチ
21年度以前						

<授業目的>

授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習して下さい。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。

<各回毎の授業内容>

第1週: 1 Would you like chicken or fish?

第2週: つづき

第3週: 2 Can I have your passport, please?

第4週: つづき

第5週: 3 My mother has her own business.

第6週: つづき

第7週: 4 Can I check my email?

第8週: 中間試験

第9週: 4 のつづき

第10週: 5 Are you ready to order?

第11週: つづき

第12週: 6 Where's the station?

第13週: つづき

第14週: 7 Can I use my card in this ATM?

第15週: つづき

第16週: 期末試験

<成績評価方法>

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト・授業参加度 50 %、出席 20 % によって評価する。

<教科書・参考文献>

Angela Buckingham & Lewis Lansford, SECOND EDITION *PASSPORT 1* Student Book (Oxford)

宍戸真、Kai Nordyke, *Reading Expert 1*（成美堂）

ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）（TOEIC 英語用: X クラスのみ使用）

渡辺節子他, *A World of Change on the Web*（南雲堂）（リーディング補習用: X クラスのみ使用）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業には積極的に参加することが望まれます。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。

（関連する学習・教育到達目標: B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 3 B（TOEIC英語 1） Y、Z 2、Z 4	1	前	大岩彩子 茅野潤一郎 高橋正平
21年度以前						

<授業目的>

現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も 230～280語程度で読みやすく、単語力の強化と英文を読む力を養成します。

<各回毎の授業内容>

第 1 週: Lesson 2 Payment on Date
第 2 週: Lesson 4 Traditional Cures
第 3 週: Lesson 6 Bookcrossing
第 4 週: Lesson 8 Dog Blood Donor
第 5 週: Lesson 10 Easter Island
第 6 週: Lesson 12 A Food Stylist
第 7 週: Lesson 14 World Bank
第 8 週: 中間試験
第 9 週: Lesson 16 The Blue Screen Technique
第 10 週: Lesson 18 Soccer Balls
第 11 週: Lesson 20 Pearl S. Buck
第 12 週: Lesson 22 Fortune Cookies
第 13 週: Lesson 24 Colors
第 14 週: プリント使用
第 15 週: プリント使用
第 16 週: 期末試験

<成績評価方法>

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト等 50 % によって評価する。3B のクラスでは中間試験 20 %、期末試験 20 %、TOEIC 英語 10 %、補習用リーディング 10 %、小テスト等 40 % によって評価する

<教科書・参考文献>

Angela Buckingham & Lewis Lansford, SECOND EDITION *PASSPORT 1* Student Book (Oxford)
宍戸真、Kai Nordyke, *Reading Expert 1*（成美堂）
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）（TOEIC 英語用: Y クラスのみ使用）
渡辺節子他, *A World of Change on the Web*（南雲堂）（リーディング補習用: Y クラスのみ使用）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行うので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標: B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 3 C（読む英語 1） X、Y、Z 1、Z 2、 Z 3、Z 4	1	前	秋 孝道・辻 照彦 大竹芳夫・市橋孝道 高橋正平・本間多香子
21年度以前						

<授業目的>

授業では英文法について学習します。中学、高校 6 年間文法を学んできているはずの皆さんは案外文法をわかっていません。文法がわからないと英語の読み、書き、話すことはできません。以上の理由からこの授業では基本的な英文法の習得を目指し、1 年間英文法について学びます。

<各回毎の授業内容>

第 1 週: 1 be 動詞
第 2 週: 2 現在形
第 3 週: 3 過去形
第 4 週: 4 代名詞
第 5 週: 5 前置詞
第 6 週: 6 進行形
第 7 週: 7 名詞と冠詞
第 8 週: 中間試験
第 9 週: 8 助動詞
第 10 週: 9 提案と命令
第 11 週: 10 未来形
第 12 週: 11 疑問文と付加疑問文
第 13 週: 12 形容詞
第 14 週: 13 比較
第 15 週: 14 副詞
第 16 週: 期末試験

<成績評価方法>

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト等 50 % によって評価します。

<教科書・参考文献>

アンドルー E. ベネット、『大学英語『文法・プラス』』（南雲堂）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業では学ぶ項目が多いので、集中して授業を受けて下さい。随時小テストを実施しますので、普段の勉強が必要です。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

中学、高校まで学んだ英文法を再学習することにより、英文法の基礎的知識の向上を目指します。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	英語（再履修）	1	前	高橋正平 秋 孝道
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

現代日米のスポーツ、カラオケ等を比較した英文を読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げるトピックは日米の類似点、相違点を扱い、読みやすい英文となっています。できるだけ多くの英文を読み、英語力の強化を行います。

<各回毎の授業内容>

第1週:Lesson 1 Cherry Blossoms
第2週:Lesson 2 Names
第3週:Lesson 3 Sports
第4週:Lesson 4 Employment
第5週:Lesson 5 Films
第6週:Lesson 6 Karaoke
第7週:Lesson 7 Shaking Hands
第8週:中間試験
第9週:Lesson 8 Job hopping
第10週:Lesson 9 Money or Greeting Cards?
第11週:Lesson 10 Cash or Credit Card
第12週:Lesson 11 Independent or Parasite?
第13週:つづき
第14週:Lesson 12 Working Year Round
第15週:つづき
第16週:期末試験

<成績評価方法>

中間試験25％、期末試験25％、小テスト等50％によって評価します。

<教科書・参考文献>

ジョシュア・コーエン他、*Spotlight on America and Japan*（南雲堂）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので欠席には十分注意して下さい。

<学習到達目標>

英語の基礎力、読解力向上を目指し、できるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	フィットネス理論及び実習	1	前	藤瀬 武彦（システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

一般に高校までの体育ではスポーツの技能習得と実践を主目的に行われてきており，体力的または形態的に運動トレーニングの効果を体験する授業は行われていない．この授業では基礎体力の向上や身体づくり（ビルドアップやシェイプアップ）のためのトレーニングと食事の方法を学ぶとともに，目的に応じたウエイトトレーニングやエアロビクトトレーニングなどを実践・習得することが目的である．そして，前期終了までにトレーニング効果を実感していただきたい．

<各回毎の授業内容>

履修学生は，まず各個人の希望により「基礎体力向上」「シェイプアップ」「ビルドアップ」の3つのコースから1つを選択し，体力診断結果を基に具体的な数値目標を設定する．

1) 「基礎体力向上」・・・筋力・パワー系あるいは持久力・スタミナ系体力を向上させる．

2) 「シェイプアップ」・・・肥満解消のために余分な体脂肪を削ぎ落とし、必要な筋肉を付ける．

3) 「ビルドアップ」・・・痩せ解消のために筋肉を付けることによって体重を増やす．

1. ガイダンス …… コース選択と体力診断（体力テスト及び形態測定）

2～14. フィットネス理論とトレーニングの実践

①ワンポイントアドバイス（フィットネス理論）

②準備運動・ストレッチ

③W-upを兼ねたトレーニングの一環としての球技（バスケットボール・フットサル）

④本運動としてのトレーニング

・ウエイトトレーニング・・・バーベル・ダンベル・マシンを使用する．

・エアロビクトトレーニング・・・トレッドミルやエアロバイクを使用する．

15. 体力診断とまとめ

16. 試 験（フィットネス理論とトレーニング効果に関する筆記試験）

<成績評価方法>

週2回のトレーニングの達成度（授業1回と自主トレ1回）とトレーニング効果について総合的に評価するとともに（60点）、筆記試験（40点）の合計100点満点で評価する．なお，筆記試験を受験しないと単位を付与できないので必ず受験すること．

<受講に当たっての留意事項>

1回目に授業で，適切なトレーニングプログラムを作成し，トレーニング効果を客観的に把握するために，体力診断として体力テストと形態測定を行う．

<学習到達目標>

各個人の目的に応じたトレーニングプログラムを作成できるようにし，またトレーニングを実践してその効果を習得・体験する．

3 年基礎科目（前期）

社会調査
倫理学
キャリア開発2
インターンシップ

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	社会調査	2	前	松尾瑞穂
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

私たちは日々の生活において、新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどから発信される様々な情報に取り囲まれています。また、情報の受け手であるだけでなく、ホームページやブログ、そして今日ではソーシャルメディアなどを通して、自らが情報の発信源となることも一般的になりつつあります。今日では、人文・社会科学分野だけでなく、メディアや企業活動にとっても、情報を適切に収集、分析・検討し、提示することが重要な課題となっており、その比重は今後ますます高まるでしょう。しかし、多種多様な情報を適切に取捨選択することは容易なことではありません。社会調査は、現象に対する問いを立て、なるべく「正しい」情報を提示することを目的とするものです。しかし、もちろん何が「正しい」かは、文脈や人にもよっています。本授業では、受講生が課題に取り組みながら基本的な社会調査の手法を習得することを目指します。

<各回毎の授業内容>

第1回 インTRODクシヨ:授業の進め方と概要説明

第2回 社会調査の歴史とその展開

第3回 社会調査の技法と調査倫理

第4回 データ・グラフの見方

第5回 世論調査の真偽―新聞に書いてあることはすべて正しいか？

第6回 写真・映像が示すもの―世界の切り取り方

第7回 観察実験

第8回 紀行エッセイに学ぶ地域／土地の記述

第9回 民族誌的記述とはどのようなものか

第10回 調査計画書の作成法と講評

第11回 フィールドワーク(1)聞き取り調査とは

第12回 フィールドワーク(2)ライフストーリーとは

第13回 フィールドワーク(3)参与観察とは

第14回 フィールドワークの成果と分析

第15回 まとめ

第16回 定期試験

<成績評価方法>

小課題（30％）およびレポート（70％）

<教科書・参考文献>

篠原清夫ほか2010『社会調査の基礎―社会調査士A・B・C・D科目対応』、弘文堂。

佐藤郁哉2008『質的データ分析法―原理・方法・実践』、新曜社。

その他、必要なプリント、資料は適宜配布する。

<受講に当たっての留意事項>

3回に一回程度の割合で課題が出されるため、受講生はこの課題を提出することが求められる。また、授業中にディスカッションや質問、ワークシートを用いた作業、模擬実習などを実施するため、受講生は積極的に授業に参加することが期待される。期末試験では、各自が設定したテーマに基づいてそれぞれ社会調査を実施し、報告書を提出してもらう。受け身型の講義とは少し異なるので、この点を念頭において受講すること。

<学習到達目標>

社会調査の概要と手順、方法に関する基礎内容を理解し、受講生が卒業論文・卒業研究等で必要な調査に活用できるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	倫理学	2	前	阿部ふく子
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この講義では、伝統的な倫理思想に加え、応用倫理学のうち生命倫理・環境倫理という二つの分野をとりあげ、倫理学の基本的な問題関心・思考方法を通観します。「倫理」という漢語自体は、「なかま（倫）」の「ことわり（理）」という意味を表しています。共同体のなかに生きる人間の理について考えてゆく以上、受け身姿勢で授業に臨むのではなく、倫理的な諸問題を真摯に受けとめた上で自らの考えを深め、他の人々の意見にも耳を傾けるという開かれた知的態度を身につけることが求められます。講義をする側も学生諸君との対話を大事にしたいと思います。毎回、その日に扱った内容を各人でより主体的・実践的に考えてもらうための簡単な質問を出し、翌週にその中から一部を紹介して適宜コメントを加えます。皆さんには知識を吸収するだけではなく、同年代の声にも耳を傾け、多様な価値観に触れながら少しずつ倫理的思考の幅を広げていって欲しいと思います。

<各回毎の授業内容>

01. 基本概念①: 倫理（学）とは何か

02. 基本概念②: 義務論（カント）

03. 基本概念③: 功利主義（ベンサム、ミル、シンガー）

04. 生命倫理①: QOL 倫理と SOL 倫理

05. 生命倫理②: 安楽死問題

06. 生命倫理③: 出生前診断および障害新生児の治療停止問題

07. 生命倫理④: 脳死・臓器移植問題

08. 生命倫理⑤: 医療資源の配分問題

09. 生命倫理⑥: 優生思想とエンハンスメント

10. 環境倫理①: 環境倫理学の理念

11. 環境倫理②: 持続可能性概念と世代間倫理

12. 環境倫理③: 環境正義

13. 環境倫理④: 景観論

14. 環境倫理⑤: 動物倫理

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

毎回課されるコメントペーパー（30%）、および記述式の期末試験（70%）による。

※コメントペーパーは各回の講義内容に関連する簡単な質問に答えてもらう方式です。提出回数ではなく内容で評価します。

<教科書・参考文献>

・取り扱う分野が多岐にわたるため、毎回プリントを配布します。

・参考文献は講義で随時紹介します。

<受講に当たっての留意事項>

・毎回の講義で配布した資料にはすべて目を通すこと。

・講義時に紹介する参考文献等にも積極的に手を伸ばし、自主的に学習を進めることを望みます。

<学習到達目標>

・倫理学の基本的な用語、主要な問い、議論を理解し説明することができる。

・上記の理解を、個人的・日常的な所感や出来事、社会や政治の現実を考えるなかで柔軟に適用し、単なるエゴイズムに依らない理性的な倫理的判断力を身につける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	キャリア開発 2	1	前	就職指導委員長 他
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

- ・雇用の仕組み、現状、採用の意味など、「仕事」を取り巻く状況を理解した上で、選択に責任感と期待を注ぐことができる進路決定をめざす。自らの適性の模索、自分に合った職場環境や仕事内容の探索を実現し、前向きに向き合える進路決定の準備を目的とする。
- ・進路決定のプロセスとして避けては通れない採用選考についても理解し、準備に備える。

<各回毎の授業内容>

講師:外部からの招聘および本学教員

4 / 4	第 1 回	キャリア開発 1 のおさらいおよび大学生の進路決定	斎藤 幸江
4 / 11	第 2 回	就職の基礎知識～進路選択の視点、職場の特性を読む～	斎藤 幸江
4 / 18	第 3 回	S P I 演習	上西園 武良
4 / 25	第 4 回	それぞれの進路選択～社会人に学ぶ、進路の選び方、そして仕事と人生～<ゲスト 卒業生>	斎藤 幸江
5 / 2	第 5 回	S P I 演習	上西園 武良
5 / 16	第 6 回	私の進路を考える～さまざまな基準で自分の進路を考えてみよう～	斎藤 幸江
5 / 23	第 7 回	S P I 演習	上西園 武良
5 / 30	第 8 回	ワークルールと雇用を巡る動き～雇用関連の法律、企業の制度や自治体の取り組み～	斎藤 幸江
6 / 6	第 9 回	話の上手な伝え方講座 1	マイナビ
6 / 13	第 10 回	講演「新潟県産業・観光の現状と施策」	新潟県産業労働 観光部 産業政 策課
6 / 20	第 11 回	採用選考のトレンド～採用選考の実際とその対策～	斎藤 幸江
6 / 27	第 12 回	話の上手な伝え方実践 2	マイナビ
7 / 4	第 13 回	就職活動の体験に触れよう～4 年生に学ぶ進路選択と就職活動～<ゲスト 4 年生>	斎藤 幸江
7 / 11	第 14 回	「集団の中の私」から学ぶコミュニケーション、そして強み～グループワーク～	斎藤 幸江
7 / 18	第 15 回	特別講義	キャリア支援課

※グループワークまたは、小レポートの作成を授業時間内で実施する。ゲスト教員などのミニ講義を適宜、取り入れ、視野の拡大や気づきの獲得を図る。

<成績評価方法>

各回の演習点・レポート点（70％）、最終レポート点（30％）の合計で評価する。

<教科書・参考文献>

柳本 新二（著）:SPI2の解法スピード&シュアー（2013、2014、2015年度版のいずれかで可）、一ツ橋書店

<受講に当たっての留意事項>

- ・授業内では、適宜小レポートを課し、その内容を紹介していく。積極的に取り組み、「自分の考えや気持ち」を具体的にしっかり伝えること。
- ・他人の視点や考えを知り、自らに活かすことに積極的に取り組むこと。
- ・キャリア開発 1 に引き続き、複数回、ゲストを招いた講義を行う。疑問や興味を持って質問するなど、積極的に参加すること。

<学習到達目標>

- ・「就職」を取り巻く用語、仕組み、法律やルールなど、基本的な知識を身につけ、必要な情報収集を充分に行って進路選択を可能にする。
- ・「採用ニーズ」という視点を踏まえて、自らの力を活かしてやりがいや期待を持って就職するための、自己理解やコミュニケーションのポイントが明確になっている。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	インターンシップ	1	前	情報文化学科就職指導委員
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

「キャリア開発ガイダンス」や「キャリア開発」、その他の授業の中で習得した知識と二十年間、自分自身が積み上げてきた「自己能力」を企業の中で確かめることが出来る良い機会である。実際に企業の中に身を置き、各世代の人々とコミュニケーションを取りながら、社会人として必要な「能力」を確かめると共に、社会で通用する自己能力に気付き、足りない部分を自覚することで、今後の大学生活に活かしていくことを目的としている。この経験は、今後取り組む就職活動や卒業後の人生設計を考えるうえで非常に役立つものである。

<各回毎の授業内容>

就業体験は平均して一週間程度である。体験内容は受入先に応じて異なる。それゆえ、学内で学ぶ「キャリア開発2」の授業が重要になる。実習内容は、ソーシャル・エチケットやマナーおよび民間企業の一般的な組織・業務内容に関するものになる。受講学生は、受入機関について調査し、就業体験の内容と何を学んだかをレポートにまとめる。また就業体験中に作成する実習日誌の書き方もあわせて学ぶ。

就業体験を終えた後は、体験内容を「キャリア開発1」もしくは3年次生前期ガイダンスで報告してもらうことがある。また実習日誌を最終的に仕上げ、大学に提出する。その日誌は受入先機関の守秘事項チェックを受ける。指摘された部分があった場合、それを修正して再提出する。以上の後、参加学生が各自受入機関へ礼状を出して、授業が終了する。

<成績評価方法>

成績評価は、事前研修の出席状況、受入先企業の評価、実習日誌の内容の三点から総合的に判断する。なお、受入企業・団体数は限られており、希望者全員が履修できない場合がある。受入企業・団体が決まらなかった場合、履修登録そのものが取り消される（成績上の記録は何も残らない）。ただし、受入先機関が決まった後、事前研修において著しい問題が見られる場合、その段階でD評価がつけられることもある。さらに実習日誌を期日までに提出しなかった場合、特段の理由がないかぎりE評価とはせず、D評価とする。内容が（誤字脱字も含めて）一定水準以下の場合、同じくD評価となることがある。

<受講に当たっての留意事項>

この授業科目は、3年前期の「キャリア開発2」とインターンシップガイダンスを受講することを前提としているので、ぜひ、キャリア開発2を受講してもらいたい。受入企業・団体は、①大学が指定する国内企業・団体、②学生が自ら選び、インターンシップ参加が認められた国内の企業・団体、もしくは③学生自らが選び、インターンシップ参加が認められた海外の企業・団体とする。①については、実習学生を選出（マッチング）する際に希望を確認し、レポートをもとに学内で面接をして決定する。②、③については交通費・渡航費・滞在費等滞在期間中の費用は当該学生がその一切を負担し、本学は一切それを負担しない。また、インターンシップ参加の交渉・斡旋を本学は一切行わず、滞在期間中の安全及び滞在先についても学生自身が自己責任で確保する。参加期間を夏季休業中のみとする。また、②及び③の単位認定に当たっては、①で本学が学生に義務付けているレポート及び実習日誌の提出期限までの提出と、受入企業・団体担当者からの当該学生に関する実習報告書（英語）の提出を条件とする（成績判定はこれまでと同様とする）。これらすべてがそろわない場合には単位を認定しない。

過去の実習日誌はキャリア支援課で随時閲覧できる。まずは先輩の体験に目を通して見るように。受講に当たって迷いがある場合、ぜひ遠慮せずに、担当の教員もしくはキャリア支援課職員に相談してもらいたい。

共通科目



1 年共通科目（前期）

地域研究概論
アジアと日本
日本政治論
国際研究概論
国際交流インストラクター演習2
情報システム
コンピュータシステム
ネットワークコンピューティング
人間情報システム
情報処理演習1
日本語1
日本語2
日本事情1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	地域研究概論	2	前	コーディネーター 小山田紀子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科は必修、情報システム学科は選択

<授業目的>

情報文化学科の1年生の皆さんは、1年後期から、ロシア、中国、韓国、アメリカのうち1つの地域を選択し、その地域の言語を中心に歴史、文化、社会、政治経済等について学ぶことになります。この授業はその準備として、地域研究というものの方論的性格と、一通り各地域についての基礎的知識を学び、皆さんが自分の専門地域を選択する際の判断材料を提供することを目的とします。

<各回毎の授業内容>

1. 序論1:地域研究入門（小山田紀子）
2. 序論2:世界の中の日本（小山田紀子）
3. ロシアの歴史（神長英輔）
4. ロシアの文化（神長英輔）
5. ロシアと日本（神長英輔）
6. 中国の概況—国土・自然・人口・民族—（區建英）
7. 中国語という言語（區建英）
8. 地域研究における中国（區建英）
9. 韓国・北朝鮮の現代事情（申銀珠）
10. 日韓文化の比較（申銀珠）
11. 韓国語とは（申銀珠）
12. アメリカ社会の歴史的構成（越智敏夫）
13. アメリカ経済の特徴（安藤潤）
14. アメリカ文化（矢口裕子）
15. 地域研究の総括と地域言語選択について（小山田紀子）

<成績評価方法>

各地域担当者が各2問出題し、その全問あるいは一部を選択して（どちらになるかは未定）解答する。おそらく全問とも論述式。

<教科書・参考文献>

各地域担当者が授業中に指示する。

<受講に当たっての留意事項>

大人数の授業になるので、私語はくれぐれも慎むこと。

<学習到達目標>

地域研究の分析視点を獲得し、各地域の基礎的知識を得ること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	アジアと日本	2	前	吉澤文寿・高橋正樹・ 小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この講義は日本の近隣地域、すなわち台湾、朝鮮、中国、さらには東南アジアに対する侵略の歴史とそれをめぐる今日の議論を考察し、日本と近隣諸国との建設的な将来を構想することを目的とする。

<各回毎の授業内容>

1. 講義の概要

2. 朝鮮と日本(1)

3. 朝鮮と日本(2)

4. 朝鮮と日本(3)

5. 朝鮮と日本(4)

6. 中国と日本(1)

7. 中国と日本(2)

8. 中国と日本(3)

9. 中国と日本(4)

10. 中国と日本(5)

11. 東南アジアと日本(1)

12. 東南アジアと日本(2)

13. 東南アジアと日本(3)

14. 東南アジアと日本(4)

15. 沖縄と日本（やまと）

16. 定期試験

「朝鮮と日本」は吉澤、「中国と日本」は小林、「東南アジアと日本」及び「沖縄と日本（やまと）」は高橋が担当する。

<成績評価方法>

定期試験およびレポートによって成績評価をする。

<教科書・参考文献>

小林英夫『日本のアジア侵略』山川出版社、2001年、729円＋税。

<受講に当たっての留意事項>

受講にあたり、当該の講義内容を予習することを勧める。学科を問わず、受講を勧める。

<学習到達目標>

講義内容の理解もさることながら、私たち日本人々にとって「アジア」とは何か、そもそも日本は「アジア」ではないのかー日本のアジア侵略の歴史に関連する今日の議論を学ぶことにより、上記の問いに対する答えを見つけ出すヒントが得られることを期待したい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本政治論	2	前	椎橋勝信
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

1993年7月の衆院選で自民党が過半数割れ、55年体制が終わり、日本の政治は連立の時代に入りました。以来20年間、第2次安倍晋三内閣まで14の内閣は、ほんの一時期を除きずっと連立政権でした。たび重なる政党・政治家の離合集散、政策二の次の数合わせ連立、挙句足の引っ張り合いの応酬や財政事情無視のばら撒き。連立に成熟した面は認められるものの、日本の政治は進歩したのでしょうか。20年間政治記者として間近で観察してきた講師がその現状をレポート、同時に大事にすべき、あるいは克服すべき日本政治の特質にも触れます。皆さんのための政治を切り開く一助になれば、というのが願いです。

<各回毎の授業内容>

1. 20年の歴史概観（年表を集中講義の前の週に入手、20年間の流れをつかんでおく）

① 非自民・非共産連立

55年体制終焉、自民単独政権時代に幕

② 自民基軸連立

自民復権の秘密と政策は二の次「着せ替え人形」連立

③ 自民・公明連立

10年続いた「同床異夢」、そして切れない絆

④ 民主基軸連立

「悪い夢」だった？ 3年3カ月。結果は自民再復権

2. ネジレ国会（「参議院とは何か」=下記参考文献参照=を読んでおく）

① 両院多数党なし

与党が参院で過半数を取れないワケ。ネジレ常態化

② 政権のアキレス腱

「強い参院」。参院対策に苦心した55年体制下の首相

③ 報復の連鎖

日銀総裁不在2カ月、解散と交換に特例公債法

3. 短命内閣（第1次安倍から野田までの6内閣の在任日数を調べておく）

① 「国民国家の終焉」

実行迫られる不評の政策（不況、少子高齢化）

② 小選挙区制

選挙左右する党首、有権者受け悪ければ即刻「辞めろ」

③ 官僚主導政治

増税のためなら「首相のクビの一つ二つ飛んでも」

④ 1996小沢的政治手法

作っては壊し8つ目の「生活」。力尽きたか数の政治

4. 無党派層（どの新聞でも、原則月1回の世論調査（政党支持率）結果のうち「支持政党なし」（無党派層）の推移をつかんでおいて下さい。できれば4月から7月まで）

① 政権交代の影の主役

無党派層征する者、政治を征する

② 連立政治の「落とし子」

政治に関心あるからこそ支持政党なしの新無党派層

5. 政策と数の織りなすドラマ（昨年暮れ自民党が復権して以来、民主党政権の政策などを転換したものを拾い上げておく）

① 目的と手段を混同

連立（数）は政策実現より政権とりのため

② 蘇る自民党政治

民主党の失敗はマニフェスト。政策軽視のツケ

6. 試験

<成績評価方法>

最終回に講義内容の理解度を把握する試験を実施します。基本的には試験によりますが、これに出席を加味することもあります。

<教科書・参考文献>

「参議院とは何か1947～2010」（竹中治堅、2010年中公叢書）、「日本政治論」（五十嵐暁郎、2010年岩波書店）、「論議の時代」（2003年、日本評論社）、「日本近代史」（坂野潤治2012年、ちくま新書）、「高島通敏集 第3巻 現代日本の選挙」（2009年、岩波書店）

<受講に当たっての留意事項>

①

4月から新聞の政治記事を集中的に読んで、とくに7月に予定の参院選に関する記事を継続的に読むと講義内容が理解しやすいです。

②

講義内容のレジュメ・メモを用意します。これをテキストに講義は進みます。毎回すべてのレジュメ・メモを用意してください。

<学習到達目標>

主権者として政治参加のための知識、判断能力を養うこと。昨年暮れの衆院選の投票率は戦後最低でした。自民党の小選挙区の得票は有権者全体の2割です。ここで日本の将来を託すのです。有権者が常に政治をチェックしなければ、政治は政党・政治家たちの内輪のものになって国民全体から離れかねません。政治を学ぶことは、自分たちの将来を守ることに繋がります。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	国際研究概論	2	前	高橋正樹（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

この授業の目的は、世界の見方についての基礎的な枠組を具体的な問題に関連付けながら考察して行くことです。世界は国家同士が軍事対立しているのか、あるいは企業による国境を越えた経済活動によって世界がひとつになったのか、さらには民間の国際援助団体（NGO）が国境を越えて自由に活動しているのか。実際の世界はこれらすべての側面がありますが、人によっていずれを重視するかは異なります。その相異はどのような考え方の違いから生じるのかを授業を通じて考えて行きましょう。学生が理解しやすいように、時事的な国際問題を絡ませながら授業を進めたいと考えています。また、この授業はこれから4年間、皆さんが学ぶ国際的な諸科目についての道案内的な役割をもちます。

＜各回毎の授業内容＞

1～2. 世界の見方。自分の先入観を点検しよう。

3～6. 主権国家間の外交戦略関係として世界を理解する見方を考察します。これは、「現実主義」的国際政治理論といわれています。

7～10. 世界をとくに経済的相互依存を重視し諸国家間の協調関係に注目する「リベラリズム論」を考察します。

11～14. 世界を不平等な関係として理解します。この考えはリベラリズム論のように相互依存性や協調性は重視せず、むしろそこにある格差や不平等性に注目します。最近のグローバリゼーションにもふれつつ考察します。

15. 以上の見方を参考にして、学生自身の世界像を点検します。

＜成績評価方法＞

原則として、授業への全出席が最低条件になります。さらに、中間テスト・学期末テストによって評価します。

＜教科書・参考文献＞

（教科書はなし）

毎回配布するレジュメに掲載してあります。

＜受講に当たっての留意事項＞

学生は毎日、新聞を読み、テレビの報道・ドキュメンタリー番組を観てもらいます。

＜学習到達目標＞

新聞やニュース番組によって国際的な事象を知り、その背景を自分なりに分析できること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	国際交流インストラクター演習2	1	前	佐々木寛・神長英輔ほか
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

21世紀に要求されるのは、他者と共に、臨機応変に創造的な活動を展開することができる、総合的な人間力である。単に前例を倣い、知識や指示を一方的に受容・伝達するだけの生き方や学習方法は、あらゆる分野で行き詰まりを見せている。本演習では「ワークショップ」および「ファシリテーター」等の新しい手法を用い、参加者が実際に身体を動かしながら、自ら主体的に学ぶことを第一義とする。本演習を経験することで、さまざまな<他者>の中で、さまざまな議題やテーマを柔軟に「コーディネート」する能力や、民主的なリーダーシップを発揮する真の知的・社会的能力を養うことができる。演習1では、たとえば「世界の現実」「世界の不平等」「異文化理解」などの3つの大きなテーマに即して、国際理解を深める。演習の合格者は、新潟県国際交流協会の認証を得たのち、同年度の9月と2月に県内の小中学校・高等学校でワークショップを実践することになる。

<各回毎の授業内容>

1. ガイダンス（概要説明、年間計画表・自己紹介シート配布、課題レポート説明）

2. 自己紹介アイスブレーキング・講義（「ワークショップの意味」）

3. 学外講師による講義（「世界の現実」）

4. 学外講師による講義（「世界の不平等」）

5. 学外講師による講義（「異文化理解」）

6. 学外講師によるワークショップ（「身体とアクティビティ」）

※学外講師については、順序が変更になることもある。

※このワークショップは特別に土曜日になる可能性があるので注意すること。

7. レポートテーマによるグループ分け;ワークショップ作成法の説明

8. アイスブレーキング事例集紹介;経験者模擬ワークショップ

9. 学生による模擬ワークショップ準備

10. 学生による模擬ワークショップ披露・評価1

11. 学生による模擬ワークショップ披露・評価2

12. 学生による模擬ワークショップ披露・評価3

13. 学生による模擬ワークショップ披露・評価4

14. 学生による模擬ワークショップ披露・評価5

15. まとめ、問題点の確認

<成績評価方法>

基本的に出席回数と、授業参加態度による。参加者が発表するワークショップも評価の対象とする。

<教科書・参考文献>

ロバート・チェンバース『参加型ワークショップ入門』明石書店 2004年

ちよんせいこ『人やまちが元気になるファシリテーター入門講座』解放出版社 2007年

<受講に当たっての留意事項>

この科目は、単に授業に出席するだけでなく、その準備のために多くのエネルギーを要する。地域社会に成果を示すため、本学を代表する覚悟と自覚が必要である。

<学習到達目標>

基本的に、自分ひとりでも国際理解に関するワークショップを運営展開できる能力を身につけること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	情報システム	2	前	小林満男（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択 情報システム学科必修

＜授業目的＞

情報システムを理解するうえで必要な基本的考え方と基本技術、応用分野について解説し、情報システムについて深く学ぶための導入とする。情報システムとは、情報を収集し、加工、分析、蓄積し、活用する仕組みのことである。われわれの生活に身近な事例を取り上げて、情報システムの開発者、利用者、サービス提供者それぞれの立場から、情報システムについて考える。特に、社会や企業などの人間活動とのかかわりを重視し、情報システムが必ずしもコンピュータ中心のシステムではないことを認識し、情報システムを考えるとときには広い視野に立ったものの見方が必要であることを学ぶ。

＜各回毎の授業内容＞

1 情報システムとは	情報、情報処理、情報システム、情報化社会
2 情報システムとコンピュータ	利用目的、利用形態、システムの信頼性
3 社会基盤としての情報システム	社会基盤、安全への対策と整備、危機管理
4 生活基盤としての情報システム	生活の中の情報システム、ユビキタス、〔事例〕
5 行政と情報システム	IT基本法、電子行政システム、電子認証システム
6 ビジネス戦略と情報システム	小売業の情報システム、製品への組込みシステム
7 ネットビジネスと情報システム	ネットビジネスの現状、ビジネスモデル（期中レポート①提出）
8 顧客情報と情報システム	顧客情報管理システム、CTI、トレーサビリティ
9 電子商取引と情報システム	電子商取引の形態と発展、特徴と問題点
10 組織と情報システム	統合業務システム、ナレッジマネジメント
11 情報の共有と検索の仕組み	情報の共有、情報検索の仕組み
12 情報システムの新たな展開	生活環境と情報システム、文化財と著作権、新たな展開
13 情報システムと倫理	知的財産、不法行為、利用者の倫理（期中レポート②提出）
14 情報システムの開発	システム企画、分析、設計、製造、テスト、運用
15 システムエンジニアの役割と育成カリキュラム	システムエンジニア、プログラマ、プロジェクト管理
16 期末試験	情報システム学科のカリキュラム、人材育成

＜成績評価方法＞

・情報システム学の体系と情報システムを取り巻く環境についての理解度を、期中レポート（20%）と期末試験（80%）で評価する。期中レポート未提出、又は期末試験を受験しない場合は不合格とする。

＜教科書・参考文献＞

・教科書：神沼靖子編著 「情報システム基礎」 オーム社 2625円

・参考書：浦昭二（他）編 「情報システム学へのいざない〔改訂版〕」 培風館 2730円

＜受講に当たっての留意事項＞

・教科書は必ず入手し、毎回、予習／復習をすること。

・特別講義及びビデオ学習（複数回）の際には、感想文等は必ず提出すること。

＜学習到達目標＞

・情報システムを、人間活動を含む社会的システムであると捉える情報システム学の体系を理解するとともに、情報化社会の中でどのように情報システムと関わっていくべきかを考えることができるようになる。（50％）

・情報システムのさまざまな事例を理解し、説明できるようになる。（30％）

・情報システム学科カリキュラムの授業科目間の関連と意味付けが理解できるようになり、専門科目の履修選択に役立てることができるようになる。（20％）

（関連する学習・教育到達目標：E）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	コンピュータシステム	2	前	石川 洋（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択、情報システム学科必修

<授業目的>

コンピュータシステムを理解するために、コンピュータ全体とその構成要素について学習する。コンピュータ上で使う情報の表現、入出力装置、主記憶、演算、制御などの基本装置を学習する。主にITパスポート試験のテクノロジ系や、基本情報技術者試験の午前試験に出題される内容を学習する。

<各回毎の授業内容>

1、データ表現 2進数

2、データ表現 2進数から10進数、16進数への変換 1

3、データ表現 2進数から10進数、16進数への変換 2

4、データ表現 浮動小数点数、文字表現（レポート課題1）

5、情報と論理、情報素子

6、プロセッサアーキテクチャ

7、制御装置の動作原理、レジスタ

8、演算の仕組み、演算回路

9、メモリアーキテクチャ

10、補助記憶装置1

11、補助記憶装置2

12、入出力アーキテクチャと装置

13、コンピュータの種類とアーキテクチャの特徴（レポート課題2）

14、オペレーティングシステムとその種類（レポート課題3）

15、言語処理系、マルチメディアとは、マルチメディア応用システム

16、定期試験

<成績評価方法>

・成績は期末試験（70%）と自己学習によるレポート課題（30%）により評価する。

・試験では講義に沿った（配布資料の内容も含む）問題を出題する。持ち込みは不可とする。

<教科書・参考文献>

・教科書 基本情報技術者テキスト No.1 コンピュータシステム
日本情報処理開発協会監修、増進堂（2013）

・参考文献 随時紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・情報処理技術者試験（ITパスポートや基本情報技術者）をめざす学生には有意義である。

<学習到達目標>

・コンピュータ内部のデータ表現やデータ操作を理解するために、基数変換、命題論理、論理演算について学習する（試験20%、レポート10%）。

・コンピュータの五大装置を中心に、それぞれの装置の仕組みや役割について理解する（試験30%、レポート10%）。

・オペレーティングシステムの仕組みと基本的な機能を理解する（試験20%、レポート10%）。

（関連する学習・教育到達目標:E）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	ネットワークコンピューティング	2	前	石川 洋（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

必修（情報システム学科）、選択（情報文化学科）

<授業目的>

現代社会の基盤となるオープンな情報通信ネットワーク（インターネット）について、プロトコルと伝送制御、符号化と伝送、ネットワーク、通信機器とネットワークソフトなどの観点から学習する。基本情報技術者試験（午前問題）やインターネット検定、ITパスポート試験に出題される内容を学習する。

<各回毎の授業内容>

1、ネットワーク技術を学ぶ意義、現在のインターネットの使われ方

2、ネットワークアーキテクチャ

3、TCP/IP-通信プロトコルのデファクトスタンダード

4、TCP/IPで利用されるアドレス 1

5、TCP/IPで利用されるアドレス 2

6、伝送制御 ベーシック手順、HDLC手順（レポート課題1）

7、変調、符号化、アナログ通信、デジタル通信

8、伝送技術 誤り制御、同期制御、多重化方式、圧縮・伸張方式

9、伝送方式と通信回線 交換方式、パケット交換（レポート課題2）

10、LANとWAN 組織の大きさとLAN、LANの構成装置

11、LAN間接続機器 リピータ、ブリッジ、ルータ

12、インターネットの各種サービスその1 DNS,HTTP,FTP

13、インターネットの各種サービスその2 SMTP,POP3,NNTP,TELNET,SNMP,DHCP

14、ネットワークの性能、ネットワーク関連法規（レポート課題3）

15、ネットワークの応用、通信機器とネットワークソフト

16、定期試験

<成績評価方法>

・成績は期末試験（70%）と自己学習によるレポート課題（30%）により評価する。

・試験では講義に沿った（配布資料の内容も含む）問題を出題する。持ち込みは不可とする。

<教科書・参考文献>

・教科書 基本情報技術者テキスト No.4 ネットワーク技術
日本情報処理開発協会監修、増進堂（2013）

・参考文献 随時紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・ネットワーク関連の資格取得や、インターネットを利用する仕事をめざす学生には有意義である。

<学習到達目標>

・代表的なネットワークアーキテクチャ（OSI、TCP/IP）の概要、階層構造、各層の役割について理解する（試験20%、レポート10%）。

・データ伝送の種類、仕組み、特徴について理解する（試験20%、レポート10%）。

・実用的なネットワーク（LAN、WAN）の特徴、仕組み、プロトコル、提供される多様なサービスについて理解する（試験30%、レポート10%）。

（関連する学習・教育到達目標:E）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	人間情報システム	2	前	上西園武良（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択、情報システム学科必修

<授業目的>

人間を入力系・情報処理系・出力系を備えた「情報システム」として捉えることができる。まず、入力系としての感覚機能を外部情報センサーとして捉え、その構造・特性を数理的に解説する。次に、情報処理系としての脳神経系を概説し、さらに、出力系としての筋肉の構造・特性を概説する。講義の位置づけとしては、「人間情報工学1」へ進むための基礎として人間の生物学的特性を習得する講義とする。

<各回毎の授業内容>

1. 情報システムとしての人間の概要

2. 入力系(1)感覚の種類、数学的補足①指数

3. 入力系(2)視覚①

4. 入力系(3)視覚②、数学的補足②三角法

5. 入力系(4)視覚③

6. 入力系(5)視覚④

7. 入力系(6)聴覚

8. 入力系(7)その他の感覚

9. 入力系(8)感覚の一般的性質

10. 情報処理系(1)脳神経系①、数学的補足③対数

11. 情報処理系(2)脳神経系②

12. 出力系(1)筋肉

13. 出力系(2)心臓の制御

14. 人間情報システムへの影響因子

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

・小テスト3回（各10点、計30点）と期末試験（70点）の合計（100点）で評価する。

・3回の小テストのうち少なくとも1回は受験していることを期末試験の受験資格とする（0回の人
は受験資格なし）。

・期末試験は「電卓（通信機能なし）」以外は持ち込み不可（小テストは持ち込み可）。

<教科書・参考文献>

特定の教科書は使用しない。

<受講に当たっての留意事項>

毎回、数値計算を行うので平方根（√）計算機能のある電卓を持参すること。

<学習到達目標>

情報システムとしての人間のしくみ・特性を数理的に説明できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	情報処理演習 1（情報文化）	2	前	澤口晋一（情報文化） 山本瑞枝・佐藤徳子・ 谷賢太郎
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科必修

<授業目的>

本学情報センターの使用環境を理解し、コンピューターの基本的な知識と技術の習得を目的としています。具体的には、インターネット、メール、ワードプロセッサ（Word）、表計算（Excel）、プレゼンテーション（Power point）、ウェブページ作成などコンピューターの活用技術を習得します。なお、本演習では、最終的にMicrosoft Office Specialist 試験の合格を目指すので、授業内容もそれを視野にいたれたものとなります。

<各回毎の授業内容>

1. ガイダンス

2. 統一テストとアンケート

3. Wordの活用①

4. Wordの活用②

5. Wordの活用③

6. Wordの活用④

7. Excelの活用①

8. Excelの活用②

9. Excelの活用③

10. Excelの活用④

11. 複合文書（文書, 図表, 画像等）の作成

12. Power pointの活用①

13. Power pointの活用②

14. ウェブページの作成①

15. ウェブページの作成②

<成績評価方法>

小レポート, 試験により評価する。

<教科書・参考文献>

・『情報システムガイド』

・MCAS 攻略問題集（Word, Excel）

<受講に当たっての留意事項>

・情報センターの利用規則を守ること

・クラスはタイピング試験により編成します。

<学習到達目標>

・本学の情報センターの使用環境を十分に理解し、ルールに沿った演習室の利用ができる。

・コンピューターにおける基本的な知識と技術を習得し、活活用できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本語 1	1	前	佐々木香織
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞
新聞、新書などの文章を読み、人文社会科学の専門科目を受講する際に必要な語彙、文法、表現を学ぶ。また、適宜映像メディアも利用して、総合的な情報リテラシーを高めていく。

＜各回毎の授業内容＞
1 レベルチェック・テスト
2 テスト結果をもとにして、受講者の関心にあわせた教材を読んでいく。
3 同上
4 同上
5 同上
6 同上
7 長い文献を読みこみ、必要な情報を
8 同上
9 同上
10 同上
11 同上
12 同上
13 なじみがない分野の文献に触れて、語彙や表現の幅を広げる。
14 同上
15 同上
16 テスト（またはレポート）

＜成績評価方法＞
出席と予習を重視します。

＜教科書・参考文献＞
レベルチェックテストの結果を見てから、受講者と相談のうえ決めます。

＜学習到達目標＞
辞書を時々使って新書が読めるレベルを目指す。
（読解力をこれまでより高める）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本語 2	1	前	佐々木香織
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
日本語でレポートや論文が作成できるようにする。日本語でのディスカッションやプレゼンテーションができるようにする。

<各回毎の授業内容>

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

2、3の繰り返し／別のテキストや映像資料について書く場合もある。

12

13

14

15

16

自分で課題を決め、レポートを書く
同上（書いた部分の添削:場合によっては学生同士で添削しあう）
同上
同上
レポート提出

<成績評価方法>
ほぼ毎回課題が出るので、それによって評価する。
訂正された箇所をどの程度きちんと復習して、次に同じ間違いをしないかを評価の対象にする。

<教科書・参考文献>
レベルチェックテストの結果を元に、受講者と相談して決める。

<学習到達目標>
自分の言いたいことが正確に相手に伝わるように書け、話せるようにする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本事情 1	2	前	廣川 智
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

本授業では、日本人にとっては当たり前の常識でありながら、外国籍者の多くが疑問を抱く、日本の社会・文化について理解することを目標とします。また、トピックに関する発表やグループディスカッション等を実施し、その活動を通じて日本語でのコミュニケーション能力の向上を目指します。

<各回毎の授業内容>

各回で2～3つのトピックを扱います。主なトピックは以下の通りです。

1

風習:年中行事

2

宗教：お寺と神社 他

3

学生による発表とディスカッション①

4

世界の中の日本1：世界中で流行している「カワイイ」 他

5

世界の中の日本2：マンガ、アニメ、オタク 他

6

学生による発表とディスカッション②

7

日本語1：なぜ、日本語には3種類もの文字があるのか 他

8

日本語2：<敬語>「つまらないもの」を贈る日本人 他

9

学生による発表とディスカッション③

10

自然1：日本の四季 他

11

自然2：地震大国 他

12

学生による発表とディスカッション④

13

産業1：電気製品・車 他

14

産業2：エネルギー産業>原子力発電 他

15

学生による発表とディスカッション⑤

16

筆記試験またはレポート

<成績評価方法>

定期試験<30％>、発表<30％>、その他課題<20％>、出席<20％>
「出席」には発言やグループ活動等への参加など、積極的な授業態度が求められます。
なお、発表を行わなかった学生は不合格となります。

<教科書・参考文献>

教科書は指定しません。各授業で資料を配布します。
参考文献については適宜紹介します。

<学習到達目標>

・日本の社会・文化に対する基礎的な知識が理解できる。

・日本の社会・文化について考えることを通して、自国の文化に対する考えを深めることができる。

・発表に用いる表現を身に付けることができる

・日本語でのコミュニケーション能力を向上させる。

2 年共通科目（前期）

異文化理解
平和学
情報検索
マーケティング

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	異文化理解	2	前	小山田紀子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

いま日本では「ヒト、モノ、カネ、情報」の国境を越えた往来が活発に行われ、国際化が急速に進んでいる。この国際化の波は私たちの生活にさまざまな影響を与えている。われわれの身のまわりでも外国人の姿が目立つようになったし、また私たちが海外に出て行くチャンスー海外旅行、留学、ビジネスなどーも増えてきている。そしてそれは多かれ少なかれわれわれに異文化接触の機会を提供することになる。このような国際化の時代にあって、「異文化理解」の必要性が声高に唱えられるようになってきたのだといえよう。しかし、異文化への理解というと、とかくそれ自体がよいことであるようなニュアンスがあるが過去には植民地支配のための異文化理解もあったし、市場獲得を目的にした異文化理解もありうるわけで、そう考えると、何のためのどのような異文化理解かが問われなければならないであろう。また、異文化というと何も国際間のことだけではなくて、国内の異文化もあるわけで、国内の文化を単一的なものと捉える感覚が、異なった文化の拒否や排除につながっていくケースも見られるのである。

本講義では、私の海外生活の経験を踏まえて、異文化接触の諸相をさまざまな事例から紹介していきたい。ヨーロッパにおける移民問題、日本における在日韓国朝鮮人問題や外国人労働者問題、国際交流や教育の国際化がもたらす問題、あるいは個人のレベルでは国際結婚というテーマもあるであろう。さまざまな角度から異文化理解の問題を考えていきたい。さらに国際化時代から地球時代へと移り変わりつつある今日、われわれは異文化理解を通して、自分の国の利益だけにとらわれずより広い普遍的な発想を持つ地球市民としての生き方が求められているといえよう。

<各回毎の授業内容>

1. 序論ー私の異文化体験	9. 日本の外国人労働者問題(3)
2. 異文化接触の諸相ーヨーロッパの移民問題（総論）	10. 国際社会での活動
3. " (1)フランスの移民問題	11. 「異文化理解」の試み
4. " (2)ドイツの移民問題	12. 自己表現力をつける
5. " (3)イギリスの移民問題	13. 主体的に学ぶ
6. ヨーロッパ市民の誕生	14. 行動する
7. 日本の外国人労働者問題(1)	15. まとめー地球市民としての生き方
8. 日本の外国人労働者問題(2)	

<成績評価方法>

レポート・試験・出席状況

<教科書・参考文献>

教科書 渡部淳『国際感覚ってなんだろう』岩波ジュニア新書、2004年

参考書は授業時間中、適宜指示する。

<受講に当たっての留意事項>

授業への出席を重視します。

<学習到達目標>

2年次後期の海外留学や今後の異文化接触に機会の役立つ視点を獲得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	平和学	2	前	佐々木寛（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

平和学は「ジェノサイド」や「世界戦争」といった、20世紀の暴力をめぐるさまざまな人間の経験から生成し、展開を遂げてきた学問運動である。それゆえ平和学は、一貫して、既存の社会構造や世界秩序を批判的に見つめ、その代案（オルタナティブ）を模索しつづけてきた。そしてまた、既存の政治学・社会学・経済学などの社会科学のみならず、時には自然科学をも横断した包括的な認識枠組みから問題の核心に肉迫し、むしろ既存の知識体系自体に重大なインパクトを与えてきた。講義の前半では、戦争と平和、あるいは暴力の問題そのものに関する知の蓄積を広く「平和学」の中に位置づけ、それら一連の思想や理念、理論などを、それらが生成してくる歴史的な背景とリンクさせながらふりかえってみたい。さらに後半では、現在の「グローバル化」にともなう新しい問題群が平和学につきつける挑戦の意味を明らかにしたい。平和学がこれら問題群といかに格闘してゆくのか、またなぜ平和学という広い枠組みでなければこれらの問題に対応できないのか、つまり平和学の<批判的構想力>を今後どのように鍛え上げてゆくべきなのかについて、共に考えてみたい。

<各回毎の授業内容>

新鮮な題材を多く取り入れたいため細目は限定しないが、以下の内容には触れる予定である。

1. 「平和」とは何か —— 平和学前史 [3 回]

2. 平和学の生成 —— 20世紀の時代経験Ⅰ（ジェノサイド）[2 回]

3. 平和学の展開 —— 20世紀の時代経験Ⅱ（構造的暴力）[2 回]

4. 世界秩序の構造変動と平和学の新地平 [2 回]

5. 新世紀の平和学 —— 21世紀「平和秩序」形成のために [2 回]

6. 日本の平和主義の課題と平和学 [1 回]

7. 新しい「文明」を求めて [2 回]

※+ 1 回分は、招聘講師による講演に充てる。

<成績評価方法>

しばしば講義の最後に、コメントカード（質問やコメント、感想を書いてもらう）を作成してもらい、それらは講義の改善に役立てるだけでなく、受講者の参加姿勢を見る材料とする。基本的に最終筆記試験の成績によりすべての評価を決定し、出席も重視しないが、このコメントカードの内容は成績に加味する。また、試験は、個別的な知識よりはそれをもとにした思考力（学期中にどれだけ考えたか）を重視した問題を出題する。

<教科書・参考文献>

教科書 高柳先男『戦争を知るための平和学入門』（ちくま書房）

AERA Mook『平和学がわかる』（朝日新聞社）

参考書は、授業中、それぞれのサブテーマに即して随時指定する。必読参考文献の一例として、高島通敏『平和研究講義』（岩波書店）、日本平和学会編『平和研究第26号——新世紀の平和研究』（早稲田大学出版部）、君島東彦編『平和学を学ぶ人のために』（世界思想社）、岡本三夫・横山正樹編『平和学のアジェンダ』（法律文化社）、J.ガルトゥング『構造的暴力と平和』（中央大学出版部）、U.ベック『危険社会』（法政大学出版局）、P.ハースト『戦争と権力』（岩波書店）などを挙げておく。

<受講に当たっての留意事項>

平和学は、いわゆる「文系」「理系」の区分をこえた講義科目である。「共通科目」である理由もそこにある。

<学習到達目標>

平和学のアジェンダは常に展開するのであり、参加者は最終的には自分なりの「平和学」を構築してほしい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	情報検索	2	前	高木義和（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択、情報システム学科必須

<授業目的>

学問や社会活動を行う場合、既に存在する情報を活用して行動することにより効率良く目標や目的に到達することができる。情報検索の目的は、過去の情報を収集し、入手した情報を整理・加工・分析することにより、知識を深めるだけでなく、実現可能性の高い実行計画を作成したり、的確な意思決定を可能にしたりすることである。授業では日常使用している Web 検索エンジンと、実際に社会で使用されている有料データベースを使用し、論理式を使って情報検索を行う。検索方法を学ぶだけでなく、新聞記事（朝日新聞 DNA、日経テレコン 21）、雑誌記事・学術論文（日経 BP、EBSCOhost）情報など実際に社会に流通している情報の収集／選択／加工／分析を行うことにより情報の活用能力を習得する。

<各回毎の授業内容>

1 情報検索の概要

2 検索主題－新聞記事とキーワード

3 検索課題の設定

4 論理演算と検索式

5 新聞記事情報の検索 ①朝日新聞記事検索、日経新聞記事検索

6 ②地方紙の記事検索、新聞記事情報と時系列変化

7 図書・雑誌記事情報の検索 ①雑誌記事情報検索、CiNii の利用

8 ②図書情報検索

9 情報収集と情報の利用

10 W e b 情報の検索 ①日本語 Web 情報の検索

11 ②英語 Web 情報の検索 9 情報収集と情報の利用

12 複合情報検索による体系的な情報収集（グループ分け、課題の決定）

13 複合情報検索による体系的な情報収集（EBSCOHost の利用）

14 複合情報検索による体系的な情報収集（内容確認）

15 情報検索に関する重要な視点と学内における D B の利用

16 定期試験

<成績評価方法>

検索主題とキーワード、インターネット情報の検索、新聞記事情報の検索、図書・雑誌記事情報の検索、複合情報検索のレポート（80％）と定期試験（20％）により評価する。

<教科書・参考文献>

教科書を配布する

<受講に当たっての留意事項>

この授業で学ぶ内容を理解できれば個人の情報活用能力が大きく向上することが期待できます。有料のデータベースを使用するため情報および D B の著作権に注意を払ってください。指示に従わないレポートは提出されても評価しない場合があります。

<学習到達目標>

・ 検索主題をキーワードと検索式で表現できるようになる。

25 %

・ W e b 情報の特性を理解しその情報を利用することができる。

25 %

・ 新聞記事情報の特性を理解しその情報を利用することができる。

25 %

・ 図書／雑誌記事情報の特性を理解しその情報を利用することができる。

25 %

（関連する学習・教育到達目標:E）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	マーケティング	2	前	谷本和明（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

本講義の目的は、マーケティングを理解するための基本的理論の枠組みを理解し、実務面で効果的なマーケティング上の意思決定を行なうための洞察力と実践的なスキルを養成することにある。本来マーケティングとは、企業が市場（顧客）に対して、いかに魅力的な商品やサービスを提供できるかを研究した学問である。この目的に沿って研究された理論は、SWOT、STP、4P分析とこれらを相対的に活用するマーケティング・ミックスと言える。これらの理論を具体的に理解するために本講義では、理論と戦略的手法を紹介すると同時に、ケースに関するレポート作成と討議による実践的な応用力を養成する。このように、理論の紹介とケース研究による実践的経験を通して、企業が提供する商品のマーケット・バリューを維持・継続するための戦略を習得し、企業の継続的な成長の手法を身につける。

<各回毎の授業内容>

1. マーケティング論の概要
2. 事業機会と領域の選択
3. 市場分析の理論:SWOTと5Force
4. 市場分析の理論:STP分析
5. 市場分析の理論:4P分析
6. マーケティング・ミックスの概要
7. ケース研究1:「株式会社 福武書店」 慶應ビジネス・スクール 文献番号 15174
8. マーケティング・ミックス(1):製品（Production）に関するレポートの討議
9. ケース研究2:「富士フィルム株式会社」 慶應ビジネス・スクール 文献番号 90-76-15029
10. マーケティング・ミックス(2):価格（Price）に関するレポートの討議
11. ケース研究3:「スズキ・サムライ」 Harvard Business School 文献番号 9-507-J17
12. マーケティング・ミックス(3):広告（Promotion）に関するレポートの討議
13. ケース研究4:「花王株式会社」 慶應ビジネス・スクール 文献番号 15165
14. マーケティング・ミックス(4):流通（Place）に関するレポートの討議
15. マーケティング・サイエンス
16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験:30％、レポート課題（4回）:計40％、課題の発表と討議:30％の配分で評価する。

<参考文献>

和田・恩蔵・三浦「マーケティング戦略」有斐閣アルマ、2006年

マイケル・E. ポーター、竹内弘高訳「競争戦略1＆2」ダイヤモンド社、1999年

<受講に当たっての留意事項>

ケース研究への理論の応用を考察することにより、理論を習得し戦略的な思考を養う。

<学習到達目標>

- ・マーケティングの基本理論であるSWOT、STP、4P分析を理解する。（定期試験15％）
- ・理論の実践的な活用であるマーケティング・ミックスを理解する。（定期試験15％）
- ・ケース研究でマーケティング・ミックスを用いた経営戦略を考察する（レポート40％）
- ・自分で分析したマーケット戦略を発表し他者の戦略との比較を行う。（発言・討議30％）

3 年共通科目（前期）

国際法
情報社会論
情報メディア論

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	国際法	2	前	熊谷 卓（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

地球という「惑星」にはおよそ200の主権国家が存在し、そこには50億人をこえる人々が日々の生活を送っている。国際法というのは主としてこれらの国家関係を規律する法規範の総体をいう。今日の国際事象をみていると、国際社会において守られるべきルールとは何かあらためて問われているようにも思われる。本講義では、現代の諸問題について国際法がなしうることに、それについて検討する。

<各回毎の授業内容>

講義全体を通じてのテーマ:「国際法から世界を見る」

- 1 オリエンテーション
- 2 国際法はどのように発展してきたのか？—伝統的国際法の性格
- 3 現代国際法はどのような特徴を持っているか？— 1
- 4 現代国際法はどのような特徴を持っているか？— 2
- 5 国際法はどのように作られ、どのように適用されるのか？—条約と国際慣習法— 1
- 6 国際法はどのように作られ、どのように適用されるのか？—条約と国際慣習法— 2
- 7 人権の国際的な保護の発展— 1
- 8 人権の国際的な保護の発展— 2
- 9 国際法で個人を裁く— 1
- 10 国際法で個人を裁く— 2
- 11 国際社会の司法権？—国際紛争の平和的解決と国際裁判— 1
- 12 国際社会の司法権？—国際紛争の平和的解決と国際裁判— 2
- 13 世界の中で日本はどうする？—国際法と日本の立場— 1
- 14 世界の中で日本はどうする？—国際法と日本の立場— 2
- 15 まとめ
- 16 試験

<成績評価方法>

主として試験による成績評価

<教科書・参考文献>

開講時に指示

<受講に当たっての留意事項>

本科目は専門性の高い科目である。それ故、「現代ヨーロッパ論」をはじめとする情報文化学科専門科目を複数、履修済みの者を受講対象とする。十分に注意して欲しい。初学者に受講を勧めない。

<学習到達目標>

国際法学のアウトラインの習得

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	情報社会論	2	前	小宮山智志（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

消費化社会の最たるもの（のひとつ）が「情報化社会」です。ユニクロやヴィトンや、景気や戦争といったものは、「情報化社会」と一見関係ないようですが、大変、密接な関連があります。モノとしてよりも"情報"の部分に私たちは多くのお金を支払っています。そして「情報化社会」は、世界にとって、大きな光（経済的効果）を与えています。

「情報化社会」は、大きな光を放つために、影（私たちの生活を脅かすマイナスの効果）も作ります。国内に環境問題をおこし、さらに公害を輸出します。また発展途上国に貧困を作ると同時に我々"先進国の貧困"を作ります。

いままでの情報化社会を乗り越え、影を作らず、光を失わない"情報化社会"の条件を考え、さらにそのアイデアを具体的に我々の社会、暮らしに、そして大学の授業にも活かすことを考えます。

<各回毎の授業内容>

講義は2回1セットで行われます。1回目は、それぞれの課題について個人またはグループで考え、2回目は皆さんの考えを紹介しながら解説し、さらにグループワークを行います。

第1回:本講義の射程とスケジュール等について

第2～9回:情報化社会と消費社会の関連

1) 情報化/消費化社会の展開（第2回・第3回）

2) 環境の臨界/資源の臨界（第4回・第5回）

3) 南の貧困/北の貧困（第6回・第7回）

4) 情報化/消費化社会の転回（第8回・第9回）

第10～13回:楽しみの社会学～新しい情報化社会に向けて私たちだからできること

第14～16回:最終レポートについてのグループワーク（第14回）とまとめ（第15回・第16回）

<成績評価方法>

成績は、第1～15回のグループワーク・個人ワーク（35%）と最終レポート（65%）によって、評価します。オリジナリティを高く評価します。

<教科書・参考文献>

参考文献:見田宗介 1996『現代社会の理論～情報化・消費社会の現在と未来～』岩波新書（465）

講義と並行してこの文献を読むことで「抽象的な理論を具体的な事例にあてはめて考える力」が効果的に身に付きます。

<受講に当たっての留意事項>

1.体調不良、忌引き、就職活動、部活動などで欠席した場合、第16回の授業での個人・ワーク・グループワークを行うことで、欠席した分の個人ワーク・グループワークを補うことが出来ます。

2.授業中、私が説明しているときは、誰も話してはいけません。小声でもダメです。私が聞こえなくてもあなたの周りの人が迷惑です。個人ワーク・グループワークのときは、どんどん周りの人と話してください。友達の意外なアイデアを楽しみ、また友達を楽しませてあげてください。

<学習到達目標>

抽象的な理論を具体的な事例にあてはめて考える力を養ってください（1～9回のグループワーク・最終レポート）。さらに自分で新しい理論を作るという発想を身につけてください（10～15回のグループワーク・最終レポート）。卒業してから、大学時代にはなかった新しい理論・考え方が出てくることでしょう。新しい理論が出てきても、現場で応用できる力、アレンジする力、そして自分で理論を構築する能力を身につけてください。さらに主体的に楽しく仕事する能力について考えてください。

もっと身近なところでは、就職や進学等の面接で、抽象的な事柄を、抽象的な言葉を使わずに具体的な事例を用いて、"自分"を伝えることに、この講義を役立ててください。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	情報メディア論	2	前	本間正一郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

コミュニケーションとは、メディアとは、ジャーナリズムとは何なのか。情報化社会と言われて久しいが、大学生世代の情報欠落・無関心は危機的な様相を呈している。社会がどう動いているのか、自分は社会の中にどう位置づけられるのかなど、間もなく社会人となるべき自分自身への訓練を怠っているケースが目につく。この授業では人と情報を取り次ぐメディア、特に古典的メディアといわれる新聞に焦点を当て、新聞とは何なのか、なぜ新聞は存在しているのかなど、日ごろまったく考えもしないであろう次元から「社会常識」を身に着けることを目指す。また、日々の世界の動きを「熱い」うちに教材として取り入れるので、「情報偏食」の人でも社会の姿を知る訓練となり、社会人としての常識の涵養を促す。

<各回毎の授業内容>

1、当日までのニュースを解説・分析。新聞とは何なのか

2、当日までのニュースを解説・分析。世界の新聞 1

3、当日までのニュースを解説・分析。世界の新聞 2

4、当日までのニュースを解説・分析。日本の新聞 1

5、当日までのニュースを解説・分析。日本の新聞 2

6、当日までのニュースを解説・分析。記者クラブは悪の帝国か①

7、当日までのニュースを解説・分析。記者クラブは悪の帝国か②

8、当日までのニュースを解説・分析。世論調査と選挙と新聞

9、当日までのニュースを解説・分析。漢字と日本語と新聞

10、当日までのニュースを解説・分析。新聞とネット社会①

11、当日までのニュースを解説・分析。新聞とネット社会②

12、当日までのニュースを解説・分析。新聞とネット社会③

13、当日までのニュースを解説・分析。総引きこもり社会と新聞

14、当日までのニュースを解説・分析。客観、真実、公正

15、当日までのニュースを解説・分析。新聞記者と教育

<成績評価方法>

出席を重視する。評価配分は期末 40 %、小課題と出席ポイントなどで 60 %。

<教科書・参考文献>

特にないが、授業の中で随時紹介する。ただし、日々の新聞が一番の教科書なので、できるだけ一般紙に「毎日」目を通すことを推奨する。

<受講に当たっての留意事項>

本授業は「試験のための丸暗記」を求めない。大学生らしく自律的に思索を広め、深めることを期待し、そのためのヒントを豊富に提示する。授業中に t w i t t e r を使って意見や感想を募る。ハッシュタグを指定するので、可能な人は積極的な参加を望む。授業中の教室出入りや私語、授業に関係ない携帯電話等は周囲の学習者の迷惑となるので慎むこと。本授業は後期開講の「コミュニケーション技術」と補完関係にある。

<学習到達目標>

「狭い視野」「偏った知識」「思い込み」の危険性を理解し、柔軟で寛容な情報対応力を養う。新聞を苦痛なく読むことができるようになる。

專門科目



2 年文化専門科目（前期）

ロシア語 2
中国語 2
韓国語 2
アメリカ英語 2
現代ロシア論
現代中国論
現代韓国朝鮮論
現代アメリカ論
日本政治史
日本の思想
現代東南アジア論
国際政治史
国際経済史
Advanced CEP3

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	ロシア語 2	3	前	A プラーソル（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシア語 1 基礎文法の導入部に引き続き、名詞の格変化、動詞の定・不定・時制などに対する理解を深める。「話す」、「聞く」能力を身に付けるための訓練には十分な時間を割く。

<各回毎の授業内容>

1－4 テキスト第13課 名詞の生格・3人称所有代名詞

5－8 テキスト第14課 名詞の与格と造格と与格

6－9 テキスト第15課 生格と体格の等しい名詞・人称代名詞の体格

10－13 テキスト第16課 所有の表現とその否定

14－17 テキスト第17課 命令法

18－21 テキスト第18課 過去時称

22－25 テキスト第19課 БЫТ Ъ 動詞の未来形と合成未来

26－29 テキスト第20課 -С Я 動詞の変化と意味

30－33 テキスト第21課 定動詞と不定動詞(1)

34－37 テキスト第22課 定動詞と不定動詞(2)

38－41 テキスト第23課 数詞一時間の表現

42－45 テキスト第24課 数詞一年月日の表現

46 テスト

<成績評価方法>

出席率と学期末試験の結果によって成績を評価する。

<教科書・参考文献>

佐藤純一著、新ロシア語入門、NHK 出版、1999年

<受講に当たっての留意事項>

毎回宿題あり

<学習到達目標>

ロシア語の高度な文法を習得し、文章の読解能力を身につけることを目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国語 2 A ・ 2 B		前	笠原ヒロ子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

中国語 I で習得した基礎の上に、豊富な語彙、用例を学び、語順による文法機能と意味関係を確定して、日常会話能力と作文能力を身につける。

<各回毎の授業内容>

1 程度副詞(1)

2 程度副詞(2)

3 程度副詞(3)、連動文

4 助動詞 (1)

5 助動詞 (2)、兼語文

6 助動詞 (3)、反語文

7 起動相 (1)、結果補語

8 起動相 (2)、存現文

9 起動相 (3)、方向補語

10 残存相 (1)

11 残存相 (2)

12 残存相 (3)

13 受身文 (1)

14 受身文 (2)

15 受身文 (3)

16 定期試験

<成績評価方法>

授業参加度、小テスト、定期試験を勘案して総合評価を行います。

<教科書・参考文献>

「互問互答中国語 会話編」朱継征著

<学習到達目標>

中国語の話す、聞く、書く、読むの四つの能力を身につけます。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国語 2 A ・ B		前	區 建英（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中国語 1 の基礎の上で、単語の量を蓄積していき、より高いレベルの文法知識を学び、文章の解体と再構成の方法によって中国語の理解力と会話能力を向上させます。とくに活用による理解を重視し、パートナー或いはグループでの作文練習や会話活動を行い、現地留学に活用できる会話能力を身に付けるよう指導します。

<各回毎の授業内容>

各回ではそれぞれの話題をめぐって会話を行います。文法は下記のポイントを教える予定です。

1、動作の頻度、全面否定と部分否定、頻度と常態

2、助動詞―「應該…」「必須…」「得…」「不得不…」

3、副詞―「只好」「最好」、空間と時間を限定する表現

4、起動相―「開始…」「起来…」「…上」、動作の始点と開始後の状態

5、方向補語―単一方向補語、目的語の位置、複合方向補語

6、残存相―「…着」「…了」、存在文―静態・動態・単純存在、場所語句

7、「是…的」構文、述語動詞を修飾する三要素―時間状語、場所状語、方式状語

8、可能補語―「…得了」「…得動」「…得成」「…得到」、可能助動詞と可能補語

9、可能補語の否定―「動詞＋不＋可能補語」「没＋動詞＋可能補語」

10、程度補語―文型、主述構造の程度補語、程度補語と状況語の相違

11、可能補語のまとめ―肯定形・否定形・目的語の位置、可能補語と能願動詞並行動作

12、「把」構文と「被」構文、結果補語

13、時間と関係のある常用の副詞

14、主従複文―因果関係、逆接関係、条件関係、仮定関係、譲歩関係

15、総合練習

16、定期試験

<成績評価方法>

定期試験は60％、授業での作文・会話の状況は30％、出席の状況は10％。

<教科書・参考文献>

教科書：朱繼征著『互問互答中国語 会話編』新潟大学

<受講に当たっての留意事項>

授業の時、辞書を携帯すること、予習・復習をすること

積極的に作文や会話に取り組むこと

<学習到達目標>

単語の量を蓄積しながら、より内容豊かで生き生きとした会話練習を行い、多くの表現形式を身に付け、コミュニケーション能力を発展させることを目指します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国語 2 A ・ B		前	寺沢一俊
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中国語 1 で習得した発音・四声にさらに磨きをかける。既習の単語・慣用表現・文法事項を新しく学ぶ事柄と関連させ、応用発展させる。「朗読する・聞く・話す」の練習にできるだけ多くの時間を充当し、中国語運用能力の向上をめざす。

<各回毎の授業内容>

1 冊のテキストを複数の教員が分担して講義をするため、実際授業内容とは若干異なる可能性がある。

1. 程度副詞(1)	9. 進行相(3)
2. 程度副詞(2)	10. 進行相(4)
3. 程度副詞(3)	11. 経験相(1)
4. 助動詞(1)	12. 経験相(2)
5. 助動詞(2)	13. 経験相(3)
6. 助動詞(3)	14. まとめ(1)
7. 進行相(1)	15. まとめ(2)
8. 進行相(2)	16. 期末試験

<成績評価方法>

出席が 2 / 3 以上の者に定期試験を受ける資格を与える。成績評価は小テスト 20 %、出席率 20 %、定期試験 60 % の結果を総合的に判断する。

<教科書・参考文献>

教科書: 朱継征著「速問速答中国語（Ⅱ）」

参考文献: 相原茂著「Why ? にこたえる はじめての中国語の文法書」 同学社

<受講に当たっての留意事項>

学んだ単語や文は日本語で意味を理解するだけでなく、正しく読めるようにすること。そして朗読を繰り返して暗誦すること。暗誦できたら、ピンイン符号と漢字で書く練習をすること。

<学習到達目標>

中国語の動相（アスペクト）概念を理解し、正しく運用できるようにする。さらに助動詞・補語の用法に習熟する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	韓国語 2		前	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この授業では、韓国語 1 に引き続き、慶熙大学校のテキストを用いた 2 コマの授業を補強するために、日本で出版されたテキストを用いて、日本語を母語とする者の特性を生かした言語学習を通して、初級段階前半の語学力の完成を目指す。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国語 1 の復習

2. 8 課 今、何時ですか？（その 1）

3. 8 課 今、何時ですか？（その 2）

4. 9 課 初デートの約束（その 1）

5. 9 課 初デートの約束（その 2）

6. 10 課 何が好きですか？（その 1）

7. 10 課 何が好きですか？（その 2）

8. 11 課 週末に何をしましたか？（その 1）

9. 11 課 週末に何をしましたか？（その 2）

10. 12 課 スープが冷たくておいしいです。（その 1）

11. 12 課 スープが冷たくておいしいです。（その 2）

12. 13 課 一度遊びに来てください。（その 1）

13. 13 課 一度遊びに来てください。（その 2）

14. 今学期の復習

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が 2 / 3 以上の者に期末試験の受験資格を与え、成績は期末試験の結果で評価する。なお、宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

金順玉・阪堂千津子『新・チャレンジ！韓国語』白水社、2009年、定価：2300円＋税

<受講に当たっての留意事項>

前学期に引き続き、学習項目を着実に習得してほしい。宿題も随時出したい。

<学習到達目標>

言葉に親しみつつ、話す、聞く、書く、読むという基礎的な言語能力の習得を目標とする。そして、習得した言語をもって、みずからのコミュニケーションに活用することを意識しながら学んでほしい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	韓国語 2		前	申 銀珠・金 世朗
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

一年次に習った初級文法を復習しつつ、中級文法への橋渡しとなる言語運用能力の養成を目的とする。文法面では、用言の活用の学習に重点をおく。用言の活用を体系的に理解し、豊富な練習問題によって実践的に身につけるようにする。基本的な単語と語句を使った和韓作文と口頭表現の練習を行う。

<各回毎の授業内容>

1. 제 10과 종합 연습

2. 제 11과 서점이 몇 층에 있어요?

3. 제 12과 아저씨, 이 사전이 얼마예요?

4. 제 13과 오늘이 무슨 요일이에요?

5. 제 14과 지금 몇 시예요?

6. 제 14과 지금 몇 시예요?

7. 제 15과 종합 연습(1)

8. 제 15과 종합 연습(2)

9. 제 16과 학생 식당으로 갈까요?

10. 제 17과 뭘 드시겠습니까?

11. 제 17과 뭘 드시겠습니까?

12. 제 18과 동대문 시장에 같이 갑시다.

13. 제 19과 이 운동장 어때요?

14. 제 20과 종합 연습(1)

15. 제 20과 종합 연습(2)

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果で評価。宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

『韓国語初級 I』(国際教育院韓国語教育部、慶熙大学校出版局)

<受講に当たっての留意事項>

外国語の学習はまさに、「継続が力なり」である。毎回課題が与えられ、随時小テストも行われる。しっかりついてきてください。

<学習到達目標>

初級レベルの読み書き・会話ができるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 A		前	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

This course is a continuation of Introduction to American Eng.1. It aims to equip students with the cultural and background knowledge needed to work, live and communicate intelligently and productively with people who use English as their main means of communication. Students will engage in activities, which require reflecting, discussing, and sharing their points of view about a variety of themes. The themes represent a variety of topics about the identity of people in the English-speaking world - what influences identity and how it is expressed.

<各回毎の授業内容>

・ Tentative schedule will be given on the first day of classes, but subject to change according to the needs and abilities of the students.

第 1 回 Course introduction, rules of the course, and introduction to computer skills & computer room etiquette

第 2 回 UNIT 1

第 3 回 UNIT 2

第 4 回 UNIT 3

第 5 回 UNIT 4

第 6 回 UNIT 5

第 7 回 UNIT 6

第 8 回 Group presentations

第 9 回 Group presentations

第 10 回 UNIT 7

第 11 回 UNIT 8

第 12 回 UNIT 9

第 13 回 UNIT 10

第 14 回 Review for final test

第 15 回 Final test

<成績評価方法>

・ 40% Coursework (including quizzes, in-class preparations and group presentations, homework, writing assignments, etc)

・ 30% Major Examinations

・ 30% Attendance and Participation

※ The 85% attendance policy will be strictly followed.

<教科書・参考文献>

・ The textbook will be announced the first day of class. A dictionary is also required.

・ Teacher will give students work and information handouts which they must keep in a separate English folder.

<受講に当たっての留意事項>

・ There will be regular quizzes to ensure that they have learnt the vocabulary.

・ weekly homework (journal writing) will be given to help improve English writing skills and self-confidence.

<学習到達目標>

This course further improves students' daily communication ability and understanding of American culture by focusing on vocabulary, grammar and pronunciation. There is also a focus on students expressing their opinions.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 A		前	梶浦 麻子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策のテキストを用い、試験に対応する英語力を養成する。特有な問題に慣れるため、多くの練習問題を解いていく。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Part1及びPart5 品詞

3. Part1及びPart5 類義語

4. Part1及びPart5 動詞

5. Part2・Part3 「Time」 及び Part5 仮定

6. Part2・Part3 「People」 及び Part5 副詞

7. Part2・Part3 「An opinion」 及び Part5の復習

8. Part2・Part3 「A reason」 及び Part6 主語と動詞の一致

9. Part2・Part3 「Location」 及び Part6 助動詞

10. Part2 「A suggestion」 及び Part6 不定詞・動名詞

11. Part2 「A choice」・Part3 「Intent」 及び Part6 代名詞

12. Part4 「Sequence」 及び Part6の復習

13. Part4 「Audience」 及び Part7 「Advertisements」・「Business correspondence」

14. Part4 「Situation」 及び Part7 「Forms, charts, and graphs」・「Articles and reports」

15. Part4 「Topic」・「Request」 及び Part7 「Announcements and paragraphs」

16. テスト

<成績評価方法>

授業内小テスト 50％、宿題 40％、出席 10％

<教科書・参考文献>

Lin Lougheed 著「Preparation Series for the New TOEIC Test: Introductory Course」(Pearson Longman)

<受講に当たっての留意事項>

遅刻2回で1回の欠席とする。

<学習到達目標>

基礎的な文法を確実に理解できているか確認し、読解力及び聴解力を伸ばす。また、TOEIC受験時間内に効果的に解答ができる力を身に付ける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 A・B・C		前	大岩彩子
22～24年						
21年度以前						

選択必須

<授業目的>

The aim of this course is to build fluency in personal communication, and develop a colloquial conversation style. Students will practice fluency building activities such as shadowing and overlapping. The class introduces American culture and life style through the context covered in the weekly topics. Class time will be also spent doing series of speaking and listening activities, and the students taking this course will be expected to fully participate in pair and group activities. Homework will be assigned each week, which involves using Facebook.

<各回毎の授業内容>

Week 1 Introduction of the course, class survey

Week 2 Unit 1 Introductions

Week 3 Unit 2 Home

Week 4 Unit 3 Food

Week 5 Unit 5 Work

Week 6 Unit 7 Experiences

Week 7 Unit 8 Health

Week 8 Midterm examination

Week 9 Unit 9 Family

Week 10 Unit 10 Personality

Week 11 Unit 11 Beliefs

Week 12 Unit 12 Relationships

Week 13 Unit 13 Education

Week 14 Unit 14 Memories

Week 15 Unit 16 Inspiration

Week 16 Final examination

<成績評価方法>

Homework assignments 20%

Midterm examination 40

Final examination 40

<教科書・参考文献>

Impact Conversation 2 by Sullivan K. &Beucken, T. (Pearson Longman)

<受講に当たっての留意事項>

Good participation is the key to a successful class. Students who come to class ready and eager to study raise the quality of learning for everyone.

Good participation means you:

- speak English in class.
- ask questions. It's GOOD to ask questions.
- pay attention and focus on the class activities.
- do your homework.

<学習到達目標>

Build fluency in personal communication.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 B		前	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

This course is a continuation of Introduction to American Eng.1. It aims to equip students with the cultural and background knowledge needed to work, live and communicate intelligently and productively with people who use English as their main means of communication. Students will engage in activities, which require reflecting, discussing, and sharing their points of view about a variety of themes. The themes represent a variety of topics about the identity of people in the English-speaking world - what influences identity and how it is expressed.

<各回毎の授業内容>

・ Tentative schedule will be given on the first day of classes, but subject to change according to the needs and abilities of the students.

第1回 Course introduction, rules of the course, and introduction to computer skills & computer room etiquette

第2回 UNIT 1

第3回 UNIT 2

第4回 UNIT 3

第5回 UNIT 4

第6回 UNIT 5

第7回 UNIT 6

第8回 Group presentations

第9回 Group presentations

第10回 UNIT 7

第11回 UNIT 8

第12回 UNIT 9

第13回 UNIT 10

第14回 Review for final test

第15回 Final test

<成績評価方法>

・ 40% Coursework (including quizzes, in-class preparations and group presentations, homework, writing assignments, etc)

・ 30% Major Examinations

・ 30% Attendance and Participation

※ The 85% attendance policy will be strictly followed.

<教科書・参考文献>

・ The textbook will be announced the first day of class. A dictionary is also required.

・ Teacher will give students work and information handouts which they must keep in a separate English folder.

<受講に当たっての留意事項>

・ There will be regular quizzes to ensure that they have learnt the vocabulary.

・ weekly homework (journal writing) will be given to help improve English writing skills and self-confidence.

<学習到達目標>

This course further improves students' daily communication ability and understanding of American culture by focusing on vocabulary, grammar and pronunciation. There is also a focus on students expressing their opinions.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 B		前	梶浦 麻子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策のテキストを用い、試験に対応する英語力を養成すると共に、TOEIC特有の「解き方」を練習することで得点向上を目指す。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Part1及びPart5 品詞

3. Part1及びPart5 動詞

4. Part1及びPart5 名詞

5. Part2 「Who」・「What」 及びPart5 副詞・形容詞

6. Part2 「When」・「Where」 及びPart5 前置詞・接続詞・代名詞

7. Part2 「W h y 」・「How」 及び Part5の復習

8. Part3 「Auxiliaries」 及び Part6 時制

9. Part3 「Occupation」・「Activities」 及び Part6 時制

10. Part3 「Time」・「Location」 及び Part6 時制

11. Part3 「Reasons」 及び Part6 時制

12. Part4 「Advertisements」・「Weather」 及び Part6の復習

13. Part4 「News」・「Recorded Announcements」 及び Part7 「Advertisements」・「Forms」

14. Part4 「Special Announcements」 及び Part7 「Letters, E-mail, Faxes, and Memos」・「Tables, Indexes, and Charts」

15. Part4 「Business Announcements」 及び Part7 「Introductions and Notices」

16. テスト

<成績評価方法>

授業内小テスト 50 %、宿題 40 %、出席 10 %

<教科書・参考文献>

Lin Lougheed 著「Preparation Series for the New TOEIC Test: Intermediate Course」(Pearson Longman)

<受講に当たっての留意事項>

遅刻 2回で1回の欠席とする。

<学習到達目標>

自分の弱点を理解し文法力、読解力及び聴解力を伸ばす。また、TOEIC受験時間内に効果的に解答ができる力を身に付ける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 C		前	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

This course is a continuation of Introduction to American Eng.1. It aims to equip students with the cultural and background knowledge needed to work, live and communicate intelligently and productively with people who use English as their main means of communication. Students will engage in activities, which require reflecting, discussing, and sharing their points of view about a variety of themes. The themes represent a variety of topics about the identity of people in the English-speaking world - what influences identity and how it is expressed.

<各回毎の授業内容>

・ Tentative schedule will be given on the first day of classes, but subject to change according to the needs and abilities of the students.

第1回 Course introduction, rules of the course, and introduction to computer skills & computer room etiquette

第2回 UNIT 1

第3回 UNIT 2

第4回 UNIT 3

第5回 UNIT 4

第6回 UNIT 5

第7回 UNIT 6

第8回 Group presentations

第9回 Group presentations

第10回 UNIT 7

第11回 UNIT 8

第12回 UNIT 9

第13回 UNIT 10

第14回 Review for final test

第15回 Final test

<成績評価方法>

・ 40% Coursework (including quizzes, in-class preparations and group presentations, homework, writing assignments, etc)

・ 30% Major Examinations

・ 30% Attendance and Participation

※ The 85% attendance policy will be strictly followed.

<教科書・参考文献>

・ The textbook will be announced the first day of class. A dictionary is also required.

・ Teacher will give students work and information handouts which they must keep in a separate English folder.

<受講に当たっての留意事項>

・ There will be regular quizzes to ensure that they have learnt the vocabulary.

・ weekly homework (journal writing) will be given to help improve English writing skills and self-confidence.

<学習到達目標>

This course further improves students' daily communication ability and understanding of American culture by focusing on vocabulary, grammar and pronunciation. There is also a focus on students expressing their opinions.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 2 C		前	梶浦 麻子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

自分の弱点を理解し克服すると共に、TOEIC 特有の「解き方」を練習し、高得点を目指す。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Part1 及び Part5・Part6 構成

3. Part1 及び Part5・Part6 構成

4. Part1 及び Part5・Part6 構成

5. Part2 及び Part5・Part6 文法

6. Part2 及び Part5・Part6 文法

7. Part2 及び Part5・Part6 文法

8. Part2 及び Part5・Part6 文法

9. Part2 及び Part5・Part6 文法

10. Part3 及び Part5・Part6 語彙

11. Part3 及び Part5・Part6 語彙

12. Part3 及び Part5・Part6 語彙

13. Part4 及び Part7 パラグラフの構成

14. Part4 及び Part7 読解法

15. Part4 及び Part7 読解法

16. テスト

<成績評価方法>

授業内小テスト 50 %、宿題 40 %、出席 10 %

<教科書・参考文献>

授業内でレジメ等を配布

<受講に当たっての留意事項>

遅刻 2 回で 1 回の欠席とする。

<学習到達目標>

語彙力、文法力、読解力及び聴解力を伸ばす。また、TOEIC 受験時間内に効果的に解答ができる力を身に付ける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代ロシア論	2	前	神長英輔（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業では、ロシア近現代史の学習を通じて参加者のみなさんに自分と現代ロシアの接点を見つけてもらいます。みなさんの知識や興味関心を現代のロシアに関するさまざまな知に結びつけることをめざします。歴史や社会を理解する方法についても考えていただきます。

<各回毎の授業内容>

政治・経済・文化・国際関係などさまざまな方面からロシア・ソ連の20世紀史を概観します。講義の内容は以下の通りです。

- ・第1回 ガイダンスと「現代ロシアの基礎知識 その1」
- ・第2回 「現代ロシアの基礎知識 その2」
- ・第3回 「現代ロシアの基礎知識 その3」
- ・第4回 「19世紀までの歴史・概要」
- ・第5回 「日露戦争と1905年革命」
- ・第6回 「第1次世界大戦」
- ・第7回 「ロシア革命」
- ・第8回 「内戦と干渉戦」
- ・第9回 「ネップと上からの革命」
- ・第10回 「スターリン時代」
- ・第11回 「第2次世界大戦」
- ・第12回 「フルシチョフ時代」
- ・第13回 「ブレジネフ時代」
- ・第14回 「ペレストロイカとソ連解体」
- ・第15回 （予備回）

随時、私がテーマを設定した上で数人単位のグループワークをおこない、その場で口頭の発表をしていただく場合があります（グループ分けは名簿をもとに不作為におこないます）。

また、課題として毎回の授業回の最後にその日の講義の要旨（200から400字程度）を5分程度で書き、提出していただきます。これを提出しない場合は欠席（ないし早退）扱いにします。

<成績評価方法>

出席回数、上記の授業内容要旨の提出、グループワークにおける積極性、学期末のペーパーをもとに総合的に判断します。

<教科書・参考文献>

常時使う教科書はありません。資料は必要に応じて配布します。

参考文献として地図帳（ロシア全土が記載されているもの。中学や高校で使用していたものでよい）を持参してください。

不明点があれば、授業中に質問するほか、『ロシアを知る事典』（平凡社）で随時確認してください。

また、東洋書店から出版されているユーラシア・ブックレットシリーズ（図書館にあります）のうち、自分で興味のあるものを読み進めてください。

<受講に当たっての留意事項>

参加者に求めるものは主体性と積極性です。グループワーク等に積極的に参加する気がない方、約束事を守れない方はご遠慮ください。

健康に留意し、できるだけ出席するよう心がけてください。また、積極的に質問し、授業に関わってください。私語をする方、寝ている方、携帯端末等を見ている方、遅刻や早退の程度が過ぎる場合は欠席扱いにします。

ロシア・ソ連とその歴史について関心のある方の参加を希望します。

<学習到達目標>

自分がロシアについて何を知りたいのかを自分で発見してください。期待しています。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代中国論	2	前	區 建英（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中華人民共和国は建国以来、国民経済の建設と民主化を進める上で、どのような路を辿ってきたのか。広大な領土には異なった言語・文化・宗教・価値観を持つ多くの民族があり、これら様々な民族はどのように共存するのか。また、東アジア諸国との関係、とくに日本との関係はどのような道を辿ってきたのか。これらの問題を、国際的背景とくに冷戦終結後の時代変遷、経済のグローバル化、および中国の経済急速成長という視野に置いて分析します。

民主化の問題については、中華人民共和国が置かれていた冷戦下の国際的環境を説明し、国際的な反覇権闘争と国内の民主化・国民経済建設とのジレンマを語ります。民族の問題については、多様性を重視する多民族社会の伝統と、近代国家の均質化傾向とのジレンマを乗り越えようとする試行錯誤を説明します。日中関係および東アジア諸国との関係については、冷戦時代の問題に触れながら現在の問題や課題に重点を置いて語ります。

<各回毎の授業内容>

授業は下記のスケジュールで進めますが、授業の状況によって若干変更する場合があります。

(一) 1、建国初期の国際環境—冷戦構造
2、国民経済建設の屈折と文化大革命
3、冷戦終結と改革開放
4、経済成長と民主化運動
5、公民の成長と中国の変貌
6、格差問題と改善への取り組み

(二) 7、統一国家と多民族社会
8、政治・経済・文化における民族関係
9、民族政策の曲折と原点への復帰
10、西部開発と「扶貧」

(三) 11、中国と東アジアの国際関係
12、冷戦終結後の全方位外交
13、中米関係の新しい模索
14、日中関係の新しい模索
15、大陸と台湾との兩岸関係
16、定期試験

<成績評価方法>

定期試験は70％、毎回の授業に提出するコメント（感想、質問等）は20％、出席の状況は10％。

<教科書・参考文献>

教科書は、授業のテーマ毎に配るレジュメ。参考文献は、授業時に紹介。

<受講に当たっての留意事項>

講義のメモを取りながらよく思考し、コメントを書くこと。レジュメをよく復習し、参考書をも積極的に読むこと。

<学習到達目標>

中華人民共和国の歩みを把握し、現代中国の様々な事象を歴史、伝統、国際関係など複数の視点から捉え、中国社会を理解すること。よって、日中の新しい協力関係を模索する知を掴むよう期待します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代韓国朝鮮論	2	前	申 銀珠（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

解放後から現代にいたるまでの韓国社会の変貌と現状について、政治、経済、文化、教育などの各方面から述べる。特に、民主化と統一への動きに焦点を当てて、韓国現代政治史について詳しく述べる。現代韓国が抱える様々な社会問題、人々の人生観・価値観の変化、さらに日韓関係、日朝関係、南北統一問題などを多角的に理解するよう、時事問題も積極的に取り上げる。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国の最新事情:政治・経済を中心に
2. 韓国人の社会ネットワーク:血縁・地縁・学縁、結束力と排他性
3. 民主化と統一への道
4. 解放後から大韓民国政府樹立まで
5. 朝鮮戦争と韓国社会
6. 離散家族問題
7. 朴正熙政権に対する評価
8. 光州事件から民主化宣言まで
9. 文民政府（金泳三）の登場と金大中の太陽政策
10. 盧武鉉政権と386世代
11. 経済の発展と課題:財閥と労使紛争、IMF時代、貧富の格差、伝統的価値観の崩壊
12. 韓国の教育事情:公教育と私教育、早期留学の実態とその背景
13. 韓国人の家族観 :伝統的な家族制度の変貌、女性と法律
14. 韓国の宗教
15. 韓国の若者文化、韓国社会と徴兵制

<成績評価方法>

出席20％、レポート80％(感想文、小テスト、最終レポート)

<教科書・参考文献>

毎回プリントを配布する。写真集、ビデオなどを副教材として使う。

<受講に当たっての留意事項>

適当なテキストがないため毎回かなりの量の資料を配布する。欠席した者は自己責任で資料をそろえること。

<学習到達目標>

朝鮮半島の近現代史及び現代韓国・北朝鮮事情を幅広く理解したうえで<比較>の視点を生かし、朝鮮半島の南北問題・日韓関係・日朝関係の近未来像を受講者自ら描けるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代アメリカ論	2	前	安藤 潤（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この講義の目的は、主に1990年代以降のアメリカ経済の特徴、基軸通貨ドルの問題点、アメリカ経済が世界経済に与える影響について理解を深めることである。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. アメリカ経済の特徴①:デモグラフィック・データから

3. アメリカ経済の特徴②:マクロ経済から

4. 基軸通貨ドルの歴史①:基軸通貨ドルの誕生

5. 基軸通貨ドルの歴史②:レーガノミクスの帰結

6. 基軸通貨ドルの歴史③:「強いドル」政策

7. アメリカのジェンダー経済格差①

8. アメリカのジェンダー経済格差②

9. アメリカの所得・資産格差①

10. アメリカの所得・資産格差②

11. アメリカの軍事経済①

12. アメリカの軍事経済②

13. アメリカの医療問題①

14. アメリカの医療問題②

15. アメリカの医療問題③

16. 定期試験

<成績評価方法>

コメントカード（不定期、20％）、定期試験（80％）

<教科書・参考文献>

特に教科書は指定しない。参考文献は指定図書すべて。

<受講に当たっての留意事項>

月曜1限なので特に遅刻には注意すること。授業中はスマートフォン、携帯電話の類は必ず電源を切っておくこと。グラフや表を多用するが、「経済学（マクロ）」で使うような数式は用いない。私語は厳禁。注意しても私語を続ける者は退室を願うことがある。体調不良などやむを得ない場合を除き大幅な遅刻・途中退出はしないこと。授業中は歩き回らないこと。ただし病気などでやむをえず一時退出せざるを得ない者は事前に教員に伝えること。携帯電話・PHSの類は必ず電源を切ること。飲食禁止。コピーを配布するが、欠席をした者は自己の責任でそろえること。板書したことだけでなく、重要と思われる点は各自ノートに書いておくこと。

<学習到達目標>

受講生が、頭の中に刷り込まれた「豊かな国」、「世界最大の経済大国」といったアメリカ経済につけられるフレーズが頭の中で剥がれ落ちるその瞬間の音を聞き、アメリカ経済の真実－超格差社会アメリカーに気づくこと。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	日本政治史	2	集 中	中村起一郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

私たちの身の回りにはたくさんの「権力」がありますが、その中でもとびきり強大なのは、国家権力でしょう。中央政府のつくる制度や政策は、私たちの生活に非常に大きな影響を与えます。

日本において、そのような強大な権力はどのようにして作られるのか。また、私たちはそれをどのようにに制御し、あるいは関与することができるのか。この講義では、日本の統治のあり方の特徴と課題がどのように変わってきたか（変わっていないか）を、歴史的に分析します。「いまの政治家は無能だ」「どこに投票しても変わらない」と嘆く前に、知るべきことはたくさんあります。

<各回毎の授業内容>

1 イントロダクション 2012年総選挙をどうみるか

2－3 明治維新と大日本帝国憲法——江戸幕府の政治と何が違うのか

4－5 戦前の政党政治——なぜ軍部の台頭を抑えられなかったのか

6－7 敗戦と占領——アメリカは何を変えたのか

8－9 自民党の一党支配体制——なぜ半世紀も続いたのか

10－11 自民党政治の機能不全——冷戦の終焉と低成長は日本政治をどう変えたか

12－13 「政治主導」の時代——競争で豊かになるのか

14－15 2013年の政策課題

16 期末試験

<成績評価方法>

期末試験の成績で評価する。平常点を若干加味する。

<教科書・参考文献>

教科書は特に指定しない。基本的な事実を確認するために、高校の日本史・世界史の教科書および用語集を頻繁に参照してほしい。その他の参考文献は講義中に適宜紹介する。日本政治史の流れを追うのには、以下の本が参考になる。

北岡伸一『日本政治史』有斐閣、2011年

<学習到達目標>

・日本の政党政治の発展の歴史的条件を理解する。（50％）

・日本政策決定過程の複雑さを理解した上で、そのあり方を批判的に検討する視座を養う。（50％）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	日本の思想	2	集 中	今井 修
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
日本の思想を掘り下げて理解するうえでの入門講座的内容とする。問題の所在・特質の把握やとくに近代日本の思想を歴史思想を中心に文化史的背景のもとに理解することを今年度の授業目的としたい。

<各回毎の授業内容>
1、今年度集中講義の意図と概要
2、日本思想史研究のあゆみ
3、日本思想史研究の現在（1日目小テスト）
4、日本近代史学史のアウトライン
5、日本近代史学の基本的問題
6、日本近代史学思想の再検討（2日目小テスト）
7、「文明史学」と「民間史学」について
8、福沢諭吉と田口卯吉の文明史論
9、山路愛山の史論史学（3日目小テスト）
10、「文化史」について
11、大正期における「文化史」シリーズの特色
12、津田左右吉の思想史学の形成（4日目小テスト）
13、津田左右吉の思想史学の成立
14、津田左右吉の思想史学の特質
15、まとめと展望
16、教場試験

<成績評価方法>
1日3コマ、5日間の集中講義なので5日間の皆出席を単位認定の前提条件とする。毎日定刻に出席をとり、最後に小テストをおこなう。小テストについては翌日に簡単にコメントし、良好な例をプリントとして配布する。この小テスト4日分を40点とし、5日目のおわりに論述問題中心の総合的な教場試験を実施し、これを60点として、両者の合計点で評価する。

<教科書・参考文献>
教科書はない。参考文献については授業中に紹介していく。場合によって資料プリントを配布するが、各自のノートを用意すること。

<受講に当たっての留意事項>
集中講義のメリットを実感できるよう、他の受講生に迷惑・不快な思いをさせないことが第一に要求されることである。私語厳禁さらに大幅な遅刻や途中退席は認めない。授業の進行を著しく阻害すると判断した場合は退席を求め、以後の受講をできないことにする。
ノートをしっかりとること。

<学習到達目標>
・日本思想史研究のあゆみが理解できる。
・日本近代の歴史学の特質とその歴史思想を重点的に理解できる。
・歴史的アプローチの方法の基本を身に付けることができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代東南アジア論	2	前	高橋正樹（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

東南アジア諸国の政治経済と歴史を日本との関係に留意しながら考察することを目的とします。東南アジアは11カ国によって構成される多様な歴史と文化、政治経済をもつ広い地域ですので、短い授業で触れられることは限られます。地域としては、タイ・ビルマ（ミャンマー）・ベトナム・カンボジア・ラオスといった大陸部東南アジアの戦後の動きを中心に扱います。東南アジアは日本軍が戦時中に占領したたいへん関係の深い地域ですが、戦後もとくに政治経済的に深い関係にあります。現在は開発による経済的格差の拡大や民主化弾圧など様々な問題を抱えています。授業では随時、ビデオなどを観て具体的イメージをつくりながら進めていきたいと思っています。

<各回毎の授業内容>

1. 東南アジア認識の方法
2. 戦前の日本と東南アジアとの関係
3～4. 戦後のアジア冷戦と日本の東南アジア復帰
5～6. ベトナム戦争
8～9. ビルマの民主化
10～12. 日本の経済進出と東南アジア
13～15. タイの政治変動

<成績評価方法>

原則として、授業への全出席が最低条件になります。さらに、中間テスト・学期末テストによって評価します。

<教科書・参考文献>

教科書

教科書はありませんが、毎回、授業内容をレジュメに書いて配ります。

参考文献

サイード『オリエンタリズム』平凡社；矢野暢『南進の系譜』中央公論社；永瀬隆『「戦場にかける橋」のウソと真実』岩波書店、1986年；末廣昭『タイ・開発と民主主義』岩波書店、1992年；古田元夫『歴史としてのベトナム戦争』大月書店、1991年；歴史教育者協議会編『知っておきたい東南アジアI』青木書店。

<受講に当たっての留意事項>

東南アジアにとくに興味がない人でも履修してください。授業を受けることできっと東南アジアへの関心が深まることでしょう。

<学習到達目標>

東南アジアへの関心と理解を深めること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	国際政治史	2	前	小澤治子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この科目のねらいは、第一次世界大戦終結後、第二次世界大戦勃発にいたる時期（戦間期）における国際政治の歴史を主に学ぶことである。20世紀に起こったこの二度の世界大戦をなぜ防ぐことができなかったのだろうか。また二度の世界大戦が残した歴史の教訓とはいかなるものであろうか。そのような問題意識を持って二つの世界大戦勃発にいたる過程、また第一次世界大戦の戦後処理の特色と問題点について詳しく考えてみたい。

<各回毎の授業内容>

- 1 戦間期国際政治史研究の意義
- 2 19世紀から20世紀初めの東アジア——ロシアの東進
- 3 19世紀から20世紀初めの東アジア——アメリカの西進
- 4 第一次世界大戦勃発と国際政治——ヨーロッパの民族問題との関連で
- 5 第一次世界大戦とアメリカ——ロシア革命との関連で
- 6 第一次世界大戦の戦後処理——パリ講和会議と日本外交
- 7 ワシントン会議と日本外交
- 8 ワシントン体制と日本外交——二人の外相を中心に
- 9 1930年代の東アジア——満州事変から日中戦争へ
- 10 戦間期のヨーロッパ——集団安全保障体制構築の試み
- 11 戦間期のヨーロッパ——集団安全保障体制構築の挫折
- 12 第二次世界大戦開始前後のソ連外交——独ソ不可侵条約と日ソ中立条約
- 13 太平洋戦争勃発と米ソ関係(1)
- 14 太平洋戦争勃発と米ソ関係(2)
- 15 戦間期国際政治の特色と問題点

<成績評価方法>

学期末試験の結果を中心に成績評価を行うが、授業ごとに提出するコメントペーパーも参考にする。

<教科書・参考文献>

教科書は特に指定せず、授業内容についてのプリントを毎回配付する。参考文献は講義の中で随時紹介するが、以下二冊が特に有用である。

石井修『国際政治史としての20世紀』 有信堂 2000年。

川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』 名古屋大学出版会 2007年。

<受講に当たっての留意事項>

授業においては私語と遅刻を厳禁します。最低限のモラルを守って下さい。

<学習到達目標>

戦間期の国際政治の歴史を学ぶことを通じて、今日の国際政治を考える視点を養う。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	国際経済史	2	前	佐藤芳行
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

戦後、国際経済は様々な変化を経験してきた。まず「資本主義の黄金時代」と呼ばれる1950年代中葉～60年代に日本とヨーロッパ諸国が急速に米国にキャッチ・アップした。この時期のOECD諸国では混合経済体制の下で福祉国家が形成され、完全雇用、高成長、格差の縮小などが達成された。しかし、1970年代になると石油危機、スタグフレーションをはじめ様々な困難が現れてきた。そして、1980年代に米英を中心として政策の大転換がなされ、ネオ・リベラル政策が実施されるようになった。またグローバル化の現象が顕著となり、ケインズの福祉国家体制からグローバル市場経済への移行が行われた。しかし、それは社会を不安定化させる様々な問題（金融危機、失業の増加、所得分配における格差拡大など）をもたらしている。この講義では、そうした変化やその理由を経済学的に理解することを通じて、市民が安心して暮らせる社会を実現するにはどうしたらよいのかを考える。

<各回毎の授業内容>

1 回 はじめに 国際経済史を学ぶ意義

2 回 戦後における「資本主義の黄金時代」

3 回 黄金時代における国内体制

4 回 黄金時代における国際関係

5 回 黄金時代の黄昏(1) IMF体制の動揺とインフレーション

6 回 黄金時代の黄昏(2) 石油危機とスタグフレーションの昂進

7 回 1980年代の大転換

8 回 ネオ・リベラル政策の展開

9 回 グローバル化と貿易フロー・ポートフォリオ資本移動

10回 グローバル化と企業の多国籍化

11回 アジアの成功とラテン・アメリカの失敗

12回 計画経済の成功と失敗、市場移行

13回 グローバル化とネオ・リベラル政策の一般的な帰結

14回 グローバル化と日本経済(1)

15回 グローバル化と日本経済(2)

16回 期末試験

<成績評価方法>

国際経済史とその分析ツールの理解度を定期試験（80％）とレポート（20％）で評価する。

<教科書・参考文献>

テキストは使用しない。それに代わり毎回講義資料を配付する。

<学習到達目標>

・日本経済とかかわりの深い地域における重要な国際経済史上の変化・出来事を知り、それを説明できるようになる。（50％）

・そのために必要な経済学上の基礎的概念を理解した上で、それを用いて国際経済史上の趨勢や出来事を批判的・客観的に整理し、説明できるようになる。（50％）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	AdvancedCEP3	2	前	M. Ruddick P. Dickinson
22～24年						
21年度以前						

<現在の教育目標>

CEP 1・2と同じように、A-CEPは英語を楽しく集中的に学習するプログラムです。A-CEPで積極的に取り組んだ学生は、そのほとんどが学年末には自信を持って英語を話すことができるようになっています。A-CEPでは、国際英語を教えます。英語を自分のことばにして、日本人としての学生の視点から話します。A-CEPでは、学生が英語を話したくなるような、楽しいクラスを目指します。

<教育内容>

CEP 1・2と同じように、A-CEPプレイスメント・テストの結果によって、レベル別クラスが編成されます。昔Aクラスが最も難しく、Fクラスが基礎レベルです。しかし、今学生が出席できないため、クラスは一つだけです。A-CEPはディスカッションと批判的思考法を教えるために現代の話題や議論を学生と一緒に調査します。文化学科のゼミのテーマが教材を作るために使われます。A-CEPには、スピーキング・リスニングの授業とリーディングの授業があります。リスニングとスピーキングのテストは3週間に1回あります。

<時間数>

週4回で45分

<学習成果>

A-CEPでの参加者の学習成果として英語力が向上しているの重要な点。しかしながら、また、学生たちが批判的な思考能力を教えられるだけでなく、学生たちが生涯学習（Lifelong Learning）に関与し始めます。

3 年文化専門科目（前期）

ロシア語 4
中国語 4
韓国語 4
アメリカ英語 4
日ロ関係論
日中関係論
日韓朝関係論
日米関係論
日本語学
地球社会と人権
現代エネルギー論
EU 論
国際組織論
外国語文献講読 1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 4 A		前	A プラーソル（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシア語 1・2・3・基礎文法の導入に引き続き、基本的な知識を整理し、発展させながらロシア語の運用能力を高めることを目的とする。文法知識を体系的に整理することを目標とし、特に「話す」「聞き分ける」能力を身に付けるための訓練には十分な時間を割く。

<各回毎の授業内容>

1・2 講義のガイダンス、テキストの第32課

3・4 テキストの第33課

5・6 テキストの第34課

7・8 テキストの第35課

10・11 テキストの第36課

12・13 テキストの第37課

14・15 テキストの第38課

16 期末試験

<成績評価方法>

出席率と期末試験の結果によって成績を評価する。

<教科書・参考文献>

①佐藤純一、新ロシア語入門 NHK 出版 ②研究者露和辞典等 ③教員が用意したプリントを配布する

<受講に当たっての留意事項>

①毎回宿題あり ②欠席が3分の1を超えた場合は期末試験の受験を認めない

<学習到達目標>

教科書の基本例文を完全に習得すること。テキストに説明されている高度な文法を習得し、文章の読解能力を身に付けることを目標とする。学習者が外国旅行等際に必要に応じて簡単な会話ができることも目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 4 A		前	神長英輔（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
ロシア語の基礎の文法のうち、発展的な内容の習得をめざします。作文や精読を通じて語法を習得し、語彙を増やしていくことをめざします。手持ちの知識を活かして作文や発話を試みていただきます。

<各回毎の授業内容>
各週の内容は以下の通りです。

1. 代名詞変化のまとめ(1)（『新ロシア語入門』第32課）
2. 代名詞変化のまとめ(1)（同第32課）
3. 形容詞変化のまとめ（同第33課）
4. 形容詞変化のまとめ（同第33課）
5. 代名詞変化のまとめ(2)（同第34課）
6. 代名詞変化のまとめ(2)（同第34課）
7. 形容詞の短語尾形（同第35課）
8. 形容詞の短語尾形（同第35課）
9. 動詞の体(4)（同第36課）
10. 動詞の体(4)（同第36課）
11. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
12. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
13. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
14. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
15. 総復習（第32課から第38課まで）および総復習テスト

以上は受講者の達成度や前学期「ロシア語3」の進度に応じて多少前後する可能性があります。詳しくは開講時に指示します。

各課では文法解説、音読、グループワークによる露作文等の練習をおこないます。また、随時ロシア語の歌をいっしょに歌います。

<成績評価方法>
出席回数、小テスト（筆記・暗唱）、課題（書写）、総復習テストをもとに総合的に判断します。

<教科書・参考文献>
教科書は佐藤純一『NHK新ロシア語入門』NHK出版（CD付き）です。随時、補習教材を配布します。

<受講に当たっての留意事項>
出席が極めて重要です。出席回数を重視します。
語学は積み重ねです。あとでまとめてやることは不可能です。毎回の着実な復習が大事です。授業に出るだけで勝手にできるようになることはありません。教科書添付のCDを活用し、日常生活の中でロシア語を聞き、読み、書く時間を確保してください。小テストは必ず復習してください。
間違いを恥じてはいけません。楽しく取り組むのは大事ですが、他の受講者の間違いを笑ってはいけません。わからないことはいつでも遠慮なく質問してください。
みなさんの積極的な取り組みを期待しています。

<学習到達目標>
教科書の基本例文を完全に習得すること。教科書の読本教材（テキスト部分）を自在に読めるようになること（文意を理解し、音読できること）。受講後に語彙が増えたと実感できること、手持ちの知識を活かして積極的にロシア語で表現（話す・書く）していただくこと、ロシア語学習が楽しいと思えるようになること、以上が目標です。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 4 B		前	神長英輔（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
ロシア語の基礎の文法のうち、発展的な内容の習得をめざします。作文や精読を通じて語法を習得し、語彙を増やしていくことをめざします。手持ちの知識を活かして作文や発話を試みていただきます。

<各回毎の授業内容>
各週の内容は以下の通りです。
1. 代名詞変化のまとめ(1)（『新ロシア語入門』第32課）
2. 代名詞変化のまとめ(1)（同第32課）
3. 形容詞変化のまとめ（同第33課）
4. 形容詞変化のまとめ（同第33課）
5. 代名詞変化のまとめ(2)（同第34課）
6. 代名詞変化のまとめ(2)（同第34課）
7. 形容詞の短語尾形（同第35課）
8. 形容詞の短語尾形（同第35課）
9. 動詞の体(4)（同第36課）
10. 動詞の体(4)（同第36課）
11. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
12. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
13. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
14. 関係代名詞(1)(2)（同第37・38課）
15. 総復習（第32課から第38課まで）および総復習テスト

以上は受講者の達成度や前学期「ロシア語 3」の進度に応じて多少前後する可能性があります。詳しくは開講時に指示します。
各課では文法解説、音読、グループワークによる露作文の練習等をおこないます。また、随時ロシア語の歌をいっしょに歌います。

<成績評価方法>
出席回数、小テスト（筆記・暗唱）、課題（書写）、定期試験をもとに総合的に判断します。

<教科書・参考文献>
教科書は佐藤純一『NHK新ロシア語入門』NHK出版（CD付き）です。随時、補習教材を配布します。

<受講に当たっての留意事項>
出席が極めて重要です。出席回数を重視します。
語学は積み重ねです。あとでまとめてやることは不可能です。毎回の着実な復習が大事です。授業に出るだけで勝手にできるようになることはありません。教科書添付のCDを活用し、日常生活の中でロシア語を聞き、読み、書く時間を確保してください。小テストは必ず復習してください。
間違いを恥じてはいけません。楽しく取り組むのは大事ですが、他の受講者の間違いを笑ってはいけません。わからないことはいつでも遠慮なく質問してください。みなさんの積極的な取り組みを期待しています。

<学習到達目標>
教科書の基本例文を完全に習得すること。教科書の読本教材（テキスト部分）を自在に読めるようになること（文意を理解し、音読できること）。受講後に語彙が増えた実感できること、手持ちの知識を活かして積極的にロシア語で表現（話す・書く）していただくこと、ロシア語学習が楽しいと思えるようになること、以上が目標です。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 4 B		前	ライサ プラーソル
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシア語 1・2・3 基礎文法の導入に引き続き、名詞と代名詞の格変化、形容詞の変化・短・長語尾形などに対する理解を深める。「話す」、「聞く」能力を身に付けるための訓練には十分な時間を割く。授業の目的はロシア語会話能力の育成にある。学習者が外国旅行等の際に必要なに応じて簡単な会話ができるように授業を計らうつもりである。テキストだけでなく、ロシア文化の基礎知識を養うために、映画や教材ビデオ等を利用する。

<各回毎の授業内容>

1－2 テキスト第33課 形容詞変化のまとめ

3－4 テキスト第34課 代名詞変化のまとめ

5－6 テキスト第35課 形容詞の短語尾形

7－8 テキスト第36課 所有の表現とその否定

9 中間テスト

10－11 テキスト第37課 関係代名詞(1)

12－13 テキスト第38課 関係代名詞(2)

14－15 テキスト第39課 名詞的従属文(1)

16 末期テスト

<成績評価方法>

授業出席率は15%、宿題の実施率は15%、中間テストは20%、期末試験は50%という計算で最終評価を与える。

<教科書・参考文献>

佐藤純一著、新ロシア語入門、NHK出版

基礎ロシア語コース・会話編等のプリントを教員が配布する。

<受講に当たっての留意事項>

欠席率が授業数3部の1を超えると受験資格がなくなる。宿題が毎回出る。

<学習到達目標>

ロシア語の高度な文法を習得し、会話能力を身につけることを目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 4 A		前	朱 継征
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この授業は中国語の聴解力、会話力、読解力、作文力などの総合的運用能力を高め、中国語検定試験4～3級合格を目指します。

中国語と日本語の異同についての説明及び通訳、翻訳の訓練においても、日本語の使用を最小限にしますが、単語、本文と文法の説明及び討論会、発表会と授業での指示を基本的に中国語で行います。

<各回毎の授業内容>

1. 命令表現

2. 願望表現

3. 推量表現

4. 比較表現

5. 否定表現

6. 比喩表現

7. 可能表現

8. 可能助動詞と可能補語

9. 受身表現

10. 使役表現

11. 時量補語

12. 結果補語

13. 程度補語

14. 方向補語

15. 総合練習（中国語検定試験とHSKについて）

<成績評価方法>

平常点と期末試験によって判定。平常点（小テスト、発表会、宿題）40％、期末試験60％。

5回以上無断欠席した者は失格。

<教科書・参考文献>

教科書:授業中に指示します。

参考書:『講談社 中日辞典』相原茂編集 2002年（第二版）

『講談社 日中辞典』相原茂編集 2006年（初版）

<受講に当たっての留意事項>

毎回必ず予習して出席すること。積極的に質問すること。大きな声で返事すること。宿題をちゃんとやること。

<学習到達目標>

中国語運用の基礎的能力を獲得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 4 A		前	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

2 年までに学んだ中国語の基礎を堅固にし、読解能力を中級レベルに高める。語学を単に学ぶのではなく中国語の学習を通じて中国文化（中国人の考え方、習慣、生活）への理解を深める。

<各回毎の授業内容>

1. はじめに－初級文法のポイント・復習

2. 教育的公平(1)

3. 教育的公平(2)

4. 就業難(1)

5. 就業難(2)

6. 年轻人婚恋观的变化(1)

7. 年轻人婚恋观的变化(2)

8. 房奴(1)

9. 房奴(2)

10. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習 1

11. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習 2

12. 众多的股民(1)

13. 众多的股民(2)

14. 城市里的消费热(1)

15. 城市里的消费热(2)

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に行う確認テスト及び定期試験によって評価する。3 分の 2 以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

孟広学・本間史『変化する中国』白水社（2100円＋税）

<受講に当たっての留意事項>

中日辞典を必ず携帯すること。

<学習到達目標>

「読む」「聞く」「話す」のバランスのとれた中国語の習得を目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 4 B		前	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

2 年までに学んだ中国語の基礎を堅固にし、会話と読解を実用的なレベルにまで高める。語学を単に学ぶのではなく中国語の学習を通じて中国文化（中国人の考え方、習慣、生活）への理解を深める。

<各回毎の授業内容>

1. はじめに－「中国語 3」復習

2. 温故知新(1)

3. 温故知新(2)

4. 说变就变(1)

5. 说变就变(2)

6. 百闻不如一见(1)

7. 百闻不如一见(2)

8. 一见钟情(1)

9. 一见钟情(2)

10. 中国語検定対策－過去問題の分析と問題練習(1)

11. 中国語検定対策－過去問題の分析と問題練習(2)

12. 各有千秋(1)

13. 各有千秋(2)

14. 近在眼前(1)

15. 近在眼前(2)

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に行う確認テスト及び定期試験によって評価する。3分の2以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

崎原麗霞『ひとめぼれ中国語』朝日出版社（2100円＋税）を予定しているが、変更する場合があるので、掲示等をよく確認すること。

<受講に当たっての留意事項>

中日辞典を必ず携帯すること。

<学習到達目標>

実際に「話せる」中国語のマスターを目指し、言葉の背景にある文化に対する理解を深める。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 4 B		前	寺沢一俊
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

多量の中国語文を学習することにより中国語の文表現に慣れさせる。さらに文の内容について中国語で理解し、説明する練習をとおして中国語の運用能力を向上させる。また使用頻度が高い構文及び副詞・介詞・接続詞などの用法に習熟させることを目的とする。

<各回毎の授業内容>

1. 第一課 选修汉语课(1)

2. 第一課 选修汉语课(2)

3. 第一課 选修汉语课(3)

4. 第二課 自我介绍(1)

5. 第二課 自我介绍(2)

6. 第二課 自我介绍(3)

7. 第三課 中国留学生(1)

8. 第三課 中国留学生(2)

9. 第三課 中国留学生(3)

10. 第四課 梅雨时节(1)

11. 第四課 梅雨时节(2)

12. 第五課 我得打工(1)

13. 第五課 我得打工(2)

14. 第六課 中国短期留学(1)

15. 第六課 中国短期留学(2)

16. 期末試験

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に定期試験を受ける資格を与える。成績評価は小テスト 20 %、出席率 20 %、定期試験 60 % の結果を総合的に判断する。

<教科書・参考文献>

教科書: 范建明 沈麗華 張仕英著「中国語デイリーライフ」朝日出版 2200円+税

参考文献: 講義中に紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

予習の際には必ずテキスト付属のCDを聞き、本文を朗読すること。テキストの中国語文は繰り返し朗読をして暗誦すること。暗誦した文はピンインと漢字で書けるようにすること。

<学習到達目標>

テキスト本文の内容概略について中国語で説明できるようにしたい。さらにその内容について中国語による質疑応答や簡単なコメントができるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 4 A		前	申 銀珠・金 世朗
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

中級レベルの語彙・文型・会話・読解力を総合的に向上させることを目的とする。今までより高度な文法や語彙、多様な表現を学習し、コミュニケーション能力を向上するため、授業では教科書の語彙や文法項目を重点的に取り扱い、教室以外でできることは自習にする。教室では、なるべく学んだことを実際に使用する練習を行うことにする。会話だけでなく、日記・手紙・エッセーなどを書かせ作文力を向上させる。中級レベルの誤用例などをいっしょに学習する。韓国語で授業を行う。

<各回毎の授業内容>

1. 제 1 과 이사

2. 제 1 과 이사

3. 제 1 과 이사

4. 제 1 과 이사

5. 제 2 과 음식과 요리

6. 제 2 과 음식과 요리

7. 제 2 과 음식과 요리

8. 제 2 과 음식과 요리

9. 제 3 과 돌잔치

10. 제 3 과 돌잔치

11. 제 3 과 돌잔치

12. 제 3 과 돌잔치

13. 제 4 과 분실

14. 제 4 과 분실

15. 제 4 과 분실

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果で評価。課題、小テストを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

『韓国語中級Ⅱ』(国際教育院韓国語教育部、慶熙大学校出版局)

<受講に当たっての留意事項>

予習と復習をしっかりとすること。授業はペアワークやグループ活動が多いので、学生たちの積極的な態度が求められる。

<学習到達目標>

中級レベルの読み書き・会話ができるようにしたい。「韓国語能力試験」「ハングル能力検定試験」3級合格を目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 4 B	1	前	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

韓国語 1～3 までの学習を簡単に復習してから、文法事項を中心に学習の要点を整理する。日本で出版されたテキストを用いて、日本語を母語とするものの特性を生かした言語学習を通して、初級段階の語学力を完成させることを目指す。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国語 3 の復習

2. 7 課 少し安くしてください。（その 1）

3. 7 課 少し安くしてください。（その 2）

4. 8 課 私の気持ちですから受け取ってください。（その 1）

5. 8 課 私の気持ちですから受け取ってください。（その 2）

6. 9 課 咳がひどくて眠れませんでした。（その 1）

7. 9 課 咳がひどくて眠れませんでした。（その 2）

8. 7～9 課の復習

9. 10課 字幕を見ながら勉強します。（その 1）

10. 10課 字幕を見ながら勉強します。（その 2）

11. 11課 今日は来られないそうです。（その 1）

12. 11課 今日は来られないそうです。（その 2）

13. 12課 久しぶりに来てみて、どうですか？（その 1）

14. 12課 久しぶりに来てみて、どうですか？（その 2）

15. 10～12課の復習

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が 2 / 3 以上の者に期末試験の受験資格を与え、成績は期末試験の結果で評価する。なお、宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

金順玉・阪堂千津子・崔栄美『ちょこっとチャレンジ！韓国語』白水社、2011年、定価:2400円＋税

<受講に当たっての留意事項>

前学期に引き続き、学習項目を着実に習得してほしい。宿題も随時出したい。

<学習到達目標>

韓国語による表現を楽しみつつ、基礎的な語学能力を完成させ、実践的に韓国語を活用できるようになることを目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 4 B	1	前	朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業は前の3学期で学んだ韓国語の基本文型を応用した多様な表現を学んで、日常会話ができるようになることを目指す。

<各回毎の授業内容>

1. 美しい韓国語 1－3 の

第3 課(1)

2.

第3 課(2)

3.

第3 課(3)

4.

第4 課(1)

5.

第4 課(2)

6.

第4 課(3)

7. 韓国映画鑑賞(1)

8. 韓国映画鑑賞(2)

9. 美しい韓国語 1－3 の

第5 課(1)

10.

第5 課(2)

11.

第5 課(3)

12.

第6 課(1)

13.

第6 課(2)

14.

第6 課(3)

15. 韓国の文化体験（ユンノリ／お正月の伝統遊び）

16. 期末試験

<成績評価方法>

期末試験（70％） 出欠（10％） 課題（20％）

<教科書・参考文献>

美しい韓国語 1－3（韓国語教育開発研究院）

<受講に当たっての留意事項>

積極的に授業に臨む。

<学習到達目標>

日常生活に必要な多様な韓国語表現を身につける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	アメリカ英語 4 A		前	本間多香子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策のテキストを使って実際の受験の準備をするとともに、語彙、文法、語法等の定着を図りながら、総合的な英語力の向上を目指す。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Unit 1

3. Unit 2

4. Unit 3

5. Unit 4

6. Practice Test

7. Unit 5

8. Unit 6

9. Unit 7

10. Unit 8

11. Practice Test

12. Unit 9

13. Unit 10

14. Unit 11

15. Unit 12

16. 試験

<成績評価方法>

定期試験60％ 小テスト、授業への取り組み度等40%

<教科書・参考文献>

上仲律子他著 FAST PASS FOR THE TOEIC TEST（センゲージラーニング2100円）

必要に応じて、配布物で問題演習を行う。

<受講に当たっての留意事項>

欠席が3分の1以上になると試験を受ける資格を失う。

遅刻2回で欠席1回

毎回辞書を必ず持参すること。

<学習到達目標>

基本的な文法、語法をしっかりと身につけられるようにする。

集中して問題に取り組み、TOEICの得点を上げるコツを掴めるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	アメリカ英語 4 B		前	本間多香子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

上級者向けの TOEIC 試験対策のテキストを使い、リスニングとリーディングの演習を行う。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Unit 1

3. Unit 2

4. Unit 3

5. Unit 4

6. Review Test 1, Practice Test

7. Unit 5

8. Unit 6

9. Unit 7

10. Unit 8

11. Review Test 2, Practice Test

12. Unit 9

13. Unit 10

14. Unit 11

15. Unit 12

16. 試験

<成績評価方法>

定期試験60％ 小テスト、授業への取り組み度等40%

<教科書・参考文献>

大賀リエ他著 TOEIC Test : On Target (Book 2) (南雲堂2100円)

必要に応じて、配布物で問題演習を行う。

<受講に当たっての留意事項>

欠席が3分の1以上になると試験を受ける資格を失う。

遅刻2回で欠席1回

毎回辞書を必ず持参すること。

<学習到達目標>

集中して問題に取り組み、TOEIC の得点を上げるコツを掴めるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 4 A ・ B		前	デロシェ ジェラルド
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

The object of this course is to encourage the students to communicate freely in English. It will be structured course and guidance. It is hoped that the students will be able to speak without hesitation and state their opinions. It is hoped that the classroom environment will be tension free to encourage the students to master English communication.

<各回毎の授業内容>

1 . Course explanation and an English activity.

2 . Listen In # 2 David Nunan plus reading comprehension and aural grammar speaking exercises.

3 . Bomb a 3 part exercise that teaches about locations,finding differences,and explaining how to do things.

4 . Bomb continue

5 . Listen In # 2 David Nunan plus reading comprehension and aural grammar speaking exercises.

6 . Wandering tourist- A travel activity dealing with directions,money,hotels.

7 . Puzzle- a vocabulary exercise.

8 . Listen In # 2 David Nunan plus reading comprehension and aural grammar speaking exercises.

9 . Stakeout-physical descriptions and explaining movements.

10. Stakeout-continue

11. Listen In # 2 David Nunan plus reading comprehension and aural grammar speaking exercises.

12. Mr. Brown and Mrs. Green-a discussion and debating activity.

13. What get's the money- a budgetary exercise activity dealing with country issues.

14. What get's the money-continue

15. Listen In # 2 David Nunan plus reading comprehension and aural grammar speaking exercises.

16. Final Test-based an Listen In # 2 and grammar speaking exercises.

<成績評価方法>

Final Test 40% Class participation and including attendance 60%.

<教科書・参考文献>

Prints will be provided.

<受講に当たっての留意事項>

The students who participate and come to class will be very successful.

<学習到達目標>

The students who participate and come to class will be very successful.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	日口関係論	2	前	小澤治子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この科目のねらいは、日本人とロシア人の出会いから始まり、領土問題、安全保障体制、経済協力、姉妹都市交流など様々な角度から、日ソ・日口関係の歩みを考察することによって、両国関係についての理解を深め、今後の日口関係のあり方を考える視点を養うことである。

<各回毎の授業内容>

1

日本とロシアの出会い

2

帝政ロシア時代の日露関係

3

ロシア革命と日ソ関係(1)——連合国のシベリア出兵を中心に

4

ロシア革命と日ソ関係(2)——日ソ国交樹立との関連で

5

第二次世界大戦と日ソ関係——日本の戦後処理問題との関連で

6

日ソ国交回復と領土問題

7

日米・日中関係とソ連

8

極東シベリア開発プロジェクトの進展と日ソ関係

9

ペレストロイカと日ソ関係(1)

10

ペレストロイカと日ソ関係(2)

11

ソ連解体と日口関係(1)

12

ソ連解体と日口関係(2)

13

日口関係における新潟市

14

日口関係の現状と展望(1)

15

日口関係の現状と展望(2)

<成績評価方法>

学期末試験の結果を中心に成績評価を行うが、授業ごとに提出するコメントペーパーも参考にする。

<教科書・参考文献>

教科書は特に指定せず、講義内容についてのプリントを毎回配付する。参考文献は講義の中で随時紹介するが、下記の4冊が特に有用である。

長谷川毅『北方領土問題と日露関係』 筑摩書房 2000年。

木村汎『遠い隣国 ロシアと日本』 世界思想社 2002年。

横手慎二編『東アジアのロシア』 慶應義塾大学出版会 2004年。

東郷和彦『北方領土交渉秘録』 新潮社 2007年。

<受講に当たっての留意事項>

授業の際には遅刻と私語は厳禁です。その他最低限のモラルを守って下さい。

<学習到達目標>

日ソ、日口関係の歩みを学ぶことを通じて、今後の日本とロシアの外交関係、また交流のあり方を考える視点を養う。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	日中関係論	2	前	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

2012年は日中国交正常化40周年の記念すべき年だったにもかかわらず、尖閣諸島（釣魚島）をめぐって日中関係はかつてないほど冷え込んだ。2010年にGDPで日本を追い抜き、世界第2位の経済大国となった中国。中国と日本の関係は今後どうなるのだろうか。中国に進出した日系企業の苦戦が報じられるが、それでも日本には中国からの輸入品で満ち溢れている。食品、衣服、雑貨、電気製品等々。私たちの生活はこれらの中国製品を抜きにして成り立たない。現在および将来の日中関係を身近な題材から考える。

<各回毎の授業内容>

1. はじめに－現在の日中関係を考える

2. 対中、対日感情－日本からみた中国、中国からみた日本

3. 日中に横たわる問題(1)－「領土」問題

4. 日中に横たわる問題(2)－歴史問題

4. 経済からみた日中関係(1)

5. 経済からみた日中関係(2)

6. 政治からみた日中関係(1)

7. 政治からみた日中関係(2)

8. 日中の近現代150年(1)

9. 日中の近現代150年(2)

10. 日中の近現代150年(3)

11. 日中の近現代150年(4)

13. 新潟と中国 1－新潟から中国へ

14. 新潟と中国 2－中国から新潟へ

15. 将来の日中関係を考える

16. 定期試験

<成績評価方法>

学期末の試験および授業中の課題（コメント・感想文）によって評価する。3分の2以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

その都度プリントを配布する。

参考文献: 読売新聞中国取材団『メガチャイナ』中公新書（740円＋税）

<受講に当たっての留意事項>

必ず1週間の新聞報道（日中関係）に目を通したうえで授業に出席すること。

<学習到達目標>

事実に基づき、冷静に日中関係を分析するための基礎知識を習得する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	日韓朝関係論	2	前	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この講義は1年次の「アジアと日本」（朝鮮と日本編）および「韓国朝鮮史概説」の内容をふまえて、植民地支配と南北分断の問題をテーマとして、おもに1945年から現在までの日本と南北朝鮮との関係を考察することにより、朝鮮現代史および日朝関係史を連関させて理解することを目指す。

<各回毎の授業内容>

1. 講義の概要、レポート作成および参考文献案内

2. 問題の所在(1)…植民地支配をどのように問うのか

3. 問題の所在（2－1）…朝鮮の「解放」、そして分断体制の成立

4. 問題の所在（2－2）…朝鮮戦争、そして日本との関係について

5. 問題の所在(3)…在日朝鮮人の形成（1945～1952年）

6. 在日朝鮮人帰国事業～1950年代の日朝関係

7. 日韓国交正常化（1965年）

8. 米中和解と南北対話の開始～南北共同声明（1972年）をめぐる展開を中心に

9. 1970・80年代の日本と南北朝鮮～経済と人権の問題を中心に

10. 在日朝鮮人の権利問題の展開～1970・80年代を中心に

11. 脱冷戦と南北対話の再開（1987～現在）

12. 韓国における過去清算と日本～「親日派」問題を中心に

13. 脱冷戦期の日本と南北朝鮮～戦後補償および日朝交渉を中心に

14. 脱冷戦期の在日朝鮮人と日本社会

15. まとめ…現在の日本と南北朝鮮との関係と私たちの課題

<成績評価方法>

レポートによって成績評価をする。ただし、選択必修の講義科目としては最後になるので、完成度の高いレポートを求めたい。

<教科書・参考文献>

教科書は使用しない。講義時にレジメを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

本講義を理解する上で、「アジアと日本」および「韓国朝鮮史概説」を履修しておくことが望ましい。

<学習到達目標>

受講者が日本と南北朝鮮との関係の概要を習得したうえで、1）みずからの関心に即してテーマを設定し、2）そのテーマに即した文献および資料を収集および分析し、3）一定の結論に到達できることを目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	日米関係論	2	前	中村起一郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

強大な軍事力と経済力を背景に、独自の外交理念をふりかざす大国アメリカ。アメリカとどのような付き合いあうかは、世界の主要国にとって頭の痛い問題である。もちろん日本もそのことに長く頭を悩ませてきた国の一つだ。時に積極的に、時に苦渋の決断を迫られながら、いくつもの選択が積み重なって現在の日米関係が作られている。

この講義では、現在の日本外交の基軸となっている日米の同盟関係がどのように形成されてきたのか、主に政府レベルの政策決定過程に焦点を当てながら分析する。中国が台頭し、アジアが経済成長のセンターとなる時代に、日本外交における日米関係の位置づけは見直しを迫られている。高校時代の日本史、世界史、大学で学んだ日本政治や国際政治などの知識を利用しながら、日米関係が日本と世界にとってどのような意味を持っているのかを考えたい。

<各回毎の授業内容>

1 日米同盟の現状

2－3 日露戦争と日本の満州進出――遅れてきた大国の国際政治観

4－5 日米戦争――開戦は避けられなかったのか

6－7 終戦・占領・冷戦――なぜ敵国から同盟国になったのか

8－9 日米同盟の形成と深化――日本の成長とアジアの安定に役立ったのか

10－11 日米関係と国内政治(1)――安保・ベトナム闘争、経済摩擦をめぐって

12－13 東アジアの政治変動と日米同盟――「中国の時代」に日米同盟は必要か

14－15 日米関係と国内政治(2)――沖縄とTPPをめぐって

16 期末試験

<成績評価方法>

期末試験の成績で評価する。授業への参加など平常点を若干加味する。

<教科書・参考文献>

教科書は特に指定しない。事実の確認などには、高校の教科書や用語集を使ってほしい。参考文献は講義中に適宜紹介するが、日本外交の流れを追うのに有用な概説書として、次のものを挙げておく。

五百旗頭真・編『日米関係史』有斐閣、2008年

五百旗頭真・編『新版 戦後日本外交史』有斐閣、2006年

井上寿一『日本外交史講義』岩波書店、2003年

<学習到達目標>

- ・日本外交の基盤でありながら、時に制約要因ともなっている日米関係。そのメリットとデメリットを冷静に評価できるようになる。
- ・20世紀以降、軍事、経済、価値といった要素がどのように国際政治の構造や日本の外交政策に影響を与えたか理解できるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	日本語学	2	前	佐々木香織
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
この授業では、個々人が日本語とはどのような言語であるかを考え、理解するための様々な視点を提供します。日本語に対する内省力、分析力を高め、言葉と社会の関係を見つめ直すことが最大の目的です。また、授業中の活動を通じて、文章表現力やコミュニケーション力などの言語運用力の向上も目指します。

<各回毎の授業内容>
1. 日本語のプロフィール:日本語はどんな言語か
2. 日本語の多様性:地理的、歴史的な位相
3. 方言調査をやってみよう。
4. 「標準語」と「方言」:言葉の使分けとアイデンティティー
5. 日本語の歴史的変化1:万葉仮名の世界
6. 日本語の歴史的変化2:懐かしき古典文法
7. 日本語の歴史的変化3:「南蛮人」の見た日本語
8. 日本語の歴史的変化4:日本語の近代化
9. 音声から見た日本語:英語の発音が苦手な理由。
10. 文字・語彙から見た日本語:漢字は必要か？
11. 日本語の文法1:さまざまな文法
12. 日本語の文法2:外国人からみた日本語文法
13. 「文」を超える文法・「文字」で表せない文法
14. 「無意識」のコミュニケーション
15. 日本社会・国際社会と日本語
16. テスト（実施するか、レポート等にするかはまだ未定です。）

<成績評価方法>
授業の最後5分程度でコメントを書いてもらいます。毎回のコメントカードも宿題の小レポートとともに、評価対象です。出席回数、コメントカードの内容、小レポート、期末レポートで総合評価します。決められたレポートを出さない人や、8回以上休んだ人は評価の対象外です。

<教科書・参考文献>
特定のテキストは使用しませんが、資料を配布します。
参考文献『日本語（上・下）』金田一春彦（岩波新書<赤表紙>）、『日本語と外国語』鈴木孝夫（岩波新書<赤表紙>）、『ことばと文化』鈴木孝夫（岩波新書<緑表紙>）、『標準語の成立事情』真田真治（PHP文庫）、『国語元年』井上ひさし（新潮社）、『日本語ウォッチング』井上史雄（岩波新書<赤表紙>）、『日本語は年速1キロで動く』井上史雄（講談社現代新書）、『日本語の歴史』山口仲美（岩波新書<赤表紙>）。『多民族化社会・日本』渡戸一郎他編著（明石書店）

<学習到達目標>
この授業の最大の目標は、自分たちが使っている言葉についての内省力を高め、客観的に日本語を観察する力をつけ、外国語学習にも役立てられるようにすることです。そして、外国人に日本語について聞かれた時、自信を持って自分の言葉で説明したり、適切な用例を挙げたりできるようになってほしいと思います。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	地球社会と人権	2	前	黒田俊郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

かつてフランスの思想家シモーヌ・ヴェーユは、権利と義務との関係について次のように語ったことがあります。

義務の観念は権利の観念に優先する。権利の観念は義務の観念に従属し、それに依存する。一つの権利はそれ自体として有効なのではなく、その権利と対応する義務によってのみ有効となる。一つの権利が現実に行使されるにいたるのは、その権利を所有する人間によってではなく、その人間にたいしてなんらかの義務を負っていることを認めた他の人間たちによってである（『根をもつこと』より）。

この授業では、以上のヴェーユの言葉を念頭に置きながら、今年度も一昨年度、昨年度に続いて三度、米国の国際政治学者スタンレー・ホフマンの著書『国境を超える義務』（1981年）をテキストとして、地球社会と人権について多角的に考察したいと思います。ホフマンの著書には邦訳（1985年）がありますが、残念ながら現在は絶版です。そこで同書の内容を適宜要約したレジュメを作成し、それに基づいて授業を進めていきます。また授業のなかでは、ホフマンの提示する論点を今日の世界の具体的な事例のなかで考えていくこともする予定です。

<各回毎の授業内容>

1. 倫理と国際関係:序論
2. 国際関係における道徳的問題
3. 外交政策行動における倫理
4. 武力行使:飼いならせぬものを飼いなす営為
5. 国家と戦争の道徳性
6. 市民と戦争の道徳性
7. 人権とは何か:人権の推進
8. 人権政策に対する賛否
9. 何がなされるべきか
10. 国際的不正義:配分的正義の諸問題
11. さまざまな義務
12. 診断と処方
13. 世界秩序の倫理学:世界秩序という問題
14. 国家間システム
15. 人間たち
16. （必要に応じて）レポート／筆記試験

<成績評価方法>

国際政治の専門書をテキストとして使う授業なので受講生は少人数であることが予想されます。そこで、受講生が少数の場合は、評価は平常点（出席と授業参加の度合い）のみで行うか、それとも平常点と学期末レポートを組み合わせるかどうかを授業を具体的に進めていくなかで検討します。予想に反して受講生が多数の場合は、学期末の筆記試験で行う予定です（その場合は、出題形式は論述で持ち込みは不可です）。受講生が上記の中間の場合（つまりそこそこいたときは）、平常点、レポート、筆記試験を組み合わせることを検討します。つまり評価の方法は、受講生の多寡によって決まりますので、開講時まで不確定ということになります。この点、ご注意ください。

<教科書・参考文献>

上記したとおり、テキストの邦訳は絶版なので、購入は義務づけません。毎回、レジュメ・資料等を配付し、参考文献も適宜紹介します。

<受講に当たっての留意事項>

とくにありません。

<学習到達目標>

ホフマンの議論を手がかりとして、地球社会と人権をめぐる論点を理解し要約できること。また個々の論点ごとに自分の意見を論理立てて説明できること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	現代エネルギー論	2	前	澤口晋一（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

福島第一原発で発生した水素爆発事故によって、大量の放射性物質が日本列島のみならず地球の広い範囲に拡散しました。この事故によって発電所周辺には人の立ち入りが禁止された区域が設定され、数万人にのぼる人たちが今なお不便な避難生活を余儀なくされています。さらに、ほとんど把握が困難なほど多くの人々が被曝しました。しかし、日本政府や原子力政策を推進してきた人たちは、ほとんど他人事のような言説を繰り返すだけです。確かに日本はエネルギーのほとんどを輸入に頼っており、エネルギー安全保障的な観点からみれば、原発は必要だという主張は正しいかのように響きます。しかし、エネルギーはなぜ必要かと言えば、それは結局は人の生活を守るためです。国家や経済のためではありません。人の生活があって国家や経済が成り立つわけで、人のいないところに国家も経済もありはしないのです。ところが、今回の事故から明らかなように、原発がひとたび事故を起こせば人の生活など根本から崩れ去ってしまいます。少し間違えば経済も取り返しのつかないぐらいのダメージを受けた可能性もあります。本当にこんなものに頼ったまま将来を考えてよいのでしょうか。今こそ、エネルギー需給のありかたを全面的に見直す時ではないでしょうか。

ところで、あまり知られていないのですが、日本の原子力発電所は核燃サイクルという大きな工程の中の一部門にすぎません。日本の原子力問題は、この核燃サイクルというものの仕組みと考え方に対する理解がなければ何も語れません。福島第一原発の事故もこの核燃サイクルの文脈に位置付けてみる必要があります。この授業では、世界最大の原子力発電所を抱える新潟県に住まう皆さんが、これから日本の原子力政策さらにはエネルギー政策を批判的に考えていく際の基本的知識として身につけておかなければいけない事項をできるだけ詳細に解説します。

<各回毎の授業内容>

1. 現代のエネルギー問題, 地球環境問題
2. エネルギー資源とその種類
3. 核燃サイクル政策の現状と問題点
 - 1) 原子力問題の枠組み
 - 2) 世界の原子力発電の現状
 - 3) 放射線被曝に関する問題
 - 4) 原子力発電の種類と仕組み
 - 5) 日本の原子力問題の概要（何が問題なのか）
 - 6) 核燃サイクルとは何か
 - i. 全体像
 - ii. 「六ヶ所村」
 - iii. 再処理
 - iv. プルサーマル
 - v. 高速増殖炉
 - vi. 放射性廃棄物（特に、高レベル放射性廃棄物の地層処分問題をめぐって）
 - vii. 海外委託と放射性物質の運搬（5週予定）
4. 福島第一原発事故一経緯と放射性物質汚染一
5. 活断層と原発
6. まとめ

<成績評価方法>

レポート, 出席を総合して評価します。

<教科書・参考文献>

テキストは使用しないが、参考文献として下記文献を購入することを勧めます。

広瀬 隆・藤田祐幸（2000）『原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識』東京書籍。¥1600。

高木仁三郎（2000）『原発事故はなぜくりかえすのか』岩波新書。 ¥735。

<受講に当たっての留意事項>

授業中は私語厳禁です。突っ伏して寝ることも禁止します。携帯電話については毎回授業の最初に電源を切ったことを確認してから始めます。

<学習到達目標>

日本の原子力政策の現状と問題点の把握を基礎に、将来のエネルギー利用とそれに派生する問題について自ら考えられるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	EU 論	2	前	白井陽一郎（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

E U ・欧州連合は国家どうしの合意によって生み出された地域統合組織である。そのかぎりでは数ある国際組織の一つにすぎない。ところが、E U は法を創ることができる。裁判所もあって法を破った加盟国は裁かれる。罰金も科せられる。議会もあって選挙で議員が選ばれる。国際条約も結べる。予算はロシアより多い。失業に苦しむ地域には資金援助もある。加盟国の国民にはE U 市民権が与えられる。共同戦闘部隊や警察機構も整備されていきそうな気配だ。憲法という名の条約さえ提案された（失敗したが・・・）。E U とはそれゆえ、まさに国家の陽炎であるといえるかもしれない。しかし、それはどこまでも陽炎であって、国家としての実体はない。そもそもE U は宣戦布告する主体でもされる客体でもありえない。ユーロ危機に際しては税金を取って再分配する財政当局の不在が問題になった。E U とはいったいどのような社会構成体なのであろうか。この前例なき政体はグローバル社会の中でどのようなプレゼンスを示しているのだろうか。講義では規範を作り出すマシンのような社会構成体・E U の仕組みを解説した上で、グローバル社会におけるその存在のあり方に迫っていく。

<各回毎の授業内容>

1、E U の政治体制——国際組織以上連邦国家未満の前例なき政体

2、E U の機関構成——二つのバランス・E U と加盟国および大国と小国(1)

3、E U の法と政策——二つのバランス・E U と加盟国および大国と小国(2)

4、E U の対外関係——ヨーロッパ統合を域外へ拡張するグローバル戦略

5、E U の予算制度——7 年間のパッケージ

6、E U 規範パワー論——ヨーロッパ的価値の普遍性を追求するE U ? (1)

7、E U 規範パワー論——ヨーロッパ的価値の普遍性を追求するE U ? (2)

8、E U 規制パワー論——グローバル・スタンダードを決定するE U ? (1)

9、E U 規制パワー論——グローバル・スタンダードを決定するE U ? (2)

10、事例①——世界標準化戦略(1)

11、事例①——世界標準化戦略(2)

12、事例②——E U のグリーン・アイデンティティ(1)

13、事例②——E U のグリーン・アイデンティティ(2)

14、E U ガバナンス①——共同体方式とOMC方式

15、E U ガバナンス②——マルチレベル・ガバナンス

16、定期試験

<成績評価方法>

試験100 %

<教科書・参考文献>

遠藤・鈴木編『E U の規制力』日本経済評論社。

白井陽一郎『環境のEU・規範の政治』ナカニシヤ出版。

<受講に当たっての留意事項>

前提となりまた関連してくる授業に、国際法・国際政治学・国際組織論・地域統合論・現代ヨーロッパ論がある。事前にすべて履修しておく必要はないが、卒業までにこれらの科目を学習することによって、EU 論の理解をさらに深めて欲しい。

<学習到達目標>

E U の制度について習熟しグローバル社会におけるそのあり方を批判的に分析できるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	国際組織論	2	前	佐々木寛（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

現在、「国際関係」は必ずしも単なる「国家間関係」ではない。それゆえ近年、従来の国家中心の国際関係論を補うべく、国際組織（国際機構）論が誕生し、国連やNATOのような政府間国際組織（IGO）や国際的環境運動などの非政府間国際組織（INGO）が国際関係の重要なアクター（行為主体）として分析されるようになった。ただ本講義では、これら無数の国際組織を単に法的・制度的にばらばらに理解するのではなく、世界で生起するダイナミックな政治現象の統一的文脈の中でとらえなおしてみたい。つまり、近代国家を横断する多様なアクター（行為主体）が重層的に織りなす「世界政治（global politics）」の視点から見た動的な国際組織論を目指す。

<各回毎の授業内容>

本講義では、単に「グローバル・ガバナンス（世界統治）」（世界の問題をいかにうまく管理・解決するか）の視点ではなく、特に「グローバル・デモクラシー（世界民主主義）」（世界の問題をいかに民主的に解決するか）の視点から多層化した国際的行為主体のあり方を考えてみたい。その際、できるだけ具体的な事例を検討する中から理論や概念を洗練できるよう努める。細目は限定しないが、以下の内容には触れる予定である。また、1度は21世紀の組織像に関するすぐれた映像資料を鑑賞する。

1. 国際組織とは何か [1回]
2. 国際政治学における機能主義・相互依存モデルの生成 [1回]
3. 「グローバリゼーション」と政治の重層化 [3回]
4. 「グローバル・ガバナンス」と「グローバル・デモクラシー」 [1回]
5. 地域主義と国際組織 [3回]
6. 世界政治と国際連合 [2回]
7. 安全保障問題と国際組織 [2回]
8. 国際NGOを考える [1回]

※+1回分、資料映像を鑑賞する時間に充てる。

<成績評価方法>

しばしば講義の最後に、コメントカード（質問やコメント、感想を書いてもらう）を作成してもらい、それらは講義の改善に役立てるだけでなく、受講者の参加姿勢を見る材料とする。基本的に最終筆記試験の成績によりすべての評価を決定し、出席も重視しないが、このコメントカードの内容は成績に加味する。つまり、試験当日万が一やむをえない事情で十分解答できなくとも、日常的な参加姿勢は成績に加味される。また、試験は、個別的な知識よりはそれをもとにした思考力（学期中にどれだけ考えたか）を重視した問題を出題する。

<教科書・参考文献>

教科書は、デヴィッド・ヘルド『デモクラシーと世界秩序』（NTT出版）。また、授業中、それぞれのサブテーマに即して随時参考図書を指定するので、参加者各自で思考を深めておいてほしい。必読参考文献として、小林誠・遠藤誠治編『グローバル・ポリティクス』（有信堂）を挙げておく。この他の参考文献の具体例としては、『AERA Mook 新国際関係学がわかる』（朝日新聞社）の中の「ブックガイド」を参照のこと。

<受講に当たっての留意事項>

内容的にかなり高度なことも含むので、知的好奇心が旺盛な学生の参加を望む。また、2年次に「平和学」を受講していることが望ましい。

<学習到達目標>

様々な国際組織の機能やダイナミズムを理解することを通じ、現代の国際社会の実態をより深く理解する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	外国語文献講読 1	2	前	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業は、特定のテーマに沿った専門性の高い英語文献を講読することにより、高度な英文読解能力と、特定のテーマ・分野において了解事項となっている知識の修得をめざすものである。「言葉・外国語学習・翻訳」をテーマに、三人の a u t h o r のテキストを取り上げる。具体的には、(1)日本のみならずロシア・韓国・中国・アメリカをはじめ世界各国で読者を獲得し、現在最も国際的知名度のある日本文学者にして、アメリカ文学の熱心な翻訳者でもある村上春樹(2) 20歳を過ぎてから「日本語と恋に落ち」、学び始め、現在は日本に住みながら日本語で詩やエッセイを多数執筆、中原中也賞を受賞した詩人アーサー・ビナード(3) インドからアメリカへ移住、英文学、フェミニズム・ジェンダー批評、ポストコロニアル研究等諸分野で圧倒的な影響力をもつとともに、フランスの思想家ジャック・デリダの翻訳・紹介でもめざましい仕事を収めたガヤトリ・スピヴァクの三名である。彼／女らのテキストを精読することにより、「言葉・外国語学習・翻訳」の秘密に迫りたい。なお、場合により一部取り上げる作家を変更する可能性もある。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. 村上春樹のテキスト講読①

3. 村上春樹のテキスト講読②

4. 村上春樹のテキスト講読③

5. 村上春樹のテキスト講読④

6. アーサー・ビナードのテキスト講読①

7. アーサー・ビナードのテキスト講読②

8. アーサー・ビナードのテキスト講読③

9. アーサー・ビナードのテキスト講読④

10. ガヤトリ・スピヴァクのテキスト講読①

11. ガヤトリ・スピヴァクのテキスト講読②

13. ガヤトリ・スピヴァクのテキスト講読④

14. ガヤトリ・スピヴァクのテキスト講読⑤

14. まとめと復習

<成績評価方法>

授業への準備・貢献・期末試験／レポート等を総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

プリントを配布。

<受講に当たっての留意事項>

全員が十分な予習をしたうえで授業に臨むこと。テキストの音読、読解、文法理解はもちろん、できれば背景となる知識・思想なども調べ、考えた上で授業に臨んでほしい。出席のための出席は意味がない。

<学習到達目標>

「言葉・外国語学習・翻訳」というテーマについて、人種・国籍・母語の異なる三人の作家たちがどのような考えをもっているかを知り、われわれが外国語を学ぶ意味を考えると同時に、授業のなかで翻訳の実践を試みることに。

4 年文化専門科目（前期）

ロシア語 6
中国語 6
韓国語 6
アメリカ英語 6

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	ロシア語6	1	前	ライサ プラーソル
22～24年						
21年度以前						

選択

＜授業目的＞

ロシア語会話における新しい文法形態、語彙、その利用について学習する。コミュニケーションと発音の技能、ロシア語の会話を聞き理解する能力を向上する。日常会話に関連した短い文の読み書き能力を発展させる。いくつかのロシアの象徴と生活習慣を学習する。毎回、時間を割いて映画、歌、アニメ、現代ロシア文化を紹介する。

＜各回毎の授業内容＞

1 Урок 8(1) 日常の行動を運動の動詞を使って話す

2 Урок 8(2)ダイアログ "Если она не придёт"、会話

3 Урок 8(3) 練習問題

4 Урок 9(1) 時間を表すいろいろな表現

5 Урок 9(2) ダイアログ "В поезде"、会話

6 Урок 9(3)練習問題

7 Урок 10(1) 形動詞

8 Урок 10(2) ダイアログ、会話

9 Урок 10(3)練習問題

10 Урок 11(1)受動構文

11 Урок 11(2)ダイアログ、会話

12 Урок 11(3)練習問題

13 Урок 12(1)文化に関する表現 ダイアログ

"Поэт в России - больше, чем поэт"

14-15 ロシアの映画

16 末期テスト

＜成績評価方法＞

評価は授業の出席（15％）、小テスト（20％）、学期末試験（65％）。

＜教科書・参考文献＞

A. デボフスキー、北岡千夏「会話で学ぶロシア語」中級1 フェニックス2004

＜受講に当たっての留意事項＞

欠席率が授業数3部の1を超えると受験資格がなくなる。宿題が毎回出る。

＜学習到達目標＞

ロシア語の高度な文法とロシアの知識を習得し、会話能力を身につけること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	中国語 6	1	前	朱 継征
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

中国語の人文・社会科学分野の文献、新聞記事やテレビニュースなどを理解するには、一層高いレベルの語学力と知識が要求されます。中国語は実用性の面でも将来性のある言語の一つです。その実力は若いうちに身に付ければ一生の財産になります。

この授業は中国語の聴解力、会話力、読解力、作文力などの総合的運用能力を高め、中国語検定試験3～2級合格を目指します。

中国語と日本語の異同についての説明及び通訳、翻訳の訓練においても、日本語の使用を最小限にしますが、単語、本文と文法の説明及び討論会、発表会と授業での指示を基本的に中国語で行います。

<各回毎の授業内容>

1. 単純方向補語

2. 複合方向補語

3. "把"構文

4. "关于"構文

5. "对"構文

6. "按照"構文

7. "往"構文

8. "根据"構文

9. "给"構文

10. "由于"構文

11. "为"構文

12. "除了"構文

13. "向"構文

14. TECCとHSK対策

15. 総合練習（中国語検定試験、TECCとHSKについて）

<成績評価方法>

平常点と期末試験によって判定。平常点（小テスト、発表会、宿題）40％、期末試験60％。

5回以上無断欠席した者は失格。

<教科書・参考文献>

教科書:授業中に指示します。

参考書:『講談社 中日辞典』相原茂編集 2002年（第二版）
『講談社 日中辞典』相原茂編集 2006年（初版）

<受講に当たっての留意事項>

毎回必ず予習して出席すること。積極的に質問すること。大きな声で返事すること。宿題をちゃんとやること。

<学習到達目標>

中国語の総合的運用能力を高め、中国語検定試験4～3級合格、HSK（漢語水平考試）3～5級合格を目指します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	韓国語 6	1	前	朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業は、韓国語7 繋がる授業で、韓国語7 の準備過程とも言えます。

韓国の文化全般に関する教師講義の後、そこに関して学生達が中心になって自由に意見を交わしたり討論する事によって韓国語の上達を目的とします。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国に対する基本的な理解

2. 韓国という共同体

3. 韓国人が尊敬する歴史的な人物

4. 韓国人の休暇の過ごし方

5. 韓国人の好きなスポーツ

6. 韓国的価値

7. 韓国の宗教

8. 韓国を代表する企業と企業人

9. 韓国の若者達が好む職業

10. 韓国人の家族観

11. 韓国人の異性観及び結婚観

12. 韓国の教育理念及び教育制度

13. 韓国社会の変化

14. 現代韓国文化の特徴（恨からシンミョンへ）

15. 発表（韓国と私）

16. 期末試験

<成績評価方法>

平常発表（30％） 出欠及び課題（10％） 定期試験（60％）

<教科書・参考文献>

テキストは使用しません。 講義の時資料を配布します。

<受講に当たっての留意事項>

他国を理解しようとするオープンマインド

<学習到達目標>

隣接国を言葉だけでなく文化を知ることによって、より深い理解が出来、グローバル時代の一人としての資質を見に付けるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	アメリカ英語 6	1	前	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業では、TOEICや英検の過去問題を教材として、総合的英語力の強化および資格試験対策を行う。大学生のうちにできるだけ英語力を伸ばしておくことは、自分の知的資源・財産となるとともに、社会人になってからの学びを動機づけることにもつながるだろう。4年配属のこの授業は、いわば大学での英語学習の総仕上げ、ラストスパートとしてぜひ受講してほしい。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. TOEIC 2011年度の問題

3. TOEIC 2011年度の問題

4. TOEIC 2011年度の問題

5. TOEIC 2012年度の問題

6. TOEIC 2012年度の問題

7. TOEIC 2012年度の問題

8. 英検2011年度の問題

9. 英検2011年度の問題

10. 英検2011年度の問題

11. 英検2012年度の問題

12. 英検2012年度の問題

13. 英検2012年度の問題

14. 英検2012年度の問題

15. 総復習

<成績評価方法>

授業への準備、貢献、期末試験／レポートの成績等を総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

プリントを配布。

場合により受講者と相談のうえ教材を選択することもありうる。

<受講に当たっての留意事項>

全員が予習してくることを前提として授業を進める。問題は予習の段階で全員が解いてくるものとし、授業は答えあわせと確認・解説に当てる。

<学習到達目標>

TOEIC 600点、英検準1級に合格する英語力養成を目指す。

1 年システム専門科目（前期）

コンピュータソフトウェア
基本情報処理特論1/基本情報演習1
簿記特論1
FP特論1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	コンピュータソフトウェア	2	前	石川 洋（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

必修（情報コース）、選択（24年度以前、および経営コース）

<授業目的>

コンピュータシステムを有効利用するための基本的な考え方をソフトウェアの側面から学習する。プロセス管理、メモリ管理、ファイル管理などの主要な機能とその役割や、言語処理系の基本についても学習する。

<各回毎の授業内容>

1、オペレーティングシステムの概要

2、プロセス管理 1

3、プロセス管理 2

4、プロセスの同期

5、プロセス間通信

6、実記憶管理 1

7、実記憶管理 2

8、仮想記憶管理 1

9、仮想記憶管理 2

10、仮想記憶管理 3（レポート課題 1）

11、ファイルシステム

12、割り込み処理

13、情報システムの基盤としての Windows および Linux（レポート課題 2）

14、言語処理プログラムの種類と構造

15、言語処理プログラムにおける字句解析と構文解析（レポート課題 3）

16、定期試験

<成績評価方法>

・成績は期末試験（70%）と自己学習によるレポート課題（30%）により評価する。

・試験では講義に沿った問題を出題する。持ち込みは不可とする。

<教科書・参考文献>

・教科書 オペレーティングシステムの基礎 大久保英嗣、サイエンス社（1997） 1600円＋税

・参考文献 随時紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・専門用語が多く出てくるが、意味のわからない用語は必ず調べておくこと。

<学習到達目標>

・オペレーティングシステムの基本を理解し、諸機能の役割（試験60%、レポート15%）を習得する。

・具体的なオペレーティングシステムの利用動向（レポート10%）を理解する。

・コンパイラの仕組みを学習し、プログラミングを支える基本的な知識（試験10%、レポート5%）を習得する。

（関連する学習・教育到達目標:E、J）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年 2 年	基本情報演習 1	2	前	谷 賢太郎 桑原 悟（情報システム）
22～24年			基本情報処理特論 1			
21年度以前						

選択

<授業目的>

経済産業省認定の「基本情報技術者試験」は、テクノロジー・マネジメント・ストラテジの3分野に関する基礎的な知識・技能を問う試験であり、情報を専攻する学生にとって、学習の進捗を測る一つのツールであるといえます。この授業では、これらの分野のうち、テクノロジー分野の範疇である「ハードウェア」、「ソフトウェア」、「システム開発」、「ネットワーク」、「情報セキュリティ」、「データベース」に関する知識習得と理解を目的とします

<各回毎の授業内容>

本講座の各回のテーマは次の通りです。

1. 受講ガイダンス、ハードウェア①（プロセッサ、メモリ）

2. ハードウェア②（補助記憶装置、入出力アーキテクチャ）

3. ソフトウェア①（オペレーティングシステム）

4. ソフトウェア②（ミドルウェア、言語プロセッサ）

5. ネットワーク①（LAN、WAN）

6. ネットワーク②（TCP／IP）

7. ネットワーク③（回線サービス）

8. セキュリティ①（暗号化と認証）

9. セキュリティ②（ファイアウォール）

10. データベース①（データベースモデルと正規形）

11. データベース②（SQL）

12. データベース③（システム構成技術）

13. システム開発①（開発手法）

14. システム開発②（モジュール設計、テスト）

15. システム開発③（オブジェクト指向）

<成績評価方法>

毎回の出席を基本とし、成績は授業での演習課題により評価します。

<教科書・参考文献>

当該試験の動向に沿った最新の教材を授業開始前に案内する。

<受講に当たっての留意事項>

「基本情報技術者試験」の過去問題はipaのWebページから入手でき、予習復習に有用です。

<学習到達目標>

基本情報試験午前及び午後問題（問1～5）で、2／3以上の正解率を確保できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	簿記特論 1	2	前	山下 功（情報システム）

選択、24年度以前自由（卒業要件に含まない）

<授業目的>

簿記は、企業規模の大小や業種、業態を問わずに、日々の経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする技能です。

「日商簿記検定」は日本で最も普及した会計系資格試験です。この授業を履修することによって、日商簿記検定3級に合格可能な知識を修得することを目標とします。

<各回毎の授業内容>

- | | | |
|------------------|----------------|---------------|
| 1. 簿記の全体像(1) | 6. その他の債権・債務 | 11. 決算整理(2) |
| 2. 簿記の全体像(2)、主要簿 | 7. 有価証券、有形固定資産 | 12. 決算整理(3) |
| 3. 商品売買 | 8. 訂正仕訳、伝票 | 13. 精算表、帳簿の締切 |
| 4. 現金・預金 | 9. 主要簿と補助簿 | 14. 補充問題(1) |
| 5. 手形取引 | 10. 決算整理(1) | 15. 補充問題(2) |
| 16. 期末定期試験 | | |

<成績評価方法>

期末定期試験80%、第2～15講の授業中に実施する復習テスト20%で評価します。

<教科書・参考文献>

教科書として、以下の2冊を使用します。第1講が始まる前に購入してください。

東京リーガルマインド（2009）『10日で合格ろぞ! 日商簿記3級光速マスターテキスト』

東京リーガルマインド（2009）『10日で合格ろぞ! 日商簿記3級光速マスター問題集』

わかりやすい参考文献として、以下を推奨します。

有馬圭（2012）『絶対合格! 簿記3級（裏）テキスト』光文社。

<受講に当たっての留意事項>

この授業では、予習及び復習が充分になされていることを前提としています。

日商簿記検定で使用可能な電卓を持参してください。

<学習到達目標>

初めて簿記を学習する者が、日商簿記検定3級に合格可能な知識を修得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	FP特論 1	2	前	田中陽子
<p>＜授業目的＞</p> <p>ファイナンシャルプランニングの基礎を学び国家資格3級FP技能士資格に挑戦できる力を養う。</p> <p>＜各回毎の授業内容＞</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 FPガイダンス 総論1 ライフプランとファイナンシャルプランニング 2 FP総論2 コンプライアンスと関係法規。FPに必要な分野と知識 3 ライフプランニングの基礎 ライフイベント表の作成 4 ライフプランニング生活設計1 キャッシュフローマネジメントの基礎知識 5 ライフプランニング生活設計2 教育資金設計 住宅資金設計 6 ライフプランニング生活設計3 リタイアメントプラン その他のローンの基礎知識 7 ライフプランニング生活設計4 社会保障制度の概略 8 ライフプランニング生活設計5 公的年金 私的年金の仕組み 9 リスク管理 1 リスクマネジメントと保険 10 リスク管理 2 生命保険の基礎知識 11 リスク管理 3 生命保険商品の概略 12 リスク管理 4 疾病傷害保険 損害保険の概略 13 リスク管理 5 リスク管理と保険 14 金融資産運用設計Ⅰ 金融経済の基礎知識 15 金融資産運用設計Ⅱ 貯蓄型金融商品の基礎知識 16 課題によるライフイベント表の作成（試験に代えて） <p>＜成績評価方法＞</p> <p>出席率を含め授業態度60％レポート提出40％を目安として総合的に評価する。</p> <p>＜教科書・参考文献＞</p> <p>受講者は指定テキストの購入が必要です。</p> <p>「FP技能検定3級FPテキストⅠⅡ」2冊組FPK研修センター編 販売価格 4,500円</p> <p>＜学習到達目標＞</p> <p>お金や財産に係る生活設計の基礎知識の中からライフプランニングの基礎、リスク管理 金融資産運用設計の基礎の前半までを到達目標とする。</p> <p>前期後期通じて3級FP技能士受験レベルまでを目標とし資格取得を目指します。</p>						

2年システム専門科目（前期）

システム論
情報システムモデル
アルゴリズム
テレコミュニケーション
ソフトウェアエンジニアリング
経営と情報
財務会計
人間情報工学2
モデリング数学
北米社会と情報
情報英語

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	システム論	2	前	近藤 進（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択科目

<授業目的>

システムとは、複数の要素が有機的に関係し、全体としての目的をはたす集合体やその仕組みをいう。機械システムでは車のような物を扱い、経済システムでは概念を扱う。しかし、このように一見離れた分野でも、それぞれに共通する動作や考え方が存在する。システム論では、この多くの分野に共通する見方考え方を学ぶ。この中で、目的を達成するために、もっとも適した方法を見いだすのがシステム思考である。ここでは、情報システムで基本となるシステム思考についての基礎知識を修得し、システムの理論を実際に応用するための能力を育成する。

<各回毎の授業内容>

1 システムとは

システムの歴史 システムの概要

2 システム思考

システムの定義 システム工学

3 システムの分類方法

自然人工 人間機械 生産 線形非線形 連続離散

4 システム計画と分析

システム技法の概要

5 システム計画と分析

ネットワーク

6 システム設計

将来予測

7 動的計画法

最短時間ルート

8 動的計画法

倉庫問題

9 シミュレーション

抵抗コンデンサーの線形回路解析

10 シミュレーション

山岳展望解析（カシミール）

11 システムの信頼性

故障率 平直列回路 保全率

12 システムの信頼性と予測技法

半導体レーザーの寿命 期待値

13 最適化技法

線形計画法 割当て法

14 スケジューリング

アローダイヤグラム平準化と稼働率 費用勾配とCPM

15 ラインバランシング

編成効率 非同期生産方式

16 定期試験

<成績評価方法>

・成績は期末試験の結果（80%）と毎回の理解度チェックの結果（20%）により評価する。

・試験は講義に沿った問題を出題する。

<教科書・参考文献>

・教科書 series電気電子情報系1「システム工学」 石川博章著 共立出版

・教科書にない領域および付け加える点については、その都度資料としてプリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

・毎回講義の終了時に、講義内容に関するコメント（理解度チェック、意見、質問）を提出してもらう。

・「数学基礎」の履修を指導された学生は単位を取得していることが望ましい。

<学習到達目標>

・システム全般にわたる基礎知識を習得する。（50%） またこれらの簡単な応用ができる。（50%）

（関連する学習・教育到達目標：G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	情報システムモデル	2	前	梶木公一（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

企業活動や人間活動を支える情報システムは、人とコンピュータの協調作業を基軸として有形の構成要素（人、コンピュータ本体や端末など）と無形の構成要素（ソフトウェアの機能やデータなど）が絡み合って成り立っている。このような情報システムの全体像を理解するためには、その本質を捉えて眼に見える形にした「情報システムモデル」を利用する必要がある。新しく情報システムの構築を考える時にも、情報システムの利用者、設計者、開発者が正確に情報交換する場合にも情報システムモデルが中心となる。ここでは、まずモデルの基本となる図形とその意味、役割（図解）を学習し、ルールに沿った図形表現による情報システムモデルを「読む」ことによって、情報システムを理解できるようにする。

<各回毎の授業内容>

1

情報システムモデルの意義と役割

2

モデル作成（モデリング）の視点と基本技法

3

図解によるモデリング（問題点整理と分析結果）

4

図解によるモデリング（意思決定、企画と行動戦略）

5

図解によるモデリング（概念、機能、状態、構造）

6

図解によるモデリング（システム概念図）

7

ビジネスプロセスモデル（概要、種類、事例）（練習課題レポート）

8

情報システムモデルとコンピュータシステムモデル

9

情報、データ構造のモデリング

10

機能、プロセスのモデリング

11

構造化表現とオブジェクト指向表現

12

構造化表現による情報システムモデルその1

13

構造化表現による情報システムモデルその2（練習課題レポート）

14

オブジェクト指向表現による情報システムモデルその1

15

オブジェクト指向表現による情報システムモデルその2（練習課題レポート）

16

期末試験

<成績評価方法>

成績はで評価する。期末試験は各講義に沿った問題を数題出題し全問の解答を求める。成績は期末試験結果（80%）と講義中の提出レポート（20%）で評価する。

<教科書・参考文献>

・ほぼ毎回必要なプリントを配布する。ただし、プリントには図表のみが記載されているので、講義に出席しないと理解できない。参考書、参考文献は必要な都度紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・図解が中心となるので、自分で手を動かして図を描くことにより理解すること。

<学習到達目標>

・文章記述などから、情報システムの全体図や業務プロセスなどを具体的に図形表現できるようになる。（期末試験50% レポート10%）

・表現ルールが定められた情報システムモデル（DFD、ERD、UML）を正しく読むことができるようになる（期末試験30% レポート10%）

（関連する学習・教育達成目標:G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アルゴリズム	2	前	河原和好（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

コンピュータを用いて問題解決を行う際の、基本的な考え方と手法について学ぶ。問題を解く手続きを与えるアルゴリズムと、その際に用いるデータの表現形式であるデータ構造との関連を理解する。さらに、アルゴリズムの記述方法、代表的なアルゴリズムについて学び、新しい問題へ適用するための手法を学習する。

<各回毎の授業内容>

1. アルゴリズムとは:プログラムとの関係、簡単なアルゴリズム

2. アルゴリズムの記述方法1:フローチャート、疑似言語など

3. アルゴリズムの記述方法2:代表的なアルゴリズム

4. データ構造:配列、リスト、スタック、キュー、木、グラフなど

5. 計算量:アルゴリズムの性能評価、基本的なアルゴリズムの計算量、中間レポート1

6. 探索1:線形探索、二分探索、ハッシュ法

7. 探索2:二分探索木、平衡木

8. 探索3:文字列の探索など

9. 整列1:基本的なソート（バブルソート、選択ソート、挿入ソート）、シェルソート

10. 整列2:高速なソート（ヒープソート、マージソート、クイックソート）

11. 整列3:その他のソート、中間レポート2

12. 応用アルゴリズム1:再帰、分割統治法など

13. 応用アルゴリズム2:動的計画法、バックトラックなど

14. 応用アルゴリズム3:グラフ探索など

15. まとめ

16. 期末レポート

<成績評価方法>

中間レポート1を30%、中間レポート2を30%、期末レポートを40%の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

・資料を配付する（学内専用ウェブページから授業前に各自ダウンロードしておくこと）

・参考資料は講義中に紹介する

<受講に当たっての留意事項>

・プログラミングに関する演習や講義科目を履修済みであることが望ましい

・連絡事項や追加情報はウェブページに掲載する。<http://www.nuis.ac.jp/~kawahara/>

<学習到達目標>

・アルゴリズムとデータ構造について理解する（中間レポート1:15%、中間レポート2:5%、期末レポート:10%）

・与えられた問題に対し適切なアルゴリズムやデータ構造を適用できる（中間レポート1:10%、中間レポート2:10%、期末レポート:15%）

・学習したアルゴリズムやデータ構造をプログラミングにより実現できる（中間レポート1:5%、中間レポート2:15%、期末レポート:15%）

（関連する学習・教育到達目標:D,J）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	テレコミュニケーション	2	前	近藤 進（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択科目

<授業目的>

テレコミュニケーションは、電磁気的な方法を用い、遠くの人とコミュニケーションをはかることである。この分野の進歩は著しく、2～3年前のシステムが、いつのまにか陳腐化してなくなったり、新しいシステムと入れ替わったりする。しかし、これらシステムの基盤となる技術や考え方は普遍である。この普遍的な考え方をしっかり修得すれば、あらたなシステムが導入されても、容易に理解でき、応用できる。この講義では、これら普遍的な技術や考え方を修得した後、IT社会をささえるブロードバンド、携帯電話、地上デジタル放送を初めとする、応用技術について学ぶ。基盤技術を習得し応用技術を学ぶことにより、新しいより高度な通信技術を理解できるようになる。

<各回毎の授業内容>

- 1 はじめに 講義の概要
- 2 固定電話 一般加入者電話 ISDN 加入者線 中継線 交換機
- 3 アナログとデジタル アナログとデジタルの特徴 アナログ・デジタル変換
- 4 時間軸と周波数軸 矩形波のsinカーブ合成
- 5 交換技術 自動交換
- 6 多重化技術 周波数分割多重 時分割多重
- 7 パケット通信 パケット通信の原理 パケットの構成 パケット交換
- 8 非対称転送モード フレームリレー ATM
- 9 有線通信 ケーブル 有線通信方式 IP電話
- 10 無線通信 電磁波 電磁波の使われ方
- 11 移動電話 携帯電話 CDMA方式 PHS
- 12 衛星通信 衛星通信システム
- 13 光通信 光ファイバー レーザ 光通信方式 FTTH
- 14 放送 地上デジタル放送 ケーブルテレビ
- 15 情報通信と社会
- 16 定期試験

<成績評価方法>

- ・通信の原理とその応用である通信システムについての理解度を期末試験（80%）および講義毎の理解度チェック（20%）により評価する。
- ・試験は講義に沿った問題を出題する。

<教科書・参考文献>

- ・教科書 進歩の顕著な領域であり、授業の開始に合わせて指定する。
- ・教科書にない領域および付け加える点については、その都度資料としてプリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

- ・欠席した場合は自己責任で資料をそろえること
- ・各回の授業内容は厳密に一限毎の内容を示すものではなく、各講義の主な内容であり、理解度に応じ進度は変化する。
- ・毎回講義の終了時に、講義内容に関するコメント（理解度チェック、意見、質問）を提出してもらう。
- ・「数学リテラシー」または「数学基礎」の履修を指導された学生は単位を取得していることが望ましい。

<学習到達目標>

- ・通信技術の基礎を理解できるようになる。（65%） また、通信システムがどのような原理で成り立っているかを知り、新しい通信システムについても理解できる力を養う。（35%）
- （関連する学習・教育到達目標:E,J）平成24年度生以前
- （関連する学習・教育到達目標:J）平成25年度生以降

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	ソフトウェアエンジニアリング	2	前	桑原 悟（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

ソフトウェアは、高度に知的な作業の結果として生まれるとあってよいが、反面、その作成に関しては、属人的なものになりがちであり、科学的アプローチは簡単ではないという特徴がある。ソフトウェアエンジニアリングは、このソフトウェアの作成におけるさまざまな局面に対し、工学的な視点での測定や改善を扱う分野である。この授業では、ソフトウェアのライフサイクルを意識し、その機能や価値と作成のコスト及び改善のための考え方や具体的手法について学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1）授業オリエンテーション

2）ソフトウェアの特徴とソフトウェア工学の必要性

3）ソフトウェアのもたらす利益／ソフトウェアの価値

4）ソフトウェア開発モデル(1)

5）ソフトウェア開発モデル(2)

6）ソフトウェア開発モデル(3)

7）ソフトウェアのコスト(1)

8）ソフトウェアのコスト(2)

9）ソフトウェア工学関連領域（外部講師を招聘する場合がある）

10）ソフトウェアの開発環境, ツール及び手法(1)

11）ソフトウェアの開発環境, ツール及び手法(2)

12）ソフトウェアの開発環境, ツール及び手法(3)

13）ソフトウェアの品質

14）ソフトウェア工学分野の最新の動向

15）まとめ

16）定期試験

注）受講する学生の理解度により講義順序（日程）や分量を調整することがある。

<成績評価方法>

定期試験（90%）及び課題（10%）により評価を行う。

<教科書・参考文献>

└ 新技術の登場が盛んな分野であるので、授業開始時期に合わせて最適なものを選定し指定する┘

<受講に当たっての留意事項>

分散コンピューティングの授業内容の理解及び、数学1, 数学2, テレコミュニケーション, 組織と経営の単位を取得していることが望ましい。また、基礎自由科目「数学基礎」の履修を指導された者は、これを履修していることが望ましい。授業に集中している学生の邪魔になる行為をするものは退出させる（出席を認めない）。質問は歓迎するので、遠慮なく質問して欲しい。

<学習到達目標>

ソフトウェアエンジニアリングが必要な背景, その考え方及び、個別の手法などの特徴について理解できる。

（関連する学習・教育到達目標:D,J）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	経営と情報	2	前	内田 亨（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

本講義では、企業経営と情報の関わり方を習得する。前半では、情報（技術）と企業経営の関連性に関して基本的なことを理解する。後半では、情報に関連した戦略論・組織論にも展開する。

<各回毎の授業内容>

第1回 インTRODクシヨン（ガイダンス）

第2回 IT化と企業経営

第3回 IT戦略マネジメントの背景と課題

第4回 企業と市場のあたらしい関係の構築

第5回 ITによる本業革新のためのビジネスモデル

第6回 経営に携わるゲストスピーカーによる講義

第7回 ITによる新事業創造のビジネスモデル

第8回 IT市民型ビジネスの展開

第9回 中間まとめと中間試験

第10回 ITによる業務プロセスの革新

第11回 IT化と組織デザイン

第12回 情報と組織戦略

第13回 ネットワーク組織

第14回 ラーニング・スクール

第15回 知識創造論（SECIモデル）・ナレッジ・マネジメント

第16回 定期試験

*ゲストスピーカーの日程により授業内容の順番が前後する。

<成績評価方法>

・中間試験（小論文）:30％、定期試験（小論文 B 4 両面 全て持ち込み不可）:50％、コメント票 20％で、評価する。

<教科書・参考文献>

・教科書:寺本義也（2003）『企業と情報化 現代経営学講座 4』八千代出版を使用する。ただし、この分野は、日進月歩で常に変化しているので、随時、最新情報等の資料も紹介・配布する。

<受講に当たっての留意事項>

・事前に教科書を読んでくること。試験は論文形式のため、文章を書けるように努力すること。

<学習到達目標>

・情報（技術）と経営の関連性およびその仕組み（ITを活用した企業経営、IT戦略、イノベーション、新事業創造など）を理解し、基本的な理論や専門用語を説明できるようになる（中間試験:30％、定期試験:10％、コメント票20％）。

・情報技術を活用した組織戦略、知識創造論、ナレッジ・マネジメントを理解し、組織経営について分析・考察できるようになる（中間試験:0％、定期試験:40％、コメント票0％）。

・（関連する学習・教育到達目標:E、I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	財務会計	2	前	山下 功（情報システム）
22～24年度						
21年度以前		3 年				

選択

<授業目的>

財務会計は、複式簿記の計算を通して企業の損益と財産の状態を測定し、株主・投資家・取引先・政府・地方自治体等の企業外部の利害関係者に報告する会計の仕組みです。それゆえ、管理会計が企業内部への報告を目的とするのに対して、財務会計では企業自身を企業外部へ、会計的にいかに表現するのが重視されます。この授業を履修することによって、簿記及び財務会計の基本的な知識を習得することを目標とします。

<各回毎の授業内容>

- | | |
|------------|------------------|
| 1. 財務会計とは | 9. 有価証券 |
| 2. 企業会計の目的 | 10. 固定資産会計(1) |
| 3. 財務諸表の概要 | 11. 固定資産会計(2) |
| 4. 仕訳と記帳 | 12. キャッシュ・フロー計算書 |
| 5. 商品売買の記帳 | 13. 連結財務諸表 |
| 6. 伝票会計 | 14. 会計と税務 |
| 7. 決算 | 15. 財務会計の実務 |
| 8. 棚卸資産の評価 | 16. 期末定期試験 |

<成績評価方法>

期末定期試験80%、第2～15講の授業中に実施する復習テスト20%で評価します。

<教科書・参考文献>

教科書として、拙著テキスト『財務会計前編・後編』を使用します。授業中に配付します。

<受講に当たっての留意事項>

授業で計算問題を解くことがありますので、電卓を持参してください。なお、期末定期試験では、使用できる電卓が制限されます。

<学習到達目標>

企業会計の目的と財務会計の概要についての知識を習得し、財務会計学習の前提となる簿記の基本を理解すること。(期末定期試験40%、復習テスト10%)

財務諸表から得られる情報がどのように役に立っているかを理解するとともに、連結財務諸表および財務会計の実務についての知識を習得すること。(期末定期試験40%、復習テスト10%)

(関連する学習・教育目標:I)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	人間情報工学 2	2	前	上西園武良（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

人間情報工学2では、人間の心身機能に適合した機器・環境を設計するためには、どのような開発プロセスで行うべきかを具体的な事例で修得する。講義の基礎知識として前提としているのは、人間情報システムで学習した「人間の特性」および人間情報工学1で学習した「人間の心身機能に適合させるための設計手法」である。

<各回毎の授業内容>

1. 人間中心設計

2. 家庭用ミシンの事例(1)商品企画①

3. 家庭用ミシンの事例(2)商品企画②

4. 家庭用ミシンの事例(3)設計・評価①

5. 家庭用ミシンの事例(4)設計・評価②

6. オフィスチェアの事例

7. 温水洗浄便座の事例

8. 自動車の事例

9. 睡眠の基礎知識(1)

10. 睡眠の基礎知識(2)

11. 枕の事例(1)商品企画

12. 枕の事例(2)設計・評価①

13. 枕の事例(3)設計・評価②

14. ベッドの事例

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

・6回のレポート（各10点、計60点）と期末試験（40点）の合計（100点）で評価する。

・6回のレポートのうち少なくとも3回は提出していることを期末試験の受験資格とする。（2回以下の方は受験資格なし）

・期末試験は「電卓（通信機能なし）」以外は持ち込み不可。

<教科書・参考文献>

特定の教科書は使用しない。

<受講に当たっての留意事項>

・人間情報工学1の単位を取得済であることが受講（履修登録）の条件である。

・毎回、統計的なデータ処理計算を行うので平方根（√）計算機能のある電卓を持参すること。

<学習到達目標>

人間の心身機能に適合した機器を生み出すためにどのような開発プロセスで行うかを説明でき、開発計画を策定できる。

（関連する学習・教育到達目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	モデリング数学	2	前	白井健二（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

数理科学では現象に対する数学的モデルを作り，これを数学的に取り扱うことによって現象を解明する。現象の定式化の方法と計算のしかたを学習する。あわせて数学を単なる道具ではなく，現象の本質の表現であることを修得する。

<各回毎の授業内容>

1、方程式と不等式

2、方程式と不等式演習

3、等差数列と等比数列およびそれらの和

4、階差数列とその和

5、数列と級数演習

6、三角関数, 指数関数および対数関数

7、三角関数, 指数関数および対数関数の演習

8、微分法その(1)－多項式, 三角関数, 指数関数, 対数関数－

9、微分法その(2)－媒介変数, 逆関数－

10、微分法の応用

11、積分法その(1)－多項式, 三角関数, 指数関数, 対数関数－

12、積分法その(1)－多項式, 三角関数, 指数関数, 対数関数－

13、積分法その(2)－置換積分－

14、積分法の応用

15、積分法演習

16、定期試験

<成績評価方法>

毎回出席を取る。期末試験:60％と適時実施する確認テスト:40％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書および配布資料

教科書:リメディアル大学の基礎数学, 小平平治著, 裳華房（ISBN 978-4-7853-1553-5）

<学習到達目標>

・解析の基礎である方程式または不等式を立てて，問題を解くことを修得する。（定期試験:10％，確認テスト:10％）

・関数および逆関数の考え方を修得する。（定期試験:20％，確認テスト:10％）

・現象の規則性に関する数列と級数，および多方面で活用される三角関数と指数関数・対数関数を修得する。（定期試験:10％，確認テスト:10％）

・システム解析に欠かせない微積分法とその応用を修得する。（定期試験:20％，確認テスト:10％）

（J A B E Eに関連する学習・教育目標:D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	北米社会と情報	2	前	上西園武良、西山 茂
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

海外夏期セミナーにおける授業科目の1つである。ソフトウェア開発の現場見学や開発プロジェクト担当者の講義などを通して、北米社会における最新の情報関連技術動向・ビジネス動向、それらを取りまく社会動向の理解を深める。授業の理解を深めるため、現地への出発前に授業内容の概要の事前学習を行う。

<各回毎の授業内容>

5週間の間に以下の授業を英語で行う。但し、多少の内容変更もある。

- ・企業訪問（5回）
- ・ITを利用した授業（3時間×5回）

<成績評価方法>

帰国後に提出されたレポートにより成績評価を行う。

<教科書・参考文献>

適宜、教材を配布する。

<受講に当たっての留意事項>

訪問企業などの状況によって内容が変更になることがある。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	情報英語	4	前	上西園武良、西山 茂
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

海外夏期セミナーにおける授業科目の1つである。英語によって自分の考えや主張を相手に伝え、コミュニケーションができるようにするための技術を身につける授業を行う。また、海外夏期セミナーにおいて開講される「北米社会と情報」を理解するための情報技術関連の英語力修得を目指す。北米の大学のエクステンション学部における通年のESL（English as a second language: 英語が母国語ではない人に対する英語教育）クラスの運営ノウハウを生かした授業構成となっている。授業の理解を深めるため、現地への出発前に授業内容の概要の事前学習を行う。

<各回毎の授業内容>

エクステンション学部のESL英語教育プログラムを受講する。4時間の授業に週5日・5週間にわたり参加する。英語文化圏におけるコミュニケーション技術向上に焦点をあてた授業である。上記の時間以外でもホームステイなどを通して英語によるコミュニケーションのトレーニングができる。

- ・自己評価調査: 英語授業を組み立てるための英語能力の確認
- ・カンバセーション・クラブ: 外国人との英会話練習（10回）
- ・様々な場面における言語技術向上のためのトレーニング: ディスカッション、プレゼンテーション、実務処理の実行・対応、感情表現等の学習
- ・ホームステイ: 3週間のホームステイによる日常生活の中での英語体験とコミュニケーション技術の向上

<成績評価方法>

帰国後に研修先の大学から送られてくる成績証明書と提出されたレポートにより成績評価を行う。

<教科書・参考文献>

短編小説、新聞、パンフレットなどを含む多くのテキストを使用する。また、音声・映像教材も使用する。

3・4年システム専門科目（前期）

情報システム特論
情報システム設計
経営情報システム
知識情報処理
コンピュータビジョン
マルチメディア情報処理
生産情報システム
企業と国際化
商品企画
経営と法律
地域情報システム
認知科学
多変量解析
オペレーションズリサーチ2
学外実習
ビジネス英語入門1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	情報システム特論	2	前	西山 茂（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

＜授業目的＞

(1) 現実の社会状況に対する知見を広げるため、産官学等社会で活躍している方を講師に招き、講師の業務分野等のトピックをお話しして頂く。また、当該分野でのICT利用方法等について学ぶ。

(2) 現代の社会活動の基本であるプロジェクト活動を体得する:履修生自身が組織・運営する複数のチーム（プロジェクト）を編成する。各プロジェクトは役割分担を含む組織構成を決め、問題・課題（目標）設定、スケジュール設定を行い、進捗管理・成果管理法を決め、文書化する。計画に対する進捗を管理しながら活動し、目的達成を図る。15回目の授業でプロジェクト活動成果を報告する。

＜各回毎の授業内容＞

- ・外部講師による授業は5回行う。その講義内容は適宜プロジェクト活動に利用する。
- ・プロジェクトは履修生自身が積極的・自律的に運営する。

[1] 授業オリエンテーション

[2] 外部講師による講義1 「プロジェクト管理技術」に関する講義

[3] 外部講師による講義2 「政府・自治体等の政策・動向」に関する講義

[4] 外部講師による講義3 「社会状況、ICT動向等」に関する講義

[5] 外部講師による講義4 「社会状況、ICT動向等」に関する講義

[6] 外部講師による講義5 「社会状況、ICT動向等」に関する講義

[7] プロジェクト編成 キックオフ、課題の大枠、プロジェクト内役割分担（組織）の設定

[8] プロジェクト活動 プロジェクト計画書策定、計画書レビュー、目的達成のための活動

[9] プロジェクト活動 目的達成のための活動、中間成果の整理、進捗管理

[10] プロジェクト活動 目的達成のための活動、中間成果の整理、進捗管理

[11] プロジェクト活動 目的達成のための活動、中間成果の整理、進捗管理

[12] プロジェクト活動 目的達成のための活動、中間成果の整理、進捗管理

[13] プロジェクト活動 目的達成のための活動、成果の最終整理、進捗管理

[14] プロジェクト活動 成果報告資料作成

[15] プロジェクト活動成果発表

[16] 講評とまとめ 試験は実施しない。日々の活動及び成果報告を評価する

(注:上の[n]は授業順序を示してはいない。外部講師講義のテーマ及び順番は入れ替わることがある。)

＜成績評価方法＞

- ・外部講師講義受講アンケート及び講義受講レポート提出（各回の講義内容の要点と所感）(5回):35%
- ・プロジェクト計画書:10%、プロジェクト成果発表:40%
- ・活動態度:10%、及び履修生個々に行う報告時の他プロジェクト評価:5%
- ・プロジェクト活動は必須である。プロジェクト評価を個人成績に反映する。プロジェクトメンバに登録してもプロジェクト活動（集団活動）に貢献しなかった者は評価しない。

＜教科書・参考文献＞

- ・教科書はない。毎回、講義スライドのコピーを配布する（HPやCampusmate等の電子的手段）ほか、必要があれば次回講義に関連するURL等を紹介する。
- ・各種白書（情報化白書、情報通信白書、情報サービス産業白書、等）、@IT、日経BP等の情報サイト

＜受講に当たっての留意事項＞

(1) 外部講師講義では積極的質問すること。

(2) 講義情報、受講レポート、プロジェクトチーム活動は、Campusmate等電子的手段を活用する。

(3) 授業時間の外に、レポート作成やプロジェクト活動にある程度の時間をかける必要がある。

＜学習到達目標＞

(1) 5つの講義テーマ関連領域についての最新の知識を獲得し、その要点を説明できる。（受講アンケートと受講レポートの提出:35%）

(2) プロジェクトチーム活動を通じて、与えられた制約下での業務の進め方、リーダー役実践によるチームまとめ能力、チーム活動手法などを習得する。（プロジェクトチーム活動及び成果報告:65%）

（関連する学習・教育到達目標:F、G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	情報システム設計	2	前	槻木公一（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

情報システムの設計について、そのプロセスと方法論を学習する。 情報システムの構築についてまず理解し、方法論の必要性和種類、特徴について学び、事例を通して理解を深める。

情報システムの仕事の仕組みと情報のモデル化の技法を中心に説明し、コンピュータシステムの設計へと結びつけていくプロセスを具体的に学ぶ。

<各回毎の授業内容>

- 1 情報システム概論
- 2 情報システムの構築
- 3 情報システム設計概論
- 4 分析設計方法論の種類と特徴
- 5 図式表現と設計技法その1
- 6 図式表現と設計技法その2
- 7 問題領域調査
- 8 システム分析と要求事項の明確化
- 9 仕事の仕組みと情報のモデル化
- 10 設計プロセスとモデルの種類・役割（課題レポート）
- 11 物理モデルと論理モデル
- 12 現行モデルと要求モデル
- 13 モデルの変換その1
- 14 モデルの変換その2
- 15 設計事例演習（レポート提出）
- 16 期末試験

<成績評価方法>

期末試験は各講義に沿った問題を数題出題し全問の解答を求める。成績は期末試験結果（80%）と講義途中の提出レポート（20%）で評価する。

<教科書・参考文献>

・適時、プリントを配布する。ただし、プリントには図表のみが記載されているので、講義に出席して各自内容を充実すること。参考文献は初回の講義の中で紹介する

<受講に当たっての留意事項>

・設計プロセス全体を継続して講義するので、散発的な出席では理解できなくなる。

<学習到達目標>

・情報システムの設計プロセスと、各段階におけるモデルの種類およびその役割を学習して理解できる。（期末試験30% レポート10%）

・簡単な事例について情報システムの具体的な設計を行い、図形表現モデルの作成方法を習得する。（期末試験50% レポート10%）

（関連する学習・教育達成目標:E , G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	経営情報システム	2	前	岸野清孝（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
経済の国際化や消費者ニーズの多様化、生産技術の革新など複雑化・高度化した社会では、個人の経験や感覚だけで企業活動をコントロールすることは不可能となってきた。本科目では、急ピッチで変化する経営環境に対応するための経営情報システムについて学ぶ。

<各回毎の授業内容>
1. 経営情報システムの全体概要説明
2. 産業動向と経営情報システム:産業動向とIT化・グローバル化の進展
3. 生産における情報システム:生産管理（ERP）、製造管理（レポート課題1）
4. 販売・マーケティングにおける情報システム:流通業と販売管理、顧客管理（CRM）
5. 受発注・商取引における情報システム:EC/EDIの発展、eマーケットプレイス
6. 物流における情報システム:物流の7機能、物流情報システム
7. 会計における情報システム(1):会計情報システムの必要性、会計処理の流れ
8. 会計における情報システム(2):各部門の手続きと会計システム
9. サプライチェーンマネジメント（SCM）の発展（レポート課題2）
10. 事例研究:オフィス用品ネット通販アスクルの経営戦略
11. 電子タグの経営情報システム応用:無線ICタグの動向、活用事例
12. 安全・安心とトレーサビリティシステム:背景と必要性、先行事例
13. 経営情報システムとビジネスモデル特許:特許戦略、情報システムと特許
14. 事例研究:企業における情報システムの最新状況
15. 全体まとめ
16. 定期試験

<成績評価方法>
定期試験:80%と自己学習によるレポート課題:20%の配分で評価する。

<教科書・参考文献>
資料を配布する（本校のHPからダウンロードし、各自がプリントアウトする）。

<学習到達目標>
・企業活動（生産、販売、受発注、物流、会計など）の仕組みを理解し、基本的な知識を習得する（定期試験:25%）。
・企業の諸活動の内容と役割およびその中での情報活用の方法を理解し説明できるようになる（定期試験:25%）。経営情報システムの動向（EC・EDI、電子タグ、トレーサビリティ、ビジネスモデル特許など）を学び、それらが問題解決にどのように役立つかを理解し説明できるようになる（定期試験:30%）。
・自己学習による調査により経営情報システムについて、さらに理解を深める（レポート:20%）
（関連する学習・教育到達目標:E、G）平成24年度生以前、
（関連する学習・教育到達目標:G）平成25年度生以降

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	知識情報処理	2	前	中田豊久（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

本講義では、データマイニングとその応用について学ぶ。データマイニングとは、データの中から半自動的に知識を発見する手法の総称である。この「半自動的に」とは、計算機と人間が協同してデータを分析するという意味である。そのために、計算機が自動で出力するデータの傾向や法則について、人間はその仕組みを理解しなければならない。そこで本講義ではこの半自動的にデータ分析であるデータマイニングを、IBM社のプログラミングによる戦車ゲームであるRobocodeを題材にして学ぶ。

履修者は以下の5つの戦車をJava言語によって作成してもらう。

課題1 :Cleaning 課題2 :RoundCleaning 課題3 :Following 課題4 :Sniper 課題5 :Sniper2

<各回毎の授業内容>

1. データマイニング入門（機械学習とその応用）
2. Robocodeセットアップ、Java言語の基本、Cleaningの説明
3. Java言語（関数、クラス）、Robocodeにおける数学（角度、三角関数、三平方の定理）
4. Java言語、Robodeにおける数学の復習
5. Cleaningの解説、RoundCleaningの説明、Java言語（クラスの派生）
6. RoundCleaningの解説、Followingの説明、Java言語（イベント）
7. Sniperの説明、Java言語の復習
8. Followingの解説
9. ここまでの復習
10. Sniperの解説、Sniper2の説明
11. 座標計算
12. SniperからSniper2への派生について
13. Sniper2の解説、自由課題の説明
14. 発表資料の作り方、学習するロボットSniper3の紹介
15. ここまでの復習
16. 自由課題の発表会

<成績評価方法>

5つの課題の合計を90%、自由課題の発表を10%の割合で評価する。5つの課題は、作成したプログラムを説明するレポートによって評価する。

<教科書・参考文献>

教科書:基礎から学ぶデータマイニング、中田豊久、コロナ社、ISBN:978-4-339-02470-8

<受講に当たっての留意事項>

情報処理演習C1、C2を履修していることが望ましい。

<学習到達目標>

・戦車ゲームを通じ目的とする動作をプログラミング言語によって記述する技術を習得する。
(課題70%)

・データ分析と生成を一体化したデータマイニングについて理解する。 (課題20%)

・データ分析の結果から新たなアイデアを創造することを学ぶ。 (自由課題の発表10%)

(関連する学習・教育到達目標:J)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	コンピュータビジョン	2	前	河原和好（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

人間が外界の情報を得る手段のほとんどは視覚による画像情報である。この仕組みと同等の機能をコンピュータに持たせ、コンピュータに画像を処理・計測・認識・理解させる手法がコンピュータビジョンである。その数理的な原理や仕組みを理解し、新しい問題へ適用するための手法を学習する。さらに画像作成の原理と手法についても学習する。

<各回毎の授業内容>

1. コンピュータビジョンとは、応用事例

2. 画像処理1: デジタル画像、画像の表現方法、画像フォーマット

3. 画像処理2: 画像処理の手法、ヒストグラム処理、空間フィルタ処理

4. 画像処理3: 画像の幾何変換、同次座標による表現、補間処理

5. 画像処理4: 二値化の手法、二値画像処理

6. 画像処理5: 画像の周波数解析の原理と手法

7. 画像認識1: 画像認識の原理、パターン認識の手法

8. 画像認識2: 応用事例（文字認識）

9. 画像認識3: 応用事例（バイオメトリクス、リモートセンシング）

10. 画像理解1: 立体認識の手法

11. 画像理解2: 動画画像処理の手法

12. 画像理解3: 応用事例（ロボット）、中間レポート

13. 画像作成1: コンピュータグラフィックスの原理と手法1

14. 画像作成2: コンピュータグラフィックスの原理と手法2

15. まとめ、応用事例（バーチャルリアリティ、拡張現実）

16. 定期試験

<成績評価方法>

中間レポートを40%、期末試験を60%の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

・資料を配付する（学内専用ウェブページから授業前に各自ダウンロードしておくこと）

・参考資料は講義中に紹介する

<受講に当たっての留意事項>

・連絡事項や追加情報はウェブページに掲載する。<http://www.nuis.ac.jp/~kawahara/>

<学習到達目標>

・画像処理、計測、認識、理解の手法について理解する（中間レポート20%、期末試験30%）

・画像処理、計測、認識、理解について、与えられた問題に対し適用できるようになる（中間レポート20%、期末試験30%）

（関連する学習・教育到達目標:J）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	マルチメディア情報処理	2	前	桑原 悟（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

IT化社会の一翼を担うマルチメディア情報処理は、先人の知恵と発想の集大成であり、さらなる発展が期待されている。授業では、マルチメディア関連の旧来のアナログ技術から最新のデジタル技術及び関連事項について学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1）授業のオリエンテーション及びマルチメディア概観

2）人間の聴覚

3）音声に関する技術の発展

4）音声のアナログ表現とデジタル表現

5）不要な音声情報の除去と音声データの圧縮

6）音声合成と音声認識

7）音声情報処理ツール

8）人間の視覚

9）画像に関する技術の発展

10）画像のアナログ表現とデジタル表現

11）データ量の削減と圧縮

12）データ圧縮方式（詳細）

13）コンピュータグラフィックス

14）画像情報処理ツール

15）まとめ

16）定期試験

注）受講学生の理解度により講義の順番（日程）や分量を調整することがある

<成績評価方法>

定期試験（90%）及び課題（10%）により評価する。

<教科書・参考文献>

〔新技術の登場が盛んな分野であるので、授業開始時期に合わせて最適なものを選定し指定する〕

<受講に当たっての留意事項>

数学1, 数学2, テレコミュニケーションの単位を取得していることが望ましい。
基礎自由科目「数学基礎」の履修を指導された者は、これを履修していることが望ましい。
授業に集中している学生の邪魔になる行為をするものは退出させる（出席を認めない）。
質問は質問者自身だけでなく、他の受講者の理解を促す効果があるので、大いに歓迎する。

<学習到達目標>

人間の聴覚・視覚の特性を考慮にいたし、音声・画像コンテンツの入力, 記録, 伝達, 出力における「高品質化」, 「高速化」, 「圧縮」, 「低価格化」の発想と原理を理解し、これらの間及び、その他の制約条件とのトレード・オフの考え方についても理解できる。
(関連する学習・教育到達目標:J)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	生産情報システム	2	前	佐々木桐子（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

24年度以前（選択）、25年度以降 情報コース（選択）、経営コース（選択）

<授業目的>
生産情報の処理プロセスを理解し、生産の運用に関わる諸手法を習得する。さらに、シミュレーション手法を活用し、仮想の生産システムを構築し、円滑な生産に向けた提案を行う。

<各回毎の授業内容>

1. 生産情報システムの概要①	生産、情報、システム
2. 生産情報システムの概要②	生産システム、生産情報システム（小テスト①）
3. 方略的生産計画①	需要予測（小テスト②）
4. 方略的生産計画②	長期生産計画、利益計画（小テスト③）
5. 方略的生産計画③	販売計画、設備投資計画（小テスト④）
6. 全般的生産計画①	短期生産計画①（線形計画法:基礎）（小テスト⑤）
7. 全般的生産計画②	短期生産計画②（線形計画法:応用①）（小テスト⑥）
8. 全般的生産計画③	短期生産計画③（線形計画法:応用②）（小テスト⑦）
9. 確認テスト	
10. 確認テストの返却と答え合わせ	
11. 生産スケジューリング	ディスパッチングルール、ロット生産（小テスト⑧）
12. シミュレーション・Arena概要	SIMAN/Arenaの変遷、用語の説明（小テスト⑨）
13. シミュレーション演習①	生産システムのシミュレーションモデルの構築（基礎）
14. シミュレーション演習②	生産システムのシミュレーションモデルの構築（応用）
15. シミュレーション演習③	生産システムのシミュレーションモデルの構築（発展）
16. レポート課題提出	

<成績評価方法>
毎回の小テスト（20％）、確認テスト、（20％）、および自己学習によるレポート課題（60％）で評価する。

<教科書・参考文献>
・教科書:「生産情報システム 講義ノート」を使用する。
・参考文献
・人見勝人著 『新・生産管理工学』 コロナ社、1997。
・高桑宗右エ門監訳 『シミュレーション』 コロナ社、2005。

<受講に当たっての留意事項>
・各自、電卓を持参すること。

<学習到達目標>

① 企業における生産の運用全般を理解し、現実の問題へと応用することができる。（小テスト:10％、確認テスト:10％、レポート:20％）

② 運用に関わる諸問題を発見し、解決する能力を身につけることができる。（小テスト:10％、確認テスト:10％、レポート:40％）

（関連する学習・教育到達目標:E,I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	商品企画	2	前	谷本和明（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

企業が継続的に成長するためには、次世代の企業を支える商品の開発が必須といえる。この商品の企画を考察するに当たり重要な要件として、マーケティングで学んだように、自社のコア・ビジネス（ポジションと顧客ターゲット）を明確にし、新規の商品企画に関するマーケティング・ミックス分析を行わなければならない。本講義では、商品アイデアを事業化するために必要なプロセスを学習し、商品企画書を作成する。また、本講義では、商品開発に必要な科学的理論の学習と、それらの理論の実践的な応用を思考するケース研究を交互に組み合わせ、習得した理論を即時応用しながら商品企画書を完成させる。

<各回毎の授業内容>

1. 市場における製品化と企画書
2. 市場分析1：STP分析、SWOT分析、製品・市場マトリックス
3. 市場分析1：4P分析、マーケティング・ミックス、製品ポートフォリオ・マトリックス
4. ケース研究1：「グーグル」慶応ビジネス・スクール 文献番号90-06-7083
5. 市場分析2：ICT活用によるデータ収集とグループワーク
6. 市場分析2：アンケートによるデータ収集とグループワーク
7. ケース研究2：「デル・オンライン」Harvard Business School 文献番号9-505-J01
8. 商品企画書の間接発表と討議
9. 商品企画書の間接発表と討議
10. 市場分析3：データの統計分析（代表値、単純集計、クロス集計）
11. 市場分析3：データの統計分析（相関係数・図、回帰分析）
12. ケース研究3：「株式会社ワールドのサプライチェーン管理」Harvard Business School 文献番号9-608-J02
13. 商品企画書の作成とグループワーク：財務計画
14. 商品企画書の作成とグループワーク：組織計画
15. 定期試験：商品企画書の発表と討議
16. 定期試験：商品企画書の発表と討議

<成績評価方法>

商品企画書：50％、レポート課題（3回）：計30％、討議・発言：20％の配分で評価する。

<参考文献>

バブソン大学「コーポレート・アントレプレナーシップ」野村総合研究所 2001年ティモンズ／千本・金井訳「ベンチャー創造の理論と戦略」ダイヤモンド社 1999年

<受講に当たっての留意事項>

商品企画書の作成には、データの収集とクリティカル・シンキングが重要である。

<学習到達目標>

- ・データ分析を基に正確な自社と市場の分析を行う。（中間・最終発表50％）
- ・アイデアを製品にするプロセスをケース研究を通して考察する（ケース討議30％）
- ・自分で分析したマーケット戦略を発表し他者の戦略との比較を行う。（討議20％）

（関連する学習・教育到達目標：I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	経営と法律	2	前	吉田正之
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

企業の経営に関する法律のうち、会社法を中心に、企業のガバナンスに関する関連諸法規の基礎知識を習得させる。実際に起こりうる事象に則して講義を進め、企業のガバナンスにおいてどのような問題が起こりうるのか、法がどのような解決方法を用意しているのかについて理解させる。

<各回毎の授業内容>

- 1 法学の基礎
- 2 企業・会社とは何か
- 3 会社法総論
- 4 株式会社総論・株主総会の概要
- 5 株主総会招集等
- 6 株主総会の議事と決議
- 7 株主総会決議の瑕疵
- 8 役員および会計監査人の選任と解任
- 9 取締役・取締役会・代表取締役
- 10 取締役の一般的な義務
- 11 取締役の利益相反行為の規制
- 12 会計参与・監査役・監査役会・会計監査人
- 13 委員会設置会社・非取締役会設置会社
- 14 役員等の責任
- 15 株主代表訴訟・違法行為の差止等

<成績評価方法>

質問票を利用した「授業への参加」(20%) と、全授業終了後に提出する「レポート」(80%) で評価します。

<教科書・参考文献>

・教科書:吉田正之『コンパクト会社法』(新世社、2012年) 2,310円

・参考書:最新の六法

<学習到達目標>

- ・株式会社の運営に関する法的仕組みを理解できる。
- ・株式会社のそれぞれの機関の役割を理解できる。
- ・株式会社の役員の責任とその追及方法を理解できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	地域情報システム	2	前	藤田晴啓（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

地域情報システムとはその名のとおり、地域の情報を収集、整理、処理、出力するシステムの総称ではあるが、この用語自体、対象となる情報の種類、処理方法等が明確でないので一般的には使われていない。しかしながら、地域固有のデータを扱うシステムと位置づけるとすれば、自治体が扱う地域の人や土地に関する情報管理業務（住民基本台帳、戸籍、不動産登記、税務、道路、工業団地、港湾、上下水道および統計）、あるいは電力・ガス、製造、建築、販売、その他サービスを行う企業の顧客や土地に関わる情報処理システムである。これらの基盤情報は台帳と図面（地図）に分けることができ、自治体や企業の殆どは、台帳データはデータベース（DB）、図面データはDBを取込める地理情報システム（GIS）をその業務に使用している。授業では事業者が管理する地域固有のデータおよび業務を先ず理解し、後半5回で地理情報システムの操作と地域統計データ表示実習を行う。

<各回毎の授業内容>

1. 講義ガイダンス・授業の目的と毎回授業の内容、成績評価方法

2. 住民基本台帳・住民票と住基ネットによる電子自治体および住民サービスの向上

3. 住民基本台帳による住民情報・税務サービス連携、地域情報プラットフォームと自治体クラウド

4. 自治体業務におけるGIS、自治体GIS関連システム、税務、道路上下水公園、統合型GIS

5. 物流GIS、農業GIS（レポート課題1）

6. 農業GIS復習、林業GIS

7. 林業GIS復習、インフラGIS、自治体クラウド

8. GISの活用、マーケティング、不動産および介護福祉分野の活用事例紹介

9. 位置情報サービス（特にNAVITIME トータルナビゲーションサービス）

10. 地域情報システムの今後、地域情報プラットフォームおよび自治体クラウド（レポート課題2）

11. GIS実習1:SuperMapViewの導入説明、ファイルダウンロード、都道府県別統計データ表示

12. GIS実習2:全国市町村データダウンロード表示、新潟県市町村別GDP等入力

13. GIS実習3:Excelデータのインポート、属性テーブルの結合、統計データのグラフ表示

14. GIS実習4:独自調査した統計データ全国・新潟県内地図上表示し説明する（実習出力）

15. GIS実習5:統計データから作成した属性テーブルの結合およびグラフ表示、講義のまとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験70％、レポート課題20％・実習出力10％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

参考書:GIS自習室フリー版 SuperMapViewを使い倒そう（渡邊 康志・古今書院）

<受講に当たっての留意事項>

私語厳禁、まわりに迷惑を与えるので、注意は1回までとする。2回目で退席を勧告。

GIS実習はPC教室使用。使用するGISソフトはSuperMapView。使用PC教室にインストール済み。

<学習到達目標>

・自治体住民サービスの概要、システム連携を理解し、基本的知識を習得する（定期試験:25％）。

・地理情報システムの内容と解析例および自治体業務サービスとしての役割を理解し説明できるようになる（定期試験:25％）。住民基本台帳に関する住民認証業務の内容とシステムを学び、それらが住民サービスにどのように役立つかを理解し説明できるようになる（定期試験:10％）。

・自ら収集した特徴ある地域統計データを地図上に表示するGIS操作の習得（実習出力:10％）

（関連する学習・教育到達目標：H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	認知科学	2	前	伊村知子（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

認知科学は、人間を「情報処理システム」とみなすことにより、脳と心のはたらきを「情報」の概念から理解しようとする研究分野であり、心理学、社会学、言語学、人類学、神経科学など、人間の心に関心を持つ様々な学問分野と「情報学」との融合により生まれた学際領域である。最近では、ロボット工学や脳科学などの科学技術の進歩のもと、社会とのつながりの中でさらなる発展を遂げている。本講義では、認知科学の研究により明らかになった人間の心のはたらきを簡単な実験から確かめるとともに、それらの研究成果を現実の社会へ応用する方法について考える。

<各回毎の授業内容>

1. 認知科学とは

2. 脳の構造

3. 視覚認知

4. 注意

5. 聴覚認知と言語

6. 複数の感覚情報の統合

7. 運動

8. 推論

9. 構造の認知

10. 記憶

11. 意識

12. 他者との関係

13. 認知発達

14. 人間の心とは

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に実施する課題（30%）と定期試験（70%）により、総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

特に教科書や参考文献は指定せず、必要な資料は授業中に配布する。

<受講に当たっての留意事項>

基礎科目「心理と行動」を受講していることが望ましい。

<学習到達目標>

・ 認知科学に関する基礎的な知識を身につけること。

・ 人間の心的過程や行動を分析する方法を学び、情報システムや組織の設計・評価などに応用すること。

（関連する学種・教育目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	多変量解析	2	前	近山英輔（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

多変量解析法は多次元データを様々な角度から解析する数学的手法の総称であり、現代のビッグデータ時代に有用視されるデータサイエンスの一手法でもある。本講義では、様々な多変量解析の手法を学び、実際にソフトウェアを使用して解析する能力も養う。

<各回毎の授業内容>

1. いろいろな多変量解析の手法

2. 多次元データと特徴空間

3. R

4. 単回帰分析

5. 重回帰分析

6. 分散・共分散・相関行列

7. 主成分分析(1)

8. 主成分分析(2)

9. 主成分分析(3)

10. クラスタ分析

11. 分散分析

12. パターン認識

13. ニューラルネットワーク

14. 大規模データ

15. レポート課題解説

16. 定期試験

<成績評価方法>

レポート:100%

<教科書・参考文献>

特になし

<受講に当たっての留意事項>

レポートはオリジナリティ、手法、内容の完成度から評価する。他の履修者のレポートと内容が似ていれば似ているほど、同じ内容のレポート数が多いほど得点が下がるので、内容の選定には注意すること。レポート提出するだけで必ずしも単位が取れるわけではない。

<学習到達目標>

・多変量解析の手法を適切に選択、解析し、レポートを執筆できること（レポート100%）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	オペレーションズリサーチ 2	2	前	近山英輔（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

複雑な人間社会においては、費用を最小化する最適な数理的計画・最適化手法の立案が求められる。また、非線形系の大域的最適化、適応戦略の数理的手法が求められることがある。この講義では線形計画法、解析学的・離散的な最適化問題の手法、個体群動力学や進化・適応戦略の理論、の手計算による数学的解法を学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1. オペレーションズリサーチの歴史

2. ベクトル・行列の予備知識

3. 線形代数の予備知識

4. 線形計画法(1)

5. 線形計画法(2)

6. 線形計画法(3)

7. 線形計画法(4)

8. 局所的最適化法の概念

9. 大域的最適化法の概念

10. 解析学の予備知識

11. 微分方程式の予備知識

12. 生物社会の動力学(1)

13. 生物社会の動力学(2)

14. 生物社会の動力学(3)

15. 生物社会の動力学(4)

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験:100 %

<教科書・参考文献>

特になし

<受講に当たっての留意事項>

定期試験は持込不可。連立方程式、初等関数の微分等の計算ができる者を対象とする。そのスキルを未修得の者は専門選択科目「システム数学」等で修得してから受講すること。

<学習到達目標>

・多元連立方程式を理解し、線形計画法のシンプレックス法で最適化問題を手計算で解くことができる（定期試験60 %）。

・局所的・大域的最適化法の例について説明できる（定期試験20 %）

・微分方程式を用いた生物社会の動力学の例について説明できる（定期試験20 %）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	学外実習	2	前	情報システム教員
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

学外実習は、大学と企業等とが事前に協議し、大学から派遣された学生が、ある一定期間、企業等において、就業体験を行うものである。この科目では、学生が大学で学んでいることがらが、実社会でどのように役立つのかを、企業等に入って体験し、そこで得た知見や経験をもとに、専攻分野での知識向上、学習意欲の向上を図ることを目的としている。併せて、学生が就職を含め、将来の進路を考える上で貴重な経験と情報を得ることを期待している。

<各回毎の授業内容>

1 実習時期・期間:原則として3年次の夏季休暇期間、原則2週間（実質10日間成績評価方法参照）

2 実習先 :受け入れ企業リストで紹介する企業・団体等から選定する。
学生自身が探したものでも良いが、その場合は担当教員に履修前に申し出ること。

3 実習内容と形態:具体的な内容と形態については、担当教員と協議に基づいて実習先が作成するプログラムに従う。（会社毎の実習内容については、実習経験者の報告書を参照）

4 実習地域:新潟地域が主体で、首都圏も一部ありうる。

5 実習期間・時間:実習先の勤務形態に従う。

6 スケジュール
4月 ガイダンスおよび「学外実習」履修届け
5月 学外実習受け入れ企業の提示、実習希望先の提出（第一・第二希望）
6月 実習先毎の派遣学生の選考・確定、日程の確定、学生紹介票の提出
7月 実習前ガイダンス、および実習先担当教員による事前指導
8～9月 実習参加
9月 実習報告書の提出（担当教員の指示に従うこと）
10月 成績評価（成績は後期）

<成績評価方法>

・実習報告書と実習先指導者に依頼する実習評価とを総合して、実習先の指導担当教員が評価する。

・実習期間が受け入れ先の都合により、10日間に満たない場合は、担当教員による別途の事前・事後指導や別途レポートの作成・提出を行う。

<教科書・参考文献>

・過去の実習報告書（学務課教務係の棚に保管）。

・各企業・団体のホームページを参照すること、また新聞検索もしておくこと。

<受講に当たっての留意事項>

・学外実習による就業体験は、アルバイトではないので、実習先が提供する研修・就業に参加するという目的意識をしっかりとって臨むこと。

・実習先における態度、成果は、本人はもとより、本学に対する評価につながる場合がある。そのため、学業成績、日常の規律遵守に著しく問題のある学生に対しては実習を許可されない。参加する学生は、本学から派遣されていることを自覚して就業に臨むこと。

・各企業の希望者が実習先の受け入れ人数を越えた時は、担当教員が選考する（実習できない場合がある）

<学習到達目標>

・実習先企業等の業務を理解し、その一部を体験すること。

・今後の学習やスキルアップへの動機付け・方向付けができる。

・職業意識を形成・明確化し、職業に対する適性やキャリア開発について考えることができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ビジネス英語入門 1	1	前	グレゴリー・ディック
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
この授業ではさまざまなビジネスの世界と職場の状況における英語をおもしろく、楽しく学んでいきます。TOEIC 英語についても学習します。

<各回毎の授業内容>
第1週 Orientation & Self-Introductions
第2週 At the Office + Internet Search
第3週 At the Office + TOEIC Practice
第4週 Times+ Internet Search
第5週 Requests + TOEIC Practice
第6週 Dealing with Orders + Internet Search
第7週 Taking a Message + TOEIC Practice
第8週 中間試験
第9週 Customer Needs + Internet Search
第10週 Customer Services + TOEIC Practice
第11週 Guiding Clients + Internet Search
第12週 Directing Clients + TOEIC Practice
第13週 Customer Complaints + Internet Search
第14週 Making Applications + TOEIC Practice
第15週 Review
第16週 期末試験

<成績評価方法>
中間試験25％、期末試験25％、小テスト・授業参加度50%によって評価します。

<教科書・参考文献>
教材は毎週教員が用意します。テキストは使用しません。

<受講に当たっての留意事項>
授業には毎週出席し、積極的に参加することが望めます。欠席5回以上で試験資格を失いますので十分気をつけて下さい。

<学習到達目標>
日本および海外で使用でき、将来学生の助けとなるビジネス英語を学びます。

（関連する学習・教育到達目標：B）

後 期 科 目

基礎科目



1 年基礎科目（後期）

経済学（ミクロ）
社会学
歴史学
地球環境論
科学と技術
コミュニケーション技術
線形数学
CEP 2
英語 2
体力診断と運動処方 2

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	経済学（ミクロ）	2	後	濱田弘潤
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業では、ミクロとマクロに二分される近代経済学の中で、ミクロ経済学について最も基礎的な考え方を講義する。ミクロ経済学の入門を学ぶことを通じて、現実の経済問題を正しく捉え、考えるための最も基礎的な視点を養うことを目的とする。

ミクロ経済学を学ぶに当たって、最も基本的な経済用語や考え方、経済学で用いられる簡単な数学を説明し、個々の経済主体の行動原理について説明を行う。特に消費者理論では、消費者の予算制約下の効用最大化行動について、生産者理論では、生産者の生産技術の制約下での利潤最大化行動について学ぶ。また需要と供給の一致する市場均衡と市場均衡の資源配分の効率性について説明する。講義は、ミクロ経済学をこれまで学んだことのない初学者向けに行われる。

<各回毎の授業内容>

1. ミクロ経済学について、ミクロ経済学の位置付け
2. ミクロ経済学と数学
3. 需要と供給
4. 価格弾力性
5. 完全競争市場と市場均衡
6. 効用と無差別曲線
7. 限界代替率
8. 予算制約と効用最大化
9. 所得効果と代替効果
10. 生産関数
11. 生産量と費用
12. いろいろな費用の性質
13. 利潤最大化
14. 余剰分析の方法
15. 市場均衡と余剰・まとめ
16. 定期試験

但し講義の構成・内容は、進み具合と受講者の理解度に応じて変更することがある。
指定した教科書の章立てに従った講義を予定している。

<成績評価方法>

成績評価は、期末試験により行う。

<教科書・参考文献>

教科書:神戸伸輔・寶多康弘・濱田弘潤『ミクロ経済学をつかむ』(2006年) 有斐閣
参考文献:西村和雄『現代経済学入門 ミクロ経済学 第2版』(2001年) 岩波書店
西村和雄『ミクロ経済学入門 第2版』(1995年) 岩波書店
武隈慎一『ミクロ経済学 増補版』(1999年) 新世社

<受講に当たっての留意事項>

受講者に必要な要件は、講義を通じて真剣に学ぶ積極的な学習意欲である。
また講義内容の復習を行うこと。それ以外は特に受講に必要な要件はない。
講義を中心に進めるので、テキストの予習・復習を行うこと。

<学習到達目標>

1. 講義内容とテキストの内容を完全に理解する。ミクロ経済学の考え方や図について、経済学のものとの捉え方や経済問題、経済的な意味についてきちんと理解する。具体的には、消費者理論、生産者理論、市場均衡で用いられるミクロ経済学の基礎概念と考え方を理解する。
2. ミクロ経済学の問題を解くために最低限必要な基礎知識を修得し、ミクロ経済学の実際の演習問題の解き方を学ぶことの助けとする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	社会学	2	後	阿部春江
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
社会学の基本的視点を理解するため、最初に、社会学がどのように発展してきたか、また社会学的方法について学ぶ。次に、わが国の社会的特徴を、人口、生活、家族等に焦点を当て理解する。最後に、社会問題、とりわけ家族にかかわる問題について社会的アプローチを行い考察を深める。

<各回毎の授業内容>

1 はじめに	
2 社会学の課題と歴史 1	社会学に課せられている課題
3 社会学の課題と歴史 2	社会学の歴史と展開
4 社会学的方法・社会調査 1	社会調査の意義と社会調査の歴史
5 社会学的方法・社会調査 2	量的・質的調査の特徴と種類
6 社会学と社会福祉	社会学と社会福祉の接点
7 人口	人口の構造と変化
8 生活 1	生活のとらえ方
9 生活 2	ライフスタイル
10 家族 1	家族とは何か
11 家族 2	家族の機能、家族の変容
12 家族問題の理解 1	家族問題のとらえ方
13 家族問題の理解 2	児童虐待の現状と課題
14 家族問題の理解 3	ドメスティックバイオレンスの現状と課題
15 家族問題の理解 4	高齢者虐待の現状と課題
16 まとめ（定期試験）	

<成績評価方法>
定期試験（持ち込み不可）80％、出席15％、授業態度5％で総合評価する。

<教科書・参考文献>
教科書 テキストは使用しない。講義時に資料を配布する。
参考文献 社会福祉士養成講座編集委員会編『新社会福祉士養成講座 社会理論と社会システム 社会学』中央法規 2010,精神保健福祉士・社会福祉士養成基礎セミナー編集委員会編『社会学—社会理論と社会システム』へるす出版 2009,社会福祉学習双書編集委員会編『社会福祉学習双書 社会学』全国社会福祉協議会 2012,三本松政之ほか編『MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 社会理論と社会システム』ミネルヴァ書房 2009,宇都宮京子編『よく分かる社会学』ミネルヴァ書房 2008,社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 社会調査の基礎』中央法規 2010,

<受講に当たっての留意事項>
上記の内容はこのシラバス作成時点のものであり変更の可能性もある。第1回目に、講義内容・成績評価方法等詳細について説明する。

<学習到達目標>
社会学の基礎を身につけると同時に、現代社会、とりわけ家族の諸問題を社会的視点から見つめ直し考察する力を身につけることができるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	歴史学	2	後	小山田紀子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この講義では、西洋史とくにフランス近現代史を取り上げる。18世紀末におこったフランス大革命は世界史上で人類を近代へと導く重要な転換点を画する事件であった。革命による国民国家と近代市民社会の形成をたどり、フランス革命が世界に与えた影響を見る。次に19世紀後半以降はフランス植民地拡張という帝国主義の時代に入るが、二つの世界大戦を経てフランスは戦後、植民地の民族運動に対峙せねばならなかった。イギリスとフランスの二大植民地帝国は1950～60年代に崩壊過程をたどり、旧植民地の新興独立諸国は第三世界を形成することになる。しかし、政治的独立を達成した新興国も経済的には多くの困難を抱え、今日の開発途上国と先進国の関係は半世紀たった今も南北問題として現れている。植民地の残滓ともいえる諸問題が、旧宗主国の先進国と旧植民地の開発途上国の双方において見られるのである。ここではとくにフランスとマグリブ（北西アフリカのアルジェリア・チュニジア・モロッコの三国）との関係を先進国－開発途上国関係の一つの事例として取り上げることしたい。

<各回毎の授業内容>

1. 絶対王政の成立と破綻	
2. フランス革命とナポレオン帝国	1) フランス革命
3. “ ”	2) ナポレオン帝国
4. 名望家支配の時代	
5. 第二帝政の時代	
6. 第三共和政と帝国主義の時代	1) 第三共和政の形成
7. “ ”	2) フランス帝国主義
8. “ ”	3) イギリス帝国主義
9. 二つの世界大戦	
10. 戦後復興と植民地戦争	1) 繁栄の30年
11. “ ”	2) インドシナ戦争からアルジェリア戦争へ
12. “ ”	3) ドゴールと第五共和政
13. 1974年以後のフランス	1) ジスカールデスタンと移民問題
14. “ ”	2) ミッテランの政策々
15. “ ”	3) シラクからサルコジへ

<成績評価方法>

授業への出席と定期試験

<教科書・参考文献>

テキスト 佐々木真『図説 フランスの歴史』河出書房新社、1890円

参考書 谷川稔・渡辺和行編著『近代フランスの歴史―国民国家形成の彼方に―』ミネルヴァ書房、2006年

バンジャマン・ストラ著、小山田紀子・渡辺司訳『アルジェリアの歴史』明石書店、2011年10月

その他、授業の中で適宜指示する。

<受講に当たっての留意事項>

人間や社会に関心を抱き、想像力をもって歴史の本を読むこと。

<学習到達目標>

国民国家とは何か、という視点から歴史を見る目を養い、グローバル化の進む現代世界における人間のあり方、個人の生き方について考える姿勢を獲得してもらいたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	地球環境論	2	後	澤口晋一（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

「地球環境問題」とは、人間の社会経済活動に伴って人間圏から放出された物質が地球システムの物質循環・エネルギー循環に影響を与える（与えた）結果として生じるような地球規模の諸現象で、それが結果的に人間生存に影響を与えるようなものをいう。具体的には地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、砂漠化、野生生物種の減少、森林（熱帯林）破壊、水質汚染、土壌汚染などといった問題群であるが、この講義では地球温暖化、オゾン層の破壊、生物多様性について概説する。なお、最後の2回については、核燃料サイクルを地球環境問題として位置付けてその問題点を述べる。

<各回毎の授業内容>

1. 「地球環境問題とは何か。
2. 地球環境問題への国際的取り組みとその歴史
3. 地球温暖化の検証①
4. 地球温暖化の検証②
5. 温室効果のメカニズム
6. IPCCによる将来予測と影響予測（第四次評価報告書に基づいて）
7. 地球温暖化に対する国際社会と日本の取り組み（気候変動枠組条約、京都議定書、締約国会議）
8. 地球温暖化反人為説について①
9. 地球温暖化反人為説について②
10. オゾン層の破壊①地球大気とオゾン層、オゾン層の保護に関する国際条約について
11. オゾン層の破壊②北極と南極のオゾンホール、形成とメカニズム
12. 生物多様性①熱帯林の破壊
13. 生物多様性②生物多様性とは何か
14. 地球環境問題としての核燃料サイクル①
15. 地球環境問題としての核燃料サイクル②

<成績評価方法>

試験（定期試験80％と小テスト20％）

<参考資料>

IPCC (L. Bernstein ほか)『気候変動2007:統合報告書 政策決定者向け要約』文科省・気象庁・環境省・経産省, 2009.

環境省 平成23年度オゾン層等の監視結果に関する年次報告書第1部.
http://www.env.go.jp/earth/report/h24-06/1-1_chapter1.pdf

* 上記2点の資料を明記したアドレスからダウンロードし、必ずカラーでプリントアウトしておくこと。

<受講に当たっての留意事項>

私語・飲食（持ち込み）厳禁。携帯電話の電源は必ず切る（毎時間携帯の電源を切ってもらうことから始めます）。

<学習到達目標>

地球環境問題とは何かを多角的に認識するとともに、国際社会の取り組みに対して、市民としての自己の位置づけを明確化すること。なお、授業内容それぞれの項目にかかる比重はおよそ以下のように設定しています。1～2:10％, 3～7:40％, 8～9:20％, 10～11:10％, 12～14:20％ただし、学生の反応等によって扱う内容や比重に若干の違いが生じることがあります。

（関連する学習・教育目標:A）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	科学と技術	2	後	近藤 進（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択科目

<授業目的>

ここでは、科学と技術について概説し、情報化社会をささえる通信の歴史および原理を勉強する。通信の科学技術は、19世紀初頭から、さまざまな人々の研究、あるいは競争の上に成り立っている。当時の歴史背景をふまえ、研究者・技術者が、それぞれのどのような着眼点で研究開発をすすめていったか、そしてどのようなものが残ったかを学ぶ。あわせて、これらエレクトロニクス技術に重要な原理やシステムについて、基礎的な知識を修得する。さらに、最新の光通信を材料の観点をふくめて勉強する。これらの研究開発をふまえ独創性や特許について勉強する。これらの、比較的理解しやすい科学技術を学ぶ中から、情報化社会が広範囲な科学技術で成り立っていることを理解する。

<各回毎の授業内容>

1

はじめに 講義の概要

2

科学と技術 科学と技術の違い 細菌学と疫学

3

通信の歴史（電気以前） 腕木通信他

4

通信の歴史（電気と電池） ガルバーニ ポルタ 発電機

5

通信の歴史（電信） クック ウエバー

6

通信の歴史（電信） モールス

7

通信の歴史（電話） ライス ベル エジソン

8

通信の歴史（無線） マクスエル ロッジ マルコーニ

9

通信の歴史（無線） 大西洋横断通信 電離層 電波の使われ方

10

通信の歴史（放送） 電球 真空管 アンテナ 撮像管 液晶 プラズマディスプレイ

11

計算機の始まり 機械式計算機 ENIAC

12

通信材料の開発（結晶とガラス） ダイアモンド 水晶振動子 CDRW

13

通信材料の開発（結晶成長と光ファイバー） 人工結晶 MBE法 MOVPE法 光ファイバー

14

通信材料の開発（半導体レーザー） 発光の原理 LED レーザ

15

独創性と特許 青色発光ダイオード

16

定期試験

<成績評価方法>

・

成績は期末試験（80%）、毎回の理解度チェック（20%）の結果で評価する。

・

試験は講義に沿った問題を出題する。

<教科書・参考文献>

・

毎回プリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

・

欠席した者は自己責任で資料をそろえること

・

各回の授業内容は厳密に1限毎の内容を示すものではなく、各講義の主な内容であり、理解度に応じ進度は多少変化する。

・

毎回講義の終了時に、講義内容に関するコメント（理解度チェック、意見、質問）を提出してもらう。

<学習到達目標>

・

電子通信技術の歴史・原理を学ぶことによって、エレクトロニクスの基礎（35%）、科学技術の研究開発についての知識（65%）を習得する。また、これらを学ぶ中から、地理・歴史・物理・化学・地学・医学等の広範囲な知識を習得し、現代社会が多くの科学技術により成り立っていることを理解する。

（関連する学習・教育到達目標A）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	コミュニケーション技術	2	後	本間正一郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

現代社会は情報化社会といわれる。しかし、情報をやりとりし、使いこなすべき人間は洪水のような情報におぼれ、次第に個の殻の中へ閉じこもる傾向もみえる。本来、人間社会を円滑にするための道具に過ぎない情報技術（コミュニケーション技術）が、いつの間にか目的化・肥大化し、その陰で太古から人間が持っていた優れたコミュニケーション力にかげりが見えている。インターネットを基盤とするさまざまな情報ツールが爆発的に普及するなか、何でもできるという過信が逆にすべてに無知・無力という悲惨な状態を招いていないか。マスゴミという蔑称が当たり前のように口にされるが、実は多くの人はいかに偏った情報に踊らされコミュニケーション喪失状態に陥っているのではないか。本講座は前期の「情報メディア論」を踏まえつつ、リベラルアーツとしてのコミュニケーション技術理解を深める。

<各回毎の授業内容>

1、当日までのニュースを解説・分析。ジャーナリズムとコミュニケーション

2、当日までのニュースを解説・分析。既存メディアはなぜ攻撃されるか

3、当日までのニュースを解説・分析。言論の自由はどう死ぬか

4、当日までのニュースを解説・分析。戦争とメディア

5、当日までのニュースを解説・分析。テレポリティクスと新聞

6、当日までのニュースを解説・分析。広告、CMを考える

7、当日までのニュースを解説・分析。情報のプロとは何者か

8、当日までのニュースを解説・分析。テレビ、ラジオはどうなのか

9、当日までのニュースを解説・分析。愛国心とプロパガンダ

10、当日までのニュースを解説・分析。市民とジャーナリズム

11、当日までのニュースを解説・分析。人権と新聞

12、当日までのニュースを解説・分析。オルタナティブ・メディアの現状と課題

13、当日までのニュースを解説・分析。漢字、日本語、日本人

14、当日までのニュースを解説・分析。通信社とはなにか

15、当日までのニュースを解説・分析。匿名社会とメディア

15、当日までのニュースを解説・分析。まとめ

<成績評価方法>

出席を重視する。評価配分は期末40％、小課題と出席ポイントなどで60％。

<教科書・参考文献>

特にないが、授業の中で随時紹介する。ただし、日々の新聞が一番の教科書なので、できるだけ一般紙に「毎日」目を通すことを推奨する。

<受講に当たっての留意事項>

本授業は「試験のための丸暗記」を求めない。大学生らしく自律的に思索を広め、深めることを期待し、そのためのヒントを豊富に提示する。授業中に t w i t t e r を使って意見や感想を募る。ハッシュタグを指定するので、可能な人は積極的な参加を望む。授業中の教室出入りや私語、授業に関係ない携帯電話等は周囲の学習者の迷惑となるので慎むこと。

<学習到達目標>

「狭い視野」「偏った知識」「思い込み」の危険性を理解し、柔軟で寛容な情報対応力を養う。新聞を苦痛なく読むことができるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	線形数学	2	後	石井忠夫（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞
本講義では、線形代数の基礎について一通り解説する。線形代数は数学における他の分野（代数学、幾何学、解析学）の基礎となるばかりでなく、物理学、化学、工学、経済学等の諸科学に対して、その数学的基盤を与えるものである。更に、情報科学の観点からも重要性が認識されている。たくさんの定義が現れるので、一つ一つ順を追って解説する。

＜各回毎の授業内容＞
1. 線形代数の入門（基本的な代数の概念、講義の位置付け）
2. 行列の定義（相等、和、差、スカラー倍、積）
3. 演算の法則（交換、結合、分配）
4. 正方行列（単位行列、対角行列、対称行列、交代行列）
5. 正則行列と行列のブロック分割（逆行列、転置行列）
6. 連立一次方程式と行基本操作
7. 行列の階数と掃き出し計算法
8. 逆行列の決定と正則条件
9. 行列式の定義（置換、順列、サラスの方法）
10. 行列式の性質（転置、線形、交代、加法）
11. 余因数展開と行列式の計算
12. 逆行列と連立方程式への応用（クラメールの公式）
13. 線形変換
14. 固有値問題
15. 固有値の応用
16. 定期試験

＜成績評価方法＞
毎回の小問が10点、レポート2回の合計が30点、および期末試験が60点の合計点で評価する。

＜教科書・参考文献＞
○寺田文行、木村宣昭共著:線形代数の基礎（サイエンス社、1997年）1,480円
寺田文行、木村宣昭共著:演習と応用線形代数（サイエンス社、2000年）1,700円

＜受講に当たっての留意事項＞
(1) 履修に当たっては、上の二番目に挙げた演習書も参考にとすると良い。
(2) 学習の便宜を図るために、数回の小問題を課す。
(3) 教科書に沿って授業を進めるので、早めに教科書を購入しておくのが望ましい。
(4) 基礎自由科目「数学基礎」の内容を修得していることが望ましい。

＜学習到達目標＞
行列および行列式の基礎概念を理解（60％）し、また、連立1次方程式の求解への応用能力（40％）を習得する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	CEP2	3	後	Gregory Hadley (CEP コーディネーター)
22～24年						
21年度以前						

<現在の教育目標>

CEPは英語を楽しく集中的に学習するプログラムです。CEPで積極的に取り組んだ学生は、そのほとんどが学年末には自信を持って英語を話すことができるようになっていきます。CEPでは、国際英語を教えます。英語を自分のことばにして、日本人としての学生の視点から話します。CEPでは、学生が英語を話したくなるような、楽しいクラスを目指します。

<教育内容>

CEPプレイスメント・テストの結果によって、レベル別クラスが編成されます。Aクラスが最も難しく、Fクラスが基礎レベルです。しかし、このレベルの違いは学生の成績に影響しません。例えば、Fクラスだからという理由で悪い成績をとったり、Aクラスだからといって他のクラスの人より自動的に良い成績を修めるといったことはありません。レベル別にするのは、学習内容が簡単過ぎたり難し過ぎたりすることを避けるためです。適切なレベルから始めることで、学習効果が上がります。CEPで英語の力がつけば更に高度なクラスへ、また、あまり上達しないようなら基礎的なクラスに移動することも可能です。CEPでは毎回の出席と授業への積極的な取組みが要求されます。遅刻はしないこと。欠席回数（届出があり、やむをえないと認められた欠席を除く）が30％を超えると不合格となります。CEPでは、授業活動への参加に関してポイント・システムを採用しています。英語で質問をしたり、英語の授業活動を積極的に行ったり、教員の質問に英語で答えたりした学生は、そのつどコインがもらえます。白いコインは1ポイント、青いコインは2ポイント、赤いコインは3ポイントです。1回の授業につき最高ひとり5ポイントまで集めることができます。コインは授業終了時に教卓の箱に返却します。そのとき、自分の名前とポイントの数を教員に伝えてください。CEPには、スピーキング・リスニングの授業とリーディングの授業があります。リスニングとスピーキングのテストは3週間に1回あります。

<時間数>

週4回で45分、週1回で90分

<学習成果>

統計的な調査によると、情報文化学科の学生の学習成果として英語力が向上しているの重要な点。このほか、CEPでは学生に無欠席や、定期的な勉強や教室マナーなど学習態度を指導します。これらの学習態度は、学生が後で他の講座や授業においてや、就職するために必要とされる重要な社会的な技能です。

<問題点>

CEP1・2の後に、学生の言語能力は減少します。学生が4年生になるまでには、大半は英語を忘れてしまいます。現在のカリキュラムの余裕がないため、そして、CEP講師の人数が足りないため、CEPは2年もしくは3年プログラムができません。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 2 A（話す） P、R 1、R 3	1	後	ステファン デュルカ ランス レイサム グレゴリー ディック
<p><授業目的> 授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習する必要があります。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週:Chapter 9 Simple Present Tense 第2週:つづき 第3週:Chapter 10 Simple Present Tense:Yes/No Questions etc. 第4週:つづき 第5週:Chapter 11 Object Pronouns 第6週:つづき 第7週:Chapter 12 Contrast 第8週:中間試験 第9週:Chapter 12 つづき 第10週:Chapter 13 Can Have to 第11週:つづき 第12週:Chapter 14 Future 第13週:つづき 第14週:Chapter 15 Past Tense 第15週:つづき 第16週:期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト・授業参加度50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> Steven J. Molinsky, Bill Bliss, <i>Side by Side</i> Level 1 Student Book B with Workbook (Pearson Kiriara) 宍戸真他、<i>Practical Reading Expert 2</i>（成美堂） Masumi Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i>（センテージ ラーニング）（Pクラスのみ使用）（奇数章） Casey Malarcher, <i>Reading In 1 Practical Reading Course of English</i>（Thomson）（補習用:Pクラスのみ使用）</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。積極的に授業に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。</p> <p>（関連する学習・教育到達目標:B）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 2 B（読む） Q、R 2、R 4	1	後	福田一雄 土橋善仁 高橋正平
<p>＜授業目的＞</p> <p>現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も250～300語程度で読みやすく、単語力の強化と英文を読む力を養成します。理解度確認の練習問題、リスニング問題及び簡単な文法問題も行います。</p> <p>＜各回毎の授業内容＞</p> <p>第1週: Lesson 1 Yoga 第2週: Lesson 3 Space Travel 第3週: Lesson 5 Ice Cream Taster 第4週: Lesson 7 Bullying 第5週: Lesson 9 Plagiarism 第6週: Lesson 11 Bird Strikes 第7週: Lesson 13 Jellyfish 第8週: 中間試験 第9週: Lesson 15 Brazilian Soccer 第10週: Lesson 17 Yahoo! 第11週: Lesson 19 The Variety of English 第12週: Lesson 21 Guy Fawkes Day 第13週: Lesson 23 Astronauts in Space 第14週: プリント使用 第15週: プリント使用 第16週: 期末試験</p> <p>＜成績評価方法＞</p> <p>中間試験25%、期末試験25%、小テスト等50%によって評価します。Qクラスでは中間試験20%、期末試験20%、補修用リーディング10%、TOEIC英語10%、小テスト等40%によって評価します。</p> <p>＜教科書・参考文献＞</p> <p>Steven J. Molinsky, Bill Bliss, <i>Side by Side Level 1 Student Book B with Workbook</i> (Pearson Kiriara)</p> <p>宍戸真他、<i>Practical Reading Expert</i> (成美堂)</p> <p>Masumi Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (センテージ ラーニング) (Qクラスのみ使用) (奇数章)</p> <p>Casey Malarcher, <i>Reading In 1 Practical Reading Course of English</i> (Thomson) (補習用: Qクラスのみ使用)</p> <p>＜受講に当たっての留意事項＞</p> <p>授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p>＜学習到達目標＞</p> <p>英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標: B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 2 A（話す） P、R 1、R 3	1	後	ステファン デュルカ ランス レイサム グレゴリー ディック
<p><授業目的> 授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習する必要があります。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週:Unit 8 Where I live 第2週:つづき 第3週:Unit 9 Times past 第4週:つづき 第5週:Unit 10 We had a great time ! 第6週:つづき 第7週:Unit 11 I can do that ! 第8週:中間試験 第9週:Unit 11 つづき 第10週:Unit 12 Please and thank you 第11週:つづき 第12週:Unit 13 Here and now 第13週:つづき 第14週:Unit 14 It's time to go ! 第15週:つづき 第16週:期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト等・授業参加度50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> John and Liz Soars, <i>American Headway Starter</i> (Oxford) 宍戸真他、<i>Practical Reading Expert</i> (成美堂) (偶数章) Masumi Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (センゲージ ラーニング) (Pクラスのみ使用) (偶数章) Casey Malarcher, <i>Reading In 1 Practical Reading Course of English</i> (Thomson) (補習用:Pクラスのみ使用) (偶数章)</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業には積極的に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標:B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 2 B（読む） Q、R 2、R 4	1	後	大岩彩子 茅野潤一郎 高橋正平
<p><授業目的> 現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も200～250語程度で読みやすく、単語力の強化と英文を読む力を養成します。理解度確認の練習問題、リスニング問題及び簡単な文法問題も行います。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週: Lesson 2 Post-It Notes 第2週: Lesson 4 Internet Slang 第3週: Lesson 6 Mia Hamm 第4週: Lesson 8 Quebec Winter Carnival 第5週: Lesson 10 Sick Building Syndrome 第6週: Lesson 12 Underpopulation 第7週: Lesson 14 Glass Artist 第8週: 中間試験 第9週: Lesson 16 The Oedipus and Electra Complexes 第10週: Lesson 18 Light Pollution 第11週: Lesson 20 Virtual Reality Therapy 第12週: Lesson 22 In 2030 第13週: Lesson 24 Crash Test Dummies 第14週: プリント使用 第15週: プリント使用 第16週: 期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト等50%によって評価します。Qクラスでは中間試験20%、期末試験20%、補習用リーディング10%、TOEIC英語10%、小テスト等40%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> John and Liz Soars, <i>American Headway Starter</i> (Oxford) 宍戸真他、<i>Practical Reading Expert</i> (成美堂) (偶数章) Masumi Tanabe 他、<i>THE TOEIC TEST TRAINER Target 350</i> (センゲージ ラーニング) (Qクラスのみ使用) (偶数章) Casey Malarcher, <i>Reading In 1 Practical Reading Course of English</i> (Thomson) (補習用: Qクラスのみ使用) (偶数章)</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。</p> <p>(関連する学習・教育到達目標: B)</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語 2 C（文法） P、Q、R 1、R 2、 R 3、R 4	1	後	秋 孝道・辻 照彦 大竹芳夫・市橋孝道 高橋正平・本間多香子
<p><授業目的> 授業では英文法について学習します。中学、高校6年間文法を学んできているはずの皆さんは案外文法をわかっていません。文法がわからないと英語の読み、書き、話すはできません。以上の理由からこの授業では基本的な英文法の習得を目指し、前期に引き続き英文法について学びます。</p> <p><各回毎の授業内容> 第1週:15 不定詞 第2週:16 動名詞 第3週:17 接続詞 第4週:18 受動態 第5週:19 語形 第6週:20 形容詞節 第7週:つづき 第8週:中間試験 第9週:21 副詞節 第10週: つづき 第11週:22 条件節 第12週:つづき 第13週:23 名詞節 第14週:つづき 第15週:24 現在完了形 第16週:期末試験</p> <p><成績評価方法> 中間試験25%、期末試験25%、小テスト等50%によって評価します。</p> <p><教科書・参考文献> アンドルー E. ベネット、『大学英語『文法・プラス』』（南雲堂）</p> <p><受講に当たっての留意事項> 授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業では学ぶ項目が多いので、集中して授業を受けて下さい。随時小テストを実施しますので、普段の勉強が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。</p> <p><学習到達目標> 中学、高校まで学んだ英文法を再学習することにより、英文法の基礎的知識の向上を目指します。</p> <p>（関連する学習・教育到達目標：B）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	英語（再履修）	1	後	高橋正平 秋 孝道
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
現代日米の出生率、食べ物、アニメ等を比較した英文を読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げるトピックは日米の類似点、相違点を扱い、読みやすい英文となっています。できるだけ多くの英文を読み、英語力の強化を行います。前期使用テキストの後半を学習します。

<各回毎の授業内容>
第1週:Lesson 13 Low Birthrate
第2週:Lesson 14 Driving or Public Transportation?
第3週:Lesson 15 American Food
第4週:Lesson 16 Parties:In or Out?
第5週:Lesson 17 Anime in the USA
第6週:Lesson 18 Work and Family
第7週:Lesson 19 High School and University
第8週:中間試験
第9週:Lesson 20 Politeness
第10週:Lesson 21 Loan Words
第11週:Lesson 22 A Buddhist Christmas?
第12週:Lesson 23 Entrepreneur or Office Worker?
第13週:つづき
第14週:Lesson 24 Bathrooms:Wet or Dry?
第15週:つづき
第16週:期末試験

<成績評価方法>
中間試験25％、期末試験25％、小テスト等50％によって評価します。

<教科書・参考文献>
ジョシユア・コーエン他、*Spotlight on America and Japan*（南雲堂）

<受講に当たっての留意事項>
授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので欠席には十分注意して下さい。

<学習到達目標>
英語の基礎力、読解力向上を目指し、多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	1 年	体力診断と運動処方 2	1	後	藤瀬武彦（システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

日本は近い将来に約3人に1人が高齢者という極端な少子高齢社会を迎え（現在は約4人に1人）、医療費や介護費が高騰して国民の負担が非常に重くなることが予想される（医療費は年間約37兆円でその半分近くが高齢者分）。従って、各人が健康体力づくりに関する知識や意識をもつことが必要であり、またその実践が重要であることは言うまでもない。この授業では、生涯にわたって健康体力を保持増進させるために、日常生活に適度な運動を積極的に取り入れる能力の養成を目的とする。後期は主に「屋内スポーツ種目」のルールや基本的技術などを理解してゲームを実践するとともににより運動不足の解消や基礎体力の向上を目指すものである。

<各回毎の授業内容>

実施可能な種目:バレーボール、バスケットボール、フットサル、バドミントン、卓球、フィットネス・トレーニング（受講生の希望により1または2種目を決定する）

1. ガイダンス①……………授業について、施設紹介とトレーニング機器の扱い方、希望種目の提出

2. ガイダンス②……………フリーウエイトの扱い方、種目決め

3. 基本練習（球技）……………チーム分け、体育ルールの説明、チーム練習・練習試合など

4～8. スポーツ①～⑤……………ゲーム①～⑤（チームや個人の成績を記録する）

9. フィットネス……………エアロビック・ウエイトトレーニング

10～14. スポーツ⑥～⑩……………ゲーム⑥～⑩（チームや個人の成績を記録する:種目変更可能）

15. スポーツ⑪……………決勝トーナメント（種目数・チーム数により変更あり）

<成績評価方法>

この授業では、出席して積極的に運動を実践することが重視される。従って、評価（100点満点）については欠席1回につき10点減点とし、遅刻（授業開始30分まで）・見学・早退は計3回で1回欠席分の減点とする。また、規則やマナーの違反、あるいは教員の指示に従わなかったときには減点することがある。なお、出欠の確認は口頭で行うので、静粛にして教員によく聞こえるように元気よく返事すること（仮に出席していても返事が聞こえなかった場合は遅刻・欠席扱いになることがある）。

<受講に当たっての留意事項>

運動着と運動靴（下履き・上履き）が必要であり、上履きの紐は情報文化学科が赤色、情報システム学科が青色のものを着用すること。なお、体育館の更衣室は盗難が起りやすいので、貴重品の管理はコインロッカーを使用するなどして自己責任においてしっかり行うこと。

<学習到達目標>

競技や楽しみのための「スポーツ」と健康体力づくりのための「フィットネス」の内容を理解し、それぞれの運動を実践することによって運動不足を解消し、また基礎体力を保持増進させる。

2 年基礎科目（後期）

新潟研究（自然と文化）
民法
財政学
ジャーナリズム論
心理と行動
英語 4
キャリア開発 1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	新潟研究（自然と文化）	2	後	澤口晋一（自然編） 池田哲夫（文化編）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

君は「灯台下暗し」ではありませんか？中学・高校で新潟のことを学ぶ機会がないのも悪いが、ともかく、君たちは新潟のことを何も知らなさすぎます。新潟に生まれたなら、新潟に暮らすなら、まずは君たちが生まれ育ち、暮らしていく「新潟の文化」とそれを育んだ「新潟の自然」のことをよく知り、理解することに努めるべきだと考えます。新潟県以外の出身者ならこの機会に新潟のことを知り、考えるきっかけとしてください。このことが、君たちが今後、世界に飛躍するにせよ、新潟で頑張るにせよ、第一に必要なことだと私は思います。郷里を知らずして国際化、情報化と言うなかれ！

<各回毎の授業内容>

● 前半（池田先生）

1. 車田植：佐渡に田を丸く植える習俗があります。これに関わる年中行事とその意義を考えます。

2. 盆と祖霊：日本人の祖霊観と盆の行事について、越後の盆行事を事例に海との関わりから考えます。

3. 新潟の舟：越後の舟作りには丸木舟の伝統がありました。本海沿岸地域の造船技術からその意義を考えます。

4. 新潟平野の稲作：今は美田の新潟平野もかつては潟や湿地帯が広がっていました。舟などを使った低湿地特有の稲作を考えます。

5. 佐渡イカ漁：佐渡から発達したイカ釣り技術は、日本海沿岸から韓国まで伝えられました。技術の移動とは何かを考えます。

6. 祭りを考える：祭りのもつ意義とその本質を忌みと宮籠もりから考えます。

7. ムラの境の藁人形：東蒲原では春の行事として、ムラの境に藁で作った大きな人形が飾られます。この人形のもつ意義を考えます。

● 後半（澤口）

1. 新潟の自然概観

1) 地形と地質

2) 気候と植生（新潟の冬と夏、新潟の局地風、新潟は北国か？植生からみた新潟）

2. 特徴的な自然

1) 新潟山間部の多雪景観

2) 新潟の活断層と変動地形

3. 新潟平野の開発と災害

1) 新潟地震における被災地の地盤特性

2) 新潟市における市街地化と水害

3) 海岸侵食と地盤沈下

<成績評価方法>

レポート（池田先生50点、澤口50点の総合点で評価）

<教科書・参考文献>

テキストは使用しません。講義時に資料を配布します。参考文献は講義時に紹介します。

<受講に当たっての留意事項>

授業中は私語・飲食（持ち込み）、ゲームは厳禁！

携帯電話については、毎回授業の最初に電源を（みなさんが）切ったことを確認してから始めます。

<学習到達目標>

自分の生まれ育ったところがどういうところなのかを認識することは、あらゆることに先立つ基本だと思います。郷土の自然と文化を人に説明できるぐらいまでのレベルに到達すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	民法	2	後	里見佳香
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

私たちは普段何気なく水道やガスを使用し、電車やバスに乗り、店で買い物をします。また私たちは生きていく中で、結婚・離婚・子の出生や相続といった、様々な人生の節目を迎えることがあります。さらに、人生は色々、時には交通事故などのトラブルに巻き込まれたりすることだってあります。実は、これらの事々はすべて法で説明することができ、トラブルについては法で解決を図ることができます。その根拠となるべきおおとの法が民法です。民法は「私法の一般法」といわれ、市民生活全般の原則として機能しています。民法を知ることは生活を知ることでもあるのです。私たちが日々権利と義務の主体として生きていることを実感できる、「生きた法」である民法について、事例や判例をあげながら具体的に解説します。

＜各回毎の授業内容＞

第1回 法とはなにか

第2回 親族Ⅰ（婚姻）

第3回 親族Ⅱ（離婚）

第4回 親族Ⅲ（実親子関係）

第5回 親族Ⅳ（養親子関係）

第6回 相続Ⅰ（遺言）

第7回 相続Ⅱ（法定相続）

第8回 物権

第9回 債権Ⅰ（契約の性質と種類）

第10回 債権Ⅱ（保証）

第11回 債権Ⅲ（不法行為）

第12回 総則Ⅰ（人の能力）

第13回 総則Ⅱ（後見制度）

第14回 総則Ⅲ（法律行為・瑕疵ある意思表示）

第15回 総則Ⅳ（代理・時効）

＜成績評価方法＞

期末試験の成績により評価します。加点材料として講義中に小テストを行います。

＜教科書・参考文献＞

なし。必要な資料は講義中に配布します。参考文献は講義中に適宜指示します。

＜受講に当たっての留意事項＞

特にありませんが、積極的な受講態度を期待します。

＜学習到達目標＞

民法の基本的な理解を得、法的思考ができるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	財政学	2	後	齋藤忠雄
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

財政とは、国家その他の公共団体が財貨と労働力を獲得し、管理・使用する過程をいう。換言すれば、財政は国家その他の公権力団体の経済であり、政治と民間経済社会との接点に位置する。それは政治行政の貨幣的・物質的基礎をなすが、国や自治体によって異なるのみならず、歴史とともに変化をとげてきた。財政学は、この財政の必然的根拠を解明し、その社会経済的意義を客観的に評定することを課題としている。さて、「大きな政府」「行政国家」「福祉国家」という用語に象徴されるように、現代社会では市場経済に対する国家の積極的な介入が顕著である。しかしながら、その反面で高福祉高負担財政に対する批判もいちじるしい。とりわけ20世紀から21世紀への移行期においてそうであって、財政には新しい課題を投げかけられている。いま、20世紀型財政が揺らぎ始めているといっていよいであろう。本講義の基本的な目的は、日本財政の現状分析をつうじて、現代経済社会の理解を深めてゆくことにある。そのさい、時間の許す限り、他の先進諸国と地方自治体の個性にも留意して講義をおこなう。

<各回毎の授業内容>

1. 財政と財政学	社会科学、家計・企業・政府、財政学の課題・対象・分析視角
2. 現代財政の特色(1)	高価な政府・公租公課、企業・金融・債務・資産国家
3. 現代財政の特色(2)	国民経済計算、一般政府（中央政府・地方政府・社会保障基金）
4. 予算	予算原則、予算編成、財政計画、予算の帰着分析、会計検査
5. 経費(1)	経費膨張の法則、ポーピッツの法則、転位効果、集中過程
6. 経費(2)	経費の生産性、乗数効果、費用便益分析、国際財政経費（ODA等）
7. 租税(1)	租税根拠論、租税原則、租税体系、所得概念、所得課税
8. 租税(2)	消費課税、資産課税、租税の転嫁と帰着、環境税、国際租税制度
9. 社会保険料	社会保障制度、雇用・医療・年金・介護保険、受益と負担
10. 公債	公債原則、公債負担論、公債管理、夕張市とギリシアの財政破綻
11. 財政投融资	公的企業、政策金融、財政投融资計画の成立・展開、財投改革
12. 国と地方の財政関係	行政事務と財源の分担、地方財政調整制度、地方自治・地方分権
13. 福祉国家財政の展開(1)	英の自由主義財政、重工業、独の社会政策、ベヴァリッジ報告
14. 福祉国家財政の展開(2)	冷戦、高福祉高負担、構造的財政赤字、自己責任・ワークフェア
15. ポスト福祉国家	グローバル化、経済格差、米英瑞の財政改革、日本の公債問題
16. 期末試験	

<成績評価方法>

財政学に関する理解度を期末試験（100%）で評価する。

<教科書・参考文献>

特定のテキストは使用せず、詳しいレジュメと図表を配布する。この方式は、受講生にとって、パワーポイント等より便利ははずである。なお、主な参考文献・資料は、別途紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

政治経済社会に関する一般的知識および財政に対する高い関心を持っていることが望ましい。

<学習到達目標>

- ・財政（学）の理解を深めることができる。
- ・社会問題に対する関心を高め、多様な視角から「現代社会の史的構造」を解明する能力を培う。
- ・私たちがどんな社会に生きているか、その多様な視角を国家・民間経済関係に即して考察する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	ジャーナリズム論	2	後	永田幸男
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

健全で自由な市民社会を維持するために「表現の自由」と、国民の「知る権利」に応えるジャーナリズムの果たす役割が重要であることを理解する。新聞、テレビなどマスメディアの誕生と発展の時代背景、メディアと社会の関係を把握する。ジャーナリズムの基本理念と原則、メディアが抱える諸問題を理解して、メディア・リテラシーを身につける。

<各回毎の授業内容>

- 1) 表現の自由と知る権利
- 2) 技術革新からみたメディア史
- 3) 新聞の機能と特性
- 4) ニュースの価値判断
- 5) ジャーナリズムの原則
- 6) ジャーナリズム史 ① 新聞は何を伝えてきたか
- 7) ジャーナリズム史 ② テレビは何を映してきたか
- 8) 報道と人権
- 9) 戦争報道と情報操作
- 10) 地域ジャーナリズム／質問と回答 ①
- 11) デジタル革命とネットワーク社会
- 12) マスメディアと世論
- 13) メディア・リテラシー
- 14) 情報社会を生きる／質問と回答 ②
- 15) 取材と編集
- 16) 期末試験

<成績評価方法>

- ・毎回コメントカードを提出してもらい、出欠に代える。
- ・期末試験は800字程度の記述試験とする。配布した講義メモ、講義資料および自筆ノートの持ち込みを認める。点数の配分は期末試験70％、出席状況30％とする。

<教科書・参考文献>

- ・特定の教科書は使わない。毎回講義メモを配布する。必要に応じて新聞、映像、写真を活用する。
- ・参考図書は随時紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

- ・最も大事な教科書は日々の新聞とTVニュース。ニュースに関心を持ち、新聞を読むことが望ましい。
- ・授業日程、内容の一部を変更することがある。
- ・コメントカードの質問に答える機会をできるだけ設ける。

<学習到達目標>

- ・メディアとジャーナリズムに関する基礎知識を習得し、ニュース報道の多様性と有益情報を読み取る重要性を知る。習得した知識を基に根拠のある意見を述べるができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	心理と行動	2	後	伊村知子（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

ここへの関心や期待が高まる一方で、心理学に対する偏ったイメージが広まりつつある。この講義では、心理学の全体像について概説するとともに、「人間の行動や心のはたらきの一般法則」について学ぶ。また、講義中に与える課題に取り組みながら、「心とは何か」、「心を生み出す身体のおくみとはどんなものか」、「人間の心のはたらきにはどんな特徴があるのか」といった問題について考える。

<各回毎の授業内容>

1. 心理学とは

2. 心と行動

3. 心の発達

4. 学習

5. 記憶

6. 視覚 1

7. 視覚 2

8. 聴覚・触覚

9. 思考

10. 言語

11. 動機づけ・情動

12. 知能と性格の個人差

13. 社会行動

14. 心理学の歴史

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に実施する課題（30%）と定期試験（70%）により、総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

特に教科書や参考文献は指定せず、必要な資料は授業中に配布する。

<学習到達目標>

・心理学に関する基礎的な知識を身につけること。

・日常の行動を心理学の視点から分析すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 4 A（表現英語 2） X、Z 1、Z 3	1	後	ステファン デュルカ ランス レイサム グレゴリー ディック
21年度以前						

<授業目的>
授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話力は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習して下さい。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。

<各回毎の授業内容>
第1週:Chapter 8 Adverbs
第2週:つづき
第3週:つづき
第4週:Chapter 9 Past Continuous Tense
第5週:つづき
第6週:つづき
第7週:Chapter 10 Could Be Able to Have Got to Too + Adjectives
第8週:中間試験
第9週:Chapter 10 つづき
第10週:つづき
第11週:Chapter 11 Past Tense Review
第12週:つづき
第13週:つづき
第14週:Chapter 12 Future Continuous Tense
第15週:つづき
第16週:期末試験

<成績評価方法>
中間試験25%、期末試験25%、小テスト・授業参加度50%によって評価する。Xクラスでは中間試験20%、期末試験20%、TOEIC 英語10%、補習用リーディング10%、小テスト等40%によって評価します

<教科書・参考文献>
Steven J. Molinsky & Bill Bliss, *Side by Side Level 2 Student Book B with Workbook* (Pearson Kiriara)
Makoto Shishido, Bruce Allen, *Reading Expert 2* (成美堂)
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST* (金星堂) (TOEIC 英語用:Xクラスのみ使用) (奇数章)
渡辺節子他, *A World of Change on the Web* (南雲堂) (リーディング補習用:Xクラスのみ使用)

<受講に当たっての留意事項>
授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業には積極的に参加することが望まれます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>
中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。
(関連する学習・教育到達目標:B)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 4 B（TOEIC英語 2） Y、Z 2、Z 4	1	後	福田一雄 土橋善仁 高橋正平
21年度以前						

＜授業目的＞

現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各章で取り上げる英文も230～280語程度で読みやすく、単語力の強化と英文を読む力を養成します。

＜各回毎の授業内容＞

第1週:Lesson 1 Men Are From Mars, Women Are From Venus
第2週:Lesson 3 Product Placement
第3週:Lesson 5 Letter from an Iranian Girl
第4週:Lesson 7 The Placebo Effect
第5週:Lesson 9 The Amazon
第6週:Lesson 11 ID theft
第7週:Lesson 13 Venice, Italy
第8週:中間試験
第9週:Lesson 15 Beauty in the Media
第10週:Lesson 17 Sweatshops
第11週:Lesson 19 German Education
第12週:Lesson 21 Women in New Zealand
第13週:Lesson 23 The Pygmalion Effect
第14週:プリント使用
第15週:プリント使用
第16週:期末試験

＜成績評価方法＞

中間試験25％、期末試験25％、小テスト等50％によって評価します。Yクラスでは中間試験20％、期末試験20％、TOEIC 英語10％、補習用リーディング10％、小テスト等40％によって評価します

＜教科書・参考文献＞

Steven J. Molinsky & Bill Bliss, *Side by Side* Level 2 Student Book B with Workbook (Pearson Kiriara)
Makoto Shishido, Bruce Allen, *Reading Expert 2*（成美堂）
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）（TOEIC 英語用：Yクラスのみ使用）（奇数章）
渡辺節子他、*A World of Change on the Web*（南雲堂）（リーディング補習用：Yクラスのみ使用）

＜受講に当たっての留意事項＞

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

＜学習到達目標＞

英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいきます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 4 A (表現英語 2) X、Z 1、Z 3	1	後	ジョセフ フィコー ランス レイサム ダーリーン ヤマウチ
21年度以前						

＜授業目的＞

授業では英語コミュニケーション能力の向上を目指します。日常生活で使われる基本的な実用英語を習得します。英語を話すには間違いを恐れてはいけません。間違いの多い人ほど会話は向上します。恐れずに積極的に授業に参加することを希望します。基本文型を繰り返し、練習して下さい。テキストには実践的な会話パターンと練習問題がついています。

＜授業内容＞

第1週:1 Would you like chicken or fish ?
第2週:つづき
第3週:2 Can I have your passport, please ?
第4週:つづき
第5週:3 My mother has her own business.
第6週:つづき
第7週:4 Can I check my email ?
第8週:中間試験
第9週:4 つづき
第10週:5 Are you ready to order ?
第11週:つづき
第12週:6 Where's the station ?
第13週:つづき
第14週:7 Can I use my card in this ATM ?
第15週:つづき
第16週:期末試験

＜成績評価方法＞

中間試験25%、期末試験25%、小テスト・授業参加度50%によって評価する。Xクラスでは中間試験20%、期末試験20%、TOEIC 英語10%、補習用リーディング10%、小テスト等40%によって評価します

＜教科書・参考書＞

Angela Buckingham & Lewis Lansford, SECOND EDITION *PASSPORT 1* (Oxford)
穴戸真 & Bruce Allen, *Resding Expert 2* (成美堂) (偶数章)
ホートン広瀬恵美子他, *Cross Over the TOEIC Bridge TEST* (金星堂) (TOEIC 英語用: Xクラスのみ使用) (偶数章)
渡辺節子他, *A World of Change on the Web* (南雲堂) (リーディング補習用: Xクラスのみ使用) (偶数章)

＜受講に当たっての留意事項＞

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業には積極的に参加することが望めます。欠席5回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

＜学習到達目標＞

中学、高校まで学んだ英語を基にしながら、実際に使うことの出来る英語を学びます。

(関連する学習・教育到達目標: B)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 4 B（TOEIC英語 2） Y、Z 2、Z 4	1	後	大岩彩子 茅野潤一郎 高橋正平
21年度以前						

<授業目的>

現代社会の様々な話題を英語で読み、基礎的な英語読解力の向上を目指します。各ユニットで取り上げる英文も 260語程度で読みやすく、単語力の強化とリーディングの基礎を身につけます。

<各回毎の授業内容>

第 1 週:Lesson 2 Chocolate
第 2 週:Lesson 4 Fart Tax
第 3 週:Lesson 6 Blogs
第 4 週:Lesson 8 Sedna
第 5 週:Lesson 10 Space Junk
第 6 週:Lesson 12 Euthanasia
第 7 週:Lesson 14 Honorifics
第 8 週:中間試験
第 9 週:Lesson 16 Salzburg, Austria
第 10週:Lesson 18 Aroma Oils
第 11週:Lesson 20 Peter Jackson
第 12週:Lesson 22 Wine in France
第 13週:Lesson 24 Multinational Business
第 14週:プリント使用
第 15週:プリント使用
第 16週:期末試験

<成績評価方法>

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト等 50 %によって評価します。Y クラスでは中間試験 20 %、期末試験 20 %、TOEIC 英語 10 %、補習用リーディング 10 %、小テスト等 40 %によって評価する

<教科書・参考文献>

Angela Buckingham & Lewis Lansford, SECOND EDITION *PASSPORT 1*（Oxford）
Makoto Shishido, Bruce Allen, *Reading Expert 2*（成美堂）
ホートン広瀬恵美子他、*Cross Over the TOEIC Bridge TEST*（金星堂）（TOEIC 英語用:Y クラスのみ使用）
渡辺節子他, *A World of Change on the Web*（南雲堂）（リーディング補習用:Y クラスのみ使用）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。注意をしてもうるさい学生は退室してもらうことがあります。授業は演習形式で行いますので聴講学生には十分な予習が必要です。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

英語の読解力向上を目指す授業なのでできるだけ多くの英語を読んでいます。辞書の助けを借りながら英語を読める基礎力を養うことを本授業の到達目標とします。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	基 礎	2 年	英語 4 C（読む英語 2） X、Y、Z 1、Z 2、Z 3、Z 4	1	後	秋 孝道・辻 照彦 大竹芳夫・市橋孝道 高橋正平・本間多香子
21年度以前						

<授業目的>

授業では英文法について学習します。中学、高校6年間文法を学んできているはずの皆さんは案外文法をわかっていません。文法がわからないと英語の読み、書き、話すことはできません。以上の理由からこの授業では基本的な英文法の習得を目指し、前期に引き続き英文法について学んでいきます。

<各回毎の授業内容>

第1週:15 不定詞
第2週:16 動名詞
第3週:17 接続詞
第4週:18 受動態
第5週:19 語形
第6週:20 形容詞節
第7週:つづき
第8週:中間試験
第9週:21 副詞節
第10週:つづき
第11週:22 条件説
第12週:つづき 11
第13週:23 名詞節
第14週:つづき
第15週:24 現在完了形
第16週:期末試験

<成績評価方法>

中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト等 50 %によって評価します。

<教科書・参考文献>

アンドルー E. ベネット、『大学英語『グラマー・プラス』』（南雲堂）

<受講に当たっての留意事項>

授業中の私語は言うまでもなく厳禁です。授業では学ぶ項目が多いので、集中して授業を受けて下さい。随時小テストを行いますので、普段の勉強が必要です。欠席 5 回以上で試験資格を失うので十分注意して下さい。

<学習到達目標>

中学、高校まで学んだ英文法を再学習することにより、英文法の基礎的知識の向上を目指します。

（関連する学習・教育到達目標：B）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	2 年	キャリア開発 1	1	後	就職指導委員長 他
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

- ・自己理解の視点および社会の採用ニーズなどについての知識を蓄えながら、自らの主体的なキャリアを意識した学生生活の充実を目的とする。学生生活の中でどんな力や可能性を育み、それが卒業後にどのように影響していくのかについて、積極的に探索し、将来につなげる。
- ・就職環境の厳しさに翻弄されるあまり、「就職活動での内定」にのみ目を向けることは、就職活動の失敗や入社後の早期離職にもつながる。「将来の基盤となる学生生活」という位置づけで、今を充実させるための方法や目標をつかむ。

<各回毎の授業内容>

講師:外部からの招聘および本学教員

9 / 26	第 1 回	大学生から社会人へ～学生生活からつながる卒業後の進路～	斎藤 幸江
10/ 3	第 2 回	キャリアデザインの視点～充実した学生生活を送り、強みや可能性を磨く～	斎藤 幸江
10/17	第 3 回	自分らしさを今、そして将来に活かす～自己分析の視点～	斎藤 幸江
10/24	第 4 回	就職適性検査	ベネッセコーポレーション
10/31	第 5 回	人材としての価値～新卒採用のニーズと自己分析	斎藤 幸江
11/ 7	第 6 回	今日から始める自己分析	マイナビ
11/14	第 7 回	新卒採用選考の実際～就職活動・採用選考の基礎知識～	斎藤 幸江
11/21	第 8 回	4 年生に聞く、就職活動の実際～<ゲスト 4 年生>	斎藤 幸江
11/28	第 9 回	文章能力基礎	新潟日報社
12/ 5	第10回	体験から学ぶコミュニケーション～グループワーク～	斎藤 幸江
12/12	第11回	文章能力実践	新潟日報社
12/19	第12回	社会人に学ぶ、進路選択そして仕事、職場～<ゲスト 卒業生>	斎藤 幸江
1 / 9	第13回	特別講義	加藤 雅一
1 /16	第14回	インターンシップ・学外実習経験者 パネルディスカッション	就職指導委員会
1 /23	第15回	これからの学生生活、そして卒業後に向けて～まとめ～	斎藤 幸江

<成績評価方法>

各回の演習点・レポート点（70％）、最終レポート点（30％）の合計で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書は特に定めない。

<受講に当たっての留意事項>

前向きになれる将来の構築には、今を主体的に過ごすことが鍵となる。そのため、小レポート、ゲストスピーカーへの質問、最終課題など、積極的に取り組んでいただきたい。

<学習到達目標>

- ・「キャリア」は、過去から今、そして未来へと続いていくという認識のもとで、過去や学生生活の経験を将来に活かす意識を持つことができる。
- ・さまざまな事例や他の学生の考えや意識に触れ、相違や共通性を確認しながら、「自分らしさ」を意識し、「強み」を伸ばすための目標や行動につなげることができる。

3 年基礎科目（後期）

市民社会論
新潟研究（政治と経済）
福祉社会論
地域経営論

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	市民社会論	2	後	越智敏夫（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

私たちの社会の成立を「市民」という概念を中心に考える。近代市民革命を経た社会、あるいは民主主義的原理によって構成された社会は、それまでの人間が作ってきた社会とは大きく異なる。しかしその誕生は植民地形成と同時進行でもあった。その変動の現在形を<冷戦終焉><9・11><東日本大震災>など多くの状況との関連で議論したい。

<各回毎の授業内容>

1	はじめに	1-1	市民とは誰か	(講義1)
2	市民社会を準備するもの	2-1	絶対主義王政	(2)
		2-2	個人の誕生	(3)
		2-3	国民国家の思想	(4)
3	市民社会の成立	3-1	市民革命	(5)
		3-2	公共性	(6)
		3-3	民主主義	(7)
		3-4	権力の思想とニヒリズム	(8)
4	<9・11>と市民社会	4-1	冷戦の終焉:湾岸戦争と9・11	(9)
		4-2	グローバリゼーション	(10)
		4-3	<帝国>の思想とマルチチュード	(11)
5	現代日本と市民社会	5-1	戦後とは何か	(12)
		5-2	「日本人論」の罨	(13)
		5-3	東日本大震災	(14)
6	終わりに	6-1	市民としての私たち	(15)

<成績評価方法>

学期末筆記試験（持ち込み不可）のみで採点。

<教科書・参考文献>

教科書なし。参考文献は講義中に適宜指示する。また図書館のサイトの「指定図書リスト」を参照のこと。

<受講に当たっての留意事項>

本講義は3年配当の基礎科目である。本講義の受講によって、それまでの学習の思想的意義を再検討し、3年次以降の学習内容がどのように市民社会と思想的に関連しているのかを確認してもらいたい。

<学習到達目標>

自己の存在も含めて現代のさまざまな問題を思想的に考える「癖」のようなものを身につけてほしい。それは社会を構造として考えることでもあり、市民としての自覚をもつことでもある。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	新潟研究（政治と経済）	2	後	夏井陽三・今野洋史
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

日本の経済、政治はずっと低迷が続いていた。大災害も相次いだ。地方では人口減少と高齢化が急激に進行している。戦後の日本政治、現在の新潟の経済を概観しながら、新潟と日本の問題点、在るべき姿を探っていきたい。

政治の分野では、新潟県が生んだ政治家である田中角栄元首相の歩んだ道などを交えて、終戦から現在までの日本政治の軌跡を解説する

経済では、エネルギー基地としての歴史や豊かな産業資源を踏まえた地域経済の明日を考える。

<各回毎の授業内容>

1

ガイダンス 新聞作り、社説についてなど

2

敗戦から日本の独立、講和

3

自民党、社会党の55年体制確立

4

高度経済成長と田中首相誕生、そして退陣

5

ロッキード事件と田中支配

6

政界再編、連立の時代と田中型政治

7

※特別セミナー 就職試験の作文対策

8

政治分野試験

9

世界シェアを誇る本県中小企業

10

新潟経済の個性①＝エネルギーと機械

11

新潟経済の個性②＝資源を生かした化学、金属、食品

12

新潟経済の個性③＝コメ中心の農業

13

脱下請けへの挑戦

14

港湾空港＝立地を生かせるか

15

新エネルギー産地への道

16

経済分野試験

（政治、経済とも動きが激しい。状況次第で授業内容が大きく変更する場合もある。できるだけタイムリーなテーマを取り上げたいと思っている）

<成績評価方法>

政治、経済両分野終了時に試験を行う。論述式で1ないし2問出題する。文字数は最低でも1000字は求めたい。

<教科書・参考文献>

教科書は指定しない。授業時にレジュメ、資料を配付する。参考文献は必要に応じて紹介する

<学習到達目標>

日本と新潟県の政治・経済について現状を認識し、関心を高める。地方を活性化させるのは、そこに暮らす人々の問題意識と意欲である。受講者一人一人が、そうした認識を育て、物事を主体的に考える習慣を身に付ける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	福祉社会論	2	後	阿部春江
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

社会福祉とはわたしたちの生活問題を支援・解決し予防していくことである。最初に時代とともに変化してきた社会福祉政策の歴史や市場の論理とは異なる視点を持つ福祉思想について学ぶ。次に、社会福祉政策を立案する上で、実態を把握しニーズをつかむことの重要性について理解する。また、身近な生活問題に対して援助活動を実践していくための基本について学ぶ。講義に加えて、事例検討等をグループごとで行い、グループの考えを発表し考察を深める。

<各回毎の授業内容>

1 はじめに	
2 社会福祉の思想 1	社会福祉における自立の概念
3 社会福祉の思想 2	ノーマライゼーションとソーシャルインクルージョンの思想
4 社会福祉の課題	貧困・ケア・社会的排除の問題
5 福祉ニーズの把握	社会生活ニーズとサービスニーズ
6 サービスの利用	福祉サービスの利用主体と利用支援
7 福祉ボランティア	福祉ボランティアの歴史と特徴
8 相談援助の視点 1	生活モデルの視点とエンパワメント
9 相談援助の視点 2	コミュニケーションスキルと困難事例
10 社会福祉と生活問題 1	孤立化する若者
11 社会福祉と生活問題 2	若者の貧困
12 社会福祉と生活問題 3	若者の貧困
13 社会福祉と生活問題 4	認知症の理解
14 社会福祉と生活問題 5	認知症への対応
15 レポート発表と意見交換	
16 レポート発表と意見交換	

<成績評価方法>

レポート提出並びに発表50％、出席25％、授業態度25％で総合評価する。

<教科書・参考文献>

教科書 テキストは使用しない。講義時に資料を配布する。

参考文献 社会福祉士養成講座編集委員会編『新社会福祉士養成講座 現代社会と福祉』中央法規 2012, 社会福祉士養成講座編集委員会編『新社会福祉士養成講座 社会保障』中央法規 2012, 編『MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 現代社会と福祉』ミネルヴァ書房 2012, 福祉臨床シリーズ編集委員会編『社会福祉士シリーズ 現代社会と福祉』弘文堂 2013,『福祉＋α 格差社会』ミネルヴァ書房 2012

<受講に当たっての留意事項>

上記の内容はこのシラバス作成時点のものであり変更の可能性もある。第1回目に、講義内容・成績評価方法等詳細について説明する。

<学習到達目標>

時代や社会の動きとともに変化し発展してきた福祉理念・福祉政策・援助活動等について理解するとともに、生活問題や福祉の課題について考察する力を身につけることができるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	基 礎	3 年	地域経営論	2	後	平山征夫
22～24年						
21年度以前						

選択 20年度以前自由（卒業単位に含まない）

<授業目的>

地方自治制度をベースに地域は長年国を支えてきた。しかし現在地域は進みかけた地方分権が停滞しているだけではなく、地域には経済のグローバル化や国の財政難、国の支援システムの崩壊などに加え、少子高齢化の影響もあり、急速にその維持自体が問題となっています。こうした厳しい状況を打開するには、どうしたらよいか。地域の諸問題を地域が持つあらゆる力を結集し、これをマネジメントする「地域経営」の考え、手法を導入で、乗り切ることが求められています。このことは社会人として生きるすべての人々にとって、地域で生きる者の役割としての必修課題でもあります。この授業を通じてそのため地域人として必要な知識と実践力を身につけるようにしたいと思います。

<各回毎の授業内容>

1.

地域とは何か―地域が果たしてきた役割と新たな課題

2.

「新潟州」とは一地域分権を巡る様々な地域からの動きの意味と課題

3.

地域が抱える多くの課題とその背景―取り巻く客観情勢等の変化

4.

地方自治の現状―国と地方の権限と財源の関係、構造改革が果たさなかったもの

5.

〃 ―一国が地方を縛る仕組みとその問題点

6.

地方財政の現状と地方分権の推進の必要性―民主党の「地域主権改革」とは

7.

地域活性化の手段としての地域づくり―地域づくりの果たした意義と限界

8.

〃 ―実際事例の研究と演習

9.

〃 ―新たに必要な総合的「地域経営」の概念

10.

地域自立・維持のため必要な諸政策―地域農業と商業の再生策はあるか

11.

〃 ―地域活性化のための産業政策

12.

〃 ―地域の中小企業金融、地域の環境政策

13.

〃 ―地域における都市づくり

14.

〃 ―地域持続のための課題と対策としての総合経営

15.

地域は自立できるか―地方分権が必要な本当の意味と本源的所得

16.

まとめ 試験

<成績評価方法>

期末試験(理解度テストと小論文など)の結果で判定

<教科書・参考文献>

教科書は使用しません。参考書はその都度紹介します。授業は毎回、レジュメと参考資料を配布して行います。

<受講に当たっての留意事項>

本講座は大きな目的として地域問題を通じて、現状の政治・経済・社会を理解し、見る眼と考える力を養うことに置きます。そのため、毎回その時点で理解しておいたほうがよいと思われる政治経済問題等（例えば国債の格付け問題など）について、討議と解説を加えながら授業を進めますので、ニュース等に十分関心を持って臨んでください。また地域づくりの演習を行いますので、自分の住む地域についても考えておいてください。

<学習到達目標>

卒業後社会人として活動するのに最低必要な社会の仕組み等を理解し、地域人としても活躍出来るだけの知識を身につけるようにしたい。

共通科目



1 年共通科目（後期）

日本経済論
国際政治学
ワークショップ実践論2
経営と組織
社会情報システム
日本語3
日本語4
日本事情2

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本経済論	2	後	安藤 潤（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この授業の目的は、停滞する現代日本経済が抱える課題を、「経済のグローバル化」をキーワードに、主に家計（household）という観点から理解することである。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. 日本経済とグローバル市場経済①

3. 日本経済とグローバル市場経済②

4. 日本の経済格差①:所得格差

5. 日本の経済格差②:男女間経済格差

6. 日本の経済格差③:格差是正のための政府の役割

7. グローバル経済下における物価問題と家計経済

8. 「食」のグローバル化と家計経済

9. 経済のグローバル化と家庭外・家庭内労働

10. 日本の少子化現象と経済理論①:結婚の経済学

11. 日本の少子化現象と経済理論②:出生の経済学

12. 日本の少子化現象と経済理論③:政府の役割

13. 日本の少子高齢化と社会保障制度

14. 少子化時代における外国人労働者受入れ問題

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

コメントカード（不定期、20％）、試験（80％）

<教科書・参考文献>

長谷川博之編・馬場正弘・辻忠博・安藤潤『経済政策の理論と現実』学文社, 2,500円＋税.

<受講に当たっての留意事項>

教科書は必ず購入し、授業の際に必ず持ってくる。各回の授業のタイトルと教科書の章題は必ずしも一致していないが、授業内容は教科書に準じるので、必ず予習してから臨むこと。参考文献は高度に専門的な内容が含まれており、参考とするのはごく一部なので、購入は義務付けない。1・年後期配当科目ということを考慮し、できるだけ平易に講義し、ある程度は用語の説明を行うが、基本的には経済用語辞典や指定図書などを用いて自分で調べ、学ぶこと。どの授業でも同じだが、無遅刻・全出席が大原則である。スマートフォン、携帯電話の類は必ず電源を切っておくこと。コメントカードは感想文を書く場ではない。ましてや学籍番号と氏名だけを記入する出席カードでもない。成績評価に際し、20％を与えていることからわかるように答案の一部であるとの認識を持つこと。

<学習到達目標>

現代日本経済が抱える様々な格差問題を理解し、いずれ自分がそれを支える一員となる自覚を持ちつつ、「なぜ日本はこんな経済になったのか」を自分なりに考え、残りの学生生活を過ごすにあたり、もって臨むべき問題意識を1つでも多く持っているようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	国際政治学	2	後	小澤治子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この科目のねらいは、第1に、第二次世界大戦後における国際政治の決定要因の一つであった東西冷戦構造の形成と展開、さらには崩壊過程についての理解を深めることである。第2に、冷戦構造崩壊の結果生じた様々な問題を検討することによって、現代国際政治の基本的特色についての認識を養うことである。

<各回毎の授業内容>

1

現代の国際政治の特色

2

冷戦の始まり

3

ヨーロッパにおける冷戦構造の形成

4

アジアにおける冷戦構造の形成——朝鮮戦争を中心に

5

米ソ協調的競争体制の成立

6

多極化——社会主義圏における対立の構図（1）東ヨーロッパ

7

多極化——社会主義圏における対立の構図（2）中ソ対立

8

核軍備管理と緊張緩和

9

デタント（緊張緩和）の退潮

10

冷戦構造の崩壊と核軍縮問題

11

冷戦構造の崩壊とソ連・東欧関係

12

冷戦後の軍縮安全保障問題(1)

13

冷戦後の軍縮安全保障問題(2)

14

冷戦期国際政治の総括

15

21世紀の国際政治の展望

<成績評価方法>

学期末試験の結果を中心に成績評価を行うが、授業ごとに提出するコメントペーパーも参考にする。

<教科書・参考文献>

教科書は特に使用せず、最初の授業時に教科書に代わる資料集を配布する。また講義内容についてのプリントを毎回の授業時に配付する。参考文献は講義の中で随時紹介するが、特に次の二冊が有用である。

石井修『国際政治史としての20世紀』 有信堂 2000年。

細谷千博監修（滝田賢治・大芝亮編）『国際政治経済 グローバル・イシューの解説と資料』 有信堂 2008年。

<受講に当たっての留意事項>

授業の際は、遅刻と私語は厳禁です。その他最低限のモラルを守って下さい。

<学習到達目標>

冷戦構造の形成と展開、またその崩壊過程を学ぶことを通じて、今日の国際政治を考える視点を養う。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	ワークショップ実践論 2	2	後	佐々木寛・神長英輔
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

共通科目「国際交流インストラクター演習 1・2」が、ワークショップやファシリテーターといった新たな方法との「出会い」だったとすれば、本授業はその「応用」と「発展」を目指す。すなわち、「国際交流インストラクター演習 1・2」があくまでも教員からきっかけを与えられて取り組む授業なのに対し、本授業は学生自らが問題意識に沿って、それぞれのワークショップ内容を深めることを目標とする。問題のありかを自分たちで見つけ、その問題を解くための方法も自主的に探究するという新しい形式の授業である。講師の招聘に関しても、参加者の要望を反映させる。さらに本授業では、参加者ができるだけ多種多様のワークショップを経験することにより、ワークショップの広範囲な技術を獲得することを目指す。

<各回毎の授業内容> ※招聘講師については、都合により順序が変更になることもある。

1. イントロダクション―「国際交流インストラクター演習 1・2」、「ワークショップ実践論 1」との関連についてなど。

2. 課題設定とグループ分け

3. グループワーク①―課題分担とリサーチ

4. 招聘講師による実演①

5. グループワーク②―ふりかえりと実践

6. 招聘講師による実演②

7. グループワーク③―ふりかえりと実践

8. 招聘講師による実演③

9. グループワーク④―ふりかえりと実践

10. 招聘講師による実演④

11. グループワーク⑤―ふりかえりと実践

12. グループワーク⑥―プレゼンテーション準備

13. プレゼンテーション①

14. プレゼンテーション②

15. まとめ

<成績評価方法>

出席、授業における各グループのパフォーマンス、グループ内での各個人のパフォーマンス、期末レポートによって評価する。

<教科書・参考文献>

授業の際に配布する。

<受講に当たっての留意事項>

「国際交流インストラクター演習 1」もしくは「同演習 2」をすでに履修していることが望ましい。自分でテーマを見つけ、リサーチをして、講師の話を聞いて、それを自分たちのワークショップに生かす。そしてそこで学んだことをレポートにまとめる。積極的な学生の履修を期待する。

<学習到達目標>

本授業では、新たな知識の獲得や問題発見の技術を身につけるだけでなく、コミュニケーション能力及び実践的な学力の向上を目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	経営と組織	2	後	内田 亨（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択、情報システム学科必修

＜授業目的＞

本講義では、組織論についての基礎理論および現代企業の管理手法等を習得する。また、組織体（含非営利組織）は組織をどのようにマネジメントしているか、基本的なことを理解する。

＜各回毎の授業内容＞

第1回 インTRODクシヨン（ガイダンス、経営学とは）

第2回 第1部 組織論の枠組み I 組織とは

第3回 第1部 組織論の枠組み II 組織のダイナミックス

第4回 第1部 組織論の枠組み II 組織のダイナミックス（つづき）

第5回 第2部 個人レベル I モチベーション

第6回 第2部 個人レベル III ストレス

第7回 第3部 集団レベル I グループ・ダイナミックス

第8回 第3部 集団レベル II リーダーシップ

第9回 中間まとめと中間試験

第10回 第4部 組織レベル I 組織デザイン

第11回 第4部 組織レベル II 組織文化

第12回 第4部 組織レベル II 組織文化（つづき）

第13回 第5部 組織変革 I 危機管理

第14回 第5部 組織変革 II 人的資源管理

第15回 第5部 組織変革 III 変革の理論と実際

第16回 定期試験

＜成績評価方法＞

・中間試験（小論文）:30％、定期試験（小論文 B 4 両面、全て持込み不可）:50％、コメント票:20％で評価する。

＜教科書・参考文献＞

・教科書:(2010)『よくわかる組織論（やわらかアカデミズム・わかるシリーズ）』ミネルヴァ書房。
随時、教員が最新情報などの資料を紹介・配布する。

＜受講に当たっての留意事項＞

・受講生の授業の理解度については、中間試験およびコメント票によって確認する。なお、試験は、論述形式のため、普段から文章を書けるようにしておくこと。

＜学習到達目標＞

・組織論における基本的な知識（組織論の枠組み、個人・集団レベル、組織レベル、組織変革など）を理解する（中間試験:30％、定期試験:10％、コメント票20％）。

・組織論の理論やキーワードを使って、組織体のマネジメントについて、分析・考察ができるようになる
（中間試験:0％、定期試験:40％、コメント票0％）。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	社会情報システム	2	後	藤田晴啓（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科選択、情報システム学科必修

<授業目的>

本講義では、私たちが日常よく使う社会情報システムの仕組みを、関連する情報処理技術を解説しながら理解する。また、社会における役割を把握し、運用の一翼を担う法律制度も交えながら、私たちの生活にどのように関わっているのかを学習する。

<各回毎の授業内容>

1. 授業の目的、めざすところ、全15回の内容等ガイダンス、携帯電話の技術

2. ユビキタステクノロジーと可視化、環境負荷見積、RFID 電子タグ

3. データ駆動型低炭素社会システム、電子マネーとICカード

4. 電子マネーとICカード（続き）、ICカードの分類

5. 日常生活でのICカード利用、Felicaと電子マネー（課題レポート1）

6. Web 2.0の諸技術およびもたらされた社会変革

7. ホームビルオートメーション

8. カーインテリジェンス

9. 楽曲映像配信とIP電話

10. 空間情報技術、地理座標系と地図検索（レポート課題2）

11. GPS測位技術、ハイブリッド系測位

12. 乗換・ルート検索・ナビゲーションサービス

13. GoobleMaps, GoogleEarth, GLOBALBASE, 情報関連法律

14. 認証手段, 情報化社会, 社会情報システム（レポート課題3）

15. 講義のまとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験70％、レポート課題30％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書:ユビキタステクノロジーのすべて 徳田英幸・藤原洋 監修（予定:変更もあります）

<受講に当たっての留意事項>

私語厳禁、まわりに迷惑を与えるので、注意は1回まで（2回目で退席を勧告します）。

<学習到達目標>

・社会情報システムの仕組みを理解し、社会における役割等の知識を習得する（定期試験:25％）。

・政府・企業のデータ処理の構造および社会情報システムの社会における役割を説明できるようになる（定期試験:25％）。社会情報システムの問題点を学び、それらがデジタルデバイド等社会問題とどのように関連するのかを理解し説明できるようになる（定期試験:20％）。

・授業復習および自己学習により社会情報システムが社会インフラとして如何に重要かさらに理解を深める（レポート:30％）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本語 3	1	後	佐々木香織
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

日本語 1 に引き続き、より難易度の高い文章を読めるようにして、専門科目を学ぶ上で必要な文献を読み理解する力をつける。文献に限らず、映像メディアなども利用して総合的な情報リテラシーを高める。

＜各回毎の授業内容＞

（順序や内容は変更することもある。）

1

レベルチェックテスト

2

文学作品を読む 1

3

文学作品を読む 2

4

文学作品を読む 3

5

文学作品を読む 4

6

座談文を読む 1

7

座談文を読む 2

8

座談文を読む 3

9

専門書を読む 1

10

専門書を読む 2

11

専門書を読む 3

12

専門書を読む 4

13

映像資料の読解 1

14

映像資料の読解 2

15

映像資料の読解 3

16

レポート提出

＜成績評価方法＞

ほぼ毎回出る課題によって評価する。

また、事前の予習をどの程度まじめにやっているかで評価する。

＜教科書・参考文献＞

レベルチェックテストの結果を元に、受講者と相談して決める。

＜学習到達目標＞

様々な形式の文章に慣れる。総合的な読解力・情報リテラシーを高める。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本語 4	1	後	佐々木香織
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

日本語2に引き続き、日本語でレポートや論文が作成できるようにする。アカデミックな文章を書く技術を高めるほか、ディスカッションやプレゼンテーションの力を伸ばす。

<各回毎の授業内容>

1

レベルチェックテスト

2

日本語3で利用したテキストなどの要約、感想などを書く

3

書いた文章の間違いを直し、なぜ間違えたのか考える。

4

ハンドアウトの作成練習1

5

ハンドアウトの作成練習2

6

メールなどの通信文の練習1

7

メールなどの通信文の練習2

8

論文やレポートの形式を踏まえて書く練習をする。1

9

論文やレポートの形式を踏まえて書く練習をする。2

10

自分で課題を決め、論文形式で書く1

11

自分で課題を決め、論文形式で書く2

12

自分で課題を決め、論文形式で書く3

13

ディスカッションやディベートなどで自分の意見を言う練習1

14

ディスカッションやディベートなどで自分の意見を言う練習2

15

ディスカッションやディベートなどで自分の意見を言う練習3

16

レポート提出

<成績評価方法>

ほぼ毎回課題が出るので、それによって評価する。

主張するだけでなく、他者の意見をどのように取り入れ、議論にどのように貢献しようとしているかを評価します。

<教科書・参考文献>

レベルチェックテストの結果を元に、受講者と相談して決める。

<学習到達目標>

各種の文章の様式や形式を踏まえて書けるようにする。

建設的に議論できるようにする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	1 年	日本事情 2	2	後	廣川 智
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

本授業では、日本人にとっては当たり前の常識でありながら、外国籍者の多くが疑問を抱く、日本の社会・文化について理解することを目標とします。また、トピックに関する発表やグループディスカッション等を実施し、その活動を通じて日本語でのコミュニケーション能力の向上を目指します。

＜各回毎の授業内容＞

各回で2～3つのトピックを扱います。主なトピックは以下の通りです。

1

健康・身体1：長寿国日本 他

2

健康・身体2：アルコールと二日酔い 他

3

学生による発表とディスカッション①

4

性格1：本音と建前 他

5

性格2：すぐに謝る日本人 他

6

学生による発表とディスカッション②

7

世代1：結婚と女性の社会進出 他

8

世代2：少子化問題 他

9

学生による発表とディスカッション③

10

食1：すき焼き・寿司・天麩羅 他

11

食2：食事のマナー 他

12

学生による発表とディスカッション④

13

働く1：日本人の労働観 他

14

働く2：ニート問題 他

15

学生による発表とディスカッション⑤

16

筆記試験またはレポート

＜成績評価方法＞

定期試験<30 %>、発表<30 %>、その他課題<20 %>、出席<20 %>
「出席」には発言やグループ活動等への参加など、積極的な授業態度が求められます。
なお、発表を行わなかった学生は不合格となります。

＜教科書・参考文献＞

教科書は指定しません。各授業で資料を配布します。
参考文献については適宜紹介します。

＜学習到達目標＞

・日本の社会・文化に対する基礎的な知識が理解できる。

・日本の社会・文化について考えることを通して、自国の文化に対する考えを深めることができる。

・発表に用いる表現を身に付けることができる

・日本語でのコミュニケーション能力を向上させる。

2 年共通科目（後期）

国際経済学
企業と経済

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	国際経済学	2	後	安藤 潤（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

この科目の目的は、国際経済学の基礎理論と基軸通貨ドルを中心とした戦後の国際経済史を学び、現在世界経済を揺るがしている欧米経済の現状を認識し、その問題点と背景について理解を深めることである。

<各回毎の授業内容>

1. 第2次大戦後の国際貿易・金融システム①:ブレトンウッズ体制の誕生

2. 第2次大戦後の国際貿易・金融システム②:ブレトンウッズ体制の崩壊とスミソニアン協定

3. 第2次大戦後の国際貿易・金融システム③:1980年代の国際政策協調とその終焉

4. 第2次大戦後の国際貿易・金融システム④:G A T TとW T O

5. 現代の国際貿易①:日本の貿易、比較生産費説、

6. 現代の国際貿易②: H O定理、産業内貿易

7. 外国為替市場①:外国為替市場の仕組み、様々な外国為替相場制度

8. 外国為替市場②:外国為替相場決定理論

9. 国際収支表①:国際収支表の仕組み

10. 国際収支表②:経常収支決定理論

11. 国際収支表③:通貨危機

12. 地域経済統合①:地域経済統合のメリット、W T Oと地域経済統合、地域経済統合発展の5段階

13. 地域経済統合②: E Uの歴史

14. 地域経済統合③: F T AとE P A、F T Aの経済効果

15. 地域経済統合④: T P P

16. 定期試験

<成績評価方法>

コメントカード（不定期、20％）、定期試験（80％）

<教科書・参考文献>

特に指定しない。

<受講に当たっての留意事項>

「現代アメリカ論」を履修していることが望ましい。私語は厳禁。注意しても私語を続ける者は退室を願うことがある。体調不良などやむを得ない場合を除き大幅な遅刻・途中退出はしないこと。授業中は歩き回らないこと。携帯電話・PHSの類は必ず電源を切ること。飲食禁止。コピーを配布するが、欠席をした者は自己の責任でそろえること。板書したことだけでなく、重要と思われる点は各自ノートに書いておくこと。数式は極力避けるが、グラフは講義内容の理解を深めるために複雑でないものを用いる。全出席・無遅刻が大原則。

<学習到達目標>

この授業内容をベースとして、円高・円安、ドル不安、欧州経済危機といった新聞の国際経済欄や国際経済に関するニュースに関心を持ち、それらを理解し、また自らの考えを述べるができるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	2 年	企業と経済	2	後	内田 亨（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

本講義では、日本・世界経済、市場、環境問題等、経済状況や今日の問題と企業の関係性を習得する。また、資本主義経済社会において企業はどのような活動をしているか、基本的なことを理解する。

<各回毎の授業内容>

第1回 イントロダクション（ガイダンス、企業とは、企業経営のしくみ）

第2回 戦後の日本経済のあゆみと日本企業(1)

第3回 戦後の日本経済のあゆみと日本企業(2)

第4回 戦後の日本経済のあゆみと日本企業(3)

第5回 世界経済と日本企業(1)

第6回 世界経済と日本企業(2)

第7回 経営に携わるゲスト・スピーカーによる講義

第8回 環境問題と日本企業(1)

第9回 環境問題と日本企業(2)

第10回 グループワークによる演習(1)

第11回 グループワークによる演習(2)

第12回 資本市場とコーポレートガバナンス・CSR（企業の社会的責任）

第13回 インフォメーション・エコノミーからナレッジ・エコノミー

第14回 市場と日本企業・外国企業

第15回 まとめ

第16回 定期試験

*ゲスト・スピーカーの日程により授業内容の順番が前後する。

<成績評価方法>

・グループワークによる演習の成果物:30％、定期試験（小論文 B 4 両面、全て持込み不可）:50％、コメント票:20％で評価する。

<教科書・参考文献>

・教科書:使用しない。

・参考文献:伊藤元重（2004）『ビジネス・エコノミクス』。

<受講に当たっての留意事項>

・受講生の授業の理解度については、グループワークによる演習およびコメント票によって確認する。

・定期試験は、全て持ち込み不可の論述形式なので、普段から文章を書けるようにしておくこと。

<学習到達目標>

・企業と日本・世界経済、市場、環境問題等の関係性を理解し、基本的な知識を理解する（グループワーク0％、定期試験20％、コメント票20％）。

・基本的知識習得を前提にして、グループディスカッションによって、企業が直面する課題を発見し、解決策を考案できるようになる（グループワーク30％）。

・日本・世界経済、市場、環境問題等、経済状況や今日の問題と企業の関係性を分析・考察できるようになる（グループワーク0％、定期試験30％、コメント票0％）。

3 年共通科目（後期）

社会調査演習 1・2
情報処理演習 2
情報と法

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	社会調査演習 1、 2	各 1	後	松尾瑞穂
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
この演習では実習を通して、社会調査の技法を各自が習得することを目的としている。具体的には、本演習では次の3つのことを中心に行う。①社会調査に関する文献の講読と議論を通して、社会調査の手法について深く理解すること、②社会調査に必要なテクニック（地図や地形図の読み方、カメラやビデオ撮影の仕方、聞き取り調査の練習、テープ起こしなど）を実際に行いながら身につけること、③調査を行い、報告書をまとめること、である。なお、社会調査演習 1 と社会調査演習 2 は2コマ続きの授業であり、かならず同時に履修しなければならないので注意すること。

<各回毎の授業内容>
1. イントロダクションー社会調査と本演習の狙い
2. 社会調査に関する文献講読と発表（グループ1、グループ2）
3. 社会調査に関する文献講読と発表（グループ3、グループ4）
4. 地図と地形図の読み方
5. カメラ撮影、ビデオカメラ撮影の実習
6. 聞き取り調査の練習と発表
7. 調査テーマに関する文献講読と発表(1)
8. 調査テーマに関する文献講読と発表(2)
9. 調査テーマに関する文献講読と発表(3)
10. 調査の実施(1)
11. 調査の実施(2)
12. 調査報告(1)
13. 調査報告(2)
14. 調査報告(3)
15. まとめ
16. 試験（報告書まとめ）

<成績評価方法>
出席（30％）、授業貢献度（発表）(30％)、調査報告書（40％）によって評価する。グループワークであるため、授業の出席は特に重視する。なお、調査への参加は必須である。

<教科書・参考文献>
佐藤郁哉2008『質的データ分析法ー原理・方法・実践』、新曜社。
佐藤郁哉2001『フィールドワーク増補版』、新曜社。
西川麦子2010『フィールドワークの探求』ミネルヴァ書房。

<受講に当たっての留意事項>
演習形式のため、通常の講義とは全く異なりグループでの実習が多くなることを留意してほしい。また、調査は週末を使い2日間ほどの泊りがけで行う予定であるが、詳細は未定である（★前回は、新潟県粟島にて2泊3日の調査を行ったが、今回は合宿にしない場合もある。また、調査地は変更する予定である）。作業の必要性から、場合によっては履修人数の制限をする可能性があるため、履修希望者は必ず初日の授業に参加すること。調査に関するガイダンスも初日に行う。

<学習到達目標>
調査準備や聞き取り調査練習、グループワークを通して、社会調査に必要なスキルとコミュニケーション能力を習得できる。問題を設定して、自分で調査計画を立て調査を実施することができるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	情報処理演習 2（情報文化）	2	後	澤口晋一（情報文化） 山本瑞枝・佐藤徳子・ 谷賢太郎
22～24年						
21年度以前						

情報文化学科必修

<授業目的>

1 年次の情報処理演習 1 で身に付けた知識と技術を土台に、主に Word と Excel の運用能力の飛躍的向上を目指します。本演習の最終目標は Microsoft Office Specialist 試験の合格ですので、授業内容もそれに沿った内容で組み立てます。Microsoft Office Specialist (Word, Excel) は、本学で毎年実施する企業懇談会でのアンケート調査によって、在学中に学生に取得してもらいたい検定・資格で 4 年連続第一位となっています。就職活動を有利に展開する上でも必須資格となっています。昨年度 5 月から本学で受験できることになったこともあって、5 月～1 月までの期間に文化学科のみで Word 合格 25 人、Excel 合格 8 人、両科目合格 9 人と大きな成果を上げました。

<各回毎の授業内容>

1. Word2010 内容評価基準 1（前半全体ガイダンスを予定）

2. Word2010 内容評価基準 2,3

3. Word2010 内容評価基準 4,5

4. Word2010 内容評価基準 6,7

5. Word2010 模擬テスト

6. Word2010 模擬テスト

7. Word2010 予備

8. Excel 2010 内容評価基準 1,2

9. Excel 2010 内容評価基準 3,4

10. Excel 2010 内容評価基準 5

11. Excel 2010 内容評価基準 5

12. Excel 2010 内容評価基準 6,7

13. Excel 2010 内容評価基準 8

14. Excel 2010 模擬テスト

15. Excel 2010 模擬テスト

<成績評価方法>

出席と毎回の課題提出状況によって評価する。

<教科書・参考文献>

・よくわかるマスター Word 2010 対策テキスト&問題集 FOM 出版

・よくわかるマスター Excel 2010 対策テキスト&問題集 FOM 出版

<受講に当たっての留意事項>

・情報センターの利用規則を守ること

・クラスは基本的に 1 年次のクラス編成を踏襲しますが、希望により移動は可能です。

<学習到達目標>

Microsoft Office Specialist (Word, Excel) 試験の合格。試験は、中央キャンパスにて月 2 回の予定で実施します。検定料は 4,000 円です。また、Specialist の Word, Excel 両科目に合格すると資格取得奨学金Ⅱ種が授与されます（Word, Excel 以外の科目に関しては合格しても奨学金の対象となりませんので注意してください）。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	共 通	3 年	情報と法	2	後	浜田良樹
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

皆さんは、社会人として、インターネットを用いる際に当然に守らなければならないルールがあり、注意しなければならないということを知する必要があります。この講義では、法的な観点から、インターネットをめぐる問題点を講義します。ところで、法律の問題とは、いつも単一明快な答えが存在するというものではありません。状況によっては、同じ行為が合法にも、違法にもなり得るし、人によって判断が分かれることもあります。このような考え方を理解し、その上で情報技術に関する問題への臨み方を身につけます。

＜各回毎の授業内容＞

第1回 情報と社会生活と法～情報技術をめぐる法律問題とは具体的には何か

第2回 法律問題の考え方～著作権の基礎の基礎

第3回 情報と法と倫理～社会的評価未確定問題への対処

第4回 情報文化学部の技術者倫理～情報技術のプロとして、ビジネスや倫理との利益相反にどう対処するか

第5回 知的財産権法(1)～著作権概要

第6回 知的財産権法(2)～著作物の利用

第7回 知的財産権法(3)～著作権をめぐる訴訟

第8回 知的財産権法(4)～特許法、不正競争防止法

第9回 知的財産権法(5)～フェア・ユース（著作物を利用する場合のルール）

第10回 ソフトウェアづくりと法律～契約と知的財産権

第11回 情報の流通とプロバイダの責任～情報仲介者の責任、プロバイダ責任制限法

第12回 個人情報の有用性と保護～個人情報保護法と事業者の義務

第13回 ネットワーク犯罪と情報セキュリティ～不正アクセス、通信傍受、サイバー犯罪条約

第14回 情報・法・倫理・ビジネス・セキュリティ～総括講義

第15回 キャンパスライフとトラブルシューティング～具体的な演習を実施する

第16回 試験

＜成績評価方法＞

試験（80点）と授業に際して毎回配付するミニレポート（20点）による。

ミニレポートの点数が5点未満の場合は失格とする（第15回講義までに公示する）。

＜教科書・参考文献＞

オリジナルテキストを配布する。

＜受講に当たっての留意事項＞

2限ずつ、8回に分けての開講となる。開講日に注意すること。

＜学習到達目標＞

IT社会において新たに生じる社会問題の存在を認識し、萎縮することなく情報ネットワークを活用できること。

（関連する学習・教育到達目標：E）平成24年度生以前

專門科目



1 年文化専門科目（後期）

ロシア語 1
中国語 1
韓国語 1
アメリカ英語 1
ロシア史概説
中国史概説
韓国朝鮮史概説
アメリカ史概説

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	ロシア語 1	3	後	神長英輔
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
ロシア語の基礎の習得をめざします。今後のロシア語学習の土台をしっかりと築くことがこの授業の目的です。

<各回毎の授業内容>
各週の内容は以下の通りです（受講者の達成度に応じて多少前後する可能性があります）。

1. 文字と音声

2. 単語の発音

3. 基本3文型（テキスト第1課）

4. 疑問詞のない疑問文とその答え（同第2課）

5. 疑問詞（同第3課）

6. 人称代名詞（同第4課）

7. 名詞の性（同第5課）

8. 所有代名詞と指示代名詞（同第6課）

9. 動詞の現在人称変化(1)（同第7課）

10. 動詞の現在人称変化(2)（同第8課）

11. 無人称文(1)（同第9課）

12. 場所の表現(1)（同第10課）

13. 場所の表現(2)（同第11課）

14. 移動・動作の目標（同第12課）

15. 総復習（第1課から第12課まで）および総復習テスト

各課では文法の解説, 音読, グループワークを中心とした会話の練習をおこないます。読む力, 聞く力, 話す力, 書く力をバランスよく伸ばすことをめざします。

<成績評価方法>
出席回数（特に重視します）, 小テスト（筆記と暗唱）, 課題（書写）, 総復習テストをもとに総合的に判断します。

<教科書・参考文献>
教科書は佐藤純一『NHK新ロシア語入門』NHK出版（CD付き）です。また, 文字の練習用として『ロシア語習字ノート』（ナウカ出版）を購入してください。いずれも教科書販売所で購入し, 授業初回から持参してください。辞書については授業で案内します。

<受講に当たっての留意事項>
出席が極めて重要です。語学は積み重ねです。あとでまとめてやることは不可能です。徹底的に音読してください。読めば読むほど力がつきます。
毎回の着実な復習が大事です。授業に出るだけで勝手にできるようになることはありません。教科書添付のCDを活用し, 日常生活の中にロシア語を聞く時間と読む時間を確保してください。壊れるまでCDを聞いてください。
間違いを恥じてはいけません。楽しく取り組むのは大事ですが, 他の受講者の間違いを笑ってはいけません。わからないことはいつでも遠慮なく質問してください。
みなさんの積極的な取り組みを期待しています。

<学習到達目標>
文字を正しく発音すること, 文字を正しく書くこと, 基礎的な文法を理解すること, 基本的な単語をおぼえること, 簡単な文を聞いて理解できること, 自分の日常生活について簡単なロシア語で表現（話す・書く）できること, ロシア語学習が楽しいと思えるようになること, 以上が目標です。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	中国語 1 A ・ B		後	區 建英（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中国語は声調言語であり、その言葉の流れは歌のように聞こえます。この特徴が日本語にも英語にも見られません。発音の勉強は難しく感じられるかも知れないが、発音を正しく身につければ、中国語の会話は美学的センスを持ち、コミュニケーションの相手に素晴らしい感じを与えます。この授業は長年来の発音教育の経験を生かして、声調・単母音・複母音・子音などを正しくて美しく発音するよう、ネイティブに近いものになるよう、徹底的に指導します。同時に、最も基本的な文法と常用単語をしっかりと身につけるよう指導し、さらにその活用として、パートナー或いはグループでの作文練習や会話活動を行い、これによって初歩的な会話能力を身に付けさせます。

<各回毎の授業内容>

一、発音部分

中国語の基礎として発音と声調を重点に置き、同時に、中国語漢字と日本語漢字の書き方および意味の違いを区別するよう注意します。

1、中国語発音の概要と単母音

2、声調と複母音

3、子音

4、子音

5、鼻母音

6、軽声と各種の変調

7、発音の総合練習

二、会話入門

会話の様々な話題をめぐって大量に単語を活用することによって、友人交際、留学、ビジネスなど中国滞在時の初歩的な実用会話を身に付けさせ、その中で下記の文法ポイントを教えます。

8、場所代名詞、4種の疑問文

9、新属呼称、数字知識、「有」の構文(1)

10、時間詞、名詞述語文

11、量詞、連動文

12、語気助詞「了」(1)と動相助詞「了」(2)

13、選択疑問文

14、助動詞「想」と「会」

15、総合練習

16、定期試験

<成績評価方法>

定期試験は60％、授業での作文・会話の状況は30％、出席の状況は10％。

<教科書・参考文献>

教科書： 朱継征著『速問即答中国語・入門編』朝日出版社、補足教材

辞書： 辞書を授業で紹介

<受講に当たっての留意事項>

辞書を購入すること

予習・復習をすること、積極的に作文や会話に取り組むこと

<学習到達目標>

正しい発音を身に付け、基礎的な文法を理解し、常用単語をできるだけ多く覚え、各種の練習、とくに会話活動を通じて、単語と文法の活用と口頭作文の能力を身に付けることを目指します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	中国語 1 A		後	寺沢一俊
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

正しい中国語の基礎を身につける。

<各回毎の授業内容>

ピンイン符号（発音表記符号）の読み書きができるようになるための練習をする。さらに中国語の基本的な文型と文法事項について学ぶ。発音練習にはできるだけ多くの時間を充たしたい。1冊のテキストを複数の教員が共用するため、毎回の授業内容はシラバスと若干異なる場合がある。

1. 単母音・複合母音と四声
2. 子音一有気音と無気音
3. 子音ーそり舌音とその他の子音
4. 鼻音をともなう母音
5. 発音の総合練習(1)
6. 発音の総合練習(2)
7. 動詞述語文
8. 数字(1)
9. 数字(2)
10. 形容詞述語文(1)
11. 形容詞述語文(2)
12. 比較文 (1)
13. 比較文 (2)
14. 時間の表現
15. 名詞述語文
16. 期末試験

<成績評価方法>

出席と発音・声調の習熟度を重視する。出席が2／3以上の者に定期試験を受ける資格を与える。成績評価は小テスト20％、出席率20％、定期試験60％の結果を総合的に判断する。

<教科書・参考文献>

教科書：朱継征著「速問即答中国語 入門編」朝日出版 2700円＋税

参考文献：相原茂著「はじめての中国語」講談社現代新書0987 740円＋税

<受講に当たっての留意事項>

発音練習をする際には、大きな声で歌うように発声すること。テキストの単語や文は何回も朗読して暗誦できるまで練習すること。ピンイン符号は読み・書きが完璧にできるまで繰り返し練習すること。

<学習到達目標>

発音・声調の徹底した訓練から始め、ピンイン符号の「読み・書き」が正しくできるようにしたい。さらに学習した語彙と文型を使い、自分の日常生活について中国語で表現できるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	中国語 1 A ・ B		後	笠原ヒロ子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

中国語の発音を習得し、豊富な語彙と用例を学んで、基本文型を理解し、基礎的な会話能力と作文能力を身につける。

<各回毎の授業内容>

1

子音

2

子音

3

“e”音、変調

4

兒化音、音節の復習

5

発音の総合復習

6

動詞述語文、連用修飾語

7

諸否疑問文、推量疑問文、省略疑問文

8

指示代名詞、構造助詞“的”

9

形容詞述語文

10

“有”と“在”

11

アスペクト助詞“着”、禁止用法

12

方位詞

13

進行文

14

選択疑問文

15

助動詞

16

定期試験

<成績評価方法>

授業参加度、小テスト、定期試験を勘案して総合評価を行います。

<教科書・参考文献>

「速問即答中国語入門編」朱繼征著 朝日出版社

<学習到達目標>

中国語の基本的な話す、聞く、書く、読むの四つの力を身につける。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	中国語 1 B		後	寺沢一俊
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

正しい中国語の基礎を身につける。

<各回毎の授業内容>

ピンイン符号（発音表記符号）の読み書きができるようになるための練習をする。さらに中国語の基本的な文型と文法事項について学ぶ。発音練習にはできるだけ多くの時間を充たしたい。1冊のテキストを複数の教員が共用するため、毎回の授業内容はシラバスと若干異なる場合がある。

1. 単母音・複合母音と四声
2. 子音一有気音と無気音
3. 子音一そり舌音とその他の子音
4. 鼻音をともなう母音
5. 発音の総合練習(1)
6. 発音の総合練習(2)
7. 動詞述語文
8. 数字(1)
9. 数字(2)
10. 形容詞述語文(1)
11. 形容詞述語文(2)
12. 比較文 (1)
13. 比較文 (2)
14. 時間の表現
15. 名詞述語文
16. 期末試験

<成績評価方法>

出席と発音・声調の習熟度を重視する。出席が2／3以上の者に定期試験を受ける資格を与える。成績評価は小テスト20％、出席率20％、定期試験60％の結果を総合的に判断する。

<教科書・参考文献>

教科書：朱継征著「速問即答中国語 入門編」朝日出版 2700円＋税

参考文献：相原茂著「はじめての中国語」講談社現代新書0987 740円＋税

<受講に当たっての留意事項>

発音練習をする際には、大きな声で歌うように発声すること。テキストの単語や文は何回も朗読して暗誦できるまで練習すること。ピンイン符号は読み・書きが完璧にできるまで繰り返し練習すること。

<学習到達目標>

発音・声調の徹底した訓練から始め、ピンイン符号の「読み・書き」が正しくできるようにしたい。さらに学習した語彙と文型を使い、自分の日常生活について中国語で表現できるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	韓国語 1		後	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

韓国・朝鮮は日本に最も近い国である。言語も日本語とよく似た構造をもっており、日本人にはもっとも習得しやすい外国語といえる。この授業では、慶熙大学校のテキストを用いた2コマの授業を補強するために、日本で出版されたテキストを用いて、日本語を母語とする者の特性を生かした言語学習を目指す。

<各回毎の授業内容>

1. ガイダンス

2. 1 課 基本母音字母と合成母音字母(1)（その1）

3. 1 課 基本母音字母と合成母音字母(1)（その2）

4. 2 課 基本子音字母（その1）

5. 2 課 基本子音字母（その2）

6. 3 課 合成母音字母(2)（その1）

7. 3 課 合成母音字母(2)（その2）

8. 4 課 パッチム（終声）(その1)

9. 4 課 パッチム（終声）(その2)

10. 5 課 私は～です。（その1）

11. 5 課 私は～です。（その2）

12. 6 課 時間ありますか。（その1）

13. 6 課 時間ありますか。（その2）

14. 7 課 それは何ですか。（その1）

15. 7 課 それは何ですか。（その2）

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に期末試験の受験資格を与え、成績は期末試験の結果で評価する。なお、宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

金順玉・阪堂千津子『新・チャレンジ！韓国語』白水社、2009年、定価:2300円＋税

<受講に当たっての留意事項>

基礎から始める外国語なので、とくに初めて韓国語を学ぶ学生は学習項目を着実に習得してほしい。文字や発音の習得を確認するための小テスト、そして宿題を随時出したい。

<学習到達目標>

言葉に親しみつつ、話す、聞く、書く、読むという基礎的な言語能力の習得を目標とする。そして、習得した言語をもって、みずからのコミュニケーションに活用することを意識しながら学んでほしい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	韓国語 1		後	金 世朗・朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

韓国・朝鮮は日本に最も近い国である。言葉も日本語とよく似た構造をもっており、日本人には最も習得しやすい外国語といえる。この授業では、まず、表音文字としてのハングルの構成を正しく理解し、読み書きを十分に練習して単語・短文の自然な発音に慣れるようにする。さらに日本語と比較しながら韓国語の基本文法及び文型を学習する。

<各回毎の授業内容>

1. 예비편 母音字母と子音字母の書き方と発音(1)

2. 예비편 母音字母と子音字母の書き方と発音(2)

3. 예비편 바ッチムとしての子音字母の発音と音韻変化

4. 제 1 과 안녕하세요?

5. 제 2 과 여기가 학생 식당입니다.

6. 제 3 과 이것이 무엇입니까?

7. 제 4 과 집이 어디에 있습니까?

8. 제 5 과 종합 연습(1)

9. 제 5 과 종합 연습(2)

10. 제 6 과 내일 우리 집에 오세요.

11. 제 7 과 생일 축하해요!

12. 제 8 과 무슨 음식을 좋아하세요?

13. 제 9 과 대학교에서 한국어를 배웁니다.

14. 제 10과 종합 연습(1)

15. 제 10과 종합 연습 (2)

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果で評価。宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

『韓国語初級 I』(国際教育院韓国語教育部、慶熙大学校出版局)

<受講に当たっての留意事項>

基礎から始める外国語なので、欠席しないこと。毎回宿題が与えられ、随時小テストも行われる。しっかりついてきてください。

<学習到達目標>

ハングルの文字体系を理解し、初級レベルの読み書き・会話ができるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	アメリカ英語 1 A・B		後	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

＜授業目的＞

リスニング・発音の訓練に最適であるとともに、口語英語・イディオム表現の宝庫である英語のポップスを素材に英語を学習する。英語の音とことばに対する感覚をともに磨くことを目指す。テキストにそってリスニング・文法・リーディングの問題に取り組むとともに、それぞれの曲の歌詞に担当学生の訳を提供してもらう。学生が自分の好きな曲を選び、リスニングの穴埋め問題・訳詞の作成をしてもらうこともありうる。

＜各回毎の授業内容＞

1. イントロダクション
2. My Heart will Go On
3. Open Arms
4. Don't Look Back in Anger
5. A Whole New World
6. Livin' La Vida Loca
7. Kiss of Life
8. I Don't Wanna Miss a Thing
9. Everytime I Close My Eyes
10. Life
11. The Stranger
12. All I Want for Christmas is You
13. Hey Now (Girls Just Want to Have Fun)
14. 学生または教員作成による問題
15. まとめ

＜成績評価方法＞

平均的回数担当・発表することが必須。
学期末に試験および/あるいはレポートを課す。

＜教科書・参考文献＞

English with Hit Songs（成美堂）

＜受講に当たっての留意事項＞

全員が予習してきていることを前提に授業を進める。出席のための出席は意味がない。辞書は必ず持参のこと。

＜学習到達目標＞

総合的英語力の修得。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	アメリカ英語 1 A		後	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC (Test of English for International Communication) は、世界約90ヶ国で実施されているコミュニケーション英語能力を正確かつ総合的に評価する「世界共通のテスト」。ListeningやReadingという受動的な能力を客観的に測定することにより、英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価できるように設計。世界120ヶ国で年間約600万人、日本では年間227万人が受験（2011年度）。企業では新入社員の英語能力測定、海外出張や在住の基準等の要件になっている。

本講座では、語彙・熟語・文法などの重要事項を重点的、かつ効果的に学習する。中文・長文読解については内容把握を中心に速読の養成に力を注ぐ。また活きた英語（authentic English）に慣れるため、CALL (computer assisted language learning) 教室とオンライン学習を利用し、聴解力、文法、語彙力、読解力の総合的な英語力の向上を目指す。

<各回毎の授業内容>

第1回 Course orientation
第2回 Introductions to IP TOEIC
第3回 UNIT 1
第4回 UNIT 2
第5回 UNIT 3
第6回 UNIT 4
第7回 UNIT 5
第8回 UNIT 6
第9回 UNIT 7
第10回 UNIT 8
第11回 UNIT 9
第12回 UNIT 10
第13回 UNIT 11
第14回 UNIT 12
第15回 Final test
第16回 IP TOEIC

<成績評価方法>

1) attendance & participation 25 points/100
2) quizzes & report 25 points/100
3) mid-term & final test 50 points/100
※各種資格試験の結果も加味
※欠席が1 / 3を超えた場合には単位は与えられない

<教科書・参考文献>

テキストと参考文献については開講時に説明。
※適宜プリント教材を配布するので、ファイルブックを用意すること。

<受講に当たっての留意事項>

・毎週小テストと課題に追われるが、しっかり行えば、全員確実に自己目標のスコアに到達できる。

<学習到達目標>

・初回の授業と最後の授業でTOEIC模試を実施。各自、自己スコアを確認しながら授業を進める。
最終的には全員80点～100点UPに繋げる。
・毎回授業冒頭で小テストを行い、TOEIC スコアの向上を目指す。
・TOEIC 以外にも希望者は英検の2級・準1級の取得も目指す。二次面接対策は個別に実施。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	アメリカ英語 1 A・B		後	大岩彩子
22～24年						
21年度以前						

選択必須

<授業目的>

The aim of this course is to build confidence in speaking and listening to English. Students will be encouraged to communicate their own ideas while learning common phrases used in American English. Students will practiceactivities such as shadowing and overlapping. Class time will be also spent doing a lot of speaking and listening activities, and the students taking this course will be expected to fully participate in pair and group activities. Homework will be assigned each week, which involves discussion on Facebook.

<各回毎の授業内容>

Week 1 Introduction of the course, class survey

Week 2 Unit 1 Introductions

Week 3 Unit 2 Entertainment

Week 4 Unit 4 Families

Week 5 Unit 5 Personality

Week 6 Unit 7 Experiences

Week 7 Unit 8 Health

Week 8 Midterm examination

Week 9 Unit 9 Relationships

Week 10 Unit 11 Travel

Week 11 Unit 12 Lifestyle

Week 12 Unit 13 Culture

Week 13 Unit 14 Food

Week 14 Unit 15 Events

Week 15 Unit 16 Future

Week 16 Final examination

<成績評価方法>

Class participation 20%

Homework assignments 20%

Midtermexamination 30%

Final examination 30%

<教科書・参考文献>

Impact Conversation 1 by Sullivan K. &Beucken, T. (Pearson Longman)

<受講に当たっての留意事項>

Good participation is very important.

Good participation means you:

-speak English in class.

-ask questions.

-pay attention and focus on the class activities.

-do your homework.

Poor attendance will greatly affect your grade as you will miss your participation points and the information we covered in class.

<学習到達目標>

Build confidence in speaking and listening.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	アメリカ英語 1 B		後	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC (Test of English for International Communication) は、世界約90ヶ国で実施されているコミュニケーション英語能力を正確かつ総合的に評価する「世界共通のテスト」。ListeningやReadingという受動的な能力を客観的に測定することにより、英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価できるように設計。世界120ヶ国で年間約600万人、日本では年間227万人が受験（2011年度）。企業では新入社員の英語能力測定、海外出張や在住の基準等の要件になっている。

本講座では、語彙・熟語・文法などの重要事項を重点的、かつ効果的に学習する。中文・長文読解については内容把握を中心に速読の養成に力を注ぐ。また活きた英語（authentic English）に慣れるため、CALL (computer assisted language learning) 教室とオンライン学習を利用し、聴解力、文法、語彙力、読解力の総合的な英語力の向上を目指す。

<各回毎の授業内容>

第1回 Course orientation
第2回 Introductions to IP TOEIC
第3回 UNIT 1
第4回 UNIT 2
第5回 UNIT 3
第6回 UNIT 4
第7回 UNIT 5
第8回 UNIT 6
第9回 UNIT 7
第10回 UNIT 8
第11回 UNIT 9
第12回 UNIT 10
第13回 UNIT 11
第14回 UNIT 12
第15回 Final test
第16回 IP TOEIC

<成績評価方法>

1) attendance & participation

25 points/100

2) quizzes & report

25 points/100

3) mid-term & final test

50 points/100

※各種資格試験の結果も加味
※欠席が1 / 3を超えた場合には単位は与えられない

<教科書・参考文献>

テキストと参考文献については開講時に説明。
※適宜プリント教材を配布するので、ファイルブックを用意すること。

<受講に当たっての留意事項>

・毎週小テストと課題に追われるが、しっかり行えば、全員確実に自己目標のスコアに到達できる。

<学習到達目標>

・初回の授業と最後の授業でTOEIC模試を実施。各自、自己スコアを確認しながら授業を進める。
最終的には全員80点～100点UPに繋げる。
・毎回授業冒頭で小テストを行い、TOEIC スコアの向上を目指す。
・TOEIC以外にも希望者は英検の2級・準1級の取得も目指す。二次面接対策は個別に実施。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	ロシア史概説	2	後	A プラーソル（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

このコースの目的は、ロシア人の直接の先祖である東スラブ部族の結成時代から1917年の社会主義革命までのロシア史においてもっとも重要な出来事、社会の動きとその意義について考えながら、ロシア史の重要点を紹介することである。ロシア社会の歴史的発展に自分の名を残した皇帝や為政者や大将などの活躍について考察していきたいと思う。

<各回毎の授業内容>

1. キエフ・ロシア 800－1169年（その1）
2. キエフ・ロシア 800－1169年（その2）
3. 分裂時代 1169－1462年（その1）
4. 分裂時代 1169－1462年（その2）
5. モスクワ公国の創設者たち 1462－1613年
6. ロマーノフ朝の初期 1613－1677年
7. 危機 1677－1700年
8. ピョートル大帝の改革 1700－1725年
9. 宮廷革命 1725－1762年
10. エカテリーナ2世の治世 1762－1796年
11. アレクサンドル1世 1801－1825年
12. ニコライ1世 1825－1855年
13. アレクサンドル2世 1855－1881年
14. アレクサンドル3世 1881－1894年
15. ニコライ2世と革命運動 1894－1917年
16. 期末テスト

<成績評価方法>

学期末に筆記試験を行う。受験資格を獲得するために、総講義数の2/3出席が必要である。合格のために、講義の自筆ノートが必要である。

<教科書・参考文献>

毎回プリントを配布する。

使用テキスト:なし

参考書:ピエール・パスカール著 ロシア史 白水社

<受講に当たっての留意事項>

適当なテキストがないため毎回かなりの量の資料を配布する。欠席した者は自己責任で資料をそろえること。

<学習到達目標>

ロシア社会史の基礎知識を身につけ、異文化理解を深めること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	中国史概説	2	後	區 建英（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

かつて最も富裕な文化帝国と認知されていた中国は、なぜ近代で列強諸国に侵略される対象に転落し、また戦後で途上国となりましたか。その歴史的転換の過程に発生した多くの重大な事件は、現代中国を知るのに不可欠な知識です。というのは、今日の中国に見られる多くの現象はそうした過去の歴史にその要因が求められるからです。この講義は伝統中国から近代国家への転換、具体的にアヘン戦争から中華人民共和国成立までの過程、とくにその過程における日本と中国の関係を説明します。これによって、現代中国における対外関係のあり方、経済発展のあり方、多民族社会のあり方、および民主化の状態を理解するための基本知識と方法を提供します。

<各回毎の授業内容>

授業は下記のスケジュールで進めますが、授業の状況によって若干変更する場合があります。

- 1、中国の伝統思想と知性
- 2、伝統中国の複合政治構造と東アジア
- 3、チベットの由来と中国王朝
- 4、アヘン戦争と二つの国際秩序観
- 5、対外関係の変化と清末の外交
- 6、太平天国と洋務運動
- 7、琉球・朝鮮をめぐる日中関係
- 8、日清戦争と戊戌変法
- 9、義和団運動と辛亥革命
- 10、中華民国初期と日本の対華21カ条要求
- 11、新文化運動と「五四」運動
- 12、アジア主義に対する転換の努力
- 13、国民革命における国共（国民党と共産党）合作
- 14、抗日戦争における国共合作
- 15、国共内戦と中華人民共和国の誕生
- 16、定期試験

<成績評価方法>

定期試験は70％、毎回の授業に提出するコメント（感想、質問等）は20％、出席の状況は10％。

<教科書・参考文献>

教科書は、米原謙ら著『東アジアのナショナリズムと近代』大阪大学出版会。授業に配るレジュメ。

<受講に当たっての留意事項>

講義のメモを取りながらよく思考し、コメントを書くこと。教科書を読み、レジュメを復習する。

<学習到達目標>

伝統中国から近代国家への転換、主としてアヘン戦争から中華人民共和国成立までの過程を知り、とくに日中関係に重大な影響を与えた歴史的要素を把握すること。よって、現代中国を学ぶ予備知識が備わるよう期待します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	韓国朝鮮史概説	2	後	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この講義は「植民地主義克服のための朝鮮史」をテーマとして、朝鮮史を古代から現代まで通観する。具体的には、朝鮮におけるナショナリズムの起源と展開について考察をする。そして、これから生きるわたくしたちが現在も継続する「近代」、すなわち植民地主義を克服するための道筋について、展望を示したい。

<各回毎の授業内容>

1. 講義の概要、レポート作成および参考文献案内

2. 原始・古代…古朝鮮から統一新羅時代まで

3. 中世(1)…高麗王朝

4. 中世(2)…朝鮮王朝前期

5. 近世(2)…朝鮮王朝転換期における二つの戦乱

6. 近世(3)…朝鮮王朝後期

7. 近世から近代へ…資本主義世界経済と帝国主義、19世紀前半の朝鮮

8. 近代(1)…「開国」から日清戦争直前まで

9. 近代(2)…日清戦争、甲午農民戦争、甲午改革、閔妃暗殺について

10. 近代(3)…光武改革、日露戦争直前まで

11. 近代(4)…日露戦争、保護国期について

12. 近代(5)…韓国併合、「武断政治」期の朝鮮

13. 近代(6)…3・1運動、「文化政治」期の朝鮮

14. 近代(7)…戦時体制下の朝鮮

15. 現代の課題…解放から現在まで、まとめ

<成績評価方法>

レポートによって成績評価をする。

<教科書・参考文献>

教科書は使用しない。講義時にレジュメを配布する。

概説書として、以下の文献を紹介しておく。

武田幸男編『朝鮮史』山川出版社、2000年

田中俊明編『朝鮮の歴史 先史から現代』昭和堂、2008年

<受講に当たっての留意事項>

日本のアジア認識をテーマとする「アジアと日本」（朝鮮と日本編）を受講しておく、本講義の内容理解がより深まると思う。

<学習到達目標>

受講者が朝鮮史の概要を習得した上で、みずからの関心に即して文献を選択、分析し、一定の結論を示すことを目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	アメリカ史概説	2	後	越智敏夫（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

アメリカ合衆国の現在を作り上げてきた歴史的経緯を確認することによって、その国民形成のプロセスを理解する。多様な集団によって構成されているアメリカにおいて、一元的な政治統合を可能にしている条件について多角的に検討する。また、現在の社会的・経済的格差が生じた政治的・文化的背景、さらにその解決のための施策についても考察する。

<各回毎の授業内容>

1	はじめに		
2	北米植民地の形成	2-1 近代世界の成立	（講義1）
		2-2 西洋列強による侵略以前の北米大陸	（2）
		2-3 西洋列強の海外発展	
		2-4 コロンブス：発見か到達か	（3）
		2-5 イギリスによる北アメリカ植民	
		2-6 植民者像の転換	（4）
3	独立	3-1 独立戦争	
		3-2 独立宣言	（5）
		3-3 アメリカ合衆国憲法	（6）
4	移民国家の基本原則	4-1 市民から排除された人々	（7）
		4-2 アメリカ合衆国発展の特徴	
		4-3 市民となった人々	（8）
5	移民国家の拡大	5-1 領土の拡大	
		5-2 南北戦争	（9）
		5-3 ゴールドラッシュと移民規制法の発生	
		5-4 1924年移民法	（10）
6	移民国家の変質	6-1 大恐慌	（11）
		6-2 第二次世界大戦	
		6-3 戦後の冷戦構造	（12）
		6-4 キューバ危機とヴェトナム戦争	
7	多元的社会の統合	7-1 人種問題と公民権運動	（13）
		7-2 1965年移民法	（14）
		7-5 多文化主義	
8	まとめ		（15）

<成績評価方法>

学期末の筆記試験（持ち込み可）のみで採点。

<教科書・参考文献>

教科書なし。各回2～3枚のレジュメを本学教材ダウンロードページにアップするので、講義前に各自でダウンロードして教室に持参すること。参考文献は講義中に適宜指示する。また図書館のサイトの「指定図書リスト」を参照のこと。

<受講に当たっての留意事項>

アメリカ関連のもっとも基礎的な科目である。また近代ヨーロッパ史に関心をもっていることが望ましい。

<学習到達目標>

アメリカ社会の歴史的特質を総体的かつ相対的に理解する。

2 年文化専門科目（後期）

ロシア語 3
中国語 3
韓国語 3
アメリカ英語 3
ロシア文化論
中国文化論
韓国朝鮮文化論
アメリカ文化論
日本経済史
東南アジア文化論
現代ヨーロッパ論
Advanced CEP4

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	ロシア語 3	2	後	中谷昌弘
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

ロシア語 2 に引き続き同じテキストの 25～32 課をもって文法、語彙、会話法をマスターするように心がける。文法の練習などを教員が用意する。

<各回毎の授業内容>

1. Урок 25 Миша прочитал книгу. :動詞の体(1)

2. 同 本文と練習問題

3. Урок 26 Я прочитаю текст. :動詞の体(2)

4. 同 本文と練習問題

5. Урок 27 Я покупаю много книг. :動詞の体(3)

6. 同 本文と練習問題

7. Урок 28 Он учится русскому языку. :格支配

8. 同 本文と練習問題 および 中間試験

9. Урок 29 Мой отец был инженером. :述語の造格

10. 同 本文と練習問題

11. Урок 30 Мой отец был инженером. :名詞変化のまとめ(1)

12. 同 本文と練習問題

13. Урок 31 Мой отец был инженером. :名詞変化のまとめ(2)

14. 同 本文と練習問題

15. Урок 32 Ему шестьдесят два года. :代名詞変化のまとめ(1)

16. 同 本文と練習問題 および 期末試験

<成績評価方法>

出席率および中間・期末の両試験の結果によって成績を評価する。

<教科書・参考文献>

佐藤純一著『新ロシア語入門』、NHK 出版、2000 年。

<受講に当たっての留意事項>

欠席が三分の一を超えると受験資格がなくなる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国語 3		後	小林元裕
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

2 年前期までに学んだ中国語の基礎を徹底し、実用的なレベルにまで高める。

<各回毎の授業内容>

とくに読む練習を重視する。テキストの会話を暗記し、場面ごとの会話や必要単語を習得する。

1. はじめに

2. 打电话(1)

3. 打电话(2)

4. 介绍(1)

5. 介绍(2)

6. 换钱(1)

7. 换钱(2)

8. 生病(1)

9. 生病(2)

10. 中国語検定対策－過去問題の分析と問題練習(1)

11. 中国語検定対策－過去問題の分析と問題練習(2)

12. 网上聊天儿 1 (1)

13. 网上聊天儿 1 (2)

14. 买东西(1)

15. 买东西(2)

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に行う確認テスト及び定期試験によって評価する。授業に3分の2以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

楊凱榮・張麗群『表現する中国語Ⅱ』白帝社（2400円＋税）を予定しているが、変更する場合があるので、掲示等をよく確認すること。

<受講に当たっての留意事項>

中日辞典を必ず携帯すること。

<学習到達目標>

中国語のレベルを初級から中級に高め、実際に使える中国語の習得を目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国語 3		後	區 建英（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中国語 2 で身につけた語学力を踏まえて、いっそう単語の量を増やし、文法の知識を拡大し、中国語の会話能力を向上させると同時に、読解能力の訓練も行います。この授業は引き続き、文型の活用を中心にしてパートナー或いはグループでの作文練習や会話活動を行い、中国語によるコミュニケーションを実践します。また、中国語の新聞記事を選んで読解と問答を行い、あるいは中国の文学作品を演劇にすることによって、いっそう臨場感と実用性に富んだ言語学習を指導します。

<各回毎の授業内容>

国際交流・時事・文学作品をめぐって会話練習している中で、文法・文型を総合的に学びます。

1、動詞の諸形態(1)

2、動詞の諸形態(2)

3、形容詞の諸形態(1)

4、形容詞の諸形態(2)

5、副詞の諸形態(1)

6、副詞の諸形態(2)

7、助動詞の諸形態(1)

8、助動詞の諸形態(2)

9、前置詞の諸形態(1)

10、前置詞の諸形態(2)

11、文章構造分析方法(1)

12、文章構造分析方法(2)

13、文章における修飾形式(1)

14、文章における修飾形式(2)

15、文章における主従複文の諸関係

16、定期試験

<成績評価方法>

定期試験は60 %、授業での作文・会話の状況は30 %、出席の状況は10 %。

<教科書・参考文献>

教科書： 楊凱榮等著『表現する中国語Ⅱ』白帝社

そのほか： 必要に応じてコピー資料配布

<受講に当たっての留意事項>

授業の時、辞書を携帯すること。

会話能力の訓練はもちろん、中国語の新聞記事や文学作品にも積極的に挑戦すること。

<学習到達目標>

文法と文章構造の把握・語彙の活用という基礎をしっかりと身に付け、日中学生交流の会話、中国語の新聞記事・文学作品の理解を通じて、一定の中国語実用能力に到達することです。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	韓国語 3		後	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

韓国語 2 までの学習に引き続き、日本で出版されたテキストを用いて、日本語を母語とするものの特性を生かした言語学習を通して、初級段階前半の語学力をさらに高めることを目指す。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国語 2 の復習

2. 1 課 お名前はなんとおっしゃいますか？（その 1）

3. 1 課 お名前はなんとおっしゃいますか？（その 2）

4. 2 課 朝子といいますが、日本から来ました。（その 1）

5. 2 課 朝子といいますが、日本から来ました。（その 2）

6. 3 課 魚は焼かないで下さい。（その 1）

7. 3 課 魚は焼かないで下さい。（その 2）

8. 1～3 課の復習

9. 4 課 ファンの集いに行くことにしました。（その 1）

10. 4 課 ファンの集いに行くことにしました。（その 2）

11. 5 課 道を渡って左にずっと行ってください。（その 1）

12. 5 課 道を渡って左にずっと行ってください。（その 2）

13. 6 課 ファンの集いへ行ってみたんですけど…（その 1）

14. 6 課 ファンの集いへ行ってみたんですけど…（その 2）

15. 4～6 課の復習

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が 2 / 3 以上の者に期末試験の受験資格を与え、成績は期末試験の結果で評価する。なお、宿題、小テストなどを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

金順玉・阪堂千津子・崔栄美『ちょこっとチャレンジ！韓国語』白水社、2011年、定価：2400円＋税

<受講に当たっての留意事項>

前学期に引き続き、学習項目を着実に習得してほしい。宿題も随時出したい。

<学習到達目標>

1 年間学んだ韓国語をさらに楽しんでほしい。基礎的な語学能力をさらにステップアップさせつつ、より実践的に韓国語を活用できるようになることを目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	韓国語 3		後	金 世朗
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

韓国語 1・2 にひきつづき, 基本的な語彙や表現を着実に身につけていきます。教科書に基づき, 読む・書く・聞く・話す練習を繰り返し, 各課の最後は具体的な場面を設定し, 学生達にロールプレイ（役割演技）してもらってまとめます。

<各回毎の授業内容>

1. 제 1 과시험이있어서시간을낼수없어요.

2. 제 1 과시험이있어서시간을낼수없어요.

3. 제 1 과시험이있어서시간을낼수없어요.

4. 제 1 과시험이있어서시간을낼수없어요.

5. <復習>

6. 제 2 과구내식당으로갑시다.

7. 제 2 과구내식당으로갑시다.

8. 제 2 과구내식당으로갑시다.

9. 제 2 과구내식당으로갑시다.

10. <復習>

11. 제 3 과불고기도좀시킬까요?

12. 제 3 과불고기도좀시킬까요?

13. 제 3 과불고기도좀시킬까요?

14. 제 3 과불고기도좀시킬까요?

15. <復習>

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が2／3 以上の者に受験資格を与えます。小テストと課題20 %, 出席10 %, 定期試験70 %。

<教科書・参考文献>

『아름다운한국어1-3』(韓国語教育開発研究院, ソウル)

<受講に当たっての留意事項>

学生が中心になって行われる授業です。授業中は積極的な態度が求められます。

<学習到達目標>

韓国語でちょっとした意思伝達ができることを目標とします。また, 授業では韓国の社会や文化も紹介しますが, それを通して自分の国とは違うものについて考えるきっかけになればいいと思います。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 3 A		後	本間多香子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策のテキストを使って、実際の試験を受験する準備をするとともに、リスニングの訓練や基本的な文法・語法・語彙の定着を図る。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Unit 1

3. Unit 2

4. Unit 3

5. Unit 4

6. Practice Test

7. Unit 5

8. Unit 6

9. Unit 7

10. Unit 8

11. Unit 9

12. Unit 10

13. Unit 11

14. Unit 12

15. Unit 13

16. 試験

<成績評価方法>

定期試験60％ 小テスト、授業への取り組み度等40%

<教科書・参考文献>

石井隆之他著 Perfect Practice for the TOEIC Test（成美堂2200円）

必要に応じて、配布物で問題演習を行う。

<受講に当たっての留意事項>

遅刻2回で欠席1回。欠席が3分の1以上になると試験を受ける資格を失う。

予習として、教科書の問題を解いてくこと。

毎回辞書を必ず持参すること。

<学習到達目標>

基本的な文法を理解し、応用できるようになる。簡単な英語での会話を理解できるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 3 B		後	本間多香子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策のテキストを使って、実際の試験を受験する準備をするとともに、リスニングの訓練や基本的な文法・語法・語彙の定着を図る。

<各回毎の授業内容>

1. Introduction

2. Chapter 1

3. Chapter 2

4. Chapter 3

5. Chapter 4

6. Practice Test

7. Chapter 5

8. Chapter 6

9. Chapter 7

10. Chapter 8

11. Chapter 9

12. Chapter 10

13. Chapter 11

14. Chapter 12

15. Chapter 13

16. 試験

<成績評価方法>

定期試験60％ 小テスト、授業への取り組み度等40%

<教科書・参考文献>

石井隆之他著 Complete Tactics for the TOEIC Test（成美堂）

必要に応じて、配布物で問題演習を行う。

<受講に当たっての留意事項>

遅刻2回で欠席1回。欠席が3分の1以上になると試験を受ける資格を失う。

予習として、教科書の問題を解いてくることが。

毎回辞書を必ず持参すること。

<学習到達目標>

基本的な文法を理解し、応用できるようになる。簡単な英語での会話を理解できるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 3 C		後	本間伸輔
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

TOEIC対策用のテキストを用いて、リスニング演習、リーディング演習、文法・語彙の学習を行う。

<各回毎の授業内容>

1. オリエンテーション Unit 1 Warm-up, Part 1, 2

2. Unit 1 Part 3, 4, 5, 6, 7

3. Unit 2 Warm-up, Unit 1, 2, 3, 4, 5

4. Unit 2 Part 6, 7、Unit 3 Warm-up, Part 1, 2, 3

5. Unit 3 Part 4, 5, 6, 7、Unit 4 Warm-up, Part 1

6. Unit 4 Part 2, 3, 4, 5, 6

7. Unit 4 Part 7 Unit 5 Warm-up, Part 1, 2, 3, 4

8. Unit 5 Part 5, 6, 7 Unit 6 Warm-up, Part 1, 2

9. Unit 6 Part 3, 4, 5, 6, 7

10. Unit 7 Warm-up, Part 1, 2, 3, 4, 5

11. Unit 7 Part 6, 7 Unit 8 Warm-up, Part 1, 2, 3

12. Unit 8 Part 4, 5, 6, 7 Unit 9 Warm-up, Part 1

13. Unit 9 Part 2, 3, 4, 5, 6

14. Unit 9 Part 7, Unit 10 Warm-up, Part 1, 2, 3, 4

15. Unit 10 Part 5, 6, 7 Unit 11 Warm-up, Part 1, 2

16. 学期末試験

・進度によって変更があり得る。

・各Unit修了毎に、そのUnitの復習小テストを行う。

<成績評価方法>

学期末試験70%、復習小テスト30%の割合で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書 The Next Stage to the TOEIC Test Intermediate、Hisayo Herbert 他、金星堂

<受講に当たっての留意事項>

・毎回予習としてテキストの問題を解くこと。

・無断欠席5回で学期末試験の受験資格を失う。

<学習到達目標>

・一般的内容の英語を聞き理解できる。

・一般的内容の英語を読み理解できる。

・一般的内容の英語に頻出する語彙が身に付く。

・重要な文法事項を正確に理解できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 3 A ・ B		後	デロシェ ジェラルド
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

The objective of this course is to encourage the students to communicate freely and with confidence.

The course is designed to be a continuation of 2A class. With more emphasis on free communication.

The course is also designed in focusing on American English and culture.

<各回毎の授業内容>

1 . "BQ3" A grade 3 quiz game

2 . "Taboo Jr" An English activity that the students will acquire the ability to explain and describe things

3 . Listen In 1 "David Nunan" from chapter 6 plus reading comprehension and grammar exercise.

4 . puzzle (homework assignment)

5 . Movie -on American culture genre

6 . "Scattagories" #3,4,5 An English vocabulary activity.

7 . Listen In 1 "David Nunan" plus reading comprehension and an English grammar exercise.

8 . Puzzle (Homework assignment)

9 . "Outburst" # 2 An English activity game based on American culture.

10. "Dealer's Choice" a car selling,buying, bargaining activity. (2lessons)

12. Listen In 1 "David Nunan" plus reading cmprehension and grammar exercise

13. "Counterfeits" An excecise that enables the students to explain the differences in their pictures.

14. Review

15. Final test Based on Listen In 1 and reading comprehension and grammar exercise.-

<成績評価方法>

Final test 40% Homework assignment 20% Class participation 40%

<教科書・参考文献>

Prints will be supplied

<受講に当たっての留意事項>

The students who participate and attend the lecture will be very successful in passing the class.

<学習到達目標>

I hope the lecture will encourage the students confidence and joy of trying to speak English. I would like to see the class tension free and get the students to participate as much as they can.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ英語 3 C		後	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

In this course we will learn about the United States as well as other parts of the English-speaking world. We will cover a variety of themes and topics (many chosen by the students) through selected readings and movies. Students are expected to prepare in advance for each class by reading materials, making summaries, recording vocabulary, considering discussion questions, and conduct their own research.

<各回毎の授業内容>

・ Tentative schedule will be given on the first day of classes, but subject to change according to the needs and abilities of the students.

第1回 Course introduction, rules of the course, and introduction to computer skills & computer room etiquette

第2回 UNIT 1

第3回 UNIT 2

第4回 UNIT 3

第5回 UNIT 4

第6回 UNIT 5

第7回 UNIT 6

第8回 Presentations

第9回 Presentations

第10回 UNIT 7

第11回 UNIT 8

第12回 UNIT 9

第13回 UNIT 10

第14回 Review for final test

第15回 Final test

<成績評価方法>

・ 40% Coursework (including quizzes, in-class preparations and presentations, homework, writing assignments, etc)

・ 30% Major Examinations

・ 30% Attendance and Participation

※ The 85% attendance policy will be strictly followed.

<教科書・参考文献>

・ The textbook will be announced the first day of class. A dictionary is also required.

・ Teacher will give students work and information handouts which they must keep in a separate English folder.

<受講に当たっての留意事項>

・ There will be regular quizzes to ensure that they have learnt the vocabulary.

・ weekly homework (journal writing) will be given to help improve English writing skills and self-confidence.

<学習到達目標>

The purpose of this class is to give students the opportunity to improve and develop not only their oral/aural skills in communicating effectively in English, but also their intellectual ability.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	ロシア文化論	2	後	A プラーソル（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシアはヨーロッパではなく、東洋でもないとは、しばしば口にされる言葉であるが、この国を旅し、この国の文化の文化に親しんでみると、それが実に的を射た言葉と思わざるを得ない。明治以来、ロシア文学は日本で広く読まれてきたし、音楽やバレエ、絵画なども親近感をもって受け入れられてきた。このコースでは、文学をはじめ、あらゆる角度からロシア文化の分子を紹介したいと思う。

<各回毎の授業内容>

1. 日本とロシア伝統文化タイプの共通点・相違点について（その1）

2. 日本とロシア伝統文化タイプの共通点・相違点について（その2）

3. 現代ロシアの市民生活(1)

4. 現代ロシアの市民生活(2)

5. ロシアの社会生活と文化（教材ビデオ1）

6. ロシアの社会生活と文化（教材ビデオ2）

7. 帝政ロシア-ソ連-現代ロシア 民族と宗教の多様性(1)

8. 帝政ロシア-ソ連-現代ロシア 民族と宗教の多様性(2)

9. ロシアの祭り その歴史・現状・社会的な意味（その1）

10. ロシアの祭り その歴史・現状・社会的な意味（その2）

11. 外国人の目で見たロシア-ミハルコフ監督の映画「シベリアの理髪師」(1)

12. 外国人の目で見たロシア-ミハルコフ監督の映画「シベリアの理髪師」(2)

13. ロシアの音楽文化

14. 音楽の都市サンクト・ペテルブルグ（教材ビデオ）

15. 演劇の歴史と現状

16. まとめ

<成績評価方法>

教材ビデオを利用するたびに小レポートを書いてもらう。学期末にコースの内容をまとめた最終的レポートを書いてもらう。出席率とレポート提出により成績評価をする。

<教科書・参考文献>

使用テキストなし、毎回プリントを配布する。

参考書

ロシア 原卓也監修、新潮社、1997.

ロシア 目で見る世界の国々 68 国土社 2004

ロシア その民族とこころ 川端香男里著 悠思社 1991

<受講に当たっての留意事項>

講義出席率は66％以上でなければならない。レポート総数の79％以上提出する必要がある。

講義を休んだ者は配布されたプリント・資料などを自己責任でそろえること。

<学習到達目標>

現代ロシア社会と文化の基礎知識を身につけ、異文化理解を深めること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	中国文化論	2	後	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

中国の首都北京は2008年のオリンピック開催によってその街並みを大きく近代化させた。また中国第二の都市上海は従来から持っていた都市の近代性を2010年の上海万博によってさらに拡大させた。世界第2位の経済大国となった中国は、目覚ましい経済発展を続けるなかで伝統的な文化をどう受け継ぎ、どう発展させていくのだろうか。中国文化の現在を様々な観点から考察する。

<各回毎の授業内容>

1. はじめに－中国とは何か、中国文化とは何か

2. 中国文化を考える4つの視点(1)－ 民族、東西南北の視点

3. 中国文化を考える4つの視点(2)－ 政治と経済、都市と農村の視点

4. 形成と発展(1)－ 多様な民族世界

5. 形成と発展(2)－ 孔子の思想と『論語』1

6. 形成と発展(3)－ 孔子の思想と『論語』2

7. 形成と発展(4)－ 漢字の発明と発展

8. 形成と発展(5)－ 始皇帝の中国統一

9. 形成と発展(6)－ 前近代の東アジア世界と冊封体制

10. 形成と発展(7)－ 「中華民族」の創出

11. 北京(1)－ 胡同と四合院

12. 北京(2)－ 京劇

13. 中国の伝統行事 – 春節

14. 中国の食文化

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

学期末の試験および授業中の課題（コメント・感想文）によって評価する。3分の2以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

その都度プリントを配布する。

参考文献:岸本美緒『中国社会の歴史的展開』放送大学教育振興会（2600円＋税）

竹内実『中国という世界』岩波新書（780円＋税）

<受講に当たっての留意事項>

必ず1週間の新聞報道（中国関係）に目を通したうえで授業に出席すること。

<学習到達目標>

中国文化の多様性に興味を持ち、文化に対する理解を深める。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	韓国朝鮮文化論	2	後	申 銀珠（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業は、韓国朝鮮の文化及び社会全般について基本的な理解を深めることを目的とする。衣食住などの生活文化、歴史、社会制度、文学、大衆文化などを幅広く取り上げ、多角的に検討する。さらにそれぞれの変貌及び日本との関連など、<比べる>ことを視野に入れて、学習者自らが<今><自分>の視点から韓国朝鮮人とその社会を理解するようにしたい。

<各回毎の授業内容>

1. 韓国・朝鮮文化の基礎知識
2. 風土と生活:衣・食・住の生活文化の日韓比較
3. 現在の韓国人の生活
3. 年中行事と通過儀礼:生活規範としての儒教、<昔>と<今>
4. 韓国の料理:宮中料理（『チャングムの誓い』）
5. 家族制度:戸主制廃止と新しい家族関係登録簿
6. 族譜と創氏改名:身分社会、その変貌（映画:『族譜』①）
7. 映画:『族譜』②
8. 伝統舞踊と仮面劇:韓国人の情緒、風刺と諧謔の精神『王の男』
9. パンソリの世界:映画『風の丘を越えて』
10. 韓国古典文学の理解:映画『春香伝』
11. 陶磁器にみる韓国人の美意識:洗練さと素朴さ（『高麗人のこころ—青磁』）
12. 日本人と朝鮮（柳宗悦と浅川巧）
13. 韓国の神話・民話・民画
14. 「民画」の世界
15. 韓国近現代文学の理解

<成績評価方法>

出席20％、レポート80％(感想文、小テスト、最終レポート)

<教科書・参考文献>

毎回プリントを配布する。ビデオ、写真集などを副教材として使う。

<受講に当たっての留意事項>

適当な教材がないため、毎回かなりの量のプリントを配布する。欠席した者は自己責任で資料をそろえること。

<学習到達目標>

日韓文化の「比較」を通して、韓国朝鮮文化を幅広く理解し異文化理解の大切さを知ること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	アメリカ文化論	2	後	G ハドリー (情報文化)
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

主として歴史の視点からアメリカ文化を再評価することを目的とした講義を行います。1 回又は2 回の講義ごとにトピックを決め、講義は英語で行います。アメリカ文化についてあまり予備知識のない人でも興味を持てるカラフルな授業になればと思います。機材と教室の都合がつく限り映像や音の資料も多用する予定です。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. A Consideration of American Culture 1（アメリカ文化とは何か1）

3. A Consideration of American Culture 2（アメリカ文化とは何か2）

4. Regions of the United States 1（アメリカの地方1）

5. Regions of the United States 2（アメリカの地方2）

6. Salad Bowl (人種のサラダボール)

7. The "Other America": Women (他民族のアメリカ1)

8. The "Other America": Minorities (他民族のアメリカ2)

9. America's Political System 1（アメリカの政治制度1）

10. America's Political System 2（アメリカの政治制度2）

11. America and the World 1（アメリカの外交問題1）

12. America and the World 2（アメリカの外交問題2）

13. American Economy 1（アメリカの経済と資本主義1）

14. American Economy 2（アメリカの経済と資本主義2）

15. まとめ

<成績評価方法>

主に学期末の試験またはレポートで評価する。

<教科書・参考文献>

授業中に指示する。

<受講に当たっての留意事項>

私語は厳重に慎んでほしい。出席のための出席は意味がない。自分が欠席した授業のなかで試験・レポートその他に関する指示が伝えられた場合、自分の責任で情報を収集すること。授業内容は一部変更もありうる。

<学習到達目標>

現代の「工事中」と言うアメリカ社会と諸文化の基本知識を身につけ、異文化理解を深めること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	日本経済史	2	後	藤井隆至
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

明治維新时期から高度成長期までを対象にするが、日本社会の市場経済化は江戸時代から本格的にはじまっているので、江戸時代の日本経済についても簡単に言及する。日本経済の展開過程を概観し、特徴と課題を時代ごとに整理する。

そのさい、日本史についての基礎知識はすでに有していると思うので、この授業では、日本経済のダイナミズムを理解するために、歴史の大きな流れを把握することを目的とする。

<各回毎の授業内容>

1. 江戸時代の日本経済(1)

2. 江戸時代の日本経済(2)

3. 明治維新时期の経済改革(1)

4. 明治維新时期の経済改革(2)

5. 殖産興業政策

6. 日清戦争期の日本経済

7. 日露戦争期の日本経済

8. 財閥と地主制

9. 日露戦争後の日本経済

10. 第一次大戦期の日本経済

11. 1920年代の日本経済

12. 1930年代の日本経済

13. 戦時経済

14. 戦後復興期の日本経済

15. 高度成長期の日本経済

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験70％、復習レポート30％で評価する。

<教科書・参考文献>

なし。

<受講に当たっての留意事項>

毎回授業の終わりに復習レポートを課す。

<学習到達目標>

日本経済の展開過程を大きく把握することができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	東南アジア文化論	2	後	木佐木哲朗
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

東南アジア地域の、自然・歴史・政治・経済・社会・宗教などと文化の関連を、諸側面から多面的に分析し、それら諸側面の関連性や地域の特性と問題点を探ります。東南アジア地域あるいは東南アジア世界とはどのような文化的特色をもつもののでしょうか。つまり、単なる地理的区分ではなくて、多様であるがある種の共通項ないし紐帯で結び付けられた、ひとつの個性的な「東南アジア」の文化論にせまりたいと思います。また、日本を含む「東アジア」との比較検討もおこないます。

<各回毎の授業内容>

1、グローバリズムと地域研究の意義

2、地理的かつ社会的空間としての東南アジア地域

3、自然環境と人々の原点

4、生業の変遷と稲作の重要性

5、稲作を媒介とした自然と人間の関係

6、多様な民族とその移動を主体とした歴史

7、固有文化と外来文化の重層性

8、歴史の非連続性と国家の意味

9、社会の双系制原理と間柄の論理

10、移動性と定着性・蓄積化と簡素化・畏怖神と守護神

11、社会変容と多様な価値体系

12、学校教育と世俗教育や宗教教育

13、近代の意味や統合のあり方

14、多民族国家のかかえる諸問題

15、まとめ

16、定期試験

<成績評価方法>

出席状況等（30％）と定期試験等（70％）

<教科書・参考文献>

教科書は指定せず、適宜プリントを配布したり参考図書を紹介します。

<受講に当たっての留意事項>

授業中私語等は厳禁です。

<学習到達目標>

他者を知り自己を認識して相互理解・交流の必要性に気付いてもらいたいと思います。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	現代ヨーロッパ論	2	後	白井陽一郎
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

第二次大戦後、ヨーロッパは恒久平和への誓いのもと、地域統合の理想へと歩みを進めていった。それはやがて、EU・欧州連合の誕生という高みに到達する。米ソ冷戦構造崩壊の轟音響き渡る、まさに歴史的転換のときであった。世界の政治と経済に与えたインパクトは計り知れない。ただし、EUという巨大で複雑な機構を創り進化させることだけが、ヨーロッパ統合の意味ではない。ヨーロッパ統合の過程では、ドイツとフランスの、西ヨーロッパと東ヨーロッパの、そしてバルカン半島の、和解へ向けた果てしのない努力が、曲がりなりにも積み上げられてきた。ヨーロッパ統合とはこの意味において、和解のプロジェクトなのだと理解することもできる。もちろん画に描いた餅、ただのキレイごと、非現実的な夢想といった部分、決して少なくない。そもそも統合を進めること自体、統合の根本目的を阻害してしまう皮肉な事態も生じてしまった。この講義では、こうしたヨーロッパ統合の理念と現実と迫っていく。

<各回毎の授業内容>

1：ヨーロッパの"現代"とは？"ヨーロッパ"とは？国際政治におけるその特徴は？

2：海外事情紹介とは異なる"論"であるために。メインテーマは統合、東欧革命がサブテーマ。

3：EU（欧州連合）のいま。基本目的と加盟国の構成。EU以前と以後の史的概観。

4：ヨーロッパ統合とは？統合の意味するところは？幻の憲法条約前文を読む。

5：ヨーロッパ統合とは？統合がもたらす約束の地。統合プロジェクトは社民主義か新自由主義か？

6：ヨーロッパ統合の出発点。ドイツ問題、ドイツ分割そして米ソ冷戦へ。

7：独仏和解。モネ方式による石炭鉄鋼共同体。防衛共同体の挫折。経済共同体と原子力共同体へ。

8：北大西洋条約機構（NATO）。アメリカの庇護による西欧統合。冷戦後の東欧諸国加盟と新戦略。

9：欧州審議会（CE）。欧州人権条約と人権裁判所。ヨーロッパ統合の価値規範、EU加盟の条件。

10：全欧安保協力機構（OSCE）。西独の東方外交からヘルシンキ・プロセスへ。冷戦終焉の前提。

11：ベルリンの壁崩壊、ドイツ統一へ。2 + 2方式。マルクの放棄と通貨統合。2度の通貨危機へ。

12：東欧革命へ。1989年のドラマ。革命の政治的意味（複数政党制）と経済的意味（自由市場経済）。

13：東西欧州の和解。EUの東方拡大、旧東欧諸国への支援、コペンハーゲン基準の設定。

14：アンチEU、市民の反乱。国民投票による拒否や憲法裁判所提訴。EUのデモクラシーという問題。

15：西バルカンの旧ユーゴ諸国の包摂。トルコのEU加盟。

16：定期試験

<成績評価方法>

定期試験による（100%）。

<教科書・参考文献>

教科書は指定しない。次の参考文献を推奨しておく。遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会）、同『複数のヨーロッパ』（北海道大学出版会）、森井裕一編『ヨーロッパの政治経済・入門』（有斐閣）、ヴィクター・セバスチェン『東欧革命1989—ソ連帝国の崩壊』（白水社）など。

<受講に当たっての留意事項>

参考文献を手に取り、関心の持てそうなところに目を通して見るように。ヨーロッパとくにEUに関するニュースは、毎日必ずチェックするように。

<学習到達目標>

ヨーロッパ統合について基本的なことがらに習熟して、新聞・雑誌の現代ヨーロッパ関連の記事を読んで理解できるようになること。また東アジアの現在と比較する視点を手に入れること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	AdovancedCEP4	2	後	G. Hadley M. Ruddick P. Dickinson
22～24年						
21年度以前						

<現在の教育目標>

CEP 1・2と同じように、A-CEPは英語を楽しく集中的に学習するプログラムです。A-CEPで積極的に取り組んだ学生は、そのほとんどが学年末には自信を持って英語を話すことができるようになっています。A-CEPでは、国際英語を教えます。英語を自分のことばにして、日本人としての学生の視点から話します。A-CEPでは、学生が英語を話したくなるような、楽しいクラスを目指します。

<教育内容>

CEP 1・2と同じように、A-CEPプレイスメント・テストの結果によって、レベル別クラスが編成されます。昔Aクラスが最も難しく、Fクラスが基礎レベルです。しかし、今学生が出席できないため、クラスは一つだけです。A-CEPはディスカッションと批判的思考法を教えるために現代の話題や議論を学生と一緒に調査します。文化学科のゼミのテーマが教材を作るために使われます。A-CEPには、スピーキング・リスニングの授業とリーディングの授業があります。リスニングとスピーキングのテストは3週間に1回あります。

<時間数>

週4回で45分

<学習成果>

A-CEPでの参加者の学習成果として英語力が向上しているの重要な点。しかしながら、また、学生たちが批判的な思考能力を教えられるだけでなく、学生たちが生涯学習（Lifelong Learning）に関与し始めます。

3 年文化専門科目（後期）

ロシア語 5
中国語 5
韓国語 5
アメリカ英語 5
地方自治論
東アジア関係論
現代イスラーム論
南北問題
国際協力論
国際経済法
NGO 論
環日本海交流論
地域統合論
外国語文献講読 2
国際研究特論

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 5 A		後	A プラーソル（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシア語 1・2・3・4 基礎文法の導入に引き続き、基本的な知識を整理し、発展させながらロシア語の運用能力を高めることを目的とする。特に語彙力、文法知識を体系的に整理することを目標とする。「話す」「聞き分ける」能力を身に付けるための訓練には十分な時間を割く。

<各回毎の授業内容>

1・2 講義のガイダンス、テキストの第37課

3・4 テキストの第39課

5・6 テキストの第40課

7・8 テキストの第41課

10・11 テキストの第42課

12・13 テキストの第43課

14・15 テキストの第44課

16 期末試験

<成績評価方法>

出席率と期末試験の結果によって成績を評価する。

<教科書・参考文献>

①佐藤純一、新ロシア語入門 NHK 出版 ②研究者露和辞典等 ③教員が用意したプリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

①毎回宿題あり ②欠席が3分の1を超えた場合は期末試験の受験を認めない。

<学習到達目標>

教科書の基本例文を完全に習得すること。テキストに説明されている高度な文法を習得し、文章の読解能力を身に付けることを目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 5 A ・ B		後	ライサ プラーソル
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

ロシア語 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 基礎文法の導入に引き続き、基本的な知識を整理し、発展させながらロシア語の運用能力を高めることを目的とする。文法知識を体系的に整理することを目標とし、特に「話す」「聞き分ける」能力を身に付けるための訓練には十分な時間を割く。テキストだけではなく、ロシア文化の基礎知識を養うために映画やビデオ教材を利用する。

<各回毎の授業内容>

1 ・ 2 講義のガイダンス、テキストの第39課

3 ・ 4 テキストの第40課

5 ・ 6 テキストの第41課

7 ・ 8 テキストの第42課

10 ・ 11 テキストの第43課

12 ・ 13 テキストの第44課

14 ・ 15 テキストの第45課

16 期末試験

<成績評価方法>

出席率と期末試験の結果によって成績を評価する。

<教科書・参考文献>

①佐藤純一、新ロシア語入門 NHK 出版 ②研究者露和辞典等 ③教員が用意したプリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

①毎回宿題あり ②欠席が3分の1を超えた場合は期末試験の受験を認めない。

<学習到達目標>

教科書の基本例文を完全に習得すること。テキストに説明されている高度な文法を習得し、文章の読解能力を身に付けることを目標とする。学習者が外国旅行等際に必要に応じて簡単な会話ができることも目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ロシア語 5 B		後	水上則子
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この授業は、ロシア語の文法や語彙の基本的な知識を整理し、発展させながら、ロシア語の運用能力を高めることを目的とする。特に、語彙力をつけ、文法知識を体系的に整理することを目標とする。これまでに身に付けている事柄を確認し、新しい知識を獲得するため、単語・熟語・文法事項の小テストなども適宜行う。

<各回毎の授業内容>

「NHK 新ロシア語入門」(佐藤純一著)に基づいて、文法事項の解説と練習、単語や語句の解説と練習を行う。第37課から第43課まで扱う。ただし、ロシア語 4 終了時点での到達度に応じて前後する場合がある。また、二回の授業につき一課の割合で進めることを予定しているが、受講者の到達度に合わせて調整する場合がある。

1 講義のガイダンス 第37課

2 第37課

3 第38課

4 第38課

5 第39課

6 第39課

7 第40課

8 第40課

9 第41課

10 第41課

11 第42課

12 第42課

13 第43課

14 第43課

15 まとめ

16 試験

<成績評価方法>

小テストの成績を40％、定期試験の成績を60％として評価する。小テスト実施時、遅刻や欠席のために受験しなかった場合は、その回は0点となるので留意すること。ただし、交通機関の障害などやむをえない理由による不在と認められる場合は、追試験などの措置をおこなう。

<教科書・参考文献>

「NHK 新ロシア語入門」(佐藤純一著) 研究社露和辞典他、必要に応じてプリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

欠席が3分の1をこえた場合は期末試験の受験を認めない。

<学習到達目標>

学んだ語彙・表現・構文を活用して、ある程度複雑な内容のロシア語の文章を作ることができる。未知の語彙と複雑な構文を含む一定の長さのロシア語の文章を読解できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 5 A		後	朱 継征
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

この授業は中国語の聴解力、会話力、読解力、作文力などの総合的運用能力を高め、中国語検定試験3級合格を目指します。

中国語と日本語の異同についての説明及び通訳、翻訳の訓練においても、日本語の使用を最小限にしますが、単語、本文と文法の説明及び討論会、発表会と授業での指示を基本的に中国語で行います。

<各回毎の授業内容>

1. "是～的"構文

2. 二重目的語

3. 存在文

4. 所在文

5. 連動文

6. 従属節

7. 連体修飾

8. 連用修飾

9. 将然相

10. 起動相

11. 進行相

12. 完了相

13. 残存相

14. 持続相

15. 総合練習（中国語検定試験、TECCとHSKについて）

<成績評価方法>

平常点と期末試験によって判定。平常点（小テスト、発表会、宿題）40％、期末試験60％。

5回以上無断欠席した者は失格。

<教科書・参考文献>

教科書:授業中に指示します。

参考書:『講談社 中日辞典』相原茂編集 2002年（第二版）

『講談社 日中辞典』相原茂編集 2006年（初版）

<受講に当たっての留意事項>

毎回必ず予習して出席すること。積極的に質問すること。大きな声で返事すること。宿題をちゃんとやること。

<学習到達目標>

中国語の総合的運用能力を高め、中国語検定試験4～3級合格、HSK（漢語水平考試）3～4級合格を目指します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 5 A		後	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

3 年前期までに学んだレベルをさらに深め、中級レベルの中国語を自由に駆使できるようにする。中国語の学習を通じて中国文化（中国人の考え方、習慣、生活）への理解を深める。

<各回毎の授業内容>

中国語 4 A で使用したテキスト（孟広学・本間史『変化する中国』）を引き続き使用する。

1. はじめに－「中国語 4 A」の復習

2. 考碗族(1)

3. 考碗族(2)

4. 保姆(1)

5. 保姆(2)

6. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習(1)

7. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習(2)

8. 民以食为天(1)

9. 民以食为天(2)

10. “80后”与“养儿防老”(1)

11. “80后”与“养儿防老”(2)

12. 养老危机(1)

13. 养老危机(2)

14. 公益活动在中国(1)

15. 公益活动在中国(2)

16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に行う小テスト及び定期試験によって評価する。3 分の 2 以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

孟広学・本間史『変化する中国』白水社（2100円＋税）

<受講に当たっての留意事項>

中日辞典を必ず携帯すること。

<学習到達目標>

上記授業目的の達成及び「読む」「聞く」「話す」のバランスのとれた語学力の習得を目指す。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 5 B		後	寺沢一俊
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

「聞く・話す・読む・書く」の能力をバランスよく伸ばすことを目的とする。話し言葉と書き言葉の違いについても学習する。さらに中国語の教材を通じて中国社会への理解をより深める。

<各回毎の授業内容>

1. 第一課 打保齡球(1)

2. 第一課 打保齡球(2)

3. 第一課 打保齡球(3)

4. 第二課 吃早点(1)

5. 第二課 吃早点(2)

6. 第二課 吃早点(3)

7. 第三課 买补品(1)

8. 第三課 买补品(2)

9. 第四課 打工(1)

10. 第四課 打工(2)

11. 第五課 参观工厂(1)

12. 第五課 参观工厂(2)

13. 第六課 电脑(1)

14. 第六課 电脑(2)

15. まとめ（第一課～第六課以外にテキスト付属の文法練習問題を学習する）

16. 期末試験

<成績評価方法>

出席および発音の正確さ、流暢さを重視する。出席が2／3以上の者に定期試験を受ける資格を与える。成績評価はレポート・小テスト20％、出席率20％、定期試験60％の結果を総合的に判断する。

<教科書・参考文献>

教科書:顧春芳・荊明月著「会話と文章で学ぶ中級中国語」白帝社 1800円＋税

参考文献:講義中に紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

必ず予習をすること。予習をする際には声を出して読むこと。講義中にテキスト本文の内容について中国語で質疑応答するので、学んだ中国語文は繰り返し朗読をして暗誦すること。

<学習到達目標>

会話表現だけでなく、書き言葉による表現についても理解を深める。また既習の文法事項を総復習して中国語各種検定試験にも対応できるようにしたい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	中国語 5 B		後	小林元裕（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

日常で実際によく使う中国語の言い回しを何度も練習することで中国語に対する苦手意識を克服する。また問題練習を通じて中国語検定3級の合格を目指す。

<各回毎の授業内容>

中国語4Bで使用したテキスト（崎原麗霞『ひとめぼれ中国語』）を引き続き使用する。

1. はじめに－「中国語4B」の復習

2. 网虫(1)

3. 网虫(2)

4. 老鼠和大米(1)

5. 老鼠和大米(2)

6. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習(1)

7. 中国語検定対策－過去問題の分析及び問題練習(2)

8. 天天向上(1)

9. 天天向上(2)

10. 一目了然(1)

11. 一目了然(2)

12. 時事中国語の読解(1)

13. 時事中国語の読解(2)

14. 時事中国語の読解(3)

15. まとめ

16. 試験

<成績評価方法>

授業中に行う確認テスト及び定期試験によって評価する。3分の2以上出席しないと定期試験が受けられないので注意すること。

<教科書・参考文献>

崎原麗霞『ひとめぼれ中国語』朝日出版社（2100円＋税）及びプリント

<受講に当たっての留意事項>

中日辞典を必ず携帯すること。

<学習到達目標>

中国語の学習を通して、単に語学だけでなく、言葉の背景にある中国文化に触れ、理解する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 5 A		後	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

前セメスターまでの学習を踏まえて、より実践的な演習を行う。南北朝鮮の新聞社説を教材として、その読解を正確に行うとともに、南北朝鮮に対する理解を深めることを目指す。日本語文献でも同様だが、韓国語文献を読む場合に、その文章の背景としての基礎知識がなければ理解できない。受講者がそのような当然のことを体得することも目指している。

<各回毎の授業内容>

1. ガイダンス

2. 演習(1)

3. 演習(2)

4. 演習(3)

5. 演習(4)

6. 演習(5)

7. 演習(6)

8. 演習(7)

9. 演習(8)

10. 演習(9)

11. 演習(10)

12. 演習(11)

13. 演習(12)

14. 演習(13)

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が2 / 3以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果を基本とし、授業態度、課題の提出状況などを加味する。

<教科書・参考文献>

労働新聞、ハンギョレ新聞などの社説

<受講に当たっての留意事項>

特別な事情がない限り、欠席しないこと。教材中に不明な語句、とくに時事用語などがある場合は必ず調べてから発表すること。

<学習到達目標>

実用的な語学力を養成し、卒業論文に使用する韓国語文献を熟読できるなどの効果を期待している。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 5 A		後	朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

今までより高度な文法や語彙、多様な表現を学習し、コミュニケーション能力を向上する。授業では教科書の語彙や文法項目を重点的に取り扱い、なるべく学んだことを実際に使用する練習を行うことにする。会話だけでなく、読解力・作文力を向上させるため、教科書以外の課題として新聞社説の日本語訳の他、韓国語で日記・エッセーなどを書いてもらい、個々のレベルに合う学習を並行する。

<各回毎の授業内容>

1. 제 5 과 건강

2. 제 5 과 건강

3. 제 5 과 건강

4. 제 5 과 건강

5. 제 6 과 환경

6. 제 6 과 환경

7. 제 6 과 환경

8. 제 6 과 환경

9. 제 7 과 한글

10. 제 7 과 한글

11. 제 7 과 한글

12. 제 7 과 한글

13. 제 8 과 옛날 이야기

14. 제 8 과 옛날 이야기

15. 제 8 과 옛날 이야기

<成績評価方法>

出席が2 / 3 以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果で評価。課題、小テストを成績評価に加える。

<教科書・参考文献>

『韓国語中級Ⅱ』(国際教育院韓国語教育部、慶熙大学校出版局)

<受講に当たっての留意事項>

予習と復習をしっかりとすること。授業はペアワークやグループ活動が多いので、学生たちの積極的な態度が求められる。

<学習到達目標>

中級レベルの読み書き・会話ができるようにしたい。「韓国能力試験」4 級・「ハングル能力検定試験」準 2 級合格を目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 5 B		後	吉澤文寿（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

前セメスターまでの学習を踏まえて、より実践的な演習を行う。南北朝鮮の新聞社説を教材として、その読解を正確に行うとともに、南北朝鮮に対する理解を深めることを目指す。日本語文献でも同様だが、韓国語文献を読む場合に、その文章の背景としての基礎知識がなければ理解できない。受講者がそのような当然のことを体得することも目指している。

<各回毎の授業内容>

1. ガイダンス

2. 演習(1)

3. 演習(2)

4. 演習(3)

5. 演習(4)

6. 演習(5)

7. 演習(6)

8. 演習(7)

9. 演習(8)

10. 演習(9)

11. 演習(10)

12. 演習(11)

13. 演習(12)

14. 演習(13)

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

出席が2 / 3以上の者に受験資格を与え、成績は試験結果を基本とし、授業態度、課題の提出状況などを加味する。

<教科書・参考文献>

労働新聞、ハンギョレ新聞などの社説

<受講に当たっての留意事項>

特別な事情がない限り、欠席しないこと。教材中に不明な語句、とくに時事用語などがある場合は必ず調べてから発表すること。

<学習到達目標>

実用的な語学力を養成し、卒業論文に使用する韓国語文献を熟読できるなどの効果を期待している。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	韓国語 5 B		後	朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

日常生活に必要な表現の上達とともに尊敬の表現、伝言の文型のような好投高度な表現ができることを目的にする。

<各回毎の授業内容>

1. 美しい韓国語 1－3 の

第7 課(1)

2.

第7 課(2)

3.

第7 課(3)

4.

第8 課(1)

5.

第8 課(2)

6.

第8 課(3)

7. 韓国の文化体験（伝統衣装の試着）

8. 美しい韓国語 1－3 の

第9 課(1)

9.

第9 課(2)

10.

第9 課(3)

11.

第10課(1)

12.

第10課(2)

13.

第10課(3)

14.

第11課(1)

15.

第11課(2)

16. 期末試験

<成績評価方法>

期末試験（70％） 出欠（10％） 課題（20％）

<教科書・参考文献>

美しい韓国語 1－3（韓国語教育開発研究院）

<受講に当たっての留意事項>

積極的に会話に参加し、自ら上達を目指すこと。

<学習到達目標>

より高度な韓国語の表現ができるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	アメリカ英語 5 B		後	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

生きた英語を学ぶのに、映画が格好の素材を提供してくれることは異論のないところだろう。登場人物の設定によって、方言、スラング、時に訛りを含む多種多様な英語が話される口語英語の宝庫であることはもちろんだが、一流の劇作家を含む脚本家によって練り上げられテキストは、文学的な価値も持っている。また、硬軟さまざまなテーマの背景にある歴史・文化を学ぶ良い教科書ともなってくれる。

この授業では、90年代にロサンジェルスで起きたいわゆる「ロス暴動」を時代背景として、ある高校の新人教師と生徒たちが自らの体験を著してベストセラーとなったThe Freedom Writers' Diaryの映画化作品を素材としたテキストを取りあげる。クラスのなかで白人は1人のみ、後はアフリカ系、アジア系、ラテンアメリカ系の、困難な家庭環境・生育歴を持つ生徒たちがぶつかり合い、教師の情熱に励まされ学ぶことに目覚めていく過程を描くとともに、アメリカの人種問題の根深さ複雑さを改めて考えさせる作品である。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2－3. 作品鑑賞

4. Unit 1 人種間の対立

5. Unit 2 国語の教師

6. Unit 3 縄張り

7. Unit 4 国境線

8. Unit 5 知らないのに？

9. Unit 6 ライン・ゲーム

10. Unit 7 戦争

11. Unit 8 許可

12. Unit 9 寛容の博物館

13. Unit 10 ここがぼくの家

14. Unit 11 アンネの日記

15. 復習・まとめ

<成績評価方法>

授業への準備、貢献、期末試験／レポートの成績等を総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

『フリーダム・ライターズ』（鶴見書店）

<受講に当たっての留意事項>

テキストはScriptとExerciseからなる。どちらも全員が予習してくることを前提として授業を進める。Scriptとはト書きも含む脚本で、俳優・映画製作者はこれをもとに映画を創りあげる。皆さんも役者になったつもりで台詞を読み、かつ日本語に訳し、文法的質問にも答えられるよう準備をしてきてほしい。予習しないで授業に臨むことは、教員のみならず他の学生にとっても迷惑となるのでくれぐれも謹んでほしい。出席のための出席は意味がない。

<学習到達目標>

総合的英語力の修得、英語表現の背後にある文化・思想・時代を探ること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	アメリカ英語 5 A ・ B		後	デロシェ ジェラルド
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

This course is designed to introduce to the students the world through Academic listening. Each chapter contains interesting topics for the students to master listening in English.

<各回毎の授業内容>

Week 1- Introduction to class description and preparation for Vocabulary homework assignment

Week 2- Napoleon from school boy to Emperor

Week 3- Napoleon continue

Week 4- Pompeii destroyed, forgotten and found

Week 5- Pompeii continue

Week 6- A Tidal Wave

Week 7- Tidal Wave continue

Week 8- Lincoln and Kennedy similar destinies

Week 9- Lincoln and Kennedy continue

Week 10- Lincoln and Kennedy continue

Week 11- Dinosaurs why they disappeared

Week 12- Dinosaurs continue

Week 13- The American Civil war why it happened

Week 14- Civil war continue

Week 15- Asian and African Elephants

Week 16- Asian and African Elephants continue

<成績評価方法>

Bi weekly Vocabulary assignment 50%

Class participation and attendance 50%

<教科書・参考文献>

Prints will be provided

<受講に当たっての留意事項>

The students who participate and come to class will be very successful.

<学習到達目標>

To enable the students to enjoy English and encourage them to speak freely and with confidence.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	アメリカ英語 5 A		後	佐藤泰子
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

In this course, current news stories will be used for English reading, writing, listening and speaking activities. Through active participation in this class, the students will not only become more aware of current news topics and issues as presented in English-language newspapers, but will also have the chance to increase their vocabulary and improve their reading, writing, listening, discussion, research, and presentation skills.

The current of each lesson will depend on the current news at the time. However, the general coursework will include reading English newspaper articles, watching English news videos, researching news stories on the Internet outside of class, and then discussing the news stories in class.

<各回の授業内容>

・ Tentative schedule will be given on the first day of classes, but subject to change according to the needs and abilities of the students.

第 1 回 Course introduction, rules of the course, and introduction to computer skills & computer room etiquette

第 2 回 UNIT 1

第 3 回 UNIT 2

第 4 回 UNIT 3

第 5 回 UNIT 4

第 6 回 UNIT 5

第 7 回 UNIT 6

第 8 回 Presentations

第 9 回 Presentations

第 10 回 UNIT 7

第 11 回 UNIT 8

第 12 回 UNIT 9

第 13 回 UNIT 10

第 14 回 Review for final test

第 15 回 Final test

<成績評価方法>

・ 40% Coursework (including quizzes, in-class preparations and presentations, homework, writing assignments, etc)

・ 30% Major Examinations

・ 30% Attendance and Participation

※ The 85% attendance policy will be strictly followed.

<教科書・参考文献>

・ The textbook will be announced the first day of class. A dictionary is also required.

・ In addition to handouts provided by the teacher, students will also be given assignments requiring them to read news stories in English newspapers or online and/or watch news videos online.

<受講にあたっての留意事項>

・ There will be regular quizzes to ensure that they have learnt the vocabulary.

・ weekly essay (summary & opinion about current news) will be given to help improve English writing skills and self-confidence.

<学習到達目標>

The purpose of this class is to give students the opportunity to improve and develop not only their oral/aural skills in communicating effectively in English, but also their intellectual ability.

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	地方自治論	2	後	馬場 健
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

地方と中央との関係に対立とみるか相互依存と見るかという議論がある。学説の問題はさておき、自治体（都道府県、市町村）の首長もメディアもこぞって中央が地方を強力に統制してきたと非難し、地方に対して今まで以上の権限の付与（権限移譲）を要求する。他方で、多くの自治体は、地方税を中心とした自前の収入では自分たちの支出を賄うことができず、中央からの財政移転（富裕な自治体から国を介してもたらされる移転財源）に頼っている。

さて、本講義ではこのような対立か相互依存かという単純な二分法にはよらず、日本における地方自治の歴史、現行制度、現在の課題について概説することを目的とする。

<各回毎の授業内容>

第1回	ガイダンス	
第2回	地方自治の歴史1（明治から第二次世界大戦まで:第1章）	市制町村制、府県制、郡制
第3回	地方自治の歴史2（戦後:第1章）	機関委任事務体制、分権一括法
第4回	住民（第3章）	住民の地位、住民参加、住民自治
第5回	地方制度（自治を支える構造か、統治を支える構造か:第9章）	住民自治と団体自治
第6回	自治体を束ねる長（第5章）	長の権限、
第7回	自治体を束ねる議会（第5章）	議会の権限、長と議会との関係
第8回	自治体の運営を担う公務員（第6章）	任用制度、昇進、意思決定メカニズム
第9回	自治体をめぐる主体間をどう繋ぐのか（第2章、第4章）	広報、広聴、情報公開、意見表明
第10回	自治を支えるために必要な財政（第7章）	基準財政収入額、基準財政需要額、
第11回	地域の問題を解決する手法1（枠組み:第8章）	広域連合、市町村合併、域内分権
第12回	地域の問題を解決する手法2（担い手の変化:第10章）	機能集団、領域社群
第13回	地域の問題は解決されたのか（第12章）	指定管理者、PFI、市場化テスト
第14回	今、都市と農村で何がおきているのか（おわりに）	過疎化、過密化、少子高齢化
第15回	まとめ	地方自治と統治
第16回	期末試験	

<成績評価方法>

期末試験（100％）、ただし受講生が少ない場合（15名未満）の場合には、授業中の質問に対する解答（20％）+期末試験（80％）とする

<教科書・参考文献>

教科書： 今川晃・馬場健編著『市民のための地方自治入門 新訂版』（実務教育出版、2009年）

必ず全国紙に目を通してから授業に出席すること。その内容について受講生に問う場合がある。

<学習到達目標>

現在の日本の地方自治制度に関する基本的事項（例えば、2層制、専決処分、経常収支比率、指定管理者等）について説明できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	東アジア関係論	2	後	佐々木寛（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

本科目は、「環日本海交流論」とともに、東アジアの各国地域・歴史研究を横断的に理解する知的枠組みを模索する。「環日本海交流論」が＜海＞をめぐる自治体や市民の交流史に重きを置くとすれば、「東アジア関係論」では、東アジア国際政治史などのより高次元次元をも含むより包括的な視点に基づく。概して、「東アジア」の歴史は、暴力とディスコミュニケーションに彩られた不幸なものであったといえることができるかもしれないが、近年、主に経済分野で多くの協力関係が模索され、「東アジア共同体」構想も浮上してきた。歴史認識問題や冷戦期米国の東アジア政策、核問題など、「東アジア」に根雪のように残る障害をしっかりと見つめると同時に、新たな地域主義や地域協力の胎動も確実にききとげたい。本講の最終的な目的は、「東アジア＜共生＞の条件」がどこにあるのかを探ることにある。揺れ動く東アジア情勢の中で、一人の市民としてそれをどう理解し、行動するべきなのか、具体的な素材を通じ考えたい。

<各回毎の授業内容>

新鮮な題材を多く取り入れたいため細目は限定しないが、以下の内容には触れる予定である。

1. 「東アジア」とは何か ― 歴史編 [1回]

2. 「東アジア」とは何か ― 理論編 [1回]

3. 歴史認識問題と「東アジア」 [2回]

4. 分断国家と「東アジア」 [2回]

5. アメリカと「東アジア」 [2回]

6. リスク共同体としての「東アジア」 [1回]

7. エネルギー問題と「東アジア」 [1回]

8. 経済共同体としての「東アジア」 [1回]

9. 「東アジア」共生のために [3回]

※+1回分は、資料映像の鑑賞に充てる。

<成績評価方法>

しばしば講義の最後に、コメントカード（質問やコメント、感想を書いてもらう）を作成してもらい、それらは講義の改善に役立てるだけでなく、受講者の参加姿勢を見る材料とする。基本的に最終筆記試験の成績によりすべての評価を決定し、出席も重視しないが、このコメントカードの内容は成績に加味する。また、試験は、個別的な知識よりはそれをもとにした思考力（学期中にどれだけ考えたか）を重視した問題を出題する。

<教科書・参考文献>

教科書 佐々木寛編『東アジア＜共生＞の条件』（世織書房）

参考書は、授業中、それぞれのサブテーマに即して随時指定する。必読参考文献の一例として、五十嵐暁郎・佐々木寛・高原明生編『東アジア安全保障の新展開』（明石書店）を挙げておく。

<受講に当たっての留意事項>

内容的に高度なものも含むので、知的好奇心が高い学生を望む。ロ・中・韓・米各地域・歴史研究の基礎的な知識が前提となる。「平和学」「国際組織論」をすでに受講していることが望ましい。

<学習到達目標>

受講者がそれぞれ、揺れ動く東アジア情勢に多角的な視点を持てるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	現代イスラーム論	2	後	小山田紀子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

2001年の9・11事件以来「イスラム原理主義」の運動が世界の注目を集めている。なぜイスラームは最近になって復興してきたのか。この授業では、まず第一に、「イスラームとは何か」やイスラーム世界の発展と中東の地域概念などの基礎知識を紹介し、現代イスラーム世界を理解する鍵を提示する。次に中東の中の東アラブ地域（マシュリク）と西アラブ地域（マグリブ）のそれぞれの歴史と現在をたどる。さらには2010年12月におこったチュニジア革命を契機とするアラブ世界の変革の現状についても考える。21世紀の世界の新潮流はイスラームの理解なくしては語れないだろう。グローバル・イシューとしてのイスラームを、中東・北アフリカの現地から考えてみたい。

<各回毎の授業内容>

1. 序論
2. イスラームとは何か
3. イスラーム世界の発展 1) 中世イスラーム世界の展開
4. 2) イスラームの近代
5. 中東の地域概念
6. マシュリクの歴史と現在 1) エジプトの歴史
7. 2) スーダンとサウジアラビア
8. 3) イスラエル・パレスチナ問題
9. マグリブの歴史と現在 1) マグリブとは
10. 2) フランスの植民地化の歴史
11. 3) 民族運動と独立
12. 4) 独立後の国家建設
13. 5) イスラーム主義運動の高揚
14. チュニジア革命とアラブ世界の変革 1) チュニジア革命
15. 2) エジプトの政変と周辺諸国への影響

<成績評価方法>

小レポートと定期試験

<教科書・参考文献>

教科書 未定

参考書 宮治一雄・宮治美江子編著『マグリブへの招待―北アフリカの社会と文化―』

大学図書出版、2008年2月

大塚和夫『イスラーム主義とは何か』岩波新書、2004年

立山良司『中東』自由国民社、2002年

宮治一雄『アフリカ現代史Ⅴ 北アフリカ』山川出版社、2000年

その他、授業で適宜指示する。

<受講に当たっての留意事項>

外部講師を招くので授業をよく聞くこと。

<学習到達目標>

メディアによって作られた「イスラム原理主義」のイメージを払拭し、正しいイスラームの知識を獲得して今日の国際社会の問題を見る目を養ってほしい。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	南北問題	2	後	高橋正樹（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

世界を「不平等」という観点から考察することが、この授業の目的です。日本に住むわたし達は世界では特権的な位置にあります。（とりあえずは）食糧の不足におびえる心配もせず、身の回りはモノで溢れかえっています。他方で日々の食べ物にも事欠く人々がたくさん世界にはいます。また、大学までの教育を受けることができる人は、世界の同世代の中では全体の1%に過ぎません。文字通り、わたし達は特権階級です。それはわたし達が世界の仕組みの中ではかなり有利な位置にある日本社会の一員だからです。

他方で90年代以降、経済的グローバリゼーションの結果、途上国は益々貧富の格差が広がり、日本を含む先進国でも貧富の格差が拡大しています。日本でも日々の生活に苦勞する人々の数が確実に増えています。授業の前半は南北問題に、後半はグローバリゼーションに焦点を合わせて、世界規模での不平等問題に触れていきます。

<各回毎の授業内容>

1. 不平等をどう考えるか

2. 植民地主義の構造

3～5. 第2次世界大戦後の南北問題をめぐる新たな展開

6～9. 南北問題をめぐる諸理論

10～13. グローバリゼーションによる現代の世界の不平等構造

14～15. 南北問題解決への糸口

<成績評価方法>

原則として、全出席が最低条件になります。さらに、レポート・中間テスト・学期末テストによって評価します。

<教科書・参考文献>

教科書

教科書はありませんが、毎回授業内容をレジュメにまとめて配布します。

参考文献

1988年;ラス・カサス『インディアスの破壊についての簡単な報告』岩波書店、1976年;ヨハン・ガルトゥング『構造的暴力と平和』中央大学出版部、1991年;室井義雄『南北・南南問題』山川出版社、1997年;恒川恵市『従属の経済学』東京大学出版会、1988年;伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か』平凡社、2002年。山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年。

<受講に当たっての留意事項>

南の貧困を単なる同情の対象としてではなく、わたし達の社会との関係で考えていきたいと思います。一緒に考える授業にしたいと思いますので積極的な授業参加を期待します。

<学習到達目標>

上記授業目的の達成

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	国際協力論	2	後	松尾瑞穂
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

本講義では、「先進国」と「発展途上国」を成立させている世界システムについて学ぶとともに、国際協力が経済、社会開発において果たしている多様な役割を検討していく。まずは、国際協力とそれを成立させている世界の構造を理論的、歴史的に概観したのち、こうした「不平等」「格差」の是正を目指す日本の国際開発援助および国際機関の具体的な取り組みを紹介する。特に、2000年に定められた国連のミレニアム開発目標（MDGs）の項目を検討しながら、貧困や国際協力の重点分野について具体例を挙げ、検討する。そのうえで、開発がもたらす負の側面を検討し、国際協力の抱える課題について考察を深めていきたい。また、この授業では、国際協力の現場に詳しい専門家を外部講師として招くことを予定している。

<各回毎の授業内容>

- はじめに—国際協力の概要
- 国際協力の始まりとその展開
- 世界システム論と第三（第四）世界
- グローバリゼーション論
- ミレニアム開発目標（MDGs）とは
- 貧困と食料危機
- 初等教育の現状—教育とエンパワーメント
- ジェンダー不平等—もっとも貧しい人は誰？
- 保健の政治学—妊産婦・乳児死亡率
- HIV／エイズと感染症の蔓延
- 環境と持続可能な開発
- 国際協力に関わる組織—国際組織、政府、NGO
- 日本の国際協力：ODAと円借款
- オルタナティブな開発①—フェアトレードで世界は変わる？
- オルタナティブな開発②—マイクロファイナンス
- 定期試験

<成績評価方法>

小課題（30％）およびレポート（70％）

<教科書・参考文献>

内海成治編『国際協力を学ぶ人のために』、2005年、世界思想社。

<受講に当たっての留意事項>

この授業では、授業毎に課題が出され図書館での事前学習が必要な場合があります。日ごろから雑誌、新聞などに目を通し情報収集に努めてください。第三世界の現状に関心があり、もっと知りたいという知的好奇心旺盛な学生を対象としていますので、課題をやってこない、欠席が多い等の場合には単位を与えませんので気をつけてください。

<学習到達目標>

国際協力の構造を把握し、発展途上国と先進国とのつながりを深く理解することができるようになる。国際協力についての基本的事項を理解し、自分なりの考えを持つことができる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	国際経済法	2	後	藤本晃嗣
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
第二次世界大戦後、国際社会のグローバル化の進展とともに経済もグローバル化・国際化の一途をたどってきた。これによって、わたしたちは多くの外国製製品に囲まれ、それらを安価に購入することができるようになり、便利な生活を営めるようになった。このように経済の国際化は、私たちの生活を豊かなものにしてきた半面で、さまざまな新たな問題を発生させてきた。

本授業では、こうした経済の国際化を国際経済法という分野から分析することで、国際社会の問題を考えるきっかけを受講者に提供したいと思う。授業では、第二次世界大戦後に成立した自由貿易体制の沿革を学んだ上で、1995年1月に発足したWTO（世界貿易機関）に関する法と制度を中心に扱うことを予定している。

<各回毎の授業内容>

1. 国際経済とは
2. 国際経済法と国際公法
3. ブレトンウッズ・ガット体制の成立
4. ブレトンウッズ・ガット体制の展開(1)
5. ブレトンウッズ・ガット体制の展開(2)
6. WTO概説(1)－ウルグアイ・ラウンドとWTOの設立
7. WTO概説(2)－WTOの構造
8. WTO協定の構造－WTO設立協定と4つの附属書
9. WTOと紛争解決手続
10. WTO体制の基本的規律(1)－最恵国待遇
11. WTO体制の基本的規律(2)－最恵国待遇の例外と地域主義
12. WTO体制の基本的規律(3)－内国民待遇
13. WTO体制における規律の拡大－農業貿易
14. WTOと通商救済制度
15. まとめ－今後のWTOと日本の貿易政策（FTA、EPA、TPP）
16. 定期試験

<成績評価方法>
原則として定期試験の成績に基づき評価します（定期試験100％）。

<教科書・参考文献>
授業ではレジュメ・資料を配布するため、教科書は使用しない。参考文献は、授業中に適宜指示します。

<受講に当たっての留意事項>
授業中、私語をした学生には退席を指示しますので、指示された学生は速やかに退席してください。

<学習到達目標>
WTOに関する法と制度についての基本的な理解を深め、国際経済活動に関する報道や新聞記事を自分の力で分析し、評価する能力を備えられる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	N G O 論	2	後	佐々木寛（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

現代社会の様々な局面で、N G O（非政府組織）やN P O（非営利組織）の活動が注目されるようになって久しい。しかし、これを大学の講義などで体系的に論じ、学問的にとらえ直す作業は始まったばかりである。本講義では、これら新たな市民活動のうねりを比較的長い歴史的な観点からとらえ直し、その現代的な意味について考えてみたい。さらに、流動化する世界に呼応して刻々と変化するN G O / N P Oの多様な活動の現実をも見据えてみたい。また、これら「自発的結社」の可能性のみならず、実際の活動にともなう構造的・実践的な課題や問題点も明らかにしたい。本講義では、N G O / N P Oの諸活動を広く「ボランティア」論や「市民社会」論の文脈に位置づけ、これら市民活動の文明論的な意義についても考察を展開したいと思っている。テーマの性質上、受講者の自発的な参加や招聘講師の講演などにも触発されながら、新しい講義や大学そのもののあり方も探ってみたい。

<各回毎の授業内容>

新鮮な題材を多く取り入れたいため細目は限定しないが、以下の内容には触れる予定である。また、反グローバル化運動や環境NGOについての映像資料を多用する他、実際に様々なN G OやN P Oで活躍する人を教室に招き、現場の視点から話をしてもらう予定である。

1. N G O / N P Oとは何か、その歴史的意味 [2回]

2. N G O / N P Oの分類と争点 [1回]

3. グローバル化とN G O / N P O [2回]

4. 国連とN G O [1回]

5. 地方発のN G O [1回]

6. 女性とN G O [1回]

7. 難民問題とN G O [1回]

8. 小火器問題とN G O [1回]

9. 核問題とN G O [1回]

10. アイデンティティ・市民社会・N G O [2回]

※ + 1 回を、資料映像の鑑賞、 + 1 回を招聘講師による講演に充てる。

<成績評価方法>

しばしば講義の最後に、コメントカード（質問やコメント、感想を書いてもらう）を作成してもらい、それらは講義の改善に役立てるだけでなく、受講者の参加姿勢を見る材料とする。基本的に最終筆記試験の成績により評価を決定するが、課題として作成してもらう「N G O調査レポート」の内容も大きく加味する（レポート35 %、試験65 %）。

<教科書・参考文献>

共通テキストは、西川潤・佐藤幸男編『N G O / N P Oと国際協力』（ミネルヴァ書房）。必読参考文献の一例として、高島通敏編『現代市民政治論』（世織書房）、D.ヘルド『デモクラシーと世界秩序』（N T T出版）、M.ウォルツァー『グローバルな市民社会に向かって』（日本経済評論社）、目加田説子『地雷なき地球へ』（岩波書店）を挙げておく。

<受講に当たっての留意事項>

内容的にかなり高度なことも含むので、知的好奇心が旺盛な学生の参加を望む。また、2年次に「平和学」、3年前期に「国際組織論」を受講していることが望ましい。

<学習到達目標>

受講生が将来、社会的企業やボランティアに関わるための基本的な知識や動機を獲得する。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	環日本海交流論	2	後	神長英輔（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

サハリン・樺太を中心としたロシア極東の近現代史を概説します。

サハリン・樺太の歴史は日本史の一部であり、ロシア史の一部であり、東北アジア史の一部でもあります。近現代、特に19世紀のサハリン島は世界から隔絶した孤島ではなく、水産物の交易を通じて多様な世界とつながっていました。

この時期のサハリン島は政治的にはロシア帝国に統合されつつありましたが、経済的には中華世界や日本列島との太いつながりがありました。

こうした政治空間と経済空間の大きなずれは国家の論理と地域の論理が一致していないことを意味します。これはその後のサハリン島の歴史や現代のロシア極東など、国民国家の辺境地域に一般的な問題であり、サハリン島の経験はそうした問題を考えるための手がかりになると考えています。授業ではみなさんといっしょにこうした問題を検討します。

<各回毎の授業内容>

サハリン島を中心としたロシア極東の歴史を概観します。周辺地域との関係を重視しつつ、近現代を中心に論じます。講義の内容は以下の通りです。

- ・第1回 ガイダースと「17世紀のサハリン島とその周辺」
- ・第2回 「18世紀のアムール川下流とサハリン島」
- ・第3回 「19世紀前半のサハリン島」
- ・第4回 「19世紀半ばのロシア極東と日露関係」
- ・第5回 「樺太・千島交換条約前後のサハリン島」
- ・第6回 「監獄の島 その1」
- ・第7回 「監獄の島 その2」
- ・第8回 「日露戦争とサハリン島」
- ・第9回 「北サハリン 1905-1920」
- ・第10回 「シベリア出兵」
- ・第11回 「北サハリンのソヴィエト化」
- ・第12回 「日本領樺太の誕生」
- ・第13回 「日本領樺太の発展」
- ・第14回 「日ソ戦と戦後のサハリン島」
- ・第15回 「サハリンの残留朝鮮人問題」

以上は予定です。細目は随時変更します。順番が変わることもあります。

随時、私がテーマを設定した上で数人単位のグループワークをおこない、その場で口頭の発表をしていただきます（グループ分けは名簿をもとに不作為におこないます）。

また、課題として毎回の授業回の最後にその日の講義の要旨（200から400字程度）を5分程度で書き、提出していただきます。これを提出しない場合は欠席（ないし早退）扱いにします。

<成績評価方法>

出席回数、上記の授業内容要旨の提出、グループワークにおける積極性、学期中・学期末のペーパーをもとに総合的に判断します。

<教科書・参考文献>

常時使う教科書はありません。資料は必要に応じて配布します。

参考文献として地図帳（ロシア極東、朝鮮半島、中国東北部、日本列島が記載されているもの。中学や高校で使用していたものでよい）を持参してください。不明点があれば、授業中に質問するほか、『ロシアを知る事典』（平凡社）で随時確認してください。

東洋書店から出版されているユーラシア・ブックレットシリーズ（図書館にあります）のうち、自分で興味のあるものを読み進めてください。

<受講に当たっての留意事項>

参加者に求めるものは主体性と積極性です。グループワーク等に積極的に参加する気がない方、約束事を守れない方はご遠慮ください。

健康に留意し、できるだけ出席するよう心がけてください。また、積極的に質問し、授業に関わってください。私語をする方、携帯端末を見ている方、寝ている方、遅刻や早退の程度が過ぎる場合は欠席扱いにします。

ロシア極東について関心のある方の参加を希望します。

<学習到達目標>

授業がきっかけとなり、受講後もロシア極東について何らかの興味関心を持ち続けていただければうれしく思います。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	地域統合論	2	後	白井陽一郎（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

20世紀後半から21世紀初頭にかけて、世界各地で地域主義が進展した。欧州（E U）を先頭に、東南アジア（A S E A N）、北米（N A F T A）、南米（アンデス共同体やメルコスール）が追随し、アフリカもあらたな動きを見せていった（アフリカ連合）。こうした世界の潮流に押し流されるかのように、東アジアでも1990年代になってようやく、地域主義が政治のアジェンダとして、具体的に認識されるようになった。かつて日本が大東亜共栄圏の名の下に、帝国主義の暴虐をこの地にもたらして以来、長らく東アジア共同体について語ることはタブーであった。しかし、90年代以降のASEANをドライビング・フォースとした東アジア・リージョナリズムは、ASEANプラス3そして東アジア首脳会議（EAS）を生みだし、日中韓の解きがたき対立あっても決して消え去ることなきたしかな動きを、可能にしてきたのである。この講義では、こうした東アジア・リージョナリズムの動きをさまざまな観点から考察できるようになることを目的に、地域統合の理論枠組——経済学・政治学・社会学の視点から——について、学習していく。その上で、とくにASEANに注目しながら、東アジア・リージョナリズムの現在を追っていく。そして最後に、テキストに指定した東アジア共同体憲章案について紹介したい。

<各回毎の授業内容>

- 1、世界の地域主義——導入と紹介。
- 2、地域統合の概念①——協力と統合・地域化と地域主義・連邦国家と地域共同体。
- 3、地域統合の概念②——担い手・国連や大国との関係・ガバナンスの視点。
- 4、経済統合の理論①——バラッサの段階論、貿易創出効果と転換効果。
- 5、経済統合の理論②——最適通貨圏の理論とEUの経験。
- 6、政治学の視点①——新機能主義と政府間主義。
- 7、政治学の視点②——リベラル政府間主義と歴史制度主義、プリンシパル＝エージェンシー理論。
- 8、社会学の視点——社会統合とシステム統合の概念。
- 9、東アジア地域主義の特徴——ASEANを核とした国際フォーラムの重層的形成。
- 10、東アジアの国際フォーラム①——APECとASEM。
- 11、東アジアの国際フォーラム②——ASEANプラス3とEAS。
- 12、東アジア地域主義の歴史①——マハティール構想からアジア金融通貨危機へ。
- 13、東アジア地域主義の歴史②——金大中イニシアティブからEASの発足へ。
- 14、ASEANの基本理念・組織機構・対外政策。
- 15、東アジア共同体憲章案の紹介。
- 16、定期試験。

<成績評価方法>

学期末試験100%。

<教科書・参考文献>

中村民雄・須網隆夫・白井陽一郎・佐藤義明『東アジア共同体憲章案』昭和堂。

<受講に当たっての留意事項>

ノートをしっかり取って、試験前にきちんと復習することが大切。授業を通じて最新の東アジア国際情勢を紹介していくので、ニュースのフォローも確実に。また教科書の指定箇所は必ず読み込んでおくこと。

<学習到達目標>

地域統合の基本概念に習熟するとともに、ASEANや日中韓の動向について、新聞・雑誌・テレビなど各メディアの報道を自分なりの理論的視点から批判的に分析できるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	外国語文献講読 2	2	後	高橋正樹（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
この授業の目的はふたつある。第1の目的は、国内外の時事問題を英語で読むことである。英語講読の目的は、英語によって書かれ話されている情報や考え方に触れることである。外国の英語の記事を読むことで、日本国内で議論されていることとは異なる視点をもつことが重要な授業目的である。第2の目的は、英語を学ぶことである。時事問題の英語を読むことを通じて、文法を学び語彙を増やし英文読解力を強化することもこの授業の重要な目的である。

<各回毎の授業内容>
現在進行形の国内外の時事問題（政治経済）についての英語による雑誌や新聞の記事論文を読む。テキストは教員が逐次、コピーして準備する。授業ではテキストを学生に順番に逐語訳してもらう。まずはこの英語理解を確実にしたうえで、記事内容について解説や議論をする。授業では教員は文法の丁寧な説明に心がける。

<成績評価方法>
毎回の授業と学期末試験による。

<教科書・参考文献>
英語文法参考書を毎時間持参のこと。

<受講に当たっての留意事項>
毎回の授業の予習復習をきちんとすること。また、テキストの理解のためにはテキストとなる英語の記事だけではなく、それと関連する日本語の新聞記事に目を通しておくことが必要である。
英語力を強化したい学生には十分な効果が期待できる授業である。

<学習到達目標>
英語の時事問題記事を辞書を使いながら読めるようにする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	国際研究特論	2	後	
22～24年						
21年度以前						
未入稿						

4 年文化専門科目（後期）

ロシア語 7
中国語 7
韓国語 7
アメリカ英語 7

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	ロシア語 7	1	後	ライサ プラーソル
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

ロシア語会話における新しい文法形態、語彙、その利用について学習する。コミュニケーションと発音の技能、ロシア語の会話を聞き理解する能力を向上する。日常会話に関連した短い文の読み書き能力を発展させる。いくつかのロシアの象徴と生活習慣を学習する。毎回、時間を割いて映画、歌、アニメ、現代ロシア文化を紹介する。

<各回毎の授業内容>

1－3

テキスト第1課 電話での会話

4－6

テキスト第2課 歳月の表現（年・月・日にち）日本とロシアにおける祭日クイズ「ロシアの有名な人たち」

7－9

テキスト第3課 レストランでの注文 ロシア料理 クイズ「ロシア料理」

10－12

テキスト第4課 勉強しすぎじゃないか？ 日本語の一番難しいところなに？

13－14

ロシアの映画

15

復讐

16

末期テスト

<成績評価方法>

評価は授業の出席（15％）、小テスト（20％）、学期末試験（65％）。

<教科書・参考文献>

A. デボフスキー、会話で学ぶロシア語 中級2。会話編等のプリントを教員が配布する。

<受講に当たっての留意事項>

欠席率が授業数3部の1を超えると受験資格がなくなる。宿題が毎回出る。

<学習到達目標>

ロシア語の高度な文法とロシアの知識を習得し、会話能力を身につけることを目標とする。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	中国語 7	1	後	朱 継征
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

中国語の人文・社会科学分野の文献、新聞記事やテレビニュースなどを理解するには、一層高いレベルの語学力と知識が要求されます。中国語は実用性の面でも将来性のある言語の一つです。その実力は若いうちに身に付ければ一生の財産になります。

この授業は中国語の聴解力、会話力、読解力、作文力などの総合的運用能力を高め、中国語検定試験2級合格を目指し、TECC 500点、HSK 6級に挑戦します。

中国語と日本語の異同についての説明及び通訳、翻訳の訓練においても、日本語の使用を最小限にしますが、単語、本文と文法の説明及び討論会、発表会と授業での指示を基本的に中国語で行います。

<各回毎の授業内容>

1. 並列複文

2. 継起複文

3. 累加複文

4. 選択複文

5. 因果複文

6. 転折複文

7. 条件複文

8. 仮定複文

9. 譲歩複文

10. 取捨複文

11. 目的複文

12. 時間複文

13. 連鎖複文

14. TECCとHSK対策

15. 総合練習（中国語検定試験、TECCとHSKについて）

<成績評価方法>

平常点と期末試験によって判定。平常点（小テスト、発表会、宿題）40％、期末試験60％。

5回以上無断欠席した者は失格。

<教科書・参考文献>

教科書:授業中に指示します。

参考書:『講談社 中日辞典』相原茂編集 2002年（第二版）

『講談社 日中辞典』相原茂編集 2006年（初版）

<受講に当たっての留意事項>

毎回必ず予習して出席すること。積極的に質問すること。大きな声で返事すること。宿題をちゃんとやること。

<学習到達目標>

中国語の総合的運用能力を高め、中国語検定試験3～2級合格、HSK（漢語水平考試）4～6級合格を目指します。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	韓国語 7	1	後	朴 修禧
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業は、韓国語 6 の深化過程で、韓国で経験あるいは見た文化や風習を生かし、日本と韓国を比較しながら自由に会話します。

会話の内容を録音し、それを聞きながら発音の校訂は勿論、より自然な意思駆使が出来るようになる事を目的にします。

<各回毎の授業内容>

1. 授業の方針説明、韓国での思い出発表
2. 韓国人に日本の文化を紹介する
3. 日本と韓国の祝日比較
4. 日本の歴史的人物紹介する
5. 好きな韓国人
6. 日本の観光地紹介
7. 韓国で行ってみた観光地の中、一番印象的だった所に対して話す
8. 日本と韓国のスポーツ
9. すきなスポーツ
10. 日本の食文化紹介
11. 日本の食文化と韓国の食文化の違い
12. 自分で出来る料理のレシピ発表
13. 日本の教育の特徴と問題点
14. 自分が見た韓国の大学
15. 韓国及び韓国人から学んだ事（発表）
16. 授業のまとめ及びレポート提出

<成績評価方法>

平常発表（40％） 期末レポート（60％）

<教科書・参考文献>

テキストは使用しません。 講義の時資料を配布します。

<受講に当たっての留意事項>

他国を理解しようとするオープンマインド

<学習到達目標>

韓国を言葉だけでなく文化を知ることによって、より深い理解が出来、グローバル時代の一人としての資質を見に付けるようになる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	4 年	アメリカ英語 7	1	後	矢口裕子（情報文化）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

この授業では(1)英字新聞、インターネット上の情報を用いた時事的・ジャーナリスティックな英語(2)バラク・オバマ、ヒラリー・クリントン、キング牧師等の演説をテキストとして取り上げる。(1)については、ジャーナリズム特有の表現を学ぶとともに、ことにインターネットの普及以降、英語を共通言語として瞬時に世界がつながるさまを体感してほしい。(2)については、演説は話し／聞く言葉と書き／読む言葉の中間にあり、4技能を総動員した学習が可能のため、古典的英語学習法の一つであり、今もその有効性は失われていない。

自分について、日本について、世界について、日本語でも英語でも、語るべきことを持っているか否かは、充実したコミュニケーションを展開するための鍵である。英語を道具として世界を知る端緒になれば、と思う。補助的に映像・音声資料等を用いることがある。

<各回毎の授業内容>

1. イントロダクション

2. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

3. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

4. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

5. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

6. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

7. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

8. 英字新聞・インターネット上の情報を用いた授業

9. 演説原稿を用いた授業

10. 演説原稿を用いた授業

11. 演説原稿を用いた授業

12. 演説原稿を用いた授業

13. 演説原稿を用いた授業

14. 演説原稿を用いた授業

15. 総復習

<成績評価方法>

授業への準備、貢献、期末試験／レポートの成績等を総合的に評価する。 演説については教材の特性から言って、予習段階での音読は必須。筆記／レポートのほかに、テキストの暗誦も試験に加える。

<教科書・参考文献>

プリントを配布。

<受講に当たっての留意事項>

全員が予習してくることを前提として授業を進める。予習の段階では、すらすら音読でき（特にアクセントに注意）、意味を的確につかめ、文法的質問にも答えられるよう準備をしてくること。

<学習到達目標>

時事英語、ジャーナリズム特有の表現の習得。

1 年システム専門科目（後期）

情報産業
情報リテラシーと倫理
ビジネスモデル
人間情報工学 1
情報論理
システム数学
統計と情報 2 / 生活統計
基本情報処理特論 2 / 基本情報演習 2
簿記特論 2
F P 特論 2

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報産業	2	後	西山 茂（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

現代社会はコンピュータと電子通信（ネットワーク、特にインターネット）の複合した技術（ICT）によって支えられている。ICTはこれを供給する側（ICT供給産業）の存在は不可欠であるが、これを利用・活用する側（ICT活用産業）の拡大も重要である。本授業では、この二つを併せて「情報産業」と位置付け、それぞれの現状、市場構造、トレンド、最新情報を学ぶ。更に「情報産業」のインフラとなる標準化、情報産業政策、関連法制度、情報産業従事者の働き方などの動向と課題についても学ぶ。

<各回毎の授業内容>

[1] イントロダクションー 情報産業の位置付けとデジタル社会の意味

[2] ICT供給産業(1)ー コンピュータ産業

[3] ICT供給産業(2)ー 電子ネットワーク産業

[4] ICT供給産業(3)ー 情報サービス産業

[5] ICT活用産業(1)ー デジタルコンテンツビジネス

[6] ICT活用産業(2)ー 商取引（eコマース）

[7] ICT活用産業(3)ー 教育（eラーニング）、Web関連産業

[8] ICT活用産業(4)ー 行政（e-Gov）その他の産業分野

[9] 情報産業基盤(1)ー 政策・法令と標準化

[10] 情報産業基盤(2)ー 知的財産権

[11] 情報産業基盤(3)ー 情報セキュリティと個人情報保護

[12] 情報産業基盤(4)ー 情報産業における人材と働き方

[13] 情報産業及びデジタルエコノミーの将来展望

[14] 情報産業最新情報アップデート（ICT及び利用法の最新動向など）

[15] まとめ ー ICTがもたらす仕事、家庭生活の変化（過去、未来）、ICTの社会へのインパクト

[16] 定期試験

<成績評価方法>

・期末テスト:60%（理解度確認テストを1回以上提出していること）

・理解度確認テスト（Quiz）:40%（单元ごとに実施する）

<教科書・参考文献>

教科書はない。講義資料を配布する（履修登録確定後は各自本学HPからダウンロードし印刷する）。

参考文献:

・政府・業界系白書:情報化白書、情報通信白書、情報サービス産業白書、デジタルコンテンツ白書等

・民間の白書等:インターネット白書;インターネットビジネス白書;情報通信ハンドブック等

・OECDレポート:OECD information Technology Outlook2010、2012（出版されれば）

・米国商務省レポート:Digital Economy 2003、<http://www.esa.doc.gov/Reports/digital-economy-2003>

・林 紘一郎著、電子情報通信産業、電子情報通信学会、2002

<受講に当たっての留意事項>

・理解度確認テストの提出回数が5回以下である場合は期末試験の受験資格を与えない。

<学習到達目標>

1. ICT供給産業（コンピュータ、ネットワーク、情報サービスなど）の動向と課題を理解し、説明できる。（期末テスト／理解度確認テスト:30%／10%;以下同様）

2. ICT活用産業（商取引、教育、行政など）の動向と課題を理解し、説明できる。（10%／10%）

3. 情報産業基盤（法制度、標準化、知的財産権、情報セキュリティ、個人情報保護、情報産業人材の働き方と人材育成）に関する知識を理解し、説明できる。（10%／10%）

4. デジタルエコノミーの進展と情報産業政策の動向およびICTの潮流を理解し、説明できる。（10%／10%）

（関連する学習・教育到達目標:G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報リテラシーと倫理	2	後	岸野清孝（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

コンピュータネットワーク社会と情報倫理、著作権、情報セキュリティ、技術者倫理の関係を理解し、公衆の安全と福利における技術者の知識の重要性、技術者が担う責任について学ぶ。

<各回毎の授業内容>

情報リテラシーと倫理の全体概要説明

2. 情報リテラシーと倫理概要:情報リテラシーとは、情報倫理の意義

3. ネットワークと情報機器利用時の基本ルール:ネットワーク社会と従来の社会の違い

4. ネチケットとホームページ:ネットワーク・エチケット、ホームページの注意事項

5. コンピュータウイルス:コンピュータウイルスとは、感染防止方法、ハッカーとは

6. 個人情報不正利用:個人情報とは、不正利用による被害、振り込め詐欺

7. 情報漏洩対策:情報漏洩の原因と問題点、個人情報保護法、情報漏洩の防止対策

8. プライバシー侵害と情報操作:プライバシーの権利と保護、情報操作（レポート課題1）

9. 事例研究:プライバシー侵害と情報操作の事例

10. 知的財産権と倫理:知的財産権とは、著作権とは、著作物の使用と利用

11. 情報セキュリティ:情報セキュリティと倫理、セキュリティ対策と技術

12. 企業の倫理:ビジネスにおける倫理、コンプライアンス（法令遵守）

13. 企業の製造物責任（P L）:製造物責任とは、訴訟事例、製品安全活動（レポート課題2）

14. 技術者の倫理:技術者の倫理とは、正直性・真実性・信頼性、倫理問題の解決方法

15. 事例研究:技術者倫理と内部統制

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験:80％と自己学習によるレポート課題:20％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

資料を配布する（本校のHPからダウンロードし、各自がプリントアウトする）。

<学習到達目標>

・コンピュータネットワーク社会と情報倫理（ネチケット、ウイルス、個人情報、プライバシーなど）の関係を理解し、基本的な知識を習得する。（定期試験:25％）

・情報倫理に関する事柄について正しいか誤りであるかの判断がある程度できるようになる。（定期試験:25％）

・情報倫理に関連する義務と責任（ウイルス、個人情報、著作権、情報セキュリティ、P L、技術者倫理など）を学び、それらが情報倫理の問題解決にどのように役立つかを理解し説明できるようになる。（定期試験:30％）

・自己学習による調査により情報倫理について、さらに考える力を養う。（レポート:20％）

（関連する学習・教育到達目標：E、G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	ビジネスモデル	2	後	桑原 悟（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

情報システムは、組織の既存業務の効率化や精度向上などを狙って導入されてきている。それらの業務は、担当部門にとっては常識ともいえるが、システム開発側にとっては、未知の分野であるかもしれない。一方で、論理的、機械的に振舞うコンピュータを活かすには、その特性を理解していなければならない。システム開発側は、これらを理解しているが、業務部門が理解しているとは限らない。

そこで、双方を繋ぐために行われるのがモデル化である。この授業では、情報システム化の対象としての業務の情報モデルについて学び、情報通信技術を前提にした新しいビジネスの形態についても紹介する。

<各回毎の授業内容>

1) 授業のオリエンテーション, ビジネスモデル及び情報モデルと企業活動

2) 流通業の形態

3) 流通業の情報モデル(1)販売管理

4) 流通業の情報モデル(2)在庫管理

5) 流通業の情報モデル(3)利益管理

6) 流通業の情報モデル(4)販売分析

7) 製造業の生産形態と方式

8) 製造業の情報モデル(1)資材計画

9) 製造業の情報モデル(2)部品展開

10) 製造業の情報モデル(3)在庫管理, 購買管理

11) 製造業の情報モデル(4)能力計画

12) 製造業の情報モデル(5)品質管理

13) 製造業の情報モデル(6)損益管理

14) 企業組織と情報システム開発

15) ネットビジネス（ビジネスモデルの創出）

16) 定期試験

注）受講する学生の理解度により講義順序や分量を調整することがある。

<成績評価方法>

定期試験（90%）及び課題（10%）により評価を行う。

<教科書・参考文献>

資料を学内ネットワークに掲載する予定である。

<受講に当たっての留意事項>

数学1, 2, 組織と経営の単位を取得していることが望ましい。また、基礎自由科目「数学基礎」の履修を指導された者は、これを履修していることが望ましい。授業に集中している学生の邪魔になる行為をするものは退出させる（出席を認めない）。質問は歓迎するので、遠慮なく質問して欲しい。

<学習到達目標>

企業を代表とする組織の業務を情報システム化の対象として理解できる。

（関連する学習・教育到達目標：E、I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	人間情報工学 1	2	後	上西園武良（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

人間情報工学（人間工学）では、人間の使用する機器が使用しやすいものになることを目指している。本講義では、人間の特性を心身機能別に分類し、それぞれの機能に適合した機器の設計手法を習得する。情報の観点からは、機器使用に関わる人間の特性情報をどのように設計情報に翻訳するかを習得する。同時に、設計時に必要となる統計的なデータ処理手法も合わせて修得する。

<各回毎の授業内容>

1. 人間工学の歴史、人間の特性の分類

2. 寸法・体格の特性への適合設計(1)イスの座面幅の事例

3. 寸法・体格の特性への適合設計(2)棚の高さの事例

4. 感覚特性への適合設計(1)感覚の一般的性質

5. 感覚特性への適合設計(2)評点法

6. 感覚特性への適合設計(3)2点法

7. 感覚特性への適合設計(4)針の見易さの事例

8. 感覚特性への適合設計(5)洗浄強さの事例①

9. 感覚特性への適合設計(6)洗浄強さの事例②

10. 感覚特性への適合設計(7)洗浄強さの事例③

11. 運動特性への適合設計(1)データベース

12. 運動特性への適合設計(2)レバー形状の事例

13. 被験者実験の注意事項

14. 統計学的な補足

15. まとめ

16. 定期試験

<成績評価方法>

・小テスト3回（各10点、計30点）と期末試験（70点）の合計（100点）で評価する。

・3回の小テストのうち少なくとも1回は受験していることを期末試験の受験資格とする（0回の人には受験資格なし）。

・期末試験は「電卓（通信機能なし）」以外は持ち込み不可（小テストは持ち込み可）。

<教科書・参考文献>

特定の教科書は使用しない。

<受講に当たっての留意事項>

毎回、数値計算を行うので平方根（√）計算機能のある電卓を持参すること。

<学習到達目標>

人間の心身機能に適合した機器・環境の設計が行える。

（関連する学習・教育到達目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報論理	2	後	中田豊久（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

結論が前提から正しく導き出されることを、妥当な推論と呼ぶ。この妥当な推論、言い換えると「正しく考えること」は情報システムに関わらず、様々な学問にとって重要なことである。そこで本講義では、この妥当な推論を行うための技術の1つである記号論理（命題論理、述語論理）を学習する。

<各回毎の授業内容>

1. 論理学入門

2. 命題論理:否定、かつ、または

3. 命題論理:否定、かつ、または

4. 命題論理:ならば、同値

5. 小テスト1（否定、かつ、または、ならば、同値）

6. 命題論理:真理値表による恒真性判定

7. 命題論理:命題の標準化による恒真性判定

8. 命題論理:意味木による恒真性判定

9. 小テスト2（真理値表、命題の標準化、意味木による恒真性判定）

10. 命題論理の推論:真理値表による妥当性判定

11. 命題論理の推論:恒真性判定による妥当性判定

12. 述語論理:量化命題の有限解釈、述語論理の否定

13. 小テスト3（命題論理の推論、述語論理）

14. 離散数学（集合、ベン図）

15. 小テスト4:離散数学

16. 定期試験

<成績評価方法>

小テスト、定期試験以外のすべて日には、授業内で課題を提出する。その課題を全て合わせて10%の割合、定期試験を10%、小テストを80%の割合として評価する。但し、授業の進み具合や履修者の理解度に応じて補正を行うことがある。

<教科書・参考文献>

教科書:知識基盤社会のための人工知能入門、國藤進 他、コロナ社、ISBN:978-4-339-03366-3

<受講に当たっての留意事項>

3年次に「人工知能」を履修するものは、この科目を履修していることが望ましい。

<学習到達目標>

・自然言語を論理的に理解し、記号によって表わす力を習得する。
（小テスト40%、授業内の課題5%、定期試験5%）

・正しい知識の積み重ねにより、新しい知識を生み出す推論について理解する。
（小テスト20%、授業内の課題3%、定期試験3%）

・集合の概念を理解し、ベン図による知識表現、およびそれを用いた推論について理解する。
（小テスト20%、授業内の課題2%、定期テスト2%）

（関連する学習・教育到達目標:D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	システム数学	2	後	近山英輔（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

数学の基礎概念は情報システムを深く理解するために役立つ。本講義では、数の概念、集合の概念、関数の概念、微積分学の概念を理解し、計算法の簡単な演習によってその理解を具体化する。

<各回毎の授業内容>

1. システム

2. 数

3. 有限集合

4. 無限集合

5. ベクトル

6. 行列

7. 関数

8. 差分と和分

9. 極限

10. 微分と積分(1)

11. 微分と積分(2)

12. 微分法と積分法の諸公式(1)

13. 微分法と積分法の諸公式(2)

14. 微分法と積分法の諸公式(3)

15. 多変数関数入門

16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験:60％、小テスト:40％で評価する。

<教科書・参考文献>

特になし

<受講に当たっての留意事項>

定期試験は自筆ノートのみ持ち込み可（印刷物又は印刷物の貼付不可）。講義内容だけでなく、講義中の演習や自己学習等も自筆ノートに整理して記録しておくこと。小テストを行う。

<学習到達目標>

・いろいろな数と集合について説明できる（定期試験15％、小テスト10％）。

・ベクトルと行列の計算ができる（定期試験15％、小テスト10％）。

・いろいろな関数を微分できる（定期試験15％、小テスト10％）。

・いろいろな関数を不定積分・定積分できる（定期試験15％、小テスト10％）

（関連する学習・教育到達目標：D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	統計と情報 2	2	後	伊村知子（情報システム）
22～24年						
21年度以前			生活統計			

選択

<授業目的>

身のまわりの社会をより深く理解するためには、データを集め、解析する方法を知っておく必要がある。本講義では、統計の基礎に基づいた様々なデータの解析方法について学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1. 統計分析の基礎
2. 推測統計の基礎:母集団と標本、標本抽出
3. 統計的仮説検定①
4. 統計的仮説検定②
5. t分布を用いた1つの平均値の検定
6. t分布を用いた2つの平均値の差の検定
7. 平均値の推定
8. 相関係数
9. 回帰分析
10. まとめ:中間試験
11. クロス表とカイ二乗検定
12. 分散分析①
13. 分散分析②
14. 実験計画法
15. まとめ
16. 定期試験

<成績評価方法>

授業中に実施する課題（20%）、中間試験（20%）、定期試験（60%）により評価する。

<教科書・参考文献>

特に教科書や参考文献は指定せず、必要な資料は授業中に配布する。

<受講に当たっての留意事項>

基礎科目「統計と情報 1」を履修していることが望ましい。
計算機を用意すること。

<学習到達目標>

- ・日常生活にかかわる調査や実験を計画し、データを収集して解析する方法を身につけること。
- ・データの解析結果から、得られた情報を理解し、活用できるようになること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年 2 年	基本情報演習 2	2	後	谷 賢太郎 桑原 悟（情報システム）
22～24年			基本情報処理特論 2			
21年度以前						

選択

<授業目的>

経済産業省認定の「基本情報技術者試験」は、テクノロジー・マネジメント・ストラテジの3分野に関する基礎的な知識・技能を問う試験であり、情報を専攻する学生にとって、学習の進捗を測る一つのツールであるといえます。この授業では、これらの分野のうち、テクノロジー分野の範疇である「アルゴリズムとデータ構造」、「ソフトウェア開発」に関する知識習得と理解を目的とします

<各回毎の授業内容>

本講座の各回のテーマは次の通りです。

1. 受講ガイダンス

2. コンピュータとアルゴリズム

3. アルゴリズム演習①

4. アルゴリズム演習②

5. アルゴリズム演習③

6. ソフトウェアとデータ構造

7. データ構造関連演習①

8. データ構造関連演習②

9. データ構造関連演習③

10. ソフトウェア開発①

11. ソフトウェア開発②

12. ソフトウェア開発③

13. ソフトウェア開発④

14. 総合演習①

15. 総合演習②

ソフトウェア開発においては、受講者の当該資格試験の問題選択の傾向に合わせ内容を調整することがある。

<成績評価方法>

毎回の出席を基本とし、成績は授業での演習課題により評価します。

<教科書・参考文献>

当該試験の動向に沿った最新の教材を授業開始前に案内する。

<受講に当たっての留意事項>

「基本情報技術者試験」の過去問題はipaのWebページから入手でき、予習復習に有用です。

<学習到達目標>

基本情報試験午前及び午後問題（アルゴリズムとデータ構造, ソフトウェア開発）で、2 / 3 以上の正解率を確保できる。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	簿記特論 2	2	後	山下 功（情報システム）

選択、24年度以前自由（卒業要件に含まない）

<授業目的>

簿記は、企業規模の大小や業種、業態を問わずに、日々の経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする技能です。

「日商簿記検定」は日本で最も普及した会計系資格試験です。この授業を履修することによって、日商簿記検定2級に合格可能な知識を修得することを目標とします。

<各回毎の授業内容>

- | | | |
|------------|---------------|---------------|
| 1. 現金と有価証券 | 6. 工業簿記の概要 | 11. 総合原価計算(2) |
| 2. 債権・債務 | 7. 原価の費目別計算 | 12. 標準原価計算(1) |
| 3. 特殊商品売買 | 8. 個別原価計算 | 13. 標準原価計算(2) |
| 4. 固定資産 | 9. 原価の部門別計算 | 14. 直接原価計算(1) |
| 5. 特殊仕訳帳 | 10. 総合原価計算(1) | 15. 直接原価計算(2) |
| 16. 期末定期試験 | | |

<成績評価方法>

期末定期試験80%、第2～15講の授業中に実施する復習テスト20%で評価します。

<教科書・参考文献>

第1～5講では、以下の教科書を使用します。第1講が始まる前に購入してください。

東京リーガルマインド（2009）『20日で合格ろぞ! 日商簿記2級光速マスターテキスト商業簿記』

東京リーガルマインド（2009）『20日で合格ろぞ! 日商簿記2級光速マスター問題集商業簿記』

第6～15講では、以下の教科書を使用します。教科書販売期間中に購入してください。

東京リーガルマインド（2009）『20日で合格ろぞ! 日商簿記2級光速マスターテキスト工業簿記』

東京リーガルマインド（2009）『20日で合格ろぞ! 日商簿記2級光速マスター問題集工業簿記』

<受講に当たっての留意事項>

この授業では、予習及び復習が充分になされていることを前提としています。

日商簿記検定で使用可能な電卓を持参してください。

この授業には、商業簿記の一部の項目を含みませんので、合格の為には自習も必要です。

<学習到達目標>

日商簿記検定3級に合格可能な知識を有する者が、2級に合格可能な知識を修得すること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	FP特論 2	2	後	田中陽子

<授業目的>

ファイナンシャルプランニングの基礎を学び国家資格3級FP技能士資格に挑戦できる力を養う

<各回毎の授業内容>

- | | | |
|----|-------------------------------|---------------------------|
| 1 | 金融資産運用設計 3 | 債権及び株式投資の基礎知識 |
| 2 | 金融資産運用設計 4 | その他の商品の基礎およびマネーポートフォリオの基礎 |
| 3 | 金融資産運用設計 5 | 金融商品の税金、預金保険制度と投資家保護 |
| 4 | タックスプランニング 1 | 日本における税制の概要 |
| 5 | タックスプランニング 2 | 所得税の概要 |
| 6 | タックスプランニング 3 | 損益通算、所得控除、所得税の確定申告 |
| 7 | 暮らしと不動産 1 | 不動産および不動産取引の基礎 |
| 8 | 暮らしと不動産 2 | 不動産に関する行政法規 |
| 9 | 暮らしと不動産 3 | 不動産の有効活用 |
| 10 | 暮らしと不動産 4 | 不動産と税金 |
| 11 | 相続事業承継 1 | 贈与と税金 |
| 12 | 相続事業承継 2 | 民法と相続 |
| 13 | 相続事業承継 3 | 相続と税金 |
| 14 | 相続事業承継 4 | 相続財産の評価 |
| 15 | 相続事業承継 5 | 相続対策とその他 |
| 16 | 課題によるキャッシュフロー表の作成（定期試験に代えて提出） | |

<成績評価方法>

出席率を含め授業態度60%、レポート提出40%を目安として総合的に評価する。

<教科書・参考文献>

前期購入の3級FPテキストⅠ、Ⅱ使用

<学習到達目標>

お金や財産に係る生活設計の基礎知識の中から金融資産運用設計後半、税金、不動産、相続の基礎知識を学び前期後期授業と合わせ国家資格3級FP技能士受験レベルまでを到達目標とする。

2年システム専門科目（後期）

情報論
プログラミング環境
プログラミング技術特論
生産企画と管理
流通と物流
管理会計
生理機能と情報
行動科学
生活統計／生活情報
地域統計
オペレーションズリサーチ1

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	情報論	2	後	高木義和（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

情報をめぐるさまざまな考え方を概観し、情報を組織や社会における人・物・金に並ぶ重要な資源あるいは資産ととらえ、情報を効果的に活用できるようになるための考え方について理解を深める。情報の概念、情報の基本的性質、人の行為と情報の関係を説明する。情報の活用の際に生じる問題点とその対処方法を紹介する。さらに情報社会と知識基盤社会の概念をもとに個人による情報の利用について考える。

<各回毎の授業内容>

1 言葉としての情報

2 情報の概念

3

4 人の行為と情報

5

6

7

8 情報の活用

9

10

11 情報の基本的性質

12

13 情報社会と個人の情報利用

14

15

16 定期試験

①データと情報と知識の概念的把握

②情報と知識構造

①意志的行為と身体的行為

②意志、意図と情報

③企図と情報

④意思決定、行動と情報

①意志の確定と目的・目標段階の問題点と対応

②情報収集（選択・整理・加工・分析）段階の問題点と対応

③意思決定、行動段階の問題点と対応

①人による情報の受発信とメディアの存在

②情報のサイクルと情報の個別化

①情報社会のイメージ

②個人における情報利用の視点1

③個人における情報利用の視点2

<成績評価方法>

言葉の概念（30%）,人の行為と情報の関係（30%）, 情報社会と個人の情報利用（30%）,提出課題（10%）により評価する。

<教科書・参考文献>

必要に応じ資料を配布する。

<受講に当たっての留意事項>

ノートを良く整理すること。教室の前方で受講すること。後方で受講する場合は私語を禁止します。

<学習到達目標>

・ 情報という言葉の概念を理解できること

・ 人の行為と情報の関係を理解できること

・ 情報社会において個人が情報利用するための視点を理解できること

（関連する学習・教育到達目標：G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	プログラミング環境	2	後	河原和好（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

プログラミングを行う際に必要な環境（OSやアプリケーション及び開発環境）について学習する。まずはUNIX環境におけるファイルシステムやシェルの仕組み及び操作法を学習する。さらにプログラミングの演習課題を実施することにより、プログラミング及びソフトウェア開発手法の基礎についても学習する。

<各回毎の授業内容>

1. プログラミング環境について、UNIXについて
2. UNIX環境1：UNIXの基本操作、Telnet、基本コマンド1
3. UNIX環境2：ファイルとディレクトリ、基本コマンド2
4. UNIX環境3：テキストエディタ、正規表現とパイプ
5. UNIX環境4：X Window System、応用コマンド1
6. UNIX環境5：Windowsとの連携、FTP、応用コマンド2
7. UNIX環境6：ユーザーの権限とアクセス権
8. UNIX環境7：シェルスクリプト、中間レポート
9. プログラミング1：プログラミング言語の諸概念、プログラムの基礎（入出力、変数、演算）
10. プログラミング2：制御構造とアルゴリズム
11. プログラミング3：データ構造
12. プログラミング4：関数
13. プログラミング5：ソフトウェア開発1の基礎（仕様と設計）
14. プログラミング6：ソフトウェア開発2の基礎（実装とテスト）
15. プログラミング7：まとめ
16. 期末レポート

<成績評価方法>

中間レポートを40%、期末レポートを60%の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

- ・資料を配付する（学内専用ウェブページから授業前に各自ダウンロードしておくこと）
- ・参考資料は講義中に紹介する

<受講に当たっての留意事項>

- ・プログラミングに関する演習や講義科目を履修済みであることが望ましい
- ・連絡事項や追加情報はウェブページに掲載する。<http://www.nuis.ac.jp/~kawahara/>

<学習到達目標>

- ・UNIX環境を理解し活用できるようになる（中間レポート：40%）
- ・プログラミングとソフトウェア開発手法の基礎について学習し活用できるようになる（期末レポート60%）

（関連する学習・教育到達目標：J）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	プログラミング技術特論	2	後	石井忠夫（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

ソフトウェア設計における抽象化技術としてオブジェクト指向分析／設計／プログラミングを取り上げ、ソフトウェア開発における一連の流れを解説する。本講義においては、特に、オブジェクト指向分析／設計のための言語としてUML (UnifiedModelingLanguage)、また、オブジェクト指向プログラミング言語としてJavaを用いて説明する。また、受講生には実際にJavaプログラミングを体験してもらう。

<各回毎の授業内容>

1. ソフトウェア開発の入門（ソフトウェア開発の基礎、講義の位置付け）

2. オブジェクト指向の基礎概念（モジュール性、抽象データ型、クラス）

3. オブジェクト指向プログラミング言語とJavaの使い方

4. Javaプログラミング1（制御構造と配列）

5. Javaプログラミング2（クラスの定義、カプセル化、多重定義）

6. Javaプログラミング3（クラスの継承、再定義）

7. Javaプログラミング4（抽象クラス、インターフェイス、例外）

8. オブジェクトの静的モデル（クラス、関連、継承、集約とコンポジション）

9. オブジェクトの動的モデル（ユースケース分析、シナリオ分析、シーケンス図）

10. 酒屋倉庫問題（ユースケース分析とクラス図）

11. 生成に関するデザインパターン（Factory,Singleton,Prototype）の例

12. 構造に関するデザインパターン（Adapter,Composite）の例

13. ソフトウェア作成演習課題の説明

14. 振舞いに関するデザインパターン（Observer,Chainofresponsibility）

15. ソフトウェアテストとコンポーネント指向プログラミング

16. 定期試験

<成績評価方法>

レポート3回の合計が30点、ソフトウェア作成演習課題1回が10点、および期末試験が60点の合計点で評価する。

<教科書・参考文献>

・毎回、講義資料を配布する。

・参考文献: 1）高橋麻奈著:「やさしいJava」第3版（フトバンク出版2009年）2,730円

2）マーチン・ファウラー著、羽生田栄一監訳:「UMLモデリングのエッセンス第3版（翔泳社、2005年）2,400円

<受講に当たっての留意事項>

・既に、情報処理演習C1を履修していることが望ましい。

・レポート課題の演習時に、自ら積極的に取り組む態度が必要となる。

<学習到達目標>

ソフトウェア開発の一連の作業手順を理解し（30％）、また、小規模の課題については自らオブジェクト指向分析／設定を行い（40％）、課題を解決する能力（30％）を習得する。

（関連する学習・教育目標: D、J）平成24年度生以前

（関連する学習・教育目標: J）平成25年度生以降

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	生産企画と管理	2	後	佐々木桐子（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

24年度以前（選択）、25年度以降 情報コース（選択）、経営コース（選択）

<授業目的>

生産の概念、歴史、さらに生産企画（計画）や生産管理の諸手法を学習する。具体的には、生産における物の流れ、情報の流れ、価値（原価）の流れを理解し、生産管理の史的考察をおこない、科学的なアプローチとして意思決定の諸手法を習得し、生産における諸問題の解決案を提案する。

<各回毎の授業内容>

1. 生産の概念	生産, 生産要素, 生産工程, 生産財, 生産性
2. 生産管理の史的考察①	社会の変遷, 成行管理, 課業管理（小テスト①）
3. 生産管理の史的考察②	同時管理, 自己制御管理, システム管理（小テスト②）
4. 大量生産方式の起源と発展①	初期のアメリカ自動車産業（小テスト③）
5. 大量生産方式の起源と発展②	初期の日本自動車産業, トヨタ生産方式（小テスト④）
6. 生産の形態, 需要予測	分類, 見込生産と受注生産 需要予測のモデル（小テスト⑤）
7. 生産計画①	種類, 戦略（小テスト⑥）
8. 生産計画②	長期生産計画（小テスト⑦, レポート課題）
9. 生産スケジューリング①	2工程フローショップスケジューリング（小テスト⑧）
10. 生産スケジューリング②	多工程フローショップスケジューリング（小テスト⑨）
11. 在庫管理①	ABC在庫管理, 経済発注量（小テスト⑩）
12. 在庫管理②	定量発注法, 定期発注法（小テスト⑪）
13. 工程計画	評価基準, 最適工程計画（小テスト⑫）
14. ロジスティクス	概念（物流とロジスティクス）, 変遷（小テスト⑬）
15. 総括	
16. 定期試験	

<成績評価方法>

毎回の小テスト（20％）、自己学習によるレポート課題（20％）、および定期試験（60％）で評価する。

<教科書・参考文献>

・教科書:「生産企画と管理 講義ノート」を使用する。

・参考文献:人見勝人著 『新・生産管理工学』 コロナ社、1997。

<受講に当たっての留意事項>

・各自、電卓を持参すること。

<学習到達目標>

・企業における生産の管理全般を理解し、現実の問題へと応用することができる。（小テスト:10％、レポート:20％、定期試験:30％）

・管理に関わる諸問題を発見し、解決する能力を身につけることができる。（小テスト:10％、定期試験:30％）

（関連する学習・教育到達目標:I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	流通と物流	2	後	岸野清孝（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

社会は、大きく生産、流通、消費の3つの領域に分けられる。流通の働きにより財が生産から消費へと移転し、財の所有権の移転を「商流」、財の場所的・時間的移転を「物流」という。企業においては流通・物流コストは割高が実態であり、効果的に管理するためのノウハウ・技法などを学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1. 流通と物流の全体概要説明
2. 流通とは何か:流通機構とその社会的役割、流通とは、商流と物流、流通機構とは
3. 流通構造と流通チャネルの基本概念:流通構造と流通経路、閉鎖的チャネルと開放的チャネル
4. 日本の流通構造および流通政策の概要:自由な流通活動、構成取引、統制・規制、消費者保護
5. 流通チャネルにおける取引慣行と情報ネットワーク化
6. 流通業の機能分類と流通戦略の事例:販売方法、組織管理、物流方法、商品ブランド、取引方法
7. 流通構造の変遷:小規模流通、チェーンストア、量販店の拡大、専門店チェーン、流通構造変化
8. 物流とは何か:物流7機能、物流センターの必要性
9. 輸送機関の分類と動向:輸送機関の分類、メリット、トラック運送の運賃（レポート課題1）
10. 物流における在庫管理:物流ネットワークと在庫、在庫の種類、在庫管理方式
11. 物流情報システム:倉庫管理システム、配車配送システムの考え方、特徴、効果
12. 物流戦略と共同化:共同物流の背景、共同物流の有効性・影響、サードパーティロジスティクス
13. 物流戦略と企業同盟:製造・卸・小売の物流同盟、SCM（レポート課題2）
14. 国際貿易・輸出入業務と物流:貿易とは、通関制度、輸出入業務と信用状の考え方
15. 事例研究:小売業の経営効率化の比較
16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験:80％と自己学習によるレポート課題:20％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書:岸野清孝著「流通と物流」静岡学術出版（2007年）を使用する。

<学習到達目標>

- ・流通と物流の仕組み（流通機構、流通チャネル、流通構造、取引慣行、輸送、在庫管理など）を理解し、基本的な知識を習得する。（定期試験:25％）
- ・流通と物流の内容と役割およびその中の情報活用の方法を理解し説明できるようになる。（定期試験:25％）
- ・流通と物流の効率化の動向（共同化、サプライチェーンマネジメントなど）を学び、それらが問題解決にどのように役立つかを理解し説明できるようになる。（定期試験:35％）
- ・自己学習による調査により流通と物流について、さらに理解を深める（レポート:20％）

（関連する学習・教育到達目標：I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	管理会計	2	後	山下 功（情報システム）
22～24年度						
21年度以前						

24年度以前選択、25年度以降経営コース必修

<授業目的>

管理会計は、企業の目標を達成するために会計情報を認識、測定、集計、分析、解釈する一連のプロセスです。それゆえ、財務会計が企業外部への報告を目的とするのに対して、管理会計では内部報告目的が重視されます。また、コンピュータの性能と通信技術が発展したことにより、経営情報システムと会計との結びつきが一層強くなっています。この授業を履修することによって、管理会計の基本的な知識を習得することを目的とします。

<各回毎の授業内容>

1. 管理会計とは	9. 個別計画意思決定(1)
2. 標準原価計算と原価統制(1)	10. 個別計画意思決定(2)
3. 標準原価計算と原価統制(2)	11. 設備投資意思決定(1)
4. 直接原価計算とCVP分析(1)	12. 設備投資意思決定(2)
5. 直接原価計算とCVP分析(2)	13. 経営情報システムと会計
6. 予算管理と短期利益計画	14. 管理会計の実務(1)
7. 事業部制と会計	15. 管理会計の実務(2)
8. 長期利益計画	16. 期末定期試験

<成績評価方法>

期末定期試験80%、第2～15講の授業中に実施する復習テスト20%で評価します。

<教科書・参考文献>

教科書として、拙著テキスト『管理会計前編・後編』を使用します。授業中に配付します。

<受講に当たっての留意事項>

授業で計算問題を解くことがありますので、電卓を持参してください。なお、期末定期試験では、使用できる電卓が制限されます。

<学習到達目標>

企業内部で計画と統制を行う際に、管理会計から得られる情報がどのように役に立っているかを理解すること。（期末定期試験40%、復習テスト10%）

企業内部で意思決定を行う際の管理会計の役割を理解するとともに、経営情報システムと会計との関係や、管理会計の実務についての知識を習得すること。（期末定期試験40%、復習テスト10%）

（関連する学習・教育目標:I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	生理機能と情報	2	後	藤瀬武彦（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

日本は近い将来に極端な少子高齢社会を迎え、医療費や介護費が高騰してさらに国民負担の重くなることが予想されることから、国民一人一人が健康体力づくりや健康診断に関する知識をもつことは必要である。また、生涯にわたり健康を保持するためには医療機関との関わりが欠かせない。従って、この授業では身体の機能、体力評価や健康診断に関すること、さらには医療システム（問題点や情報公開）などについても言及し、身体の自己管理能力や患者力を身に付けることが目的である。

<各回毎の授業内容>

1. はじめに

……少子高齢社会における健康体力づくりの意義

2. 生活習慣病

……脳梗塞, 心筋梗塞, 糖尿病, 高血圧, 高脂血症

3. 身体組成

……肥満度（BMI・体脂肪率）の評価, 隠れ肥満とは

4. 体 液

……膠質浸透圧, 脱水と水分補給, 血液の組成

5. 血 液①

……赤血球の酸素運搬能, 貧血, 平均赤血球指数（MCV, MCH, MCHC）

6. 血 液②

……白血球の機能（液性免疫と細胞性免疫）, 後天性免疫不全症候群（AIDS）

7. 心機能①

……心臓の構造, 心拍数と運動強度・RPEとの関係, 心電図

8. 心機能②

……心電図の評価, 異常心電図, AED（自動体外式除細動器）

9. 循 環

……心拍出量, 血圧の測定・評価, メディカルチェック

10. 呼 吸

……スパイロメトリー, 努力肺活量（1秒率）, ガス交換（拡散能力）

11. エネルギー代謝

……VO₂, VCO₂, RQ（呼吸商）, 基礎代謝, 最大酸素摂取量

12. 物質代謝

……糖質・脂質・蛋白質の代謝

13. 骨格筋

……筋線維組成と運動能力, 筋力・筋肥大, プロテインスコア

14. 内分泌・生殖

……各ホルモンの作用, 男女の生殖生理, 成人病胎児期発症説とは

15. 医療システム

……医療の問題点（医師免許制度, 医療過誤と情報公開）, 患者力

16. 試 験

<成績評価方法>

この授業における評価は、定期試験（100点満点）の点数により行う。なお、試験ではノート・資料等の持ち込みは一切できない。

<受講に当たっての留意事項>

特になし。

<学習到達目標>

(1)基本的な生理機能や健康体力づくりに関する知識を習得する（約70％）。

(2)健康診断に関する知識を習得し、また医療システムに対する問題意識をもつ（約30％）。

（関連する学習・教育目標：H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	行動科学	2	後	小宮山智志（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

"現実"から、「なぜ～だろうか」という"問い"を考えて、つい見逃してしまいがちな人間行動のしくみに目を向けて原因を推理し（仮説を考え）、今後の行動や企画・対策を考えることを学びます。これは人類に残された最大の仕事です。覚えること、解答を計算することはコンピュータには勝てませんが問いや仮説を考えることは人類にしかできません。

仕事や人生で、自分や愛する人々のことを真剣に考え"現実"に背を向けずに行動を決定するとき、私が実践してきた、そして人類がたどり着いた"ある一つの方法"をこの講義で実際に皆さんに体験してもらいます。皆さんの先輩が自分の関心に基づいて、問い・仮説を真剣に考えた卒業論文を題材にしています（皆さんの関心に合わせて、題材とする論文は変更されることがあります）。

<各回毎の授業内容>

講義は2回1セットで行われます。1回目は、それぞれの課題について個人またはグループで考え、2回目は皆さんの考えを紹介しながら解説し、さらにグループワークを行います。

*『風の谷のナウシカ』（スタジオジブリ）で解き明かす"社会的ジレンマ"

1～3 周りの人々の行動と自分の行動の関係: 実際にゲームを通して、考えて行きます。

*"杉下右京（テレビ朝日『相棒』）"を超えろ: 人間行動の原因を推理する

4・5 観察して仮説をたてる

6・7 仮説から観察する

8・9 現実の問題で考えよう: あなたはビジュアルタイプ?! 文字タイプ?!

*複数の仮説を比較

10・11 なぜ私はいつも同じ店に行くのか? 店舗選択の要因解明

12・13 再び社会的ジレンマ どうしたら協力できるのか?

『デスノート the Last name』（日本テレビ） & 『ヒューマン なぜ人間になれたのか』（NHK）

14～16 最終レポートに向けてのグループワーク

<成績評価方法>

成績は、第1～15回のグループワーク・個人ワーク（35%）と最終レポート（65%）によって、評価します。オリジナリティを高く評価します。

<教科書・参考文献>

参考文献: チャールズ・A・レイブ, ジェームズ・G・マーチ（佐藤嘉倫[ほか]訳）

『社会科学のためのモデル入門』ハーベスト社 1991年

小林淳一/木村邦博編『考える社会学』ミネルヴァ書房 1991年

<受講に当たっての留意事項>

1. 体調不良、忌引き、就職活動、部活動などで欠席した場合、第16回の授業での個人・ワーク・グループワークを行うことで、欠席した分の個人ワーク・グループワークを補うことが出来ます。

2. 授業中、私が説明しているときは、誰も話してはいけません。小声でもダメです。私が聞こえなくてもあなたの周りの人が迷惑です。個人ワーク・グループワークのときは、どんどん周りの人と話してください。友達の意外なアイデアを楽しみ、また友達を楽しませてあげてください。

<学習到達目標>

1) 観察した結果を矛盾なく説明できる仮説を考えられるようになってください（グループワーク 1～9回・最終レポート）。

2) 一つの現象について複数の推理（仮説）を考えられるようになってください（グループワーク 10～15回・最終レポート）。

3) 自分の関心に基づいて問いを見つける方法を身につけてください（最終レポート）。

（関連する学習・教育到達目標: H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	生活統計	2	後	近山英輔（情報システム）
22～24年						
21年度以前	共 通	1 年	生活情報			
<p>選択</p> <p><授業目的></p> <p>人間、生物、経済、社会、環境の作る複雑ネットワークでは日々膨大な情報が生み出されており、現代はビッグデータの時代である。これらの現象の全体像を、少ない数値の組で把握するための効果的な方法が統計的方法である。そのような人間・社会に関わるデータを、統計学と情報技術を用いて読み解く例を学ぶ。</p> <p><各回毎の授業内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 記述統計学 2. 可視化 3. 人間・社会の様々な統計データ(1) 4. 人間・社会の様々な統計データ(2) 5. 確率変数 6. 離散確率分布 7. 連続確率分布 8. 多変量データ相関の解析例(1) 9. 多変量データ相関の解析例(2) 10. 統計的仮説検定 11. 平均値の検定 12. 平均値の差の検定(1) 13. 平均値の差の検定(2) 14. 人間・社会の複雑ネットワーク(1) 15. 人間・社会の複雑ネットワーク(2) 16. 定期試験 <p><成績評価方法></p> <p>定期試験100％で評価する。</p> <p><教科書・参考文献></p> <p>特になし</p> <p><受講に当たっての留意事項></p> <p>特になし</p> <p><学習到達目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間・社会の様々な統計データや複雑ネットワークの例を説明できる（30％） ・人間・社会データの平均値、分散、標準偏差を計算できる（30％） ・人間・社会データの平均値の差の検定を計算できる（30％） ・確率変数とさまざまな確率分布について説明できる（10％） <p>（関連する学習・教育到達目標：H）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	地域統計	2	後	藤田晴啓（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

地域を理解し研究する手法に「地域分析」がある。地域分析では、統計および地理データを使い、地域の計量的分析および空間的分析を行い、社会経済構造の類型化、あるいは地域社会や産業構造をモデル化する研究手法が主として使われる。特に、地域の計量的分析および社会経済構造の類型化では多変量解析という統計手法が多く用いられる。対象地域の統計データを収集し、多変量解析を行い、その結果をモデル化、地図化することにより、地域社会経済構造をさらに深く調べることが可能となる。本授業では計量的分析として、地域の統計データを処理・分析する一連の手法を学習し、「地域分析」のてがかりとする。

<各回毎の授業内容>

1. 授業の目的、めざすところ、全15回の内容等ガイダンス
2. 地域統計データと多変量解析
3. 多変量解析と地理時行列、回帰分析-1
4. 人口増加率の経年変化、重回帰分析
5. 地域構造を知るための因子分析（レポート課題1）
6. 地域事象類型化のためのクラスター分析
7. クラスター分析つづき、正準相関分析
8. 複数の非説明変数群に対応する正準相関分析
9. 正準相関分析応用事例、多次元尺度構成法（レポート課題2）
10. 類似性を地図に復元できる多次元尺度構成法
11. 多次元尺度構成法事例、地価が転居に与える影響
12. 質的データ解析のための数量化理論とダミー変数
13. 数量化理論Ⅰ類ビールの出荷量予測・数量化Ⅱ類
14. 数量化理論Ⅲ類および数量化理論Ⅳ類（レポート課題3）
15. パス解析, 判別分析, Q解析, 授業のまとめ
16. 定期試験

<成績評価方法>

定期試験70％、レポート課題30％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書:地域分析－地域の見方・読み方・調べ方－（村山佑司・古今書院）

参考図書:地域分析入門（大友篤・東洋経済新報社）

<受講に当たっての留意事項>

私語厳禁、まわりに迷惑を与えるので、注意は1回まで（2回目で退席を勧告します）。

<学習到達目標>

- ・地域統計のデータ構造、主要な多変量解析と応用事例を理解習得する（定期試験:25％）。
- ・主要な多変量解析事例による地域の社会・経済構造の類型化分析を把握する（定期試験:25％）。地域統計に関する変数を学び、それらをどのように解析することにより、問題解決に役立つかを理解し説明できるようになる（定期試験:20％）。
- ・主要な多変量解析事例による地域の社会・経済構造の類型化分析を復習する（レポート:30％）（関連する学習・教育到達目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	2 年	オペレーションズ・リサーチ1	2	後	白井健二（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

コーポレートファイナンスを通して企業価値についての考え方を修得する。将来, 企業の財務部門, 金融機関, 自治体などを志望する学生には特に有益な科目を目途とする。また, コーポレートファイナンスを理解するためには確率論を修得する必要がある。併せて, 確率論の授業も実施する。

<各回毎の授業内容>

1、事象と確率（集合, 順列, 組み合わせ, 確率）

2、離散系確率変数と確率関数

3、ベルヌーイ分布

4、二項分布

5、連続系確率変数

6、連続系確率密度関数

7、ポアソン分布

8、正規分布(1)

9、正規分布(2)

10、金融工学基礎（将来価値, 現在価値, 金利）

11、コーポレートファイナンス（リスクとリターン）

12、コーポレートファイナンス（事業価値の計測）

13、コーポレートファイナンス（資金調達と企業価値－1－）

14、コーポレートファイナンス（資金調達と企業価値－2－）

15、コーポレートファイナンス（資金調達と企業価値－3－）

16、定期試験

<成績評価方法>

毎回出席を取る。期末試験:60％と適時実施する確認テスト:40％の配分で評価する。

<教科書・参考文献>

教科書および配布資料

教科書:コーポレートファイナンス入門, 砂川伸幸著, 日本経済新聞出版社,
ISBN 978-4-532-11035-2

<学習到達目標>

・事象と確率（集合, 順列, 組み合わせ, 確率）を修得する。（定期試験: 5％, 確認テスト: 5％）

・離散系確率変数と確率関数（含むベルヌーイ分布, 離散系モーメント母関数）の問題を解くことを修得する。（定期試験: 5％, 確認テスト: 5％）

・連続系確率変数と確率密度関数（含む指数分布, 連続系モーメント母関数と確率変数の変換）の問題を解くことを修得する。（定期試験:20％, 確認テスト:10％）

・ポアソン分布, 大数の法則と中心極限定理および正規分布の理解と問題を解くことを修得する。（定期試験:10％, 確認テスト:10％）

・金融工学基礎（将来価値, 現在価値, 金利）とコーポレートファイナンスを修得する。（定期試験: 20％, 確認テスト:10％）

3・4年システム専門科目（後期）

情報システム開発
情報セキュリティ
人工知能
データベース
ベンチャービジネス
社会理論と調査法
生活と法律
シミュレーション
ビジネス英語入門2

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	情報システム開発	2	後	小林満男（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

コンピュータを活用して企業の情報システム化を進めるための方法論と手順について学ぶ。情報システムの導入計画から、分析、設計、製造、テスト、運用・保守にいたるライフサイクルの中で、どのような仕事が行われるのか、どのような組織でどのような管理が必要なのかを理解する。演習では提案依頼書に基づき、プロジェクトとして業務の仕組みを調査・分析しコンピュータを活用した情報システム化の提案を行うことを通し、計画的に目標を達成することを体得する。

<各回毎の授業内容>

1 オリエンテーション（企業経営と情報システム）

2 ソフトウェアエンジニアリング（技術者の仕事、ソフトウェアエンジニアリングの知識体系）

3 ソフトウェアの開発プロセス（プロセスとプロダクト、ソフトウェア開発モデル）

4 分析と設計（ソフトシステムアプローチ、構造化分析・設計、モデルとモデリング）

5 プロジェクト管理（モダンプロジェクトマネジメント、PMBOK、PMI、PMP）

6 システム提案書の作成方法（提案依頼書から情報システム化提案書作成までのステップ）

7 情報システム開発の実際（特別講義）

8 チーム学習①－1 プロジェクト発足（方針・役割分担等）[講義:チーム学習の進め方]

9 チーム学習①－2 課題、現状分析[講義:要求分析、要件定義]

10 チーム学習②－1 提案システムの検討[講義:処理方式、HW/SW/DBシステムの検討]

11 チーム学習②－2 提案システムの見積り[講義:情報収集、各種見積り方法]

12 チーム学習③－1 費用対効果の検討[講義:IT投資目的、評価の手法、TCO]

13 チーム学習③－2 提案書作成、提案書レビュー、プレゼン準備[講義:品質管理とレビュー]

14 チーム学習④－1 提案書プレゼン[講義:提案（書）の評価方法]

15 チーム学習④－2 提案書・チーム学習の講評、チーム学習のまとめ

16 期末試験

<成績評価方法>

・情報システムを開発する方法についての理解度と、コンピュータを使って業務の効率化を行うシステムをモデリングしデザインする能力を期末試験結果で評価する（持込み不可）(60%)。

・チーム学習でのチームとしての提案書、プレゼンテーション、プロジェクトマネジメントおよびチームの成果に対する個人の貢献度を相互アンケートなどにより評価する（40%)。

<教科書・参考文献>

教科書:鶴保・駒谷共著「ソフトウェアエンジニアリングの授業1,2」翔泳社 各2050円

参考書:永井昭弘著「RFP&提案書 完全マニュアル」日経BP社2205円

<受講に当たっての留意事項>

・授業に出席することは単位認定の必須条件です。欠席が1／3をこえた場合は単位認定しません。

・チーム学習の期間は隔週開催となります。チームによる自主的な学習を期待します

<学習到達目標>

・情報システムを開発する手順を理解し、開発過程で発生する問題点に対する問題解決の方法等を考えることができる。(40%)

・SEやプロジェクトリーダーとして、与えられた制約下においてチームで目標を持って計画的に仕事を進め、進捗の把握、修正するための知識を理解し、説明と実施ができる。(30%)

・社会（顧客）の要求を解決するため、問題の認識、制約条件の特定、及び問題を分析しモデル化を行い、情報処理上の要件としてまとめるデザインの基本的な能力が身につく。(30%)

(関連する学習・教育到達目標:E,G)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	情報セキュリティ	2	後	桑原 悟（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

情報セキュリティは、IT社会を支える重要なものであることには疑問の余地がない。この授業では、組織にとって情報セキュリティが必要な背景、情報セキュリティの実現に利用されている個々の要素技術、その技術を具現化した製品の適用と利用技術及び、組織経営にとっての情報セキュリティの位置付けについて学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1）授業ガイダンス及びアンケート

2）ネットワークとビジネス（情報セキュリティの必要性）

3）組織の置かれた状況

4）情報セキュリティポリシー

5）リスクマネジメント1（リスク分析）

6）リスクマネジメント2（リスク対応）

7）組織と情報セキュリティ施策まとめ

8）情報セキュリティとITC産業界（外部講師を招聘する場合がある）

9）ネットワーク構成とセキュリティ（ファイアーウォール）

10）ネットワーク構成とセキュリティ（侵入検知システム、セキュリティ設定、認証、その他）

11）ネットワーク構成とセキュリティ（暗号化、公開鍵技術基盤など）

12）ネットワーク構成とセキュリティ（コンピュータウイルス）

13）情報セキュリティ監査、脆弱性検査、コンティンジェンシープランなど

14）標準、規格、関連の法令、制度

15）情報セキュリティ技術まとめ

16）定期試験

<成績評価方法>

定期試験（90%）及び課題（10%）により評価を行う。

<教科書・参考文献>

{新技術の登場が盛んな分野であるので、授業開始時期に合わせて最適なものを選定し指定する}

<受講に当たっての留意事項>

ネットワークコンピューティングの授業内容の理解及び、数学1、数学2、テレコミュニケーション、組織と経営の単位を取得していることが望ましい。授業に集中している学生の邪魔になる行為をするものは退出させる（出席を認めない）。質問は歓迎するので、遠慮なく質問して欲しい。また、この授業は、学内の環境が整備されれば、e-learning ファシリティを用いて行う予定である。

基礎自由科目「数学基礎」の履修を指導された者は、これを履修していることが望ましい。

<学習到達目標>

情報セキュリティが必要な背景、個々の要素技術、製品、利用技術及び、組織にとっての情報セキュリティの位置付けについて理解できる。

（関連する学習・教育到達目標：G）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	人工知能	2	後	中田豊久（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

人工知能とは、コンピュータに人間と同様の知能を持たせようとする技術である。コンピュータに知能を持たせるためには、人間の知識をコンピュータに覚えさせ（知識表現）、それを活用する方法（推論）を実装する必要がある。本講義ではこれらの技術について学ぶ。

<各回毎の授業内容>

1. 人工知能入門

2. 状態空間

3. 探索:縦型探索、横型探索

4. 探索:ダイクストラ法

5. 小テスト1（縦型探索、横型探索、ダイクストラ法）

6. 探索:山登り法、最良優先選択

7. 探索:A*アルゴリズム

8. 小テスト2（山登り法、最良優先選択、A*アルゴリズム）

9. ゲーム木の探索

10. 命題論理:否定、かつ、または、ならば、同値

11. 命題論理:命題の標準化

12. 命題論理:意味木

13. 小テスト3（命題論理）

14. 導出原理、論理による問題解決

15. 小テスト4（導出原理、論理による問題解決）

16. 定期試験

[プログラミング課題]

[プログラミング課題の提出]

<成績評価方法>

小テスト、定期試験以外のすべて日には、授業内で課題を提出する。その課題を全て合わせて10%の割合、定期試験を10%、小テストを50%、プログラミング課題を30%の割合として評価する。但し、授業の進み具合や履修者の理解度に応じて補正を行うことがある。

<教科書・参考文献>

教科書:知識基盤社会のための人工知能入門、國藤進 他、コロナ社、ISBN:978-4-339-03366-3

<受講に当たっての留意事項>

情報論理、情報処理演習C1、C2を履修していることが望ましい。

<学習到達目標>

・問題に回答することと探索することの関係を理解し、探索アルゴリズムを適用する技術を身に付ける。
(小テスト25%、授業内の課題5%、定期テスト5%)

・探索アルゴリズムをプログラミング言語によって実装する技術を習得する。
(プログラミング課題30%)

・問題を論理式によって表わし、推論によって解く技術を理解する。
(小テスト25%、授業内の課題5%、定期テスト5%)

(関連する学習・教育到達目標:J)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	データベース	2	後	槻木公一（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

コンピュータによる情報技術として応用範囲の広いデータベースについて、利用される技術や仕組み、概念、モデルなどについて学習する。 できるだけ理解を促すために事例や例題を多く使用する。特に関係データベースを中心に説明し、主キーや正規化を具体的に理解して、データベース設計、利用における基本技術を習得する。

<各回毎の授業内容>

1 データベースの基本概念

2 情報の表現と概念モデル

3 E R図から関係データモデルへの展開（練習課題レポート）

4 データモデルの種類と構造

5 関係データモデルの定義と表現（練習課題レポート）

6 非正規形リレーションと正規化（練習課題レポート）

7 リレーションスキーマ、キーの概念と主キー

8 一貫性の保証とキー制約

9 関数従属性（練習課題レポート）

10 本質的な関数従属と導出された関数従属

11 高次の正規化の意義と情報無損失分解

12 1NF,2NF,3NF の定義と高次正規化の方法

13 高次の正規化事例（練習課題レポート）

14 RDBMSとデータ操作

15 リレーションの集合演算（練習課題レポート）

16 期末試験

<成績評価方法>

・ 期末試験は各講義に沿った問題を数題出題し、全問の解答を求める。成績は期末試験結果（80%）と、理解を促すため授業中数回実施するレポート（20%）で評価する。

<教科書・参考文献>

・ 参考文献は初回の講義の中で紹介する

・ 適時、プリントを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

・ 配布したプリントを授業中に充実すること。そのままでは理解できない。

<学習到達目標>

・ 情報システム領域の基本的な専門技術として、データベースの概念およびERモデルを理解する。（期末試験とレポート 25%）

・ 関係データモデルの基本的を理解する。（期末試験とレポート 25%）

・ キーの概念、正規化の意義と方法を理解し、具体的なデータベース設計への展開方法を習得する。（期末試験とレポート 40%）

・ データ操作の基本となる集合演算を理解する。（期末試験とレポート 10%）

（関連する学習・教育達成目標:E,J）平成24年度生以前、

（関連する学習・教育達成目標:J）平成25年度生以降

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ベンチャービジネス	2	後	谷本和明（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

起業家（アントレプレナー）にとって最も重要なことは、自己のアイデアを基に市場が受け入れてくれる商品を開発し、事業を成功させることである。起業家の多くは、製品を開発することに集中するが、顧客に対する配慮を忘れている。この顧客に対する配慮の欠如こそが、ベンチャービジネス失敗の90％を超える理由と言える。

本講義では、成功するベンチャーに必須の要件である製品開発プロセスと顧客開発プロセスを習得し、ビジネス・プランの作成を試みる。なお、講義では、起業に必要な科学的理論の紹介と、それらの理論の実践的な応用を思考するケース研究を交互に組み合わせ、習得した理論を即時応用しながらビジネス・プランを完成させる。

<各回毎の授業内容>

1. ベンチャービジネスとビジネス・プラン
2. 起業の問題点1：市場の分析
3. 起業の問題点2：ケース（ウェブヴァン社）
4. 起業の問題点3：キャズムの理論
5. 製品開発プロセスとビジネス・プラン
6. ビジネス・プラン作成のグループワーク 1
7. ビジネス・プラン作成のグループワーク 2
8. ビジネス・プランの中間発表と討議
9. ビジネス・プランの中間発表と討議
10. 顧客開発プロセス1：ケース（ハndsプリング社）
11. 顧客開発プロセス2：ケース（ファースト・オフィス社）
12. 顧客開発プロセス3：ケース（インルック社）
13. ビジネス・プラン作成のグループワーク 3
14. ビジネス・プラン作成のグループワーク 4
15. 定期試験:ビジネス・プランの発表と討議
16. 定期試験:ビジネス・プランの発表と討議

<成績評価方法>

ビジネス・プラン作成:50%、グループワーク（4回）:計40%、討議・発言:10%の配分で評価する。

<参考文献>

バブソン大学「コーポレート・アントレプレナーシップ」野村総合研究所 2001年ティモンズ／千本・金井訳「ベンチャー創造の理論と戦略」ダイヤモンド社 1999年

<受講に当たっての留意事項>

グループでビジネス・プランを作成するには、グループ内の役割分担と個々人の貢献度が大きなカギとなる。グループ内の調和と個々人の主張や自主的な貢献のバランスを習得してもらいたい。

<学習到達目標>

- ・製品開発と顧客開発プロセスを考察する（中間・最終発表50％）
- ・グループ内での役割と個人の主張のバランスを習得する。（グループワーク40％）
- ・ケースを通してベンチャービジネスの要点を習得する。（討議・発言10％）

（関連する学習・教育到達目標：I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	社会理論と調査法	2	後	小宮山智志（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

社会理論と調査法では、社会理論と調査法の「間」を学びます。「間」を埋める方法はいくつに分類可能ですが、私たちは、その中の一つ、以下の3ステップをこの授業で学びます。

ステップ1:インタビューで話を引き出す。

ステップ2:引き出した話から、仮説を立てる。

ステップ3:インプリケーションを考えて、再びインタビューし、仮説を改良する。

社会調査（インタビュー）で現実を調べ（ステップ1）、地域のいまに即した「私たちの私たちに
よる私たちのための新しい社会モデル（＝ステップ2・ステップ3における仮説）」を考えるための方
法を学びます（行動科学で学んだ「観察・仮説・インプリケーション」を実践）。

情報社会論では"新しい情報社会"について考察しました。この講義では、"新しい情報社会"を築く
ための具体的な方法論の一部を学びます。あなたの人生を、そしてこれからの社会を真剣に考え、実
りあるものにしてゆく実践のための講義です。

<各回毎の授業内容>

講義は2回1セットで行われます。1回目は、それぞれの課題について個人またはグループで考
え、2回目は皆さんの考えを紹介しながら解説し、さらにグループワークを行います。

1・2 本講義の目的と射程・クラスでのインタビュー練習

3・4 インタビューを計画・実施しよう（実施は授業外での課題となります）

5・6 仮説を立てよう

7・8 インプリケーションと真理表

9・10 調査を企画しよう

11・12 調査の練習と実践

13・14 報告書のまとめ方

15・16 まとめ

<成績評価方法>

成績は、1回～15回の各回の個人ワーク・グループワークによって評価します。オリジナリティ
を高く評価します。

<教科書・参考文献>

教科書:資料を配布します。参考書:以下3点です。

チャールズ・A・レイブ,ジェームズ・G・マーチ（佐藤嘉倫[ほか]訳）『社会科学のためのモデル入門』
ハーベスト社 1991年

佐藤郁哉『フィールドワーク 書を持って街に出よう』新曜社

ウヴェ・フリック（小田博志[ほか]訳）『質的研究入門<人間の科学>のための方法論』春秋社

<受講に当たっての留意事項>

1.体調不良、忌引き、就職活動、部活動などで欠席した場合、第16回の授業での個人・ワーク・グ
ループワークを行うことで、欠席した分の個人ワーク・グループワークを補うことが出来ます。

2.授業中、私が説明しているときは、誰も話してはいけません。小声でもダメです。私が聞こえな
くてもあなたの周りの人が迷惑です。個人ワーク・グループワークのときは、どんどん周りの人と話
してください。友達の意外なアイデアを楽しみ、また友達を楽しませてあげてください。

<学習到達目標>

行動科学で身につけた問い・仮説の発見方法と社会調査・多変量解析などの検証方法を扱う講義の
間をつなぐ講義です。自分の問い・仮説をどのように検証するのかがふさわしいか考える力を身につ
けてください。

（関連する学習・教育到達目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	生活と法律	2	後	下井康史
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>

私たちが日々生活をする中では、およそあらゆる行動・行為が、意識するしないにかかわらず法的にコントロールされている。この授業では、法学の基礎を学びながら、日常生活における法との関わり方や法の使い方を考えていく。

<各回毎の授業内容>

1

法の意義

2

法と規範

3

法規範の特質と機能

4

日本における法の歴史と法意識

5

法学の学び方

6

憲法

7

憲法の基本原則

8

憲法の重要性

9

法と正義

10

法的安定性

11

法の体系・法の種類

12

法の目的と価値基準

13

法解釈と解釈の基準

14

日本の裁判制度と裁判例

15

まとめ

16

期末試験

<成績評価方法>

期末試験による。出席は成績評価の対象とはしないが、5回以上欠席した者には期末試験の受験資格を与えない。

<教科書・参考文献>

教科書は指定しない。できるだけ新しい判の「六法」を入手し持参すること。各項目毎に簡単なレジュメを配布する。

<受講に当たっての留意事項>

特になし。

<学習到達目標>

法学の基礎を身につけ、社会生活における法の役割・意味を理解することができること。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	シミュレーション	2	後	白井健二（情報システム）
22～24年						
21年度以前						

選択

<授業目的>

経済学で取り上げられているテーマを対象にシミュレーションに必要な数理的考え方を身につけることが目的である。シミュレーションの基礎は数学的手法である。出来るだけ判り訳す授業を進めたいと考えている。

<各回毎の授業内容>

1、式の展開と因数分解

2、関数と指数

3、グラフの読み方

4、消費と所得の関係

5、売上最大化（2次関数）

6、利潤最大化

7、生産量と費用の関係（3次関数）

8、多変数関数の最大・最小（偏微分）(1)

9、多変数関数の最大・最小（偏微分）(2)

10、単利と複利の計算

11、割引現在価値と投資(1)

12、割引現在価値と投資(2)

13、資産価格の計算

14、平均と分散

15、総合演習

16、定期試験

<成績評価方法>

講義の理解度チェックに確認テストを3回実施（各10点, 計30点）

定期試験は70点とする。

<教科書・参考文献>

石川秀樹著:「経済学と数学がイッキにわかる！！」

（株）学研教育出版, 定価: 本体2,200円

<受講に当たっての留意事項>

出席を取る。公務員試験を受験する人には受講を薦める。

<学習到達目標>

・数学基礎（授業項目1～3）についての理解（定期試験20%, 確認テスト10%）

・経済基礎（授業項目4～7）についての理解（定期試験20%, 確認テスト10%）

・経済数学（授業項目8～12）についての理解（定期試験20%, 確認テスト10%）

・統計基礎（授業項目13～15）についての理解（定期試験10%）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	3 年	ビジネス英語入門 2	1	後	グレゴリー・ディック
22～24年						
21年度以前						

<授業目的>
本授業では前期に引き続きさまざまな実世界ビジネスと職場の状況における英語をおもしろく、楽しく学んでいきます。TOEIC 英語についても学習します。

<各回毎の授業内容>
1. Orientation & Review of First Semester
2. Welcoming Clients + Internet Search
3. Welcoming Clients + TOEIC Practice
4. Personal Background + Internet Search
5. Company Background + TOEIC Practice
6. Schedules + Internet Search
7. Invitations + TOEIC practice
8. 中間試験
9. Presentations + Internet Search
10. Presentations + TOEIC Practice
11. Products + Internet Search
12. Feedback + TOEIC Practice
13. Christmas Lesson
14. Media + Internet Search
15. Review
16. 期末試験

<成績評価方法>
中間試験 25 %、期末試験 25 %、小テスト・授業参加度 50% によって評価します。

<教科書・参考文献>
教材は毎週教員が用意します。テキストは使用しません。

<受講に当たっての留意事項>
授業には毎週出席し、積極的に参加することが望まれます。欠席 5 回以上で試験資格を失います。十分気をつけて下さい。

<学習到達目標>
日本および海外で使用でき、将来学生の助けとなるビジネス英語を学びます。

（関連する学習・教育到達目標：B）

文化演習・ゼミナール

基礎演習 1
基礎演習 2
国際研究ゼミナール 1
国際研究ゼミナール 2
国際研究ゼミナール 3
国際研究ゼミナール 4
国際研究ゼミナール 5
国際研究ゼミナール 6

基礎演習 1・2

安藤 潤（あんどう じゅん）

●教員の研究テーマ

大学院時代は80年代のアメリカ経済を中心に、軍事支出が経済にどのような影響を与えたのかについて研究していました。最近は労働と家事・育児の時間配分、結婚と女性の労働供給、結婚の経済分析といった家計経済学も研究しています。

●新入生への一言

入学おめでとうございます。昔、僕が小学生のころ、「6・3・3で12年」という学習機のCMがありました。僕の場合、振り返れば6・3・3の後にさらに2・4・2・6が付け加わります。まるで昔の大阪市内の電話番号みたいですね（と言ってもわからないか）。長いこと学生をやっていましたが、学生生活は本当に楽しかったです（30歳まで学割を使いました）。皆さんも4年後卒業するときに「楽しかった」と思ってもらいたいと思います。ただ、「楽しさ」といってもいろいろな「楽しさ」があります。大学生としての本当の「楽しさ」を見つけてください。

●ゼミテーマ・タイトル

日本と海外の社会：「結婚」と「食」を中心に

●内容

前期においては、4年間この大学でゼミを受ける基本的な姿勢、技術、マナーを身につけてもらいます。具体的には、図書館の利用法、ノートの取り方、文章の読み方、文章の要約の仕方、小論文の書き方、レジュメの作成、参考文献・資料の使い方、プレゼンテーション、司会進行の方法などです。テキストは決めません。主に新聞記事を用います。

後期は、前期で身につけた技術を用いながら、私たちの「食」をテーマにした文献を読んだりビデオを見たりして、全員で議論したいと考えています。なお、この後期のテーマは2年の「国際研究ゼミナール1」、「国際研究ゼミナール2」でも扱います。時間に余裕があれば「国際研究ゼミナール1・2」や「国際研究ゼミナール3・4・5・6」のゼミ紹介も読んでみてください。もう少しイメージがわくと思います。

ゼミは教員が主役ではありません。皆さんが主役です。高校までの授業のように、あるいは大学での講義と違って板書されたものをノートに書き写している受動的な姿勢ではゼミにはなりません。ゼミ以外の空いた時間にいかに関心、準備するかが重要になってきます。つまり、皆さんが積極的かつ主体的に取り組まなければゼミは成立しません。教室を沈黙が支配するだけです。特に後期については教員はサポート役に回ります。

●使用予定テキスト

ありません。基本的に図書館でコピーしてもらいます。

●ゼミの進め方

前期は基本的な技術やマナーを身につけるまでは、どちらかといえば講義に近いかもしれません。前期の途中からそれを実践の場で生かすべく、テキストを選定し、レポーターにレジュメを作成してもらい、ゼミ員と教員に配布・報告してもらいます。担当者以外の参加意識を高めるために全ゼミ生共通の課題を課し、必ず提出してもらいます。そのうち代表者をコメンテーターとして指名し、同じ資料をもとにしてコメントをもらい、後に議論に移ります。担当者はさらにレジュメの中でそれに対する反論や問題提起、図書・資料による下調べをもとにした補足的説明を行ってもらいます。後期は学生に司会進行も行ってもらいます。

●成績評価基準

出席50%、ゼミでの発言や取り組む姿勢（レジュメの作成など）30%、課題の提出20%。ゼミ中の態度や遅刻があまりにひどい場合、前期・後期のチームレポート未提出者には、たとえ欠席がなくとも単位を与えません。原則として欠席は認めません。

●ゼミ選択上のアドバイス

国際交流インストラクターの活動で世界の食糧問題を扱いたい人や、「食」を通じて新潟、日本、アジア、世界の現状に目を向けたい人はぜひ。

白井 陽一郎（うすい よういちろう）

●教員の研究テーマ

EU（欧州連合）の政治、環境政治（環境ガバナンスをめぐる政治）、リージョナリズム（国家間の地域共同体組織の形成）。

●ゼミのテーマ

紛争と和解の政治学。

●内容

世界は紛争に満ちている。すでに起こってしまった紛争がいたるところに見られるだけでなく、これから起こりそうな紛争も、世界各地に地雷のように埋め込まれている。本ゼミでは、この紛争を和解へもたらす条件をテーマに、テキストを一冊、精読する。また、この学習を補完して、グローバル社会の現実についてイメージを創り上げていく一助として、DVDを視聴する。なお、コミュニケーションのトレーニングとして、さまざまなトピックスをみなで考えるワークショップも実施する。

<<紛争と和解の政治学・課題テーマ>>

☆政治学が和解について考えることの難しさについて☆

【理論・思想】

- ・人間は理性による同意は不可能でも、他人を理解する能力はある？
- ・不完全な人間による不完全な和解—永遠に和解への途上にある人間について。
- ・権力を分有する政治の仕組みの可能性について。
- ・話し合いの質が大切だと考える"熟議のデモクラシー"の可能性について。
- ・歴史とは都合良く編集された民族の記憶に過ぎない？

【各国の事例】

- ・スウェーデンにおける移民と社会の亀裂。
- ・日本の社会保障における世代間闘争。
- ・多民族国家アメリカの二大政党制。
- ・タイにおける市民社会の生成と国を二分する対立。
- ・南北코리아統一と社会アクターの役割。

【国際社会の事例】

- ・国際裁判による正義の実現—その可能性と限界。
- ・人間の安全保障—国家の利己主義を超えて。
- ・日本の戦後賠償—罪の認識より経済協力の推進。
- ・西ドイツとイスラエル—和解のサクセス・ストーリーの裏にあるもの。
- ・国連における保護する責任と複合型平和維持活動—EUを事例に。

<<ワークショップ・テーマ事例>>

- ・人を知るためのインタビューをしてみよう。
- ・短所を長所に変える話法。
- ・進路選択で大切なのは能力か希望か。
- ・プロジェクトを立ち上げ人を雇ってみる。

<<DVDの視聴>>

- ・貧者の兵器—ライフル対無人爆撃機。
- ・ヨーロッパ・ピクニック計画—ベルリンの壁はいかにして崩壊したか。
- ・難民の世紀・20世紀。
- ・キューバ危機—核戦争が勃発してもおかしくはなかった。
- ・なぜ貧困が生じるのか。
- ・日本人は何を考えてきたのか。

●ゼミの進め方

テキストのリーディングやワークショップ、DVDの視聴はすべて、文章課題と報告課題を提示する。とくに報告課題については、パワーポイントやキイノートを利用してプロジェクターによるプレゼンテーションを行ってもらう。また課題の理解を深め、参加学生同士で学び合っていくために、必ず課題ごとにグループディスカッション

の機会をもうける。

●使用テキスト

松尾秀哉・臼井陽一郎編『紛争と和解の政治学』ナカニシヤ出版。

●成績評価基準

課題ごとのプレゼンと4000字ほどのターム・レポートで成績を評価する。

●ゼミ選択に際してのアドバイス

思考を広げ深めれば世界が新たに開けてくるという経験を積むこと。これが大学で勉強することの意味の一つです。このゼミでその充実感の一端にふれてもらえれば、うれしく思います。

小澤 治子（おざわ はるこ）

●教員の研究テーマ

ソ連とロシアの外交を東アジアの国際関係の中で考察することが、私の主たる研究テーマです。特に20世紀末のソ連の改革、続くソ連の解体を経て、ロシア外交や国際政治がどのような特色を示すようになったのか、また今後の日ロ関係はどうあるべきかに関心を持って研究を進めています。

●新入生への一言

自分の心を偽らない素直さ、そして勇気を持ってほしいと思います。それはわがままや自分勝手という意味とは違います。たとえ自分の意見が少数であってもそれを主張するには、時には勇気が必要です。皆さんには是非そうした勇気を持ってほしいと思います。

●ゼミテーマ・タイトル

「政治、経済、社会の動きに関心を持とう」

●内容

皆さんはテレビのニュースを見ていますか。新聞を読んだり、ネットを見たりして世の中の動きをチェックしていますか。また20歳になったら、選挙のとき投票に行きますか。「ニュースなんて見ないよ。新聞も読む気はないし、選挙なんて行かないよ！政治なんて結局誰がやっても同じ！」そんな声が聞こえてきそうな気がします。実は大人でもそう思っている人は多いです。世の中の動きなんて関係なく、政治なんて別の世界の話。そんなこととは距離を置いて自分の生活を楽しみたい。

でも本当にそれでいいのでしょうか。税金の仕組みがどう決められるかは私たちの生活に密接にかかわっています。原発の今後の行方も目が離せません。それからもっと身近なことで、皆さんの学校生活の中で、いじめの問題で悩んだことはありませんか。教師による不当な体罰に、怒りを感じたことはありませんか。

このゼミでは今言ったような世の中の動きに関心を持って、語り合い、時には熱くなって意見を交換したいと思います。それが難しそうに見える政治や経済、そして社会の動きに関心を持つことにつながります。やり方は、次のようなことを考えています。まず前期（基礎演習1）のゼミでは、政治、経済、社会問題を中心にそれぞれが関心を持った新聞の記事を選んで、毎回数名に発表してもらい、それについて皆で意見を出し合います。後期（基礎演習2）は、前期のゼミで各自が関心を持った内容をもう少し掘り下げて調べ、発表を各自に行ってもらい、それについて全員で議論しようと思います。

●使用予定テキスト

特に決まったものはありません。授業の中で必要に応じて参考文献を紹介します。

●ゼミの進め方

毎回の授業で2人から3人程度の発表者を決め、発表について皆で意見を出し合います。また司会についても順番に受講者に担当してもらいます。

●成績評価基準

①欠席、遅刻をしないこと。②授業時間中の発表をきちんと行うこと。③提出物（レポートなど）を期日までに提出すること。④授業中積極的に発言し、議論に参加すること。以上4点を総合的に判断して成績をつけます。

●ゼミ選択に際してのアドバイス

講義概要をしっかりと読んで、自分が関心を持てるゼミを選んでください。「友達が一緒だから」というような安易な考えでは、どのゼミにはいっても成果をあげることは難しいと思います。

熊谷 卓（くまがい たく）

●教員の研究テーマ

「法律学」について勉強をしています。

●新入生への一言

Congratulations on passing the entrance exam. さて、大学にはゼミナール（ゼミ）という時間があります。ここでの主役は先生ではなくて参加しているすべての学生です。ですから、ゼミの時間を楽しくするもしないも、主役である皆さんにかかっているといってもよいでしょう。ゼミでどうか「スター」になってください。

●ゼミテーマ・タイトル

「法律学ってけっこう役に立つ!？」

●内容（目的やねらいも含む）

賃貸借契約、遺言、黙秘権、表現の自由、国際条約、ということばに共通するものはなにか、と問われれば、なんと答えるでしょうか? 「法」とか「ルール」という答えを想定することはできませんか。より細かく見れば、それぞれ民法（借地借家法）、刑法（刑事訴訟法）、憲法、国際法といった具合です。そして、わたしたちは実は様々な場面でこの法と関わっているということができます。

ところで、ほとんどのみなさんは民事法そして刑事法的にみて、「未成年」の年に1年生ゼミナールに参加することになります。2年後には、およそすべての法律の適用対象となってしまいます。原則として、もう少年（少女）Aではありません。その前にできるかぎり、法というものの考え方に接しておくことは決して無駄ではないとは思いませんか。

そこで、このゼミナールは、各ゼミ生の法的な思考をより深めさせることを目的とし、また目標としています。具体的にいうと、死刑廃止の是非、男女区別の合法性（レディース・デイとは男性に対する差別か、適法か）、美容整形に納得がいけないときの慰謝料、同性間の結婚、児童の権利といったトピックや問題について法というフィルターを通して検討してゆきたいと考えています（難しそうに思えますが、できるだけ具体的に検討します。）。

●使用予定テキスト

松井ほか『初めての法律学』有斐閣
『わたしたちと法』現代人文社
円道祥之『空想科学裁判』宝島社
など

●ゼミのすすめ方

まずは、指定したテキスト（文献）をゼミ生全員で読み、それについて議論をしてもらうということを考えています。その後、各ゼミ生が自分で選択したテーマを素材に、報告をし、それについてゼミ生全員で検討するというかたちでゼミを進めます。レポートの提出を求めることも考えています。

なお、皆さんにとってゼミを受けることは初めての経験だと思いますので、報告のやり方、レポートの書き方についても、十分に時間をかけて説明をする予定です。安心してください。

●成績評価基準

報告やレポートの良し悪し、ゼミへの参加度を基準に成績をつけます。

●ゼミ選択上のアドバイス：

上にみた「内容」でとりあげたような諸問題に関心がある学生の参加を求めます。これらの問題について自分なりの意見をしっかりと提示できるよう、十分なりサーチをし、その上でなにか問題を解決・調整してやろうというやる気をもった学生を歓迎します。

ちなみに、ゼミでの食事会（未成年者が対象なので）を行うこともあります。

澤口 晋一（さわぐち しんいち）

●教員の研究テーマ

1年生のみなさんに教員の研究テーマを紹介したところで何の意味があるんだろうと思いますが、そういうつくりになっているようなので、一応書いておきます。私の専門は「自然地理学」の一分野である「地形学」です。文化学科の中では唯一の自然科学系を専門としています。しかし、頭の構造は文系です。自然現象を数式ではなく文章で記述します。

●新入生への一言

みなさんが入学したのは、「アルバイト学科」ではありません。本学の学生は働くのが本当に好きなようで、1年生のうちから週に4～5日アルバイトに励む人も少なくありません。どうしてもアルバイトをしなければいけない人も中にはいるでしょう。しかしだからといってアルバイトばかりしていていいということにはなりません。そういう人も含めてアルバイトは週2日程度にとどめておくべきです。毎年毎年、アルバイトするために大学に入ってきたような学生が多すぎます。少しは勉強もしなさい。ただしここでいう勉強とは、大学の授業の予習・復習（それも大事ですが）ではなく、本を読む、新聞を読むといったことから始まる自主的な勉強のことです。「お勉強」と「勉強」とは違うのです。勉強のための4年間なのだ。

●ゼミテーマ・タイトル

自分の興味・関心は何かを探するための1年

●内容

毎日、毎日、新聞を読み、数ある記事の中で最も自分が興味を持った記事の内容を所定の書式に従って書いてもらいます。毎回のゼミの前半はこの新聞の報告およびそれへのコメントの時間とします。時間の後半は、初年次教育（大学1年）用のテキストを使用し、大学生としての学びの技法（アカデミック・スキルズ）を少しでも身につけられるようなものとします。また、夏休みには自由研究として自分の興味のあるテーマを設定し、それを調べてもらいます。後期の基礎演習2では、この自由研究課題の報告会から始めます。

●使用教材

- ・新聞
- ・佐藤 望ほか『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門—』慶応大学出版会。

●ゼミの進め方

上記の内容と同じ。

●成績評価基準

毎回の新聞記事報告用紙の提出とその内容、口頭報告の内容および取り組み姿勢など。

●ゼミ選択上のアドバイス

毎日、新聞を開いて眺めて、興味のある記事を見つけて、切り取ってその内容をレビューするということをやってみたい人、待ってます。

高橋 正樹（たかはし まさき）

●ゼミテーマ・タイトル

感動と情熱のワクワクするゼミです。

●教員の研究テーマ

わたしの研究分野は世界の不平等を考える国際研究とタイをはじめとする東アジア研究です。自分の研究によって、日本に住むわたし達の生活が、東アジアを初めとする世界中の人々の生活と深い関係があることを明らかにしたいと考えています。

2011年3月11日から、私にもう一つの研究テーマができました。原発事故が発生し日本に人間が住めない土地ができ、さらに多くの人々が長期間にわたり放射能汚染におびえることになりました。これを引き起こし、なお原発を維持しようとする日本社会の病理を徹底的に解明することが新しい関心事です。

●新入生への一言

新潟国際情報大学（略称、国情大）への入学、おめでとう。いま、皆さんは大きな希望と不安を抱いていると思います。いまのこの新鮮な気持ちを大切に、感動と情熱にあふれた有意義な4年間で過ごしていきましょう。

3・11後の社会に無関心であってははいけません。

●内容

新聞や書物を通じて、現代社会の諸問題に対する関心をもってもらいます。前期は原発事故関連の論文や本を読みながら議論していきましょう。後期は日本で貧富の格差が拡大していることに注目します。さらに、それらの諸問題をどのように考えたらいいのかという視点から、大学の外や教室や図書館で問題について調査研究をしましょう。そして、最後に授業の成果として個人研究を発表し、研究レポートを作成してもらいます。学ぶということは、疑問をもちそれについての答えを探すことです。学ぶことは本来楽しいことです。そのことを感じ取ってください。

同時に、大学生活を生きぬき人生を生きぬくための能力である本の読み方、文章の書き方、議論の仕方、さらにはコンピューターの利用といった「学習作法」をしっかり身につけてもらいます。

●使用テキスト（一例です）

山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年。

原発と原発事故に関する多数の書籍・論文

●ゼミの進め方

毎回の授業では、議論を重視します。授業では全員参加の議論をおこないます。授業では、毎回順番の学生が司会者となり授業を進めてもらいます。わたしの出番は、司会が司会の役割を十分に果たさない時、議論の内容が支離滅裂な時、そして議論の最後のまとめの時に限定します。

授業の最初に1分間スピーチをやり、人前で要領よく話す練習をします。

●成績評価の基準

毎回、出席さえしてくれば大丈夫です。

●ゼミ選択に対してのアドバイス

充実したゼミですので、少しだけでも学習意欲のある人の参加を待っています。

松尾 瑞穂（まつお みずほ）

●教員の研究テーマ

文化人類学を専攻しています。文化人類学とは、自分と異なる文化や社会に生きる人々について学び、究極的には他者理解を目指す、比較的新しい学問です。私は特に、インドを調査地（フィールド）として、女性のリプロダクション（出産や避妊、不妊など文字通りの人と社会の「再生産」にかかわること）の近代化と変容について研究をしています。

●新入生への一言

入学おめでとうございます。大学4年間は長いようで、終わってしまえばあっという間です。昨今の社会状況を考えると、せっかく大学に入学したのに、何かに追われるように、もう次のことを考えなければならないという不安もあるでしょう。それでも、この4年間で何を学び、何をしたのかということは、みなさんの今後の人生にも大きな意味を持っています。どうかこの贅沢で潤沢な「はざま（in-between）」の時間を大切にしてください。

●ゼミテーマ・タイトル

私たちの身近にある「異なるもの」と出会う

●内容

自分が今まで知らなかったもの、出会ったことのない人、経験したことがないこと。よくよく周りを見てみると、世界は「異なるもの」であふれています。昔の人はそうしたことを「異界」「異人」と呼んできました。それは日常生活とは違う論理やルールが適用される存在ですが、じつは異界には異界の、異人には異人の論理とルールがあります。本ゼミでは「異なるもの」を学ぶことを通して、私たちの固定観念や既成概念を打ち破り、「他者」への想像力を鍛えることが目標です。とはいえ、まずは図書館での情報収集の仕方、文献の提示法、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方など、これから必要とされる学問的営みの基礎を徹底的に習得します。その後で、日本社会における「異なるもの」の受容について、「異人」とのかかわりを歴史的に捉えなおし、今日の日本社会の特徴について考えていきます。また、その際には映画などの映像資料も授業に活用したいと思っています。

●使用予定テキスト

みなさんと相談しながら、興味のあるものから読んでいきたいと思っています。

（一例）

青木保2001『異文化理解』、岩波新書。

嘉本伊都子2008『国際結婚論？！現代編』、法律文化社。

小松和彦1995『異人論—民俗社会の心性』、ちくま学芸文庫。

石毛直道（2004）『食卓の文化誌』岩波現代文庫

●ゼミの進め方

最初はひとつのテーマを選んで、グループワークを通してみんなで調べ、発表するというを通して、大学でのゼミというものがどんなものか、慣れてほしいと思います。新聞、エッセイ、論文などを使って、読む、調べる、書く、まとめる、発表する、という一連の流れを身につけましょう。特に書くということにはいろいろなルールがありますので、それらを早い段階からきちんと身につけてもらいたいと思っています。後半は、グループワークのほかに、決められた文献を全員が輪読します。また、最後には、一年の集大成として各自が関心テーマを調べ、個人研究発表をします。

●成績評価の基準

授業への貢献度（70%）、レポート（30%）

●ゼミ選択に際してのアドバイス

外国の生活や文化に興味がある、大学生になったらぜひ外国を旅行してみたい、あるいは日本のなかにある外国やエスニックなものを知りたい！といった好奇心がある方を大歓迎します。日常生活のなかで感じる疑問や不満をトコトン考えたい、と思っている方も同様です。なお、ゼミでは受け身ではなく、積極的な発言が求められます。

安藤 潤（あんど う じゅん）

●ゼミテーマ・タイトル

家庭から考える日本と世界の経済と社会

●内容

このゼミでは、結婚、家事・育児、生活利用時間、食生活、余暇と労働といった問題について、新聞や雑誌の記事を用いつつ、時に他国と比較しながら世界とつながる日本の経済と社会について考える。たとえば「婚活」はなぜ起きているのか、人はなぜそこまでして結婚したいのか、既婚男女の生活利用時間の配分をどう考えるか、なぜそのような配分が起こるのか、回転寿司で比較的安くお寿司を食べられることに問題はないか、日本食が世界に普及していることの背景とその問題点、世界の食料安全保障問題とは、「食育」が語られることの本質は何だろうか、日本人にとっての労働とは何だろうか、今の働き方を見直す必要はないか、等である。

なおレジュメはワープロで作成してもらうが、課題は自筆で提出してもらう。

●使用予定テキスト

テキストは指定しないが、図書館を活用しつつ、『AERA』など雑誌記事、主要新聞各紙の記事を用いる。時にビデオ等視聴覚資料を使用する。

●ゼミの進め方

15回のゼミのうち最初の3分の1は文章の読み方、要約の仕方、レジュメの作成の仕方、小論文の書き方に重点を置く。

何もない「引き出し」からは何も出てこない。つまり、ゼミで発言を求められても今まで知らなかったことや考えたこともなかったことについて発言するのは難しい。したがって、レポーターだけでなく、ゼミ生全員が当日取り上げるテーマについて事前に十分な準備が必要である（その準備についても当日提出してもらう）。また、ゼミ中には各ゼミ生から出た発言を書き取ってもらい、ゼミ全体を振り返りつつ小論文を書いて翌週に提出してもらう。書きながら考えて話すのはとても大変な作業ではあるが、大人の社会では当たり前のように行われている。3・4年ゼミでどの教員のゼミを選ぶかはわからないが、より専門的なゼミを充実させるためにもこの段階で経験しておくことは決して無駄にはならない。

当日は事前に決められた司会進行役に進行を任せ、レポーターによる報告とコメンテーターによる質問を経て、自由に議論してもらう。レポーターは当日扱う文章における筆者の主張を要約し、問題提起をレジュメにして発表してもらう。なお、期末にはレポートを課題として出し、提出してもらう。

●成績評価基準

出席60%、課題提出40%。他のゼミ同様、全出席が当然である。ただしやむを得ないと判断できる欠席については3回までは認める。ゼミ中の態度や遅刻も考慮する。レポーター、コメンテーター及び司会進行役の欠席は認めない。

●ゼミ選択上のアドバイス

3・4年次の、つまり大学生としての後半2年間における専門ゼミを充実させたいと思う人、担当教員の結婚観に触れ、それに一言モノ申してみたい人、食べることが好きな人などに来てもらえればと思う。

白井 陽一郎（うすい よういちろう）

●ゼミ・テーマ タイトル
紛争と和解の政治学

●内容

世界は紛争に満ちている。すでに起こってしまった紛争がいたるところに見られるだけでなく、これから起こりそうな紛争も、世界各地に地雷のように埋め込まれている。本ゼミでは、この紛争を和解へもたらす条件をテーマに、テキストを一冊、精読する。また、この学習を補完して、グローバル社会の現実についてイメージを創り上げていく一助として、DVD を視聴する。

<<紛争と和解の政治学・課題テーマ>>

☆政治学が和解について考えることの難しさについて☆

【理論・思想】

- ・人間は理性による同意は不可能でも、他人を理解する能力はある？
- ・不完全な人間による不完全な和解—永遠に和解への途上にある人間について。
- ・権力を分有する政治の仕組みの可能性について。
- ・話し合いの質が大切だと考える " 熟議のデモクラシー " の可能性について。
- ・歴史とは都合良く編集された民族の記憶に過ぎない？

【各国の事例】

- ・スウェーデンにおける移民と社会の亀裂。
- ・日本の社会保障における世代間闘争。
- ・多民族国家アメリカの二大政党制。
- ・南北코리아統一と社会アクターの役割。

【国際社会の事例】

- ・国際裁判による正義の実現—その可能性と限界。
- ・人間の安全保障—国家の利己主義を超えて。
- ・日本の戦後賠償—罪の認識より経済協力の推進。
- ・西ドイツとイスラエル—和解のサクセス・ストーリーの裏にあるもの。
- ・国連における保護する責任と複合型平和維持活動—EU を事例に。

<<ワークショップ・テーマ事例>>

- ・人を知るためのインタビューをしてみよう。
- ・短所を長所に変える話法。
- ・進路選択で大切なのは能力か希望か。
- ・プロジェクトを立ち上げ人を雇ってみる。

●ゼミの進め方

テキストのリーディングやワークショップではすべて、文章課題と報告課題を提示する。とくに報告課題については、パワーポイントやキイノートを利用したプロジェクターによるプレゼンテーションを行ってもらう。また課題の理解を深め、参加学生同士で学び合っていくために、必ず課題ごとにグループディスカッションの機会をもうける。

●使用テキスト

松尾秀哉・白井陽一郎編『紛争と和解の政治学』ナカニシヤ出版

●成績評価基準

課題ごとのプレゼンと4000字ほどのターム・レポートで成績を評価する。

●ゼミ選択に際してのアドバイス

思考を広げ深めれば世界が新たに開けてくるという経験を積むこと。これが大学で勉強することの意味の一つです。このゼミでその充実感の一端にふれてもらえれば、うれしく思います。

小澤 治子（おざわ はるこ）

●ゼミテーマ・タイトル

20世紀の国際政治を考えよう

●内容（目的やねらいも含む）

2001年9月11日にアメリカで起こった同時多発テロ事件は、国際社会全体に大きな衝撃を与えました。あの事件は、20世紀の国際政治が新たな世紀に持ち越した様々な矛盾や問題点が、きわめて悲劇的な形で爆発したものであるといえます。今日冷戦が終わったとは言っても、世界全体では悲惨なテロ事件や民族紛争が後を絶たず、21世紀の国際政治の行方は依然として予断を許しません。そこで21世紀に生きる私達が平和な国際社会を築くために何をすべきなのか、20世紀の国際政治から学ぶべきことは何か、そのことを考えることがこのゼミの目的です。

二度の世界大戦とそれに続く冷戦にみられるように、20世紀は戦争の世紀でした。一般市民を巻き込んだ不幸な戦争によって、多くの人々が犠牲になりました。しかし同時に、そのような悲惨な戦争の体験を通じて、国家の役割や性格が変容し、国家間や地域間の協力の枠組みが形成されて重要な役割を果たすようになってきたことも見逃せません。このゼミでは、20世紀の国際政治を学ぶことを通して、21世紀の国際政治のあり方について考えてみたいと思います。

●使用予定テキスト

参考文献については授業の中で随時紹介しますが、テキストを特に指定することはありません。

●ゼミの進め方

20世紀から今日21世紀に至る時期の国際政治に関連した内容のテーマを各自が決めて研究し、それについて授業の中で発表して皆で議論していきたいと思います。取り上げるテーマは国際関係に関することであれば、内容、地域は問いません。ヨーロッパ、アジア、中近東など各自が関心を持った地域や国を取り上げて下さい。

●成績評価基準

欠席をしないこと、決められた時にきちんと発表を行うこと、提出物の期限を守ること。以上は単位の取得にあたって最低限の必要条件です。加えて発表の内容や提出物の内容、また授業中の発言の質量などで成績を考えます。

●ゼミ選択上のアドバイス

一年後期配当の国際政治学（共通科目）、二年前期配当の国際政治史（文化学科専門科目）のいずれかを履修していることが望ましいです。

越智 敏夫（おち としお）

●ゼミテーマ・タイトル

「現代の社会問題と私たち」（前期・後期同一テーマ）

●内容（目的やねらいも含む）

国際研究ゼミナール1・2は基礎演習の延長線上にあると僕は考えています。ものを読み、考え、議論し、それを文章にまとめるという作業は基礎演習と同じです。しかしこのゼミで中心になるのは基本的な読解力を前提とした上での議論です。

今年度の細かいテーマは未定です。ただし「現代社会は多くの問題をかかえていて、その多くの問題と人間一人ひとりが生きにくいという事実は関連している」という基本的認識をはずれることはありません。特に先進資本主義国に特有の諸問題を取り扱う予定ですが、どんな事例を議論するときにも他人事としてではなく自分の問題として考えることを要求します。

たとえば現在、世の中で多くの人が殺されています。その「殺人」という行為には変わりがなくても、それら多くの殺人を私たちは細かく差異化していきます。テロリストによる虐殺、法治国家における死刑、正当な防衛行為、教育の「行き過ぎ」としての体罰、英雄的戦功、医療過誤、テロ根絶のための必要悪、反逆者の処刑、武装蜂起に対する秩序維持……など、呼び方はいろいろです。しかしすべての行為が「人が人を殺す」という点においては同じです。こうした呼称の差異という問題は、そのままそれらの人殺しという行為と私たちの関係を明らかにしていくはずで、その関係の総体が現代社会を構成していると考えられませんか。

こうしたことについて「そんなもん知るか。全部違うのは当たり前だろ」と言って開き直るのは、現在の社会のありかたをまったく批判していないということです。目の前の世界を「快適」だと思いこんでいるということで、それは実は何も考えてないということを表明しているだけです。酸素を吸って二酸化炭素を吐いているだけです。マレーシアの森林資源のためにはなっているでしょうが、人生の意義は限りなく低いでしょう。何かを考えて1日生きるのと、何も考えずに5万年生きるのを比較すれば、それは前者のほうがはるかに人間として意義深いと僕は考えます。

●使用予定テキスト（前期・後期で別種のことを講読予定）

田中克彦	『ことばと国家』	岩波新書
フロム	『自由からの逃走』	東京創元社
小倉千加子	『セックス神話解体新書』	ちくま文庫
杉田敦	『デモクラシーの論じ方』	ちくま新書
鶴見俊輔	『戦時期日本の精神史』	岩波書店

●ゼミの進め方

テキストを全員で講読します。内容の要旨を報告する「レポーター」と、その内容を批判する「コメンター」を中心に議論を進めます。ゼミ生はこのふたつの役割を順番に担当します。各テキストの読了後にはそのテーマについてのレポートを書いてもらいます。

●成績評価基準

出席を重視します。各セメスター2回までは欠席しても単位を出します。3回以上欠席すると単位は出ません。欠席の理由は問いません。バイトでも風邪でも、欠席は欠席です。

●ゼミ選択上のアドバイス

自分をだまさないことです。大学生活を言い訳の多い4年間にしてしまうと、それは癖になります。その後の人生でも同じ状況が続く危険性は高いでしょう。ですから本当は遊びたいのにきついゼミを選んだりすれば、教師も学生もお互い不幸になるのは明らかです。そしてこのゼミはきついゼミです。そこをのちよくよく考えてください。勉強したい人にとっては意味のあるゼミにしたいと考えています。

高橋 正樹（たかはし まさき）

●ゼミテーマ・タイトル

感動と情熱のワクワクするゼミです。

●教員の研究テーマ

わたしの研究分野は世界の不平等を考える国際研究とタイをはじめとする東アジア研究です。自分の研究によって、日本に住むわたし達の生活が、東アジアを初めとする世界中の人々の生活と深い関係があることを明らかにしたいと考えています。

2011年3月11日から、私にもう一つの研究テーマができました。原発事故が発生し日本に人間が住めない土地ができ、さらに多くの人々が長期間にわたり放射能汚染におびえることになりました。これを引き起こし、なお原発を維持しようとする日本社会の病理を徹底的に解明することが新しい関心事です。

●内容

原発事故関連の論文や本を読みながら議論していきましょう。それを通じて、日本の政治、経済、社会、文化の深刻な問題に切り込みましょう。最後に授業の成果として個人研究を発表し、研究レポートを作成してもらいます。学ぶということは、疑問をもちそれについての答えを探すことです。学ぶことは本来楽しいことです。

大学生活を生きぬき人生を生きぬくための能力である本の読み方、文章の書き方、議論の仕方、さらにはコンピューターの利用といった「学習作法」をしっかり身につけてもらいます。

●使用テキスト

原発と原発事故に関する多数の書籍・論文。

●ゼミの進め方

毎回の授業では、議論を重視します。授業では全員参加の議論をおこないます。授業では、毎回順番の学生が司会者となり授業を進めてもらいます。わたしの出番は、司会が司会の役割を十分に果たさない時、議論の内容が支離滅裂な時、そして議論の最後のまとめの時に限定します。

授業の最初に1分間スピーチをやり、人前で要領よく話す練習をします。

●成績評価の基準

毎回、出席さえしてくれば大丈夫です。

●ゼミ選択に対してのアドバイス

充実したゼミですので、少しだけでも学習意欲のある人の参加を待っています。

松尾 瑞穂（まつお みずほ）

●ゼミテーマ・タイトル

世界遺産からみる観光と文化の力学

●内容

近年、旅行のパンフレットや雑誌、テレビの番組などで、「世界遺産」という言葉がやたらと目に付きます。書店の旅行コーナーには「いつかは行きたい世界遺産リスト!」といった本もたくさん売られていますし、「世界遺産検定」なるものも人気です。皆さんの中にも、世界遺産を見に行ったことがある人もいないのでしょうか。世界遺産は、現在（2012年時点）、世界で962件、そのうち日本では16件が登録されています。そのほかにも、世界遺産登録を目指して、多くの自治体や地域が運動を行っています。新潟県の佐渡もその一例です。いまや、世界遺産は単に文化財や自然の保全という目的にとどまらず、観光開発や地域振興、経済発展などと深く結びついています。同時に、世界遺産による観光が大きな経済利益をもたらすが故に、地元の社会を急激に変化させてしまうケースも生じています。このゼミでは、この世界遺産のうち、特に文化財を題材として、「文化」が現代社会のなかでどのように政治性を帯びていくのか、どのように表象されるのか、といった問題を考えてみたいと思います。

●使用予定テキスト

佐竹剛弘（2009）『世界遺産の真実―過剰な期待、大いなる誤解』、祥伝社。

奈良大学文学部世界遺産を考える会編（2000）『世界遺産学を学ぶ人のために』、世界思想社。

山下晋司編（2007）『観光文化学』、新曜社。

山下晋司（2009）『観光人類学の挑戦―「新しい地球」の生き方』、講談社。

●ゼミの進め方

決められた文献を全員が輪読することが大前提です。最初に「観光」がいかに経済的、社会的、そして歴史的に形成され、人びとの文化的アイデンティティと結びついているのかを、しっかり理解したいと思います。やり方は、担当者がレジュメを用意して発表し、調べ物担当には決められた課題を調査してきてもらい、その後、全員で議論をします。司会とコメンテーターも学生が順番に担当してゼミを主体的に運営してもらいます。また、場合によっては最初にグループワークをすることも考えています。取り上げる世界遺産にまつわる映像や写真、ドキュメンタリーなどを見ることもあります。

●成績評価基準

出席（30%）、ゼミでの発表（30%）、レポート（40%）

●ゼミ選択に際してのアドバイス

文献を読むだけでなく、実際に自分で調査をしてみたい、話を聞いてみたいと思っている人に向いています。テレビで何となく見たり聞いたりしたことがある世界遺産を多角的に学ぶことで、新しいものの見方を発見してください。あるいは、みんなで「世界遺産検定」に挑戦するのも楽しいかもしれません。また、旅行好きの人や、世界遺産を見て回りたいと思っている人にも、将来の役に立つかもしれません（?!）。

安藤 潤（あんど う じゅん）

●教員の研究テーマ

家計経済学、経済社会学、アイデンティティ経済学、防衛経済学、アメリカ経済、日本経済

●教員の現在の関心：

夫婦間の家事労働分担行動におけるジェンダー・ディスプレイとメンタル・アカウンティング、外食・中食産業と妻の家事労働削減、ジェンダー経済格差

●これまでの卒業研究のテーマ

参考までにゼミ卒業生の代表的テーマをいくつか挙げておきます。

「新潟県内女子学生の結婚行動に関する女性の経済的自立仮説からの一考察－男性の雇用形態と所得水準が与える影響－」

「日本の子育てにおける現状と課題－アメリカ、フランスとの比較から－」

「男性の家事・育児参加と出生率の関係：政府の少子化対策の批判的考察」

「食の外部化は妻の家事分担を減らしたか」

「新潟県版『自給自足』型フードシステム確立への課題」

情報文化学科のカリキュラムの中でこれまでに学んだ様々なことをベースに、仮説を構築・検証し、できればアンケート調査を行い、その結果から自分の頭で考えて結論を導き、自分の言葉で述べる－私のゼミではこういった卒論を書いてもらいます。

●ゼミテーマ・タイトル

現代の経済・社会：ジェンダー、家事労働、結婚を中心に

●内容

教員の専門は経済学ですが、経済学というよりはむしろ社会学、あるいは経済社会学のゼミにします。3年次前半では、下記テキストを用い、雇用や労働といった経済問題も含め、現代社会におけるジェンダーの基礎学習をします。3年次後半では4年次の卒業研究・卒業論文執筆に向けて学術論文を読みます。たとえば下記参考文献や公益財団法人家計経済研究所『季刊 家計経済研究』から「父親」、「結婚・出産後の女性のキャリア」、「女性・家族・仕事」、「生活の中の食」といったテーマを選び、論文を読みます。雑誌記事を用いながら、家事労働、結婚、婚活について考えます。なぜ「婚活」までしなければ結婚できないのか、あの「婚活」産業を私たちはどのように考えればよいのか、日本ではなぜ家事労働負担がこんなにも男女間で差があるのか、どうすれば女性が就業を継続できるかといったことについて議論したいと思います。

4年後期は基本的に各ゼミ生の卒業研究のテーマがこのゼミのテーマになります。卒業研究のテーマについては幅広く「家族」、「生活」、「家庭」に関連していれば、そして私が指導できる範囲であれば必ずしもゼミテーマと一致させる必要はありませんし、対象国・地域も限定しません。「食」についてでも構いません。

卒論は自分の選んだテーマを批判的に考察し、仮説を構築してそれを検証してもらいます。そういうこともあったか、最近、アンケート調査を行い、自らの仮説を検証し、結論を導くというスタイルで卒論を書くゼミ生が増えました。もしアンケート調査をするのであれば、「社会調査」もしくは「社会調査実習」を履修してもらえると幸いです。卒業論文執筆の際、必要最低限の表計算・グラフ作成、卒論中間報告でのプレゼンテーションの方法については指導します。

ゼミ合宿はゼミ生と相談の上で決めたいと思いますが、私としてはぜひ実現したいと考えています。

●使用予定テキスト（全部使用するわけではありません）

以下のテキストは必ず購入してください。

江原由美子・山田昌弘『ジェンダーの社会学 入門』岩波書店、2,200円＋税

参考文献

川口章『ジェンダー経済格差』勁草書房、2008年。

公益財団法人家計経済研究所『季刊 家計経済研究』各年各号。

佐藤博樹・永井暁子・三輪哲〔編著〕『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房、2010年。

治部れんげ『稼ぐ妻・育てる夫 夫婦の戦略的役割 アメリカ人52人のワーク・ライフ・バランス』勁草書房, 2009年.

橘木俊詔〔編著〕『現代女性の労働・結婚・子育て』ミネルヴァ書房, 2005年.

西村純子『ポスト育児期の女性と働き方 ワーク・ファミリー・バランスとストレス』慶應義塾大学出版会, 2009年.

松田茂樹『何が育児を支えるのか 中庸なネットワークの強さ』勁草書房, 2008年.

山田昌弘〔編著〕『「婚活」現象の社会学 日本の配偶者選択のいま』東洋経済新報社, 2010年.

●ゼミの進め方

担当者には、テキストを批判的に読み、考察し、その上でレジュメを作成して報告してもらいます。司会進行もゼミ生に任せます。

●成績評価基準

報告・司会進行・質問・課題提出などゼミへの取り組み方全般で評価します。欠席は理由の如何を問わず前期後期各3回までですが、無欠席が大原則です。

●ゼミ選択上のアドバイス

ゼミの内容はどちらかと言えば経済学（家計経済学）よりも家族社会学に近いかもしれません。1・2年次に私が担当している「経済学（マクロ）」、「日本経済論」、「現代アメリカ論」、「国際経済学」を理解できたか、履修済みか、単位を取得できたかということとはまったく関係ありません。真剣に取り組む意思のある学生であれば拒みません（上限を超えない限りは）。

白井 陽一郎（うすい よういちろう）

●教員の研究テーマ

EU（欧州連合）の政治、環境政治（環境ガバナンスをめぐる政治）、地域主義（国家間の地域共同体組織の形成）。

●教員の現在の関心

ストラヴィンスキーのピアノソナタと中上健次の千年の愉楽とマイルス・デイヴィスのグリーン・ドルフィン・ストリート。

●これまでの卒論テーマの例

国際人道法の政治、パレスチナ問題・和解の構想、アマルティア＝センの思想、FIFA の政治、ハリウッド映画の中の日本人、ASEAN 統合と日本、など。

●ゼミ・テーマ タイトル

紛争と和解の政治学。

●内容

世界は紛争に満ちている。すでに起こってしまった紛争がいたるところに見られるだけでなく、これから起こりそうな紛争も、世界各地に地雷のように埋め込まれている。本ゼミでは、この紛争を和解へもたらす条件をテーマに、テキストを一冊、精読する。また、この学習を補完して、グローバル社会の現実についてイメージを創り上げていく一助として、DVD を視聴する。なお、コミュニケーションのトレーニングとして、さまざまなトピックスをみなで考えるワークショップも実施する。

<<紛争と和解の政治学・課題テーマ>>

☆政治学が和解について考えることの難しさについて☆

【理論・思想】

- ・人間は理性による同意は不可能でも、他人を理解する能力はある？
- ・不完全な人間による不完全な和解—永遠に和解への途上にある人間について。
- ・権力を分有する政治の仕組みの可能性について。
- ・話し合いの質が大切だと考える "熟議のデモクラシー" の可能性について。
- ・歴史とは都合良く編集された民族の記憶に過ぎない？

【各国の事例】

- ・スウェーデンにおける移民と社会の亀裂。
- ・日本の社会保障における世代間闘争。
- ・多民族国家アメリカの二大政党制。
- ・タイにおける市民社会の生成と国を二分する対立。
- ・南北コリア統一と社会アクターの役割。

【国際社会の事例】

- ・国際裁判による正義の実現—その可能性と限界。
- ・人間の安全保障—国家の利己主義を超えて。
- ・日本の戦後賠償—罪の認識より経済協力の推進。
- ・西ドイツの対イスラエル補償—和解のサクセス・ストーリーの裏側。
- ・国連における保護する責任と複合型平和維持活動—EU を事例に。

<<ワークショップ・テーマ事例>>

- ・人を知るためのインタビューをしてみよう。
- ・短所を長所に変える話法。
- ・進路選択で大切なのは能力か希望か。
- ・プロジェクトを立ち上げ人を雇ってみる。

<<DVD の視聴>>

- ・貧者の兵器—ライフル対無人爆撃機。
- ・ヨーロッパ・ピクニック計画—ベルリンの壁はいかにして崩壊したか。
- ・難民の世紀・20世紀。
- ・キューバ危機—核戦争が勃発してもおかしくはなかった。

- ・なぜ貧困が生じるのか。
- ・日本人は何を考えてきたのか。

●使用テキスト

松尾秀哉・臼井陽一郎編『紛争と和解の政治学』ナカニシヤ出版。

●ゼミの進め方

テキストのリーディングやワークショップ、DVDの視聴はすべて、文章課題と報告課題を提示する。とくに報告課題については、パワーポイントやキイノートを利用してプロジェクターによるプレゼンテーションを行ってもらう。また課題の理解を深め、参加学生同士で学び合っていくために、必ず課題ごとにグループディスカッションの機会をもうける。

卒業論文の指導は、後期後半からはじめる。暫定的な主題は、12月25日までに決めてもらう。卒業論文のテーマは、紛争と和解に関わるものに限定する（政治学的なものに限定せず、さまざまな視点を立てるので良いが——たとえば小説や映画を題材にしてもかまわないので——、紛争を和解へともたらす条件について考える研究を進めることを、このゼミに参加する条件としたい）。

●成績評価基準

出席 60% 報告討論 40%

●ゼミ選択上のアドバイス

思考を広げ深めれば、新たな世界が開けてくるという経験を積むこと、これが大学で勉強することの意味の一つであるはず。その充実感に一瞬でもふれてもらえれば、とてもうれしくおもう。卒業したあとも遊びに行きたいと思える場になればと、願っている。

區 建英（おう けんえい）

●教員の研究テーマ

中国で生まれ育った私は、20年以上日本に生活している立場によって、日本の視線から祖国を見ると同時に、中国の視線から日本を見ています。双方向の異文化理解によって、自分の関心を寄せている中国の民主化と多民族共存の社会の構築の問題を研究しています。

●教員の現在の関心

私の関心は一貫して、現代中国が抱えている民主化の問題と多民族社会の問題にあります。同時に、グローバル化と中国の経済発展および日中関係における諸問題にも注目しています。ただし、ゼミの研究は私の関心と研究テーマに縛られず、主に学生の関心に基づきます。

これまでの卒論テーマ（例）

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1、戦後の日中民間友好交流 | 2、日中のマスメディアの比較 |
| 3、中国の経済格差とその改善政策 | 4、中国の環境問題と NGO 活動 |
| 5、中国大学生の就職難問題 | 6、中国少数民族の文化と教育 |
| 7、台湾と大陸の対立と交流 | 8、華僑・華人とチャイナタウン |

●ゼミテーマ・タイトル

「現地の視点を導入した中国研究」

●ゼミの内容

このゼミはミニ留学にしたい、つまり、留学済の学生に留学経験を保ち、未留学の学生に留学のような授業を少しでも体験してもらいたいです。語学の授業ではなく、研究の中で中国語を用い、よって中国語の使用能力を高めるのです。

研究テーマは私の研究分野に縛られず、なるべく学生たちの個性を自由に伸ばしてそれぞれの関心を学問に組み込みます。中国を国際研究の具体例として取り上げ、中国そのものを知ること、または中国を通じて日本を見、世界的な問題を見ることを目指します。

例えば、中国は急速な経済発展において貧富格差や環境問題も発生しており、どのように格差を縮め、環境を守るのか。中国には56の民族があり、どのように相異の文化をもって共存するのか。これらの問題は中国の問題でありながら、世界的な問題でもあります。したがって、中国の実験および経験と教訓は、中国にとっての意義に止まらず、世界から高い関心が寄せられています。また、世界の同時不景気の中で各国はどのように景気回復を図るのか、国家間の利益対立の中でどのように協力を図るのか。これらの問題は、中国の経済振興策や、日中関係を含む中国の外交関係および中国が作った各種の国際協力体制に対する分析を通じて考えることができます。むしろ、格差、環境、経済振興、異文化共存、日中関係などの問題を、皆さんのより身近な、日本ないし新潟の実践課題に根付いて考えることもでき、また他の国と関連して考えることもできます。なお、具体的な生活文化や民族文化に関する研究も可能です。

要するに、学生はそれぞれ自分の関心から、研究テーマを選ぶことができ、私はそれに応じて研究方法を指導します。

このゼミの特色は外国を研究する時、現地の視点を導入する方法を重視する点にあります。外国研究において、対象国の言葉で理解することがとても重要です。また、私たちはふだん無意識のうちに、自分の生活環境やマスコミによって「与えられた」画一的な見解を持たせられがちです。これも国際理解を妨げる要因です。したがって、中国という異文化を研究するには、日本語文献のみに頼るのではなく、できるだけ直接中国語文献を読むよう勧めます。ゼミでは、学生の関心事をテーマとして中国語文献を読解し、中国語で語り合い、自らの手による中国語資料の製作をも学びます。この面では丁寧に細かく指導し、学生の作業をしっかりと支えます。

●ゼミの進め方

中国の映像資料を見、中国語文献を読解し、討論を行ったりして、視野を広げながら、中国語による研究の能力を身に付けます。具体的に、学生たちはそれぞれ関心ある文献を素材にして研究発表を行い、様々な角度から文献を学ぶことによって自分の真の関心を見つけ、卒業研究へと発展させます。3年次は主として、中国語による中国研究の技能を学び、自分の関心がもてる課題を見つけ、学術研究の基本的な方法を学び、卒業研究の基礎をととのえていきます。4年次は自分の課題に基づいて研究を進め、1つの成果にまとめるよう指導します。

●成績評価基準

ゼミの出席と発表・討論の状況に基づきます。

ゼミ選択に際してのアドバイス

このゼミは語学の授業ではなく、一定程度の中国語の修得を前提にして、中国語を研究に使用しますので、中国語使用能力の訓練を受け、その能力を駆使して研究を行いたい学生が望ましいです。したがって、ゼミに入るために下記の「条件」を設けています。

中国語履修者であること、中国語文献の読解や中国語使用の訓練に意欲あること。

小澤 治子（おざわ はるこ）

●教員の研究テーマ：

冷戦構造の崩壊過程でソ連外交はどのような変容を示したのか、そうした変容はソ連解体後のロシアの外交にどのように継承されたのか、さらには東アジアの国際関係や日本との関係においてソ連（ロシア）外交の変容がもたらした意味は何か。以上のことに関心を持ってこれまで研究を進めてきました。

●教員の現在の関心

20世紀におけるロシア（ソ連）の二度の大きな体制転換（ロシア革命とソ連解体）が国際社会や日本にどのような意味があったのかを考えながら、日ロ関係を軸にロシアのアジア政策について研究を続けています。

●これまでの卒業論文のタイトル一例

「日本政府のアイヌ政策」
「定住外国人参政権獲得問題」
「カンボジア紛争と自衛隊」
「沖縄問題から考える日米同盟」
「日中経済交流——新潟市と黒龍江省ハルビン市に焦点をあてて」
「上海協力機構——実態と今後の課題」
「資源をめぐる CIS 諸国の新たな挑戦——カスピ海資源開発を中心に」
「稼動し続ける原子炉——チェルノブイリ原発の『必要性』」
「国際社会における少年兵問題——取り組みと課題」

●ゼミテーマ・タイトル

「ユーラシアの国際関係——そして日本」

●内容

冷戦構造の崩壊、ソ連解体によって、ヨーロッパやアジアの国際関係、また地域間関係は大きく変容しました。ヨーロッパとアジアは一つの大陸ユーラシアとして生まれ変わりつつあります。そこでは様々な形の協力や交流が生み出されてきていますが、同時に新たな紛争や摩擦の火種が起こっていることも重要なポイントです。その中で日本はこれから国際社会でどのような行動をとるべきでしょうか。

このゼミでは上記のような問題に関心を持っている皆さんに参加を呼びかけたいと思います。具体的には、以下3つの柱を掲げますので、①②③の中からいずれかに関するテーマを自分で見つけ、研究を進めて最後に卒業論文をまとめて下さい。

- ① 20世紀における日本、アメリカ、ロシア（ソ連）、中国、朝鮮半島など東アジアの国際関係、また地域間関係について。東アジアであれば二国間関係でも多国間関係でも、あるいは地域間協力についてのテーマでもかまいません。
- ② 20世紀の日本外交。日本外交に関するテーマであれば、対象となる相手国や地域は自由に選んで下さい。第二次大戦前の日本外交の問題点、戦後日本外交の特色、これからの国際社会と日本など様々な角度から研究することが可能だと思います。
- ③ 旧ソ連、中東欧関係。ソ連解体によって、ロシアを含め15のソ連構成共和国はそれぞれ独立し、今日新たな関係のあり方を模索しています。また冷戦期にソ連の支配下にあった中東欧諸国も独自の道を歩んでいます。それらの国や地域のいずれかに関連したテーマを考えて下さい。

●使用予定テキスト

特定のテキストを使用することは考えていませんが、以下の文献を参考図書として挙げておきます。またそれぞれの関心に応じて随時参考文献を紹介します。

石井修『国際政治史としての20世紀』、有信堂、2000年。

小澤治子『ロシアの対外政策とアジア太平洋——脱イデオロギーの検証』、有信堂、2000年。

横手慎二編『東アジアのロシア』、慶應義塾大学出版会、2004年。

岩下明裕編著『国境・誰がこの線を引いたのか——日本とユーラシア』、北海道大学出版会、2006年。

木村汎・袴田茂樹編著『アジアに接近するロシア——その実態と意味』、北海道大学出版会、2007年。

広瀬佳一・小笠原高雪・上杉勇司編著『ユーラシアの紛争と平和』、明石書店、2008年。

細谷千博監修、滝田賢治・大芝亮編『国際政治経済——グローバル・イシューの解説と資料』、有信堂、2008年。

●ゼミの進め方

3年次前期は、受講者それぞれが共通して関心を持つことができるようなテーマの文献を一冊か二冊、全員で読み、その内容について意見交換します。その後各自で研究テーマを決め、3年次後期はそれぞれテーマに関連した内容を発表し、全員で発表内容についての質疑応答を行います。

●成績評価基準

授業を欠席しないこと、授業中に積極的に発言すること、きちんと発表を行うこと、期限までにレポートを提出すること。以上の点に発表の内容やレポートの質などを考慮して成績評価を行います。

●ゼミ選択上のアドバイス

国際政治学、または国際政治史を履修していることが望ましい。

越智 敏夫（おち としお）

●ゼミテーマ・タイトル

政治思想と現代社会

●内容（目的やねらいも含む）

卒論指導では各学生がテーマを見つけてそれに取り組みます。しかしこのゼミナールではそれらのテーマに直接関連したことを全員で議論することはありません。各自のテーマについては「政治」と「思想」と「アメリカ」に関連したことであれば広く指導するつもりでいます。

ゼミナールでは現代の政治思想家の論文をとりあげ、「ものを考えるということはどういうことか」について全員で深く議論したいと思います。それは人間らしく生きるということはどういうことかを問うことでもあります。すべての人間は阿呆のふりをしているうちに本当の阿呆になってしまいます。しかしその危険性を少しでも低くするにはどうしたらいいのか。また、なぜここまで現代社会は味気ないのか。どんな理由でこうなってしまったのか。さらには、どうせ社会の歯車として生きていくのなら少しでも存在意義を自分で見出せる歯車になるにはどうしたらいいのか。そういう問題について考えたいと思います。

もし「今の社会はすばらしい」とか「自分は歯車じゃない」と思っている人がいたら、それは社会に関する理解が足りない、あるいはたんに頭が悪いということです。ゼミナールという学習には絶対的に不向きですから何か別の道を歩まれたら良いと思います。

ゼミナールの具体的な内容としては現代社会について同時代的に考えている人々の論文を読んでいきます。これまでの越智ゼミでは、マックス・ヴェーバー、ヴァルター・ベンヤミン、ハンナ・アレント、丸山眞男、ミッシェル・フーコーという5人の政治思想家に限定していましたが、思うところあって、今年度は範囲を広げて他の論者のものも読むことにしました。誰の論文を読むかはゼミ生と相談しながら決めます。

しかし一回読んだだけで理解できるようなものを読むことは絶対にないので、ゼミ前の熟読が必要になりますし、ゼミでの議論も複雑なものになると思います。自分の意見を自分から発言するような積極的な学生の参加を期待します。

こうしたゼミナールが各自の卒業論文の問いとどう結びつくのか心配する人もいるかもしれませんが。しかしこれらの問いについて考えることは必ず論文を書くうえで役立つことです。もっと正確に言えば、このような問いを欠いた問題設定によって書かれた論文に価値はありません。価値のある論文を書いてもらいたいと思っています。

●使用予定テキスト

たとえば、下記。具体的には学生と相談します。

ヴェーバー	『職業としての学問』	岩波文庫
ヴェーバー	『職業としての政治』	岩波文庫
ベンヤミン	『複製技術時代の芸術』	晶文社
ベンヤミン	『ドイツ悲哀劇の根源』	講談社文芸文庫
アレント	『全体主義の起原』	みすず書房
アレント	『暴力について』	みすず書房
丸山眞男	『現代政治の思想と行動』	未来社
丸山眞男	『日本の思想』	岩波新書
フーコー	『知への意志 性の歴史』	新潮社
フーコー	『監獄の誕生 監視と処罰』	新潮社

●ゼミの進め方

テキストを全員で講読します。内容の要旨を報告する「レポーター」と、その内容を批判する「コメンター」を中心に議論を進めます。ゼミ生はこのふたつの役割を順番に担当します。各テキストの読了後にはそのテーマについてのレポートを書いてもらいます。

●成績評価基準

出席を重視します。各セメスター2回までは欠席しても単位を出します。3回以上欠席すると単位は出ません。欠席の理由は問いません。バイトでも風邪でも、欠席は欠席です。

●ゼミ選択上のアドバイス

自分をだまさないことです。大学生活を言い訳の多い4年間にしてしまうと、それは癖になります。その後の人

生でも同じ状況が続く危険性は高いでしょう。ですから本当は遊びたいのにきついゼミを選んだりすれば、教師も学生もお互い不幸になるのは明かです。そしてこのゼミはきついゼミです。そのところをよくよく考えてください。勉強したい人にとっては意味のあるゼミにしたいと考えています。

神長 英輔（かみなが えいすけ）

●教員の研究テーマ

東北アジア近現代史（日露関係史・ロシア極東近現代史）、現代日本文化研究。具体的には、サハリン・樺太の歴史、北洋漁業と「北洋」概念の歴史、現代日本文化における「ロシア」表象の変遷などを研究。

●教員の現在の関心

ロシア極東史、サハリン・樺太史の諸問題。コンプの生産・加工・流通の歴史。うたごえ運動とは何か。日本における「ロシア嫌い」言説の構築過程。

●これまでの卒業研究のテーマ

「アネクトートから見るソ連時代 なぜアネクトートはソ連時代に発達したのか」
「ロシア帝国における女性の宮廷服の特徴」
「なぜチェチェン共和国はロシアからの独立を強く求め、長年抵抗し続けることができたのか」
「なぜユダヤ自治州にユダヤ人が根付かなかったのか」
「チョコレート生産における労働問題 奴隷・児童労働を中心に」

●ゼミテーマ・タイトル

ロシアと私、ロシアと日本、日本のなかのロシア、ロシアのなかの日本。
自分は何が知りたいのか、それを発見しよう。どうしたらそれを「わかる」ことができるのか、考えよう。

●内容

専門分野の研究書の精読と多読を通じてロシア史（日露関係史と極東ロシア史にやや重点を置く）と現代歴史学の方法に関する基本知識を身につけ、歴史学の発展に貢献できる卒業論文を書いていただきます。たくさん読み、書き、話しましょう。

●使用予定テキスト

3年ゼミの輪読(1)では『図説 ロシアの歴史』（河出書房新社）、『図説 帝政ロシア』（河出書房新社）、『ソ連史』（ちくま新書）、『ロシア文学案内』（岩波文庫）を読みます。4年ゼミは未定です。本はすべて購入してください。輪読(2)のテキストはこちらで用意します。

●ゼミの進め方

授業は三本立てです。毎回の授業で下記の1・2・3をやります。

1. 輪読(1)

上記の本を読み進めます。毎回の担当者を決め、担当者は自分が分担する部分を精読し、必要なことを調べて報告します。担当者は事前に説明のための配布物（その日の報告内容をA4で1枚程度に要約したもの）を配付します。ほかの人は当該部分を読んで内容に即した質問（5回）をするのが義務です。質問が少ない方にはそのつどペーパー執筆を課します。

2. 輪読(2)

外国人のロシア語学習者向けの教科書『Читаем о России по-русски』を読みます。全員の毎回予習が前提です。ロシア語履修者以外の方が参加する場合は英語の新聞記事を読みます。

3. 発表

毎週、自分で1冊の本（研究書）ないし1篇の研究論文を探し、読み、内容の要旨を口頭で発表してください（全員）。4年ゼミでは卒業論文の進捗状況も報告してください。

長期休業中には計10冊程度の研究書を読み、要旨をまとめ、休業明けに提出してください。

すべての連絡はメーリングリストでおこないます。指示に従い、自分で大学のメールアドレス（携帯メールアドレスは不可）の登録をおこなってください。

●成績評価基準

出席回数、授業の参加度（質問回数と予習）、課題の提出状況をもとに評価します。欠席の多い方、ご自分の発表回を無断欠席した方の単位は認めません。

●ゼミ選択上のアドバイス

参加者に求めるものは主体性と積極性です。約束事を守れない方はご遠慮ください。

毎週の課題が多いため、予習にはかなりの時間が必要になります。ロシア史について情熱を持って学びたい人のための授業です。覚悟を決めて参加してください。

学問もスポーツや芸術と同じです。徹底した基礎訓練の蓄積の上に創造性が開花します。いっしょに本気で学びましょう。

熊谷 卓（くまがい たく）

●教員の研究テーマ

国際法 (international law)

●教員の現在の関心

21世紀の国際社会が解決を求められる国際テロリズムについて、国際法からどのような対処ができるか、研究をしています。

●これまでの卒業論文のタイトル例（ごく一部です。見れば分かるように、「法」に関するものばかりではありません！）

多国籍企業の社会的責任について

集団的安全保障体制の課題－ケーススタディーを中心に－

国際人道法はなぜ守られないのか－アメリカによる対テロ戦争 (war on terror) を中心に－

裁判員制度が及ぼす国内司法制度への影響

公共交通の課題－新潟市の事例を中心に－

日本の小学校英語教育について－韓国との比較を中心に－

●ゼミテーマ・タイトル

現代社会を生き抜く－国際法という視点から－

●内容（目的も含む）

戦争、貧困、環境保護、移民、宗教対立、国際テロなど、我々の生きる現代社会は地球規模の様々な問題を抱えています。本ゼミナールにおいては、いかにしてこうした現象を理解し、その原因をあきらかに、対処のしかたを考えるか、これまでに試みられた様々な議論を参照しつつ、ゼミナール構成員とともに考えてみたいと思います。

なお、上に見たような問題について考える場合、本ゼミナールにおいては、指導教員の専攻分野である（国際）法を分析の手段として用いることを基本にしています。比喩を用いていえば、今まさに解決を求められる諸問題について、自分が弁護士だったらどう訴訟するか、検察官だったらどう有罪を勝ち取るか、あるいは裁判官だったらどのような判決を下すべきかといった多様な視点から、取り組むことを目的とします。もっとも、問題の性質によっては、法学的な視点にとどまらず、政治、経済、歴史的なアプローチも加味しながら、考察を行います。

以上のような作業をコツコツとでも、しっかり行うことで、「現代社会を生き抜く」ための術（すべ）がゼミナール構成員に伝承されるものと信じています。

●使用予定テキスト（現在または過去に使用したものとして、一部）

水上編著『国際法』（2002年、不磨書房）

阿部浩巳『国際人権の地平』（2002年、信山社）

なお、判例（裁判の判決）を読むこともあります。

●ゼミの進め方

テーマごとに使用するテキストや資料をゼミナール構成員全員で考察します。その際、報告者が中心的研究発表を行いますが、その他の構成員もそれに対する質疑という形で主体的に参加してもらいます。

●成績評価基準について

ゼミ報告やレポート、あるいはゼミへの参加度を総合的に判断し、成績を付けます。

●ゼミ選択上のアドバイス

個人的な経験をいえば、大学・大学院のゼミで指導いただいた2人の先生なくして、現在のわたしは絶対に存在していません。情報文化学科でも、「34年ゼミ」はそれぐらい重要なものと思っています（本ゼミの卒業生でも大学院で研究を継続している人も居ます）。ですので、十分に検討して（ゼミを）選んで欲しいと思います。以下、参考までにまとめとして（繰り返しも含め）。

(1) 熊谷ゼミの分析視覚は？→法学的思考（社会科学的思考の1つ）です。もっとも、広く他の学問分野のアプローチも取り込みます。卒論のテーマも結果的に多彩です。

(2) 熊谷ゼミの地理的フィールドは？→限定しません（フランス法も個人的には勉強してきました）。

- (3) ゼミ合宿は？→これまで日光、会津、村上、新発田、咲花温泉、群馬、伊香保、越後湯沢等で実施してきました。
- (4) (国際) 社会の動向に何らかの意味で関心を持っている人に勧めます。
- (5) 「3. 4年ゼミ」は4年間の学業の集大成であると共に卒業後の人生にも関わります。
ですので、「絶対頑張ります！」という人にこのゼミナールを勧めます。
よろしくお願いします。

小林 元裕（こばやし もとひろ）

●教員の研究テーマ

近代から現在にいたる日中関係論。とくに近代中国における日本人の社会・経済活動

●教員の現在の関心

日本、中国、米国における格差社会の出現とその背景、少子高齢化と老いゆく東アジア問題、世界経済に果たす日中経済の役割、新潟の少子高齢化と人口流出、等々。

いま私たちの身の回りは様々な問題に満ちあふれている。人々は「豊かさ」、「快適さ」、「安心・安全」を求めて努力してきたはずなのに、世界では全く逆の事態が噴出している。明るい未来像を持てなくなっている私たちはこれから一体どう生きていったらいいのか。

●これまでの卒業論文のタイトル一例

- ・「台湾における日本ブームの変化－哈日族の視点から－」
- ・「少子高齢化社会の新潟で進む地域格差」
- ・「サムスンの企業成長要因について」
- ・「韓流ブームは終わったか－文化交流と日韓関係の変化－」
- ・「日本コンテンツ産業におけるファンサブ・違法配信に関する考察」
- ・「日本のチャンネルブームについての考察」

●ゼミテーマ・タイトル

「私たちが生きている世界は一体どのような世界なのか」

●内容

小林ゼミでは、学生が「自立」する力を身につけることを最終的な目標としている。「自立」とは、ある問題に直面したとき、その問題解決のために自分で調査し、考え、そして結論を導き出す方法であり技術である。

私は世界がいま抱えている問題のほとんどは、少なくとも第2次世界大戦、多くの場合、近代にまでさかのぼって考えなければいけないと考える。そこでまず、学生が大学生として最低限身につけておかなければいけない基礎知識として特に日本の近代、現代について学ぶ。次いでその基礎の上に、現在起こっている問題を取り上げ、その解決策を探究する。取り上げるテーマは学生と話し合って決めるが、日中関係の問題、格差問題、少子高齢化問題等を考えている。2012年度は「結婚の条件と少子高齢化問題」、2011年度は「TPP 問題」、2010年度は「尖閣諸島問題」を取り上げた。

●使用予定テキスト：

- ・鹿野政直『日本の現代』岩波ジュニア新書
- ・読売新聞中国取材団『メガチャイナ』中公新書
- ・白波瀬佐和子『生き方の不平等』岩波新書
- ・小倉千加子『結婚の条件』朝日文庫、同『結婚の才能』朝日新聞出版
- ・宮台真司『日本の難点』幻冬舎新書

●ゼミの進め方：

3年前期は基本的な文献を読んで基礎的な知識を習得するとともに調査、分析、発表の仕方をマスターする。3年後期はテーマを決め、グループワークによって問題解決に取り組む。4年は専門的な論文読解に挑戦し、各自の卒業論文作成につなげる。

●成績評価基準：

出席、報告の内容および学期末のレポートによる。

●ゼミ選択上のアドバイス：

積極的かつ自主的に行動できる学生に来てほしい。上級生、卒業生と接触する機会が多いので、その中で社会性を身につけてもらいたい。中国語の能力は問わない。

高橋 正樹（たかはし まさき）

●教員の研究テーマ

現在は、グローバリゼーションが国家と社会にもたらす影響についてと、タイを中心とした東南アジアの政治や国際関係について研究しています。皆さんが生まれた頃から、グローバリゼーションが拡大したために、途上国のみならず日本を含む先進国でも国内社会の格差が深刻化してきました。不平等への関心から、日本国内の格差にも関心をもっています。タイ研究ではこれまで研究してきた国際関係の中での国家形成史研究と、現代のタイ政治の変動過程研究をこれから本格化させていきたいと思っています。

●教員の現在の関心

タイの今後の政治変動はどのようなものか。学生の就職は大丈夫だろうか。原発事故によって明らかになった日本社会のひどさは一体何だ。

●これまでの卒論テーマ

「戦争責任と戦後世代」「ビルマの民主化問題」「民族主義と国民国家」「中国の経済成長と農村問題」「コメ自由化と新潟のコメ農家の将来」「新潟における国際交流」「格差社会と教育」他

●ゼミテーマ・タイトル

グローバリゼーション・格差・原発事故と日本社会・東南アジア

●ゼミ内容

3年前期は原発事故で明らかになった日本社会の問題点を明らかにします（すでにこれまでのゼミでやったという学生が多い場合はテーマについて学生と相談します）。3年後期は、グローバリゼーションと日本社会の格差問題を扱います。皆さんの関心によっては、東南アジア研究、新潟の企業研究なども考えています。

これらの研究を元にして、3年の12月頃からは卒論研究をスタートさせます。卒業論文のテーマに関しては、世界と日本の政治経済関係という範囲の中で学生の主体性を尊重します。

●使用テキスト

橘木俊詔『格差社会』岩波書店、2006年；伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か』平凡社、2002年。
原発事故関連の書籍、論文。

●ゼミの進め方

ゼミでは、学生が中心となって議論を重視します。また、学生の主体的・自発的学習を求めます。さらに、1分間スピーチで話し方の練習をし、新聞リポートなどを通して社会一般に対する知識と関心を高めてもらいます。議論の仕方、本の読み方、文章の書き方などをしっかり学びます。

●成績評価基準

出席、ゼミでの議論、課題の内容を重視します。

●ゼミ決定に際してのアドバイス

原発事故をめぐる日本社会の問題点に関心のある学生、社会の不平等に関心がある学生、東南アジアに関心のあ
る学生、その他、社会について何でも学んでみたい学生は是非来てください。和気藹々とした楽しいゼミです。充
実した楽しい大学生活を送りたい学生は是非、高橋ゼミへ。

松尾 瑞穂（まつお みずほ）

●教員の研究テーマ

文化人類学（特にジェンダーと医療の人類学）を専攻。南アジア、インド社会をフィールドとして、女性のリプロダクション（出産や避妊、不妊など文字通りの人と社会の「再生産」に関わること）の近代化と変容過程について研究をしている。

●教員の現在の関心

身体とテクノロジー（科学技術に限らず広義の技法）との関わりに関心を持っている。たとえば、インドにおける代理出産や体外受精がもたらす家族関係の変容、家族計画・産児制限と優生思想、科学技術とカースト間の浄・不浄観念の変容など。近年はインドにおけるトランスナショナルな代理出産の実践について考えている。

●これまでの卒業研究のテーマ

日本における少子高齢化、新潟の人口流動と過疎化、家族と住宅の変容、ジェンダーと女性就労、ケア労働の女性化、サッカーとグローバリゼーション、宗教による食のタブー、老人福祉と在宅介護、性のボーダーレス化とファッション、英語教育の課題、代理懐胎の問題点など。

●ゼミテーマ・タイトル

変わりゆく日本の家族－グローバル化する家族、個人化する家族、家族を越える家族

●内容

本ゼミでは、ジェンダーや結婚、生活や文化の変容、少子化、高齢化、グローバル化などのさまざまなトピックを、「家族」という大きなテーマのもとで考える。取り上げるトピックは「家族」に関わるものとはいえ、社会学、人類学、経済学、ジェンダー、歴史学など多岐にわたるので、様々な視点からある現象を広く深く学び姿勢をぜひゼミで育んで欲しい。なお、本ゼミは必ずしも文化人類学の予備知識を必要とはしないが、何らかの「調査」に基づいて卒業論文を執筆することを強く推奨する（そのための指導とガイダンスは行う）。

●使用予定テキスト

稲賀繁美編（2000）『異文化理解の倫理にむけて』、名古屋大学出版会。

春日直樹編（2008）『人類学で世界を見る－医療・生活・政治・経済』、ミネルヴァ書房。

西川祐子（2004）『住まいと家族をめぐる物語－男の家、女の家、性別のない部屋』、集英社新書。

上野千鶴子（1994）『近代家族の成立と終焉』、岩波書店。

上野千鶴子（2011）『ケアの社会学－当事者主権の福祉社会へ』、太田出版。

その他、受講生と相談の上決定。理解を深めるために、映画やドキュメンタリーを用いて分析することも考えている。

●ゼミの進め方

前期には、グループ活動を取り入れながら、ゼミ・テーマに関連するトピックについて自分たちで調べ、分析し、発表してもらう。その後、決められたテキストの各章を全員が読み、担当者がレジュメを用意して発表、そして全員で討論するという形式をとる。また、前期の早いうちに論文（感想文ではなく！）の書き方について、基本からしっかり学ぶ時間を取りたいと思う。さらに、ゼミでは毎回、必ず全員が発言することを義務とする。何も考えていないテーマに発言することは不可能ではないが、難しい。発言するためには必ず全員が与えられたテーマについて調べ、読解し、自分なりによく咀嚼したうえでゼミに出席すること。文献は英語文献を読むことも考えている。

後期では、前期と同様、文献の読解を進めるとともに、各自が卒業論文で取り上げたいテーマに関する基本文献のリストを作成したうえで、もっとも重要だと思われる文献を選んで発表する。また、ゼミのなかでも調査に基づく作業を行う予定である。4年次は各自が調査研究の結果を報告し、全員で討論する形式としたい。ゼミの主役はゼミ生であり、それぞれが積極的に質疑、討論に参加し盛り上げていくことを期待する。

●成績評価基準

ゼミへの貢献度と発表レポートから総合的に評価する。

●ゼミ選択に際してのアドバイス

日本、外国に限らず、自分で調査をして卒業論文を書いてみたいと思う人に向いている。また、社会のなかで、「自

明（当たり前）」だと思われていることに疑問を抱いていたり、批判的に問い直したいと思っていたりする学生を歓迎する。あるいは、身体にもジェンダーにも関心はないが、アジアのことを知りたい！だとか、インドに興味があるという場合も大歓迎である。なお、本ゼミでは自分で調査して論文を執筆することが前提となる。文化人類学関連のテキストを読むことも多いので、ゼミ生は「文化人類学」（2年次）や、後期に開講される社会調査演習も履修することが望まれる。

矢口 裕子（やぐち ゆうこ）

●教員の研究テーマ

女性作家を中心としたアメリカ文学研究、ジェンダー／セクシュアリティ研究。

●教員の現在の関心

フランスに生まれ、ヨーロッパ各地を転々としたのちアメリカに移住した女性作家、アナイス・ニンを中心に、アメリカ文学をジェンダー／セクシュアリティ批評の立場から読み解くこと。

●これまでの卒業論文のタイトル一例

「女性の自己表現の可能性——『やおい』を考える」
「スポーツといじめから考える『男らしさ』の問題」

●ゼミテーマ・タイトル

英語テキスト講読によるジェンダー／文学／文化批評

●内容

文学研究の世界では、1980年代後半以降、「ジェンダー・階級・民族性」という新たな視点を導入することにより、それまで埋もれていたたり周縁的位置に追いやられていた作家・作品が発掘され、さらに、すでに正典（キャンノン）として評価が確立しているかに見えた作品を読み直す作業が盛んに行われるようになった。また、そうした新たな批評の道具を映画・音楽等ポピュラーカルチャーの解説に応用する試みも活発である。

このゼミでは、そうした批評的視点から文学、映画、音楽、文化一般や時代を読み解くこと、最終的にはその成果としての卒業論文をまとめることを目標とする。

前期は日本語のテキスト、後期は英語のテキストを取り上げる予定だが、場合によっては英語購読のみとする、翻訳のゼミにする等の選択肢もありえる。

●使用予定テキスト

田嶋陽子『ヒロインはなぜ殺されるのか』講談社
アドリエヌ・リッチ『血・パン・詩』晶文社
舌津智之『どうにも止まらない歌謡曲』晶文社
『抒情するアメリカ——モダニズム文学の明滅』研究社
Harry M. Benshoff and Sean Griffin, *Gender and American Film*, Eihosha.
Anais Nin, *Linotte: The Early Diary of Anais Nin*, Harcourt.

●ゼミの進め方

レポーター制によりテキストの精読を行う。レポーターの仕事は、テキストの内容をまとめ、調べるべきことを（舐めるように）調べ、そのうえで自分の意見・疑問・論点を提示し、ゼミ内の議論を活性化させること。むろんレポーター以外の学生もテキストを精読し、自分の意見を用意してゼミに臨むことが求められる。

●成績評価基準

レポーターとしてのゼミへの貢献度、普段の発言等ゼミへ取り組む姿勢、半期ごとに課すレポートの成果を総合的に判断する。

●ゼミ選択上のアドバイス

読むこと、書くこと、考えることが好きな学生、様々な分野にアンテナを張り巡らせた、知的好奇心旺盛な学生を歓迎する。3年ゼミは2年間かけて卒論を完成させる重要なものなので、自分の興味、適性、志向に鑑みて熟慮の上選んでほしい。

吉澤 文寿（よしざわ ふみとし）

●教員の研究テーマ

朝鮮現代史、とくに「植民地責任」／植民地主義をめぐる日朝関係。

●教員の現在の関心

- (1) 1965年に実現した日韓国交正常化に至るまでの交渉過程について、日韓双方で新たに開示された外交文書を使って再検討を試みている。
- (2) 「植民地責任」をキーワードとして、在日朝鮮人、植民地・戦争被害者などの視点から朝鮮および日本の現代史、ひいては世界史を理解する方法を追究している。
- (3) 新潟のなかの朝鮮の歴史にも関心をもって史料を集めたり、歴史の現場を訪れたりしている。

●これまでの卒業研究のテーマ

2012年度吉澤ゼミの学生による卒業論文のタイトルは以下の通りである。

- (1) 朝鮮に関連するもの
 - ・韓国政府の人口政策の変化について一少子化問題を中心に―
 - ・北朝鮮の情報技術（IT）についての考察―民衆文化という視点から―
 - ・障害者教育を通してみる李方子の人物像について
- (2) 上記以外
 - ・オリエントランドの人材教育―ディズニーリゾートを支えるキャストを中心に―
 - ・ユニクロを作り上げた柳井正の経営戦略

●ゼミテーマ・タイトル

3年次：朝鮮現代史ゼミ

4年次：自主的な卒業研究の実践

●内容

3年次に南北朝鮮に関連するテキストを用いて、朝鮮現代史に対する理解を深める。テキスト講読を通して、学生各自が関心や疑問を持ったことをさらに追究することを課題とする。また、学生からの要望があれば、他の文献および史料講読、フィールドワークなども行ないたい。

4年次にみずから定めたテーマで卒業研究を行なう。「これまでの卒業研究のテーマ」に示したとおり、朝鮮関係に限らなくてもよい。

●使用予定テキスト

3年次：文京洙『韓国現代史』岩波書店（岩波新書）、2005年

和田春樹『北朝鮮現代史』岩波書店（岩波新書）、2012年

和田春樹ほか編『岩波講座 東アジア近現代通史』岩波書店、2010-2011年のうち、朝鮮関係の論文。

4年次：とくになし。このほか、学生と相談して、講読すべき文献などがあれば、取り上げたい。

●ゼミの進め方

3年次：報告者はテキストの内容をまとめ、関心や疑問があることを調べ、論点を明確にする。他の学生もテキストを読み、関心や疑問があることを調べておく。議論を通して、各自が理解を深める。

4年次：学生が卒業研究報告を順次行ない、議論を通して理解を深める。

●成績評価基準

卒業研究にいちばん大切なことは、自らの課題に真剣に向き合い、粘り強く問い続ける意志である。

●ゼミ選択上のアドバイス

志望理由書には残りの2年間で自分が何を学びたいのか、できる限りでよいので、よく考えて書いてほしい。

システム演習

基礎演習 1
基礎演習 2
情報処理演習 (F, U, C, W)
情報システム演習 1
情報システム演習 2
情報システム演習
専門演習 A
専門演習 B
専門演習 C
専門演習 D

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	基礎演習 1 基礎演習 2	1 1	前 後	情報システム教員
22～24年度						
21年度以前						

必修

<授業目的>

特定テーマについて少人数のクラス（1クラス15～20名程度）による演習を通して、情報収集、プレゼンテーション、チーム作業、社会への適応などの能力を養う。各種資料からテーマを見つけ、自分の解釈、意見、提案をまとめたものや、グループ内で議論した内容などを各自が発表する。なお、各クラスを教員1名が担当し、学生と教員の密接なコミュニケーションをすすめる場としても活用する。「自ら考え、自ら行動すること」を重視する。

<各回毎の授業内容>

以下は演習のガイドラインを示したものである。各クラスで内容や順序が変更になることがある。

【基礎演習 1】

1～2. 自己紹介、履修指導

3～4. 映像鑑賞

5～6. 情報閲覧室の利用、情報収集

7～10. プレゼンテーション、文章表現

11～12. 学生生活、キャリア設計に関すること

13～15. クラス独自の課題による演習

【基礎演習 2】

1～3. プレゼンテーション、文章表現

4～10. チーム作業による演習

11～12. 学生生活、キャリア設計に関すること

13～15. クラス独自の課題による演習

<成績評価方法>

適宜実施するプレゼンテーション、チーム作業、レポートなどに点数を付け、合計点を100点満点に換算して評価する。

<教科書・参考文献>

最初の授業時に配付する。

<学習到達目標>

【基礎演習 1】人前で自分の考えを説明し、他人の考えを聞いて意見交換することができること（約50%）。情報を収集、整理して、問題点、解決策、考察をプレゼンテーションやレポートに表現できること（約50%）。

【基礎演習 2】情報を収集、整理して、問題点、解決策、考察をプレゼンテーションやレポートに表現できること（約50%）。チーム作業を通して問題解決にあたることができること（約50%）。

（関連する学習・教育目標：A）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報処理演習 F	2	前	西山 茂・岸野清孝

<授業目的>

コンピュータの基本操作に慣れていない学生および一から学習したい学生を対象とし、コンピュータの基本操作の学習を目的とする。おもにワードプロセッサ、表計算の演習を通してコンピュータの活用技術を身につける。

マイクロソフトがOfficeアプリケーションに関する理解度やスキルを認定する資格試験MOS (Microsoft Office Specialist)「スペシャリスト」に合格できるレベルの力をつける。

<各回毎の授業内容>

- 1 ワードプロセッサ 1 (word 1)
- 2 ワードプロセッサ 2 (word 2)
- 3 ワードプロセッサ 3 (word 3)
- 4 ワードプロセッサ 4 (word 4)
- 5 ワードプロセッサ 5 (word 5)
- 6 ワードプロセッサ 6 (word 6)
- 7 ワードプロセッサ 7 (word 7)
- 8 表計算 1 (excel 1)
- 9 表計算 2 (excel 2)
- 10 表計算 3 (excel 3)
- 11 表計算 4 (excel 4)
- 12 表計算 5 (excel 5)
- 13 表計算 6 (excel 6)
- 14 表計算 7 (excel 7)
- 15 まとめ

<成績評価方法>

適宜レポートを提出させる。演習時間の評価（40点）、レポートの評価（60点）の合計点を100点として評価する。

<教科書・参考文献>

Microsoft Office Specialist Word 2010対策テキスト&問題集、FOM出版（FPT1032）

Microsoft Office Specialist Excel 2010対策テキスト&問題集、FOM出版（FPT1031）
を使用する。

<受講に当たっての留意事項>

情報センター利用規則を守ること。

<学習到達目標>

ワードプロセッサ、表計算の演習を通して、コンピュータの基本操作を学習することにより、仕事や生活にパソコンを活用する力をつける。

・MOS「スペシャリスト」試験に合格できるレベルの力をつける。
（関連する学習・教育到達目標:C）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報処理演習Ⅰ（新）	2	前 後	山下 功・内田 亨・ 小林満男
<p><授業目的> コンピュータの基本操作にある程度慣れている学生を対象とし、コンピュータの高度な操作の学習を目的とする。おもにワードプロセッサ、表計算の演習を通してコンピュータの高度な活用技術を身につける。 マイクロソフトがOfficeアプリケーションに関する理解度やスキルを認定する資格試験MOS（Microsoft Office Specialist）「エキスパート」に合格できるレベルの力をつける。</p> <p><各回毎の授業内容> 1 ワードプロセッサ1（word 1） 2 ワードプロセッサ2（word 2） 3 ワードプロセッサ3（word 3） 4 ワードプロセッサ4（word 4） 5 ワードプロセッサ5（word 5） 6 ワードプロセッサ6（word 6） 7 ワードプロセッサ7（word 7） 8 表計算1（excel 1） 9 表計算2（excel 2） 10 表計算3（excel 3） 11 表計算4（excel 4） 12 表計算5（excel 5） 13 表計算6（excel 6） 14 表計算7（excel 7） 15 まとめ</p> <p><成績評価方法> 毎回レポートを提出させる。演習時間の評価（40点）、レポートの評価（60点）の合計点を100点として評価する。</p> <p><教科書・参考文献> Microsoft Office Specialist Word 2010 Expert 対策テキスト&問題集、FOM出版（FPT1107） Microsoft Office Specialist Excel 2010 Expert 対策テキスト&問題集、FOM出版（FPT1106） を使用する。</p> <p><受講に当たっての留意事項> 情報センター利用規則を守ること。</p> <p><学習到達目標> ・ワードプロセッサ、表計算の演習を通して、コンピュータの高度な操作を学習することにより、仕事や生活にパソコンを活用する力をつける。 ・MOS「エキスパート」試験に合格できるレベルの力をつける。 （関連する学習・教育到達目標：C）平成25年度生以降</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	1 年 2 年	情報処理演習Ⅰ（旧）	2	前 後	山下・高木・上西園 内田・小林・槻木
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

実社会における問題などを解くためにアプリケーションの高度利用技術を習得することを目的とする。アプリケーションとしてExcel、SQL、VB（Visual Basic）を使用する。Excelは基礎的な内容を理解していることを前提に、文書の作成やデータの分析など、さらに進んだ内容を扱う。SQLは情報システムとして最も使用されているデータベースを扱う言語であるが、演習では主にリレーショナルデータベースのデータ照会について学ぶ。VBはWindows用アプリケーションを簡単に作成できるプログラミング言語であるが、演習では簡単ないくつかのプログラムを作成し稼動させることにより理解を深める。

<各回毎の授業内容>

1

Excel

グラフの作り方の応用

2

〃

カウント、集計表、度数

3

〃

様々な関数の使い方

4

〃

表引き関数の使用の仕方

5

Excel

表計算ソフトの歴史と現状、理解度テスト

6

SQL

データ操作言語（DML）の利用

7

〃

データの照会 SELECT文によるデータの取り出し

8

〃

データの照会 FROM節、WHERE節、GROUP BY節、ORDER BY節

9

〃

RDB（Relational DataBase）の表に対する基礎

10

SQL

理解度テスト

11

VB

VBについて、プログラミングの基礎

12

〃

計算の仕方

13

〃

コントロールの使い方

14

〃

グラフィックスの使い方

15

VB

理解度テスト、全体のまとめ

<成績評価方法>

時間内に行う演習課題の評価点の合計を40％、適宜提出させたレポートと理解度テストの評価点の合計を60％として成績評価を行う。

<教科書・参考文献>

必要な資料は配付する。

<受講に当たっての留意事項>

情報センター利用規則を守ること。

<学習到達目標>

アプリケーションの利用技術を学習することにより、仕事や生活にパソコンやインターネットを活用する力を習得する。

（関連する学習・教育到達目標：C,D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	2 年	情報処理演習 U2（旧）	2	前 後	小宮山・伊村・白井・ 高木・藤田
21年度以前						

選択

<授業目的>

Excelによる統計解析では、Excelによるデータ集計や統計解析の方法を学ぶ。Excelシミュレーションでは、Excelが持っている有力な機能の紹介と使い方の演習を行う。社会に出て十分使えるような機能を修得する。さらに Access を使ってデータベースの作成を学ぶ。

<各回毎の授業内容>

Excelによる統計解析（前期：小宮山・後期：伊村）

1. 基本統計量の求め方

2. データの集計：パレート図の作成など

3. 売れ筋商品を見つける：カイ二乗検定など

4. ファミリーレストランの印象：分散分析など

5. Excelによる統計解析のテスト

Accessによるデータベースの作成（前期：高木・後期：藤田）

6. Accessの概要

7. オブジェクトの作成

8. リレーションシップとコンボボックス

9. クロス分析とデータベースの正規化

10. 同上及びテスト

Excelによるシミュレーション（前期・後期：白井）

11. 度数分布を求める。

12. 一様乱数発生方法について

13. ゴールシークで方程式を解く

14. 最適化とソルバー、確率分布について

15. Excel シミュレーションのテスト

<成績評価方法>

演習課題・レポート課題及び最終回（各5回目）のテストの成績による。

<教科書・参考文献>

教科書を配布する。

<受講に当たっての留意事項>

Excelの基礎的事項を習得していることが望ましい。

<学習到達目標>

専門科目の中でアプリケーションがどのように使われるかを理解させるとともに、アプリケーションの高度な技能を習得させる。

（関連する学習・教育到達目標：C, D）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報処理演習 U2（新）	2	後	藤田晴啓（情報システム） 槻木公一（情報システム） 高木義和（情報システム）
<p>選択必修</p> <p>＜授業目的＞</p> <p>AccessとSQLはデータベースを扱うアプリケーションであるが、Word、Excelなどと同様に使用することが目的ではなく、実社会等における目的達成のための手段である。この演習ではAccessとSQLを使って、リレーショナルデータベースの操作方法と、使用目的を意識したデータの扱いを学ぶ。さらにVB（Visual Basic）を使ってプログラミングの基礎概念を学ぶ。プログラミングに関する基礎知識を習得することにより、コンピュータの中で稼働しているソフトウェアに関する理解を深める。</p> <p>＜各回毎の授業内容＞</p> <p>Accessによるデータベースの作成</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Accessの概要・オリエンテーション 2 オブジェクトの作成 3 リレーションシップとコンボボックス 4 クロス分析とデータベースの正規化 5 同上及びテスト <p>VBによるプログラミング</p> <ol style="list-style-type: none"> 6 VBについて、プログラミングの基礎 7 計算の仕方 8 コントロールの使い方 9 グラフィックスの使い方 10 全体のまとめ、VB理解度テスト <p>SQLによるRDBの操作</p> <ol style="list-style-type: none"> 11 SQL データ操作言語（DML）の利用 12 データの照会 SELECT文によるデータの取り出し 13 データの照会 FROM節、WHERE節、GROUP BY節、ORDER BY節 14 RDB（Relational DataBase）の表に対する基礎 15 SQL理解度テスト <p>＜成績評価方法＞</p> <p>・演習課題・レポート課題及び最終回（各5回目）のテストの成績による。 検索主題とキーワード、インターネット情報の検索、新聞記事情報の検索、図書・雑誌記事情報の検索、複合情報検索のレポート（80％）と定期試験（20％）により評価する。</p> <p>＜教科書・参考文献＞</p> <p>教科書を配布する</p> <p>＜受講に当たっての留意事項＞</p> <p>この授業で学ぶ内容を理解できれば個人の情報活用能力が大きく向上することが期待できます。有料のデータベースを使用するため情報およびDBの著作権に注意を払ってください。指示に従わないレポートは提出されても評価しない場合があります。</p> <p>＜学習到達目標＞</p> <p>検索主題をキーワードで表現できるようになる20％ インターネットWeb情報の特性を理解しその情報を利用することができる20％ 新聞記事情報の特性を理解しその情報を利用することができる20％ 図書・雑誌記事情報の特性を理解しその情報を利用することができる20％ 利用できる情報源の種類と特性を理解し英語情報を含めた世界の情報を利用することができる20％ （関連する学習・教育到達目標：D,C）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年 2 年	情報処理演習 C1	2	前 後	情報システム学科教員
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

コンピュータを使用して情報処理の問題を解決するために必要なプログラミング技術の基本を、C言語により学習する。初めてC言語を学ぶ学生を対象に、データ型、入出力処理、演算、制御構造、配列、関数といったプログラミングの基本を学習する。

<各回毎の授業内容>

1. C言語プログラムの基礎、プログラミング環境について

2. データ型、入出力

3. 演算

4. データ型、入出力、演算のまとめ

5. 制御構造（分岐 if文）

6. 制御構造（分岐 switch文）

7. 制御構造（反復 do文）

8. 制御構造（反復 while文）

9. 制御構造（反復 for文）

10. 制御構造のまとめ

11. 配列の基礎

12. 配列の応用

13. 関数の基礎

14. 関数の応用

15. まとめ、理解度テスト

<成績評価方法>

時間内に行う演習課題の評価点の合計を40％、宿題レポートの評価点の合計を30％、理解度テストの評価点を30％として成績評価を行う。

<教科書・参考文献>

・教科書「新版 明解C言語 入門編」柴田望洋 ソフトバンククリエイティブ ISBN: 978-4797327922

・参考文献はその都度紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・情報センター利用規則を守ること。

<学習到達目標>

・C言語プログラミングに関する基本的な知識を理解し学習することにより、簡単な問題の解析を行うことができること（演習10％・宿題10％）。

・プログラム作成やデバッグができるようになること（演習30％・宿題20％・テスト30％）。

（関連する学習・教育到達目標:C,D)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年 2 年	情報処理演習 W	2	前 後	西山・河原／近藤・石井 （システム）
22～24年						
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

コンピュータの基本構成やネットワークについての知識を体験的に学習した上で、ウェブプログラミングに関する基礎技術を学習する。前半では、コンピュータの仕組みを理解し、OS（Linux）をインストールして使い方を理解する。次にネットワークの設定を行い、ウェブサーバを構築する。後半では、CSS、JavaScript、CGI等のウェブプログラミング技術に関する基本的な学習を行う。

<各回毎の授業内容>

1

ガイダンス

2

前半1 コンピュータの仕組み

3

前半2 コンピュータの組立て

4

前半3 OSのインストール

5

前半4 OSの基本設定、使い方

6

前半5 ネットワークの設定

7

前半6 ウェブサーバの構築・設定

8

前半7 まとめ

9

後半1 WWWのしくみ、ウェブプログラミングの基礎、HTML

10

後半2 スタイルシート（CSS）

11

後半3 JavaScriptの基礎

12

後半4 JavaScriptの応用

13

後半5 CGIの基礎

14

後半6 CGIの応用

15

後半7 まとめ

<成績評価方法>

時間内に行う演習課題の評価点の合計を40％、適宜提出させるレポートと理解度テストの評価点の合計を60％として成績評価を行う。

<教科書・参考文献>

・必要な資料を配付する

・参考文献はその都度紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・講義や演習でHTMLに関して理解しておくことが望ましい。

・情報センター利用規則を守ること。

<学習到達目標>

コンピュータやネットワーク、ウェブプログラミングに関する演習を行うことにより、コンピュータの構成とネットワーク（前半の成績評価による）、ウェブの仕組み（後半の成績評価による）について理解できるようになる。

（関連する学習・教育到達目標:C）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	2 年	情報システム演習 1	2	前 後	情報システム学科教員
21年度以前			情報システム演習 2	2		

必修（情報システム学科（24年度以前））

＜授業目的＞

各自が主体的に"情報システム"を創造し、または情報システムを活用し情報を創造するために必要になるであろう、基礎的な方法・概念の取得を目的とした演習である。

＜各回毎の授業内容＞

情報システム演習 1 と情報システム演習 2 をあわせると 30 回の演習が行われる（前期:「情報システム演習 1」15 回、後期:「情報システム演習 2」15 回）。前期の第 1 回目（総合演習 1）では演習のガイダンスならびにこの演習の位置づけの説明を行う。第 15 回目（総合演習 2）では前期のまとめを行う。後期の第 1 回目（総合演習 3）では、研究室配属のガイダンスを行う。第 15 回目（総合演習 4）では情報システム演習 1・2 全体のまとめを行う。この他に前後期あわせて 26 回の演習を行う。演習で学ぶ内容は以下の 4 つのグループに分けられる。

1）地域社会や企業を経済的・経営的視点から捉えるための種々の方法を学ぶ。新潟・日本・世界といった地域的な広がりに着目した経済的分析と、需要予測、金利と償却、在庫管理について学ぶ（No.1～7）。

2）数量的なデータの解析の仕方を学ぶ。自らデータ分析ができるように、また既存のデータ分析の結果を評価し、利用できる能力を身につけるための基本的なトレーニングを行う。さらに、就職試験問題に出題される問題を解くために必要な数学の基礎を学ぶ（No.8～15）。

3）企業での業務を分析し、コンピュータを利用した情報システムを設計するための一連の方法を学ぶ。コンピュータによる情報システムを設計するために業務・情報の流れを図式化し分析すること、コンピュータに入力すべき情報を確定し、入力画面を設計すること、入力された情報をデータベース化する方法を修得する（No.16～21）。

4）コンピュータの中ではどのようにして演算が行われているのかということを理解する。まず論理回路の実験を行ない、電子による演算を体験する。次にマシン語によるプログラムの作成を行ない、演算の仕組みを学ぶ。また、制御用マイコンにプログラムを書き込み、その使い方を学ぶ（No.22～24）。

＜成績評価方法＞

半期ごと、演習時課題点 40 点、レポート点 60 点の合計 100 点満点で成績評価を行う。

＜教科書・参考文献＞

第 1 回演習時にテキストを配布する。

No.12～No.15では別途テキストを指定するので、教科書販売時に購入すること。

＜受講に当たっての留意事項＞

演習に出席しなければ、成績評価の対象とならない。

＜学習到達目標＞

1）情報システムを分析し、設計するためのさまざまな手法を使って、問題解決に応用できるデザイン能力を身につける。

2）情報システムを有効に活用するための基礎的な考え方を、演習を通して身につける。

（関連する学習・教育到達目標:E）

No.	演習項目	演習内容
1	世界経済と日本	世界主要国の人口および GNP per capita を求め、貿易収支と為替レートの関係を理解する。
2	日本経済の動向	日本経済の GNP・GDP、産業構造の変化、個人消費構造の変化等のマクロ経済について学ぶ。ついで、GDP の変化と個人消費構造の変化と相関分析を行う。
3	新潟県の位置付け	国内統計データより、各県毎の経済指標、生活指標を比較し、全国における新潟県の位置付け、特色を理解する。新潟県の情報産業データを分析し実態を理解する。
4	需要予測	モデルデータのグラフ化、数式化、数式モデルによる需要予測の考え方を学ぶ。
5	在庫管理	発注時期や発注量は、在庫の基本的な意思決定因子であり、これらが一定か変化するかにより、種々の在庫管理方式が存在する。これらについて学習する。
6	金利と償却	金利について単利・複利の概念を解説し、実際の金利計算をおこないその違いを体験する。固定資産の減価償却の概念を学び、定額法と定率法償却計算の構造を理解する。
7	財務諸表分析	財務諸表の数値を加工することによって、成長性、利益性、採算性、安全性、生産性などを測定する。過去の会計情報を分析し、将来に生かす方法を理解する。
No.	演習項目	演習内容
8	サンプリング	偶然との付き合い方を学びます。一見すると偶然は予測不能のように思えますが、違うのです。偶然だから推定できるのです。なぜ"ランダムサンプリング"しなければならないのか、そのしくみを実験を用いて、実感していただきます。さらにこのしくみを用いて、推定することを学びます。
9	さまざまな分布の理解とデータの単純集計	調査や測定によってデータが得られたならば、どのような結果が生じたかを知るために代表値を算出したり図表を作成したりする。本演習では、実際に得られたデータを用いて度数分布図や散布図等を作成する。
10	統計的検定と推定	推測統計学の代表的な手法である統計的検定について学ぶ。理解すべき概念は帰無仮説と対立仮説・有意水準・ノンパラメトリック検定とパラメトリック検定などである。具体的手法として2つの平均値の差の検定（t 検定）・2つの分散の検定（F 検定）・独立性・関連性の検定（クロス集計表による検定）を例題により演習する。
11	相関分析と回帰分析	2つの特性の間の関係を知るための方法として、散布図、相関係数、寄与率を理解する。ついで回帰直線を求め、回帰係数、切片、残差などを理解し、一方で実測値からもう一方の値を推定する方法を学ぶ。また、複数の実測値から一つの値を推定する重回帰分析についてもこの章で学ぶ。
12	数学の基礎(1)	割合の計算・損益算・年齢算・仕事算など就職試験問題に出題される問題を中心に解法を概説する。また、指定テキストにある問題など演習問題を多く解くことで、実力をつける。
13	数学の基礎(2)	速度算・通貨算など文章題および数学的推論や論理的思考問題など就職試験問題に出題される問題を中心に解法を概説する。また、指定テキストにある問題など演習問題を多く解くことで、実力をつける。
14	数学の基礎(3)	就職採用試験に広く採用されている SPI2 非言語問題を突破できるように、ここでは、場合の数、集合、確率、n 進法について指定テキストの演習問題を解くことにより、解法を修得する。
15	数学の基礎(4)	就職採用試験に広く採用されている SPI2 非言語問題を突破できるように、ここでは、虫食い算、不等式、進路と方向、PERT 手法について指定テキストの演習問題を解くことにより、解法を修得する。

No.	演習項目	演習内容
16	システム構造の理解と図式表現	業務（仕事）の情報システム化を考える時には、対象とする仕事の仕組みを調査し、その仕事は何を目的とし、どのように行われているかを理解する必要がある。仕事の仕組みを誰でもが理解できる図表で表現し、仕事の内容を分析する方法を学ぶ。
17	情報の流れの分析	仕事の内容を分析し、機能（仕事の単位）に分解したら、各機能を実行するためにどのような情報が必要かを分析する。その結果を、機能と情報の関係を表現する図である、データフローダイアグラムに書き表す方法を学ぶ。
18	入力情報の分析	仕事を実行するために必要な情報（入力情報）の内容を分析し、必要とされる情報項目を明らかにする。そして、入力情報をコンピュータにインプットするための入力画面を設計する方法を学ぶ。
19	蓄積情報の分析	入力された情報をコンピュータ内に蓄積し、必要な時に利用できるようにするために、どのような情報を蓄積するべきかを考える。蓄積するべきいろいろな情報の内容と、それらの関連を分析し、エンティティリレーションシップダイアグラムに書き表す。
20	リレーショナルデータベース	コンピュータ内に情報を蓄積するための方法として、最も一般的なテーブル形式のデータベースであるリレーショナルデータベース（関係データベース：RDB）について、その設計方法と活用方法を学ぶ。
21	SQL（データベース照会言語）	リレーショナルデータベース（RDB）に情報を蓄積し、必要な情報を的確に取り出すためのデータベース操作言語であるSQL (Structured Query Language) を実習を通して学ぶ。
No.	演習項目	演習内容
22	論理演算	ロジックトレーナーを用いて論理回路を組み、電子による演算の仕組みを知る。
23	ワンボードコンピュータ	マシン語のプログラムを作成し、コンピュータの動作の基本を理解する。
24	PIC マイコンによる制御	マイコンはコンピュータの機能を圧縮したもので、自動車や家電に広く使われている。ここでは、マイコンに簡単なプログラムを書き込み、その使い方を学ぶ。

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報システム演習（A分野）	1	後	A分野担当情報システム学科教員

必修

<授業目的>
 企業での業務を分析し、コンピュータを利用した情報システムを設計するための一連の方法を学ぶ。
 2回では、ビジネスで用いられるデータの種類・様式を学ぶ。
 3回、4回では、業務（仕事）の情報システム化を考えるとときに必要な、仕事の仕組みを誰でもが理解できる図表で表現し、仕事の内容を分析する方法を学ぶ。
 5回、6回では、仕事内容の分析から得られた機能とデータの流れを、形式的図形表現手法であるデータフローダイアグラムに書き表す方法を学ぶ。
 7回、8回では、仕事を実行するために必要な情報項目を明らかにする。得られた情報項目をコンピュータに入力するための入力画面、処理結果を表示する出力画面、を設計する方法を学ぶ。
 9回、10回では、入力された情報をコンピュータ内に蓄積し、必要な時に利用できるようにするために、蓄積すべき情報と、それらの関連を分析し、エンティティリレーションシップダイアグラムに書き表す。
 11回、12回では、コンピュータ内に情報を蓄積する最も一般的なデータベースであるリレーショナルデータベース（RDB）について、その論理的設計方法を学ぶ。
 13回、14回では、リレーショナルデータベース（RDB）に情報を蓄積し、必要な情報を的確に取り出すためのデータベース操作言語であるSQL（Structured Query Language）を実習を通して学ぶ。
 15回では、2回～12回で学んだ分析設計を通して復習する。

<各回毎の授業内容>
 1. SPI模擬試験（ただし、2年生後期の場合は各研究室の説明会）
 2. ビジネスデータ
 3. システム構造の理解と図式表現(1)
 4. システム構造の理解と図式表現(2)
 5. 情報の流れの分析(1)
 6. 情報の流れの分析(2)
 7. 入力情報の分析(1)
 8. 入力情報の分析(2)
 9. 蓄積情報の分析(1)
 10. 蓄積情報の分析(2)
 11. リレーショナルデータベース(1)
 12. リレーショナルデータベース(2)
 13. SQL(1)
 14. SQL(2)
 15. 総合演習

<成績評価方法>
 毎回の演習時課題点40点、レポート点60点の合計100点満点で成績評価を行う。

<教科書・参考文献>
 第1回演習時にテキストを配布する。

<受講に当たっての留意事項>
 演習に出席しなければ、成績評価の対象とならない。

<学習到達目標>
 1) 情報システムを分析し、設計するためのさまざまな手法を使って、問題解決に応用できるデザイン能力を身につける。
 2) 情報システムを有効に活用するための基礎的な考え方を、演習を通して身につける。
 (関連する学習・教育到達目標:E)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報システム演習（BC分野）	1	後	伊村知子（B）・内田亨（C）・ 上西園武良（B）・岸野清孝（C）・ 小宮山智志（B）・佐々木桐子（C）
<p>必修</p> <p><授業目的></p> <p>各自が主体的に"情報システム"を創造し、または情報システムを活用し情報を創造するために必要になるであろう、基礎的な方法・概念の取得を目的とした演習である。</p> <p>本演習の前半（B分野：人間と社会）では、数量的なデータの解析の仕方を学ぶ。自らデータ分析ができるように、また既存のデータ分析の結果を評価し、利用できる能力を身につけるための基本的なトレーニングを行う。</p> <p>後半（C分野：経営と情報）では、企業経営における情報システムの利活用に関する基礎的な知識の習得を目指す。具体的には、マーケティング、財務諸表、経営分析について学習し、ビジネスゲームを通じて、より実践的な意思決定能力、データ分析能力、プレゼンテーション能力を養う。</p> <p><各回毎の授業内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. SPI模擬試験（ただし、2年生後期の場合は各研究室の説明会） 2. B分野：2項検定 3. B分野：クロス集計とχ^2乗検定 4. B分野：一对の標本による平均の検定(1) 5. B分野：一对の標本による平均の検定(2) 6. B分野：グループでの課題演習(1) 7. B分野：グループでの課題演習(2) 8. B分野：グループでの課題演習(3):発表会 9. C分野：ビジネスゲーム説明 10. C分野：ビジネスゲーム（練習）Ⅰ期,Ⅱ期 11. C分野：財務諸表と経営分析 12. C分野：ビジネスゲームⅠ期,Ⅱ期 13. C分野：ビジネスゲームⅢ期,Ⅳ期 14. C分野：取締役会:株主総会の資料作成 15. C分野：株主総会:発表会 <p><成績評価方法></p> <p>演習時課題点40%、レポート点60%で成績評価を行う。成績判定はこの総合点で実施する。</p> <p><教科書・参考文献></p> <p>第1回演習時にテキストを配布する。</p> <p><受講に当たっての留意事項></p> <p>演習に出席しなければ、その回のレポート点は成績評価の対象とならない。</p> <p><学習到達目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報システムを分析し、設計するためのさまざまな手法を使って、問題解決に応用できるデザイン能力を身につける。 ・情報システムを有効に活用するための基礎的な考え方を、演習を通して身につける。 <p>（関連する学習・教育到達目標:E）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
25年度以降	専 門	1 年	情報システム演習（D分野）	1	後	D分野担当情報システム学科教員
<p>必修</p> <p><授業目的> 各自が主体的に"情報システム"を想像し、または情報システムを活用し情報を創造するために必要になるであろう、基礎的な方法・概念の取得を目的とした演習である。 特にD分野で必要となる情報システムを開発するために必要なコンピュータと通信技術について、WebページとWebアプリケーション作成を通して基本的な内容を具体的に学習する。 本演習の前半では、Web（ウェブ）の仕組みを理解し、実際にHTMLとスタイルシート（CSS）及びJavaScriptを用いてWebページを作成する手法を学習する。 後半では、前半で学んだ内容を発展させ、Webブラウザ上で動作し、スマートフォンやタブレット端末でも動作するWebアプリケーションの作成を行う。</p> <p><各回毎の授業内容> 1. SPI模擬試験（ただし、2年生後期の場合は各研究室の説明会） 2. Webの仕組みについて 3. HTMLについて 4. HTMLの作成 5. CSSについて 6. CSSの作成 7. JavaScriptについて 8. JavaScriptの作成 1 9. JavaScriptの作成 2 10. Webアプリケーションについて 11. Webアプリケーションの作成 1 12. Webアプリケーションの作成 2 13. Webアプリケーションの作成 3 14. Webアプリケーションの作成 4 15. Webアプリケーションまとめ</p> <p><成績評価方法> 毎回の演習時課題点40点、レポート点60点の合計100点満点で成績評価を行う。</p> <p><教科書・参考文献> 第1回演習時にテキストを配布する。</p> <p><受講に当たっての留意事項> 演習に出席しなければ、成績評価の対象とならない。</p> <p><学習到達目標> 1) 情報システムを分析し、設計するためのさまざまな手法を使って、問題解決に応用できるデザイン能力を身につける。 2) 情報システムを有効に活用するための基礎的な考え方を、演習を通して身につける。</p> <p>（関連する学習・教育到達目標:E）</p>						

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	3 年	専門演習 A	2	前	桑原・小林・石井・石川 槻木・西山・高木
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

「情報とシステム」を専門分野とする学生を対象とし、オブジェクト指向型の情報システム開発手順とオブジェクト指向用図式記述法（UML）を学ぶ。さらにコンピュータシステム化する具体的な課題を用いてオブジェクト指向による分析、設計、実装を実地に体得する。Visual Basicを実装に用い、オブジェクト指向による分析、設計の結果がコンピュータ上で正しく動作することを確認する。

<各回毎の授業内容>

1 演習ガイダンス及びオブジェクト指向設計概説	桑原、小林
2 オブジェクト指向分析、設計の概念	小林
3 UMLの概要と要件定義（ユースケース分析）	小林
4 動的モデリング（シナリオ分析）	石井
5 静的モデリング（オブジェクト分析）	石井
6 Visual Basicによる例題の実装 1 （オブジェクト指向設計による住所録システムのプログラム）	石川
7 Visual Basicによる例題の実装 2 （オブジェクト指向設計による住所録システムのプログラム）	石川、槻木
8 予約システムの分析設計 1	槻木
9 予約システムの分析設計 2	槻木
10 予約システムの実装 1（プログラム作成）	槻木
11 予約システムの実装 2（データベース作成）	西山、石川、槻木
12 予約システムの実装 3（実装とデバッグ）	西山、桑原、槻木
13 予約システムの実装 4（システムのテスト）	西山、桑原
14 成果発表と評価	西山、高木
15 理解度テスト	桑原

<成績評価方法>

・課題レポート、実習および理解度テストで、情報システムの企画、設計、構築の方法に関する理解度を評価する。（50％）

・オブジェクト指向技術を実際の問題解決に応用できる力を、システム実装結果及び成果発表により評価する。（50％）

<教科書・参考文献>

参考書:ジョセフ・シュムラー著、長瀬嘉秀監訳「独習UML」翔泳社 3600円

テキスト「専門演習 A」を配布する。

<学習到達目標>

・UMLを使ったオブジェクト指向分析、設計、プログラミングの方法を理解できるようになる。（50%）

・簡単な問題に対し、オブジェクト指向モデルでの開発ができるようになる。（50%）

(関連する学習・教育到達目標:G)

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	3 年	専門演習 B	2	前	伊村知子・上西園武良・ 小宮山智志・白井健二・ 近山英輔・藤瀬武彦・藤田晴啓
21年度以前						

必修

<授業目的>

この演習では、卒業研究の前段階として、テーマ（問題）を選定し、その問題についてどう解決すべきかを考え、それを実践し、報告するといった一連の研究形式を学ぶ。テーマは、B分野で取り上げられるべき「人間と社会」に関するものに限定する。各研究室単位でその研究室に必要な基本的研究方法、およびデータ解析方法を学び、最終的には、報告書を作成し発表を行う。

<各回毎の授業内容>

全体を4つに分けて演習を行う。第1回目～第4回目では、テーマとして取り上げられるべきB分野の研究領域に関して概説を行う。第5回目～第10回目では、各研究室に分かれ、研究テーマ（問題）を選定し、その問題を解決するために調査・実験を行いデータを収集する。第11回目～第12回目では、収集したデータを持ちより、データ解析を行いながら、解析方法に関して理解を深める。第13回目～第15回目では、報告資料・発表資料の作成後、それぞれのグループでまとめた研究成果を研究発表会で報告する。

1. ガイダンス

2. B分野における研究テーマおよび研究方法の概説(1)

3. B分野における研究テーマおよび研究方法の概説(2)

4. B分野における研究テーマおよび研究方法の概説(3)

5. 研究テーマ設定

6. 研究計画立案

7. 調査・実験(1)

8. 調査・実験(2)

9. 調査・実験(3)

10. 調査・実験(4)

11. データ解析(1)

12. データ解析(2)

13. 報告資料・発表資料作成(1)

14. 報告資料・発表資料作成(2)

15. 研究発表会

<成績評価方法>

毎回の実習課題レポート（50％）、最終レポート及び研究発表（50％）で評価する。

<教科書・参考文献>

各回に資料を配布する。

<受講に当たっての留意事項>

演習に出席しなければ、その回のレポート点は成績評価の対象とならない。

<学習到達目標>

この演習を通して以下の4つの能力を身につけることを目標とする。

1) 問いを見つける構想力

2) 斬新な仮説を導き出す独創性

3) 検証方法に関する応用力

4) 結論を導き出す論理的思考力

（関連する学習・教育到達目標:H）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	3 年	専門演習 C	2	前	岸野・高木・小林・ 谷本・内田・山下
21年度以前						

<授業目的>

本演習では、企業経営における情報システムの利活用に関する基礎的な知識の習得を目指す。具体的には、経営組織や経営戦略、経営分析、マーケティング、流通と物流などを理論的に学習し、ビジネスゲームを通じて、より実践的な意思決定能力、データ分析能力、プレゼンテーション能力を養う。さらに、事業計画の技法を取り入れながら、企業経営における問題を発見し、解決策を立案し、問題解決に至るプロセスを学ぶ。所属研究室を基本としたチームを構成することで、コミュニケーション能力の向上も充分期待される。

<各回毎の授業内容>

回次	主担当	内 容
1	岸野	オリエンテーション・ビジネスゲーム説明、ビジネスゲーム（練習）Ⅰ期、Ⅱ期
2	山下	ビジネスゲームの会計情報演習
3	内田	経営組織演習、ビジネスゲーム（基礎）Ⅰ期、Ⅱ期
4	内田	経営戦略演習、ビジネスゲーム（基礎）Ⅲ期、Ⅳ期
5	小林（満）	企業経営と情報システム演習、第1回取締役会：株主総会の資料作成
6	小林（満）	第1回株主総会：発表会
7	高木	市場情報利用演習、ビジネスゲーム（応用）Ⅰ期、Ⅱ期
8	岸野	流通と物流演習、ビジネスゲーム（応用）Ⅲ期、Ⅳ期
9	谷本	マーケティング演習、第2回取締役会：株主総会の資料作成
10	谷本	第2回株主総会：発表会
11	佐々木	第2回株主総会の講評、ビジネスゲームからシミュレーションへ シミュレーション概要、モデリング演習
12	佐々木	システムシミュレーション、プロジェクトチーム始動：問題提起、解決策の立案
13	佐々木	システムシミュレーション、シミュレーションモデルの作成、報告書の作成
14	佐々木	システムシミュレーション、発表会
15	高木	総括

<成績評価方法>

- ・個人の達成度（66％）：小テスト、レポート等。
- ・チームの貢献度（34％）：経営力（事業内容の統一性、意思決定の妥当性）、プレゼンテーション能力（発表の分かりやすさ、質疑の対応の仕方）等。必ず出席し、レポートを提出することが重要。欠席、遅刻は減点する。

<教科書・参考文献>

- ・専門演習Cのテキスト、資料等は各担当教員が必要に応じて配布する。

<学習到達目標>

- ・理論を通じて、企業経営に関わる基礎的な知識を習得することができる（個人の達成度として60点の配点）。
- ・ビジネスゲームを通じて、企業経営における意思決定能力、データ分析能力、プレゼンテーション能力を養うことができる（チームの達成度として25点の配点）。
- ・事業計画を通じて、企業経営における問題発見、問題解決のプロセスを理解することができる（チームの達成度として15点の配点）。

（関連する学習・教育到達目標：I）

入学年度 区 分	授業科目 区 分	学 年	授業科目	単 位 数	学 期	担当教員（所属等）
22～24年	専 門	3 年	専門演習 D	2	前	槻木・石井・河原・中田 近山・近藤・石川 （情報システム）
21年度以前						

選択必修

<授業目的>

情報システムを開発するために必要なコンピュータと通信技術について、演習を通して具体的に学習する。自由にプログラムを開発できるようになるために、まずOSの機能と操作を学び、次に実際に稼動する応用プログラムを作成する。通信技術については、ネットワークを実際に構築することによって、インターネットの仕組みを理解する。

<各回毎の授業内容>

1 OSの機能と操作・・・シェルの役割とプロセス制御

2 OSの機能と操作・・・ファイルシステムとセキュリティ

3 OSの機能と操作・・・正規表現、リダイレクション、パイプ

4 シェルプログラミング・・・利用環境の設定とシェルスクリプト

5 画像処理プログラミング・・・画像処理ソフトの活用方法

6 画像処理プログラミング・・・濃淡画像処理とヒストグラム

7 画像処理プログラミング・・・カラー画像処理

8 Lispによるエキスパートシステム・・・基本設計とルール記述

9 Lispによるエキスパートシステム・・・プロダクションシステムの作成

10 計算機アルゴリズム・・・8クイーン問題プログラムの作成

11 計算機アルゴリズム・・・最短経路問題プログラムの作成

12 ネットワークおよびweb、mailサーバ構築実習・・・サーバとクライアントシステムの設定

13 ネットワークおよびweb、mailサーバ構築実習・・・ネットワーク環境設定と接続テスト

14 電子回路の製作・・・発光ダイオードを用いた光通信回路の組み立て

15 まとめ

1～4の対象OSはUNIX (Linux)、5～7と10～11で使用する言語はC言語である。

<成績評価方法>

・毎回、時間内での演習課題の評価点50％、宿題レポート点50％として成績評価する。

<教科書・参考文献>

・演習テキストを配布する。

・参考文献は必要な都度紹介する。

<受講に当たっての留意事項>

・UNIXのコマンド、C言語やLispの文法、ネットワーク設定など演習中に理解不足と感じたら、指導教員に質問する、自ら進んで調べるなど積極的に自主的な学習態度が不可欠である。

<学習到達目標>

・情報システムを構成するコンピュータ技術とネットワーク技術を演習を通して体得し、情報システム開発に必要な技術的基盤を構築できる力と、実際の問題解決に応用できる力を育成する。

(関連する学習・教育達成目標:J)

システム卒業研究

卒業研究 1
卒業研究 2
卒業研究 3
卒業論文

卒業研究の所属について

1. 専門分野と卒業研究指導教員

情報システム学科では、卒業論文の提出が必修として課されており、3年次より専門領域の学習・研究に着手することになります。学生諸君は、以下に示されたA～Dの4分野から研究対象としたい分野を選択し、さらにその分野に属する研究室の中から1つを卒業研究の配属先として選択します。なお、一度決定した分野および研究室は、原則として変更することができません。

分野	A 情報とシステム	B 人間と社会	C 経営と組織	D コンピュータと通信
研究室	石井忠夫※ 石川 洋※ 岸野清孝※ 桑原 悟 高木義和※ 小林満男※ 槻木公一※ 西山 茂 藤田晴啓※	伊村知子 上西園武良 小宮山智志 白井健二 近山英輔※ 藤瀬武彦 藤田晴啓※	内田 亨 岸野清孝※ 佐々木桐子 高木義和※ 谷本和明 小林満男※ 山下 功	石井忠夫※ 石川 洋※ 河原和好 近藤 進 近山英輔※ 槻木公一※ 中田豊久
数	9 研究室	7 研究室	7 研究室	7 研究室

分野と研究室を切り離して選択することはできません。希望する分野に属する研究室を選択する必要があります。例えば、A 分野（情報とシステム）を研究対象として希望しながら伊村研究室（B 分野）を選択することはできません。

※印のついた研究室は複数の分野に対応します。これらの研究室へ出願する場合は、志望する分野を確定しておく必要があります。所属決定後に分野を変更することはできません。例えば「A 分野の石井研究室」に所属した学生が後になって「D 分野の石井研究室」に変更することはできません。

2. 研究室の定員

各研究室の定員は9名を予定しています（ただし、状況によって変更になる場合があります）。

複数の分野にまたがる研究室（上表で※マークが付されている研究室）の定員は、分野毎の定員ではなくトータルで9名です。

志願者数が研究室の定員を超えた場合は、教員が採否を決定します。卒業研究は必修科目ですから、残念ながら選から漏れた学生は他の研究室を選択しなければなりません。

3. 選考方法

選考は原則として書類審査で行います。卒業研究選択説明会（2013年9月～10月に実施予定）にて配付する選考志願書に必要事項および志望理由を記入の上、期限までに提出してください。

各研究室の研究概要や研究計画は、本冊子の以降の頁に掲載されています。また、本学 HP の卒業論文データベース（<http://www.nuis.ac.jp/~takagi/soturon/>）では卒業生の論文検索が可能です。また、関心のある研究室へは志願書を提出する前に必ず訪問し、自らの目指す方向性（研究内容など）と合致しているかを確認するようにしてください。

選考志願書のサンプル ※この志願書は昨年使用したものです。

2013年度 卒業研究1 配属第1次選考志願書

学 籍 番 号		フリガナ	
		氏 名	
資 格 等			

第 1 志 望	研究室	分 野	A B C D
---------	-----	-----	---------------

分野はA～Dの中から1つ選択し○をつけること

<志望理由>

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

学 籍 番 号	氏 名		志 願 先 研 究 室	分野	
		11	研究室		※ 採・否

※印の欄は記入しないこと

※今年度の志願書は、卒業研究配属説明会にて配付します。

【石川研究室】 A 分野・D 分野

＜授業目的＞

情報技術者にとって必須である，ソフトウェア工学またはネットワーク技術に関連した分野から各自が興味のあるテーマを設定し，研究，開発，環境整備などを行う．その成果を論文としてまとめ，発表する．研究過程で必要になる情報，技術，環境については輪講，実習，各自の調査などで習得し，レジュメを作成して発表する．

研究を通して，問題設定，問題解決，知識共有，知識伝達などの能力を養うことを目的とする．

＜授業内容＞

限定はしないが，以下のようなキーワードに関連するテーマ設定を想定している．

A 分野

- ・ソフトウェア工学関連（Java，開発環境，オブジェクト指向，リファクタリングなど）
- ・形式仕様記述関連（モデルチェッキングツールによる検証作業など）

D 分野

- ・コンピュータ関連（各種アプリケーションの設計，実装，評価など）
- ・ネットワーク関連（サーバ設定，ネットワークプログラミング（サーバ・クライアント，サーバサイドなど））

◎卒業研究 1

- ・卒業研究に必要な環境構築と知識の習得
Java 言語の習得，Linux のインストールやサーバの設定など
- ・卒業研究テーマの決定

◎卒業研究 2

- ・関連分野書籍の輪講
- ・卒業研究テーマに関する調査・進捗報告
- ・中間発表

◎卒業研究 3

- ・卒業研究テーマに関する調査・進捗報告
- ・論文執筆，成果発表

＜成績評価＞

◎卒業研究 1：環境構築と動作確認（10%），各種サーバ設定と動作確認（40%），プログラミング言語の習得（10%），卒論発表会聴講報告（10%），卒論テーマ決定レポート（30%）で評価する．

◎卒業研究 2：輪講の資料および発表（50%），進捗報告（20%），中間報告会の資料および発表（30%）で評価する．

◎卒業研究 3：進捗報告（20%），目次案（20%），添削過程（内容や回数）（30%），発表資料の内容（30%）で評価する．

◎卒業論文：独創性（20%），論理性（20%），計数性（20%），応用力（20%），発表力（20%）で評価する．なお卒業論文の成績は，論文提出と発表に加えて，卒論 DB 登録と卒業論文執筆日誌（120時間以上）の提出がないと与えられない．

＜学習到達目標＞

自ら問題を設定し計画を立てる，情報を集めて考察または製作する，自らの見解を加えて記述し発表する能力を育成する．

（JABEE に関連する学習・教育目標：F）

＜教科書・参考文献＞

- ・教科書
卒業研究 1：配布資料，Java 言語の入門書，Linux 関連書籍など（相談の上決定する）
卒業研究 2：輪講用教科書（相談の上決定する），配布資料
卒業研究 3：随時指定する．
- ・参考文献
随時紹介する．

＜留意事項＞

- ・情報やネットワークの資格取得（取得済みの場合はさらに上位資格）をめざす意欲的な人を歓迎する．

【伊村研究室】 B 分野

＜授業目的＞

「心理学」の視点から、人間の認知能力とその特性を実験的手法により理解することを目的とする。卒業研究1では、研究に必要な基礎能力として、「読む力」、「書く力」、「データを扱う力」を育成する。心理学の中から各自が関心のあるテーマを選び、文献をまとめて発表する。また、研究に必要な知識や技術、統計的解析手法について学ぶ。卒業研究2では、実験を遂行する中で直面する様々な問題解決場面を通して「考える力」、「行動力」、「コミュニケーション能力」を養う。卒業研究3では、論文作成と研究発表に取り組むことにより、研究の意義や成果を他者に理解できる形で「表現する力」を伸ばす。

＜授業内容＞

卒業研究1：テーマを見つけ、研究遂行のための基礎能力を養う

- ① 心理学の研究方法の習得
- ② 研究論文の輪読
- ③ 卒業論文のテーマの決定

卒業研究2：それぞれのテーマについて研究する

- ① 研究計画の作成・口頭発表
- ② 実験の実施（データの収集）
- ③ 研究成果についての中間発表

卒業研究3：研究結果のまとめと報告

- ① 実験の実施（データの統計的解析とまとめ）
- ② 卒業論文の作成
- ③ 研究成果についての口頭発表

＜成績評価＞

- ・ 卒業研究の評価：研究論文・研究計画・研究成果についての口頭発表（40点）、論文輪読や研究活動に取り組む姿勢（20点）、レポートまたは研究計画書の内容（40点）
- ・ 卒業論文の評価：論文の内容（50点：目的と結果の整合性、テーマの新奇性、研究方法の妥当性、結果の解釈の客観性）、発表の内容（30点：スライドの構成、発表態度、質疑応答）、研究態度（20点）

＜学習到達目標＞

自ら問題を設定し、問題を解決するための情報収集能力や実験遂行能力、データの統計的解析能力を養う。さらに、得られた実験成果を論文にまとめ、発表する能力を育成する。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【内田研究室】 C 分野

< 目的と研究対象分野 >

本研究室では、卒業研究を通して、経営の理論の習得および社会人として通じるような実践的な人材を育成します。また、卒業論文では、問題設定が最も重要となります。教員は、「つまらない仮説」の検証や当然の結果が出るようなテーマを好みません。誰も気づいていないテーマに、ぜひ、挑戦してみてください。

研究対象分野は、営利（企業）・非営利（医療・福祉施設）にかかわらず主に組織体の研究をします。卒業研究のテーマは何でも構いません。教員および過去のゼミ生の研究テーマのタイトル・キーワードには、次のようなものがあります（コーポレート・ガバナンス、人間的経営、サケ・ブリ養殖、リーダーシップ、起業家、CSR、フランスの大学病院、大学教員の自己開示、ガソリンスタンド、ソーシャル・キャピタル、・・・）。

< 研究内容 >

1. 卒業研究1（3年後期）

- (1)経営学関連の良書および研究方法に関する図書を章ごとに担当者を決め、要約と考察について発表してもらいます。
- (2)他大学のゼミ論文・卒業論文発表会を聴講します。
- (3)7月から9月までの間、希望者には、業界・企業研究を行い、都内の3大学と合同ゼミ合宿（9月中旬）において発表の機会もあります。

2. 卒業研究2（4年前期）

- (1)担当者を決め、学会論文を輪読します。
- (2)研究方法に関する図書の輪読および講義によって、その理解を深めていきます。
- (3)卒業論文の研究計画書を作成してもらいます。
- (4)グループで懸賞付学生論文（NPO 法人さいたま起業家協議会主催）に投稿してもらいます。
- (5)3年生の指導として、サブゼミの運営をしてもらいます。

3. 卒業研究3（4年後期）

- (1)卒業論文の形式・内容について指導をしていきます。
- (2)卒業論文の中間発表をしてもらいます。
- (3)卒業論文の発表会を行います。

< 成績評価 >

[卒業研究1, 2, 3] ①要約と考察の出来栄（40%）、②ディスカッションへの参加度（40%）、インターゼミナール（他大学との交流）への参加度（20%）。

[卒業論文] ①独創性（40%）、②論理性（30%）、③形式・方法（30%）。

< 卒業研究活動についての留意事項 >

- (1)「自分はどこに行っても通用する人間になるのだ」という強い向上心と信念を持った学生を歓迎します。
- (2)ゼミのメーリングリストを作り、その中で出欠や情報交換をしていきます。
- (3)井の中の蛙にならないように、インターゼミナールをしてきますので、積極的に参加してください。
- (4)書くことが多くなりますので、文章力をつけるよう努力してください。
- (5)ゼミ生には、セルフ・マネジメントと、積極的にディスカッションに参画することが求められます。
- (6)卒業研究を通して、社会に通用するスキル・能力・思考力を身につけるという意識を持ってください。
- (7)後輩指導もしてもらいます。
- (8)大学院進学を希望する学生も歓迎します。
- (9)個別相談をするときには、A4用紙1枚程度のメモを書いてきてください。

< 学習到達目標 >

問題発見能力の醸成と自律的、計画的な論文作成を行うことができる。また、洞察力・考察力を育成する。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【上西園研究室】 B分野

＜目的と研究対象＞

本研究室では、私たちの日常生活の中で「使いづらい」や「快適に使えない」と感じられる「モノやシステム」を取り上げ、人間工学の手法を使って解決策（＝人の特性により合っている）を見出すことを目的とする。

研究対象は、自分自身で「使いづらい」や「快適に使えない」などの実感がある「身近な製品（家電、家具など）」や「身近な公共物（学校、駅、公園など）」等とする。自分自身の実感のないテーマは研究に対するモチベーションが低く、困難に遭遇した時に挫折しやすいためである。

研究の進め方としては、まず当該対象に関する文献調査を徹底的に行い、既存研究でどこまでなされているかを明確にする。この結果に立脚して各自の仮説を設定する。さらに、設定した仮説の検証に当たっては、実験（または調査）に基づいて行う。従って、本研究室では実験（主に被験者実験）主体の研究となる。

＜研究内容＞

(1)研究の流れ

卒業研究1～3を通じての全体の流れは以下のようである。

- ① 研究テーマの設定
- ② 文献調査によるテーマ遂行可能性の判断
- ③ 仮説の設定
- ④ 予備実験による仮説の事前検証
- ⑤ 本実験による仮説の検証
- ⑥ 論文の執筆、発表資料の作成

(2)卒業研究1：研究手法の獲得、研究着手

- ・ 研究テーマの設定：
自分自身で「使いづらい」や「快適に使えない」などの実感があるテーマを見出す。
- ・ 文献調査：
文献調査によって当該テーマについての過去の研究例を徹底的に調査し、当該研究テーマの遂行可能性を判断する。「既に解決済」や「研究の余地無し」の場合は研究テーマを再設定する。
- ・ 仮説の設定：
文献調査の結果に立脚してオリジナルな仮説を設定する。
- ・ 予備実験による仮説の事前検証：
少人数（5～10名程度）の被験者実験により仮説の事前検証を行う。仮説を否定する実験結果となった場合は、実験方法の見直しあるいは仮説の再設定を行う。

(3)卒業研究2：研究遂行

- ・ 本実験による仮説の検証：
20～30名の被験者実験を行い、仮説検証の精度を向上させる。

(4)卒業研究3：研究成果のまとめ

- ・ 卒業論文の作成、発表

＜成績評価方法＞

自主的に研究を推進できる能力、与えられた制約下で計画的に研究を実施できる能力、プレゼンテーションなどのコミュニケーション能力、および、卒業論文の内容、卒業発表の内容を総合して評価する。

- ・ 卒業研究は、①日常の研究態度と研究への取り組み姿勢（60点）、②報告・発表の出来具合（40点）により評価する。
- ・ 卒業論文は、①問題設定の具体性（20点）、②論理の一貫性（20点）、③解決策の工夫・創造的なアイデア（20点）、④検証・評価の説得性、客観性、有用性（20点）、⑤発表内容（20点：発表の起承転結の構成、スライドの表現・解りやすさ、質問への回答的確性）により評価する。
- ・ 卒業論文については、卒業論文の提出、卒業論文発表会での発表、卒業論文のDB登録の全てを行わないと単位を認定しない。

＜研究室活動についての留意事項＞

- ・ 当研究室を志望する場合、事前の研究室訪問を必須条件とする。また、人間情報工学1および人間情報工学2を履修済みであることが望ましい。
- ・ 研究室活動として、本来の研究遂行と並行して「社会人としてのマナーの育成」を重視する。
- ・ 授業は定時（9：00）に開始する。遅刻は「社会人としてのマナー」として失格であるので厳禁とする。
- ・ 病気等で授業に出席できない場合は、事前に欠席理由をメール連絡することを必須とする。余程の理由（例えば、メールもできないほどの重病など）がない限り、欠席の事後連絡は「社会人としてのマナー」として失格である。
- ・ 授業欠席の場合は、欠席分の補習を別の日に実施する。

- ・被験者実験は他の人の協力なしには行えない。各学年の研究室生（10名程度）同士だけで相互に被験者となるだけでは人数が不足であるので、他学年の研究室生にも被験者の役割を担ってもらう。このため、他学年同士の交流を重視する。

<学習到達目標>

- ・課題発掘能力の獲得：自らテーマを設定し、「その研究を行う意義」と「研究の位置付け」を明確にすることができる。
- ・課題解決能力の獲得：自らの課題解決に当たり、「必要な情報入手」や「適切な手法（実験方法、調査方法など）の入手・実行」を通じて、問題解決が行える。
- ・コミュニケーション能力の獲得：わかりやすい資料で、適切なプレゼンテーションが行える。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【河原研究室】D 分野

＜授業目的＞

コンピュータを用いて画像を取り扱う研究を主に行う。具体的には、画像処理、コンピュータビジョン、プログラミング、ウェブ、画像作成（コンピュータグラフィックス）、パターン認識（画像認識、音声認識等）、ロボット等に関連した分野から、各自が興味のある卒業研究テーマを設定し、独自の発想や工夫を取り入れて研究・開発を行い、成果を卒業論文としてまとめ発表する。

＜各回毎の授業内容＞

卒業研究1：卒業研究に必要な基礎知識の習得、卒業研究テーマの決定、就職に関する学習

- ・プレゼン手法や論文の書き方及び研究の進め方等の学習
- ・プログラミング・画像処理・画像作成・ウェブ・ロボット等についての基礎知識の学習
- ・過去の研究テーマの紹介
- ・各自が興味をもった分野に関する調査と発表
- ・研究テーマ決定と研究計画の作成（プレゼン及びレポート提出）
- ・4年生の大学祭における展示・発表を見る（レポート提出）
- ・4年生の卒業研究発表会に参加（質問をし、レポートを提出）
- ・履歴書作成と添削
- ・就職について上級生との懇談会を実施

卒業研究2：各自の卒業研究テーマに関する調査と発表、就職に関する情報交換

- ・進捗状況の報告（プレゼン）と内容に関する意見交換
- ・究テーマに関するプログラム等の作成
- ・研究テーマに関する参考文献や資料の調査
- ・中間発表会（プレゼン及びレポート提出）
- ・就職に関する情報交換

卒業研究3：卒業研究テーマに関する調査と発表、研究結果のまとめ

- ・進捗状況の報告（プレゼン）と内容に関する意見交換
- ・研究テーマに関するプログラム等の作成
- ・研究テーマに関する参考文献や資料の調査
- ・大学祭における成果の展示・発表（成果報告の最終締切とする）
- ・成果発表会（プレゼン）
- ・卒業論文執筆と添削
- ・卒業論文発表会の練習と発表
- ・卒業論文のデータベース登録

＜成績評価方法＞

卒業研究1：報告・発表の内容（50%）、提出レポート（50%）により評価する

卒業研究2：報告・発表の内容（50%）、提出レポート（50%）により評価する

卒業研究3：報告・発表の内容（50%）、成果展示・発表（50%）により評価する

卒業論文：論文（50%）と発表（50%）の合計で評価する

論文：新規性、独創性、妥当性、有用性、完成・発表度により評価する

発表：発表の構成、スライドの分かりやすさ、発表の態度、質疑応答の的確さにより評価する

＜教科書・参考文献＞

- ・卒業研究1については適宜用意する
- ・各自の卒業研究については個人で探すこと
- ・参考文献については随時紹介する

＜受講に当たっての留意事項＞

- ・大半はプログラミングに関する卒業研究を行うことになるので、プログラミングに関する演習や講義を受講していることが望ましい
- ・具体的な研究テーマや追加情報についてはウェブページ（<http://www.nuis.ac.jp/~kawahara/lab/>）を参照するか、「卒業研究データベース」から検索すること
- ・卒業研究の配属時に希望者が定員を超えた場合の選考については、(1)教員が担当している講義の履修状況、(2)情報

処理演習の履修状況、(3)研究室訪問の面談時の面接内容、(4)志願書の内容の順で判断する

- ・ 今後の参考になるので3年次生は出来る限り4年次生の大学祭における展示・発表を見て、卒業研究発表会に参加すること
- ・ 配属が決定した2年生の参加も希望する
- ・ 行事参加や卒業研究について、欠席する場合は自前に連絡をすること

<学習到達目標>

- ・ 自ら問題を設定することができる
- ・ 問題解決のために計画を立て、情報を収集し考察及び製作することができる
- ・ 問題について、自らの見解を加えて記述し、発表することができる

(関連する学習・教育目標：F)

【岸野研究室】 A分野 C分野

<授業目的>

複雑化・高度化した社会では、個人の経験や感覚だけで企業活動をコントロールすることは不可能となってきた。とくに、経済の国際化、消費者ニーズの多様化、生産技術の革新など急ピッチで変化する経営環境に対処するためには、経営を科学的に分析することにより、経営システムの課題を解決していく必要がある。

経営システムを学ぶことを通じて、時代とともに激しく変化する経営環境を多角的に分析し、問題をスムーズに解決できる基本的能力を培うことを授業目的とする。

具体的には以下の手順で進める。

- ①企業の経営システム（経営戦略、マーケティング戦略、生産・流通・物流など）について、さまざまな企業のケーススタディを行いながら、経営に関する分析手法を身につける。
- ②経営に関する分析手法を応用して、実際の業界・企業・製品・サービスについて分析し、課題や仮説を見つける。
- ③経営に関する分析手法により評価・検証を行い、解決策（新しい経営戦略、生産・流通・物流戦略、サービス、ビジネスモデル、コンピュータシステムなどの提案）を考える。

経営に関する分析手法としては、経営戦略分析・マーケティング分析、経営指標・生産性分析、定量的な分析（アンケートによる分析手法、スコアカードによる評価手法）、定性的な分析（問題構造化分析手法）などを用いる。

卒業研究1の配属時に研究室訪問を行う方法

方法1：研究室のドアに日程表を貼り付けておくので月日、曜日、時限、(1) or (2)の欄に名前（複数可能）を記入すること。グループでの訪問の場合も全員の氏名を記入すること。

方法2：予約をしなくても研究室訪問して良いが、予約の入っていない時間帯は不在の可能性がある。

<授業内容>

卒業研究1：経営に関する分析手法の習得、ケーススタディの実施、研究テーマ選定

- ①経営戦略・マーケティング分析に関するテキストの輪講、演習
使用テキスト「図解 わかる MBA」
- ②経営戦略・マーケティング分析手法の適用演習
- ③製造・流通分野におけるケーススタディによる問題点、解決方法の提案演習
- ④定量的な分析、定性的な分析に関するテキストの輪講
使用テキスト「卒業論文の作り方～複合領域分野における経営学研究の進め方」
- ⑤卒研テーマと研究の進め方を検討し、研究計画の作成と発表を行う。

卒業研究2：経営に関する分析手法の適用による研究活動

- ①各自の研究テーマに関する進捗状況の報告と内容に関する討議
- ②各自の研究テーマに関する先行事例・参考文献・資料の紹介と調査
- ③経営に関する分析手法の適用により自分独自の課題を明確にする。
- ④解決策（仮説）を構想し、データ収集などにより検証する。
- ⑤各自の研究上の課題と解決策の検討、研究会での報告の準備について指導する。

卒業研究3：研究結果のまとめ

- ①研究の進捗状況の報告、途中結果の発表および内容に関して、個別に指導する。
- ②卒業論文・PPT作成において、構成、内容、文章表現などについて指導する。

卒業研究1, 2, 3の授業に就職活動などで欠席の場合は、事前にメールで連絡をすること。必ず別の日にメールでアポイントを取り指導を受けること。これを行わないために卒業論文が完成しなくても責任は持たない。

<成績評価>

自主的、継続的に学習できる能力、与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力、プレゼンテーションなどのコミュニケーション能力について卒業論文の作成過程、卒業論文（成果物）の内容、卒業論文（発表）の内容を評価する。

- (1) 卒業研究1は、①卒研における討論、報告、発表（50点）、②提出課題レポート（50点）により評価する。
- (2) 卒業研究2は、①卒研における討論、報告、発表（50点）、②中間成果物（50点）により評価する。
- (3) 卒業研究3は、卒研における討論、報告、発表（100点）により評価する。
- (4) 卒業論文は、卒業論文（成果物）と卒業論文（発表）の合計により評価する。卒業論文（成果物）は、①問題設定の具体性、②論理の一貫性、③解決策の工夫・創造的なアイデア、④検証・評価の説得性、客観性、有用性により評価する（50点）。卒業論文（発表）は、①発表の起承転結の構成、②スライドの表現・解りやすさ、③発表の技術・態度、④質問への回答の的確性により評価する（50点）。

(5) 卒業論文は、卒業論文の提出、卒業論文発表会での発表、卒業論文のDB登録の全てを行わないと単位を与えない。

<学習到達目標>

自ら問題を設定し、スケジュールを立て、計画的に情報を集めて考察し、または製作し、自らの見解を加えて記述し発表する能力を育成する。

(関連する学習・教育到達目標：F)

【小林研究室】A分野・C分野

＜授業目的＞

現在、企業は高齢化・少子化の進展による社員の確保・技術継承の問題、規制緩和等による競争の激化など多くの課題に直面しており、特に、地球温暖化と関連して環境問題や自然を含めた大きな視点から経営をとらえる必要に迫られています。そのため企業や国・自治体においては、これらの課題を克服する構想をあたため具体的な解決をもたらすソリューション能力が求められています。そこでは情報や情報システムの開発・利活用がひとつの鍵を握っていると考えられます。

卒業研究の進め方としては、自然科学や社会科学にとどまらず、人文科学も含めた学問を総動員しながら、社会とのかかわりを重視しつつ、経営・組織、情報システムの面から卒研究生が選定した研究テーマについて主体的に進めていただきます。そのため、最初にA分野（情報とシステム）とC分野（経営と組織）全員による研究方法論や卒業論文の書き方などの基礎的な学習、演習を行なった後、夫々の卒研究生から研究テーマに関連する先行研究、参考文献について報告してもらい、卒研究生全員で共有します。これらの作業と併行して個別に論文作成指導を実施します。

経営・組織と情報、情報システムのかかわりについて、幅広い観点からの研究を希望する学生の参加をお待ちしています。

＜授業内容＞

卒業研究1：研究の進め方の学習、ケーススタディの実施〔成果物：ケーススタディ報告書、研究計画書〕

- ・研究方法論＜研究対象と研究方法、定量的研究と定性的研究＞（輪講）
- ・ケーススタディ（優良企業をとりあげ、情報システムの利活用等の観点から分析を行なう）
- ・研究計画書を作成する

（成績評価方法）輪講の貢献度、研究方法論に対する理解度、ケーススタディの報告状況（60%）及び研究計画書の内容（40%）を評価する

卒業研究2：研究テーマに関する先行研究の調査、卒業論文のイメージづくり〔成果物：仮論文〕

- ・各自の研究テーマに関する検討状況の報告と討議
- ・先行研究と参考文献の調査（要約を報告）、理論検討
- ・現地調査、データ収集、分析、解決策の検討
- ・仮論文を作成する

（成績評価方法）仮論文の内容（50%）と、討議での貢献、自ら問題を設定し、計画的に研究を進め、発表する能力（50%）を評価する

卒業研究3：卒業論文の作成〔成果物：卒業論文中間報告書〕

- ・研究の進捗状況報告、卒研合宿（8月下旬）・中間報告会（10月中旬）
- ・論文作成、プレゼンテーション資料作成（個別指導）

（成績評価方法）卒業論文の中間報告書（60%）と自ら問題を設定し、スケジュールを立て、計画的に情報を集めて考察し、自らの見解を加えて論文にまとめていく取組み状況（40%）を評価する

卒業論文

（成績評価方法）自主的、継続的に学習できる能力、与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、まとめる能力、プレゼンテーションなどのコミュニケーション能力について、卒業論文（独創性、論理性、計数性、応用力）（70%）と発表（30%）で評価する

＜教科書・参考文献＞

輪読にテキストを使用します。必要の都度、資料を配布します。

＜学習到達目標＞

自ら問題を設定し、スケジュールを立て、計画的に情報を集めて考察し、または製作し、自らの見解を加えて論文としてとりまとめ、発表する能力を育成する。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【近藤研究室】 Dコース

＜授業目的＞

近藤研究室では、通信、光に関係した分野について研究する。テーマを自分で見だし、論文としてまとめる。内容については必ずしも最先端の技術や研究にこだわらない。独自の新しい発想・工夫を展開して自主的に問題を解決することを目的とする。

＜授業内容＞

卒業研究 1

研究するテーマを探索するために、輪講形式で、通信・光に関する基礎的な勉強を行う。また、無線レシーバ、スペクトルアナライザ、分光器等、機器の基本的な使用法を修得する。さらに、どのようにこれらの技術が実際に使われているかを知るため、工場見学等を行う。

卒業研究 2・卒業研究 3

テーマを決め、それぞれの研究テーマを推進する。

研究テーマを推進する中から、問題点を見だし、どのように展開し解決するかについて学ぶ。

研究の進め方は、内容により輪講形式、小グループ、個別に指導する。

研究に付随する実験については、限られた資源（設備や測定器）をいかにして有効に使うか、研究生独自の発想や工夫を求める。

これらの実験や調査をふまえて、論文をまとめる。

4月にテーマ企画発表会を行う。

9月に中間発表会を行う。

＜成績評価方法＞

- ・成績の評価は、論文の内容とともに、その過程を重視する。
- ・日常の研究への取り組み。
- ・テーマに関する議論。
- ・問題解決への自主的な工夫・創造的なアイデア。

＜教科書・参考文献＞

- ・教科書 通信全体、移動通信、光ファイバー通信に関する文献を開始に合わせて指定する。
- ・上記の文献や過年度の卒業論文を取りかかりとして、研究生自ら探索する。

＜受講に当たっての留意事項＞

・テーマによっては長時間を要するもの、特別の気候、時間帯を必要とするものもあり、休業中や休日でも研究を行う場合がある。また、計算機をはじめ、装置を組み立てることもある。

＜学習到達目標＞

- ・独自のあたらしい発想工夫により問題解決ができる。自らの問題について、論文をまとめ、発表することができる。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【佐々木研究室】 C分野

＜授業目的＞

身近にあるさまざまなシステムに興味を持ち、そこで起こる問題を発見し、モデル化し、解決する方法を習得する。具体的には、対象システム（例えば、生産、物流、道路交通、病院、銀行業務など）を調査・分析し、SIMAN/Arena シミュレーション言語を用いてシミュレーションモデルを構築し、シミュレーション実験をおこない、問題解決策を検討する。

＜授業内容＞

卒業研究1：SIMAN/Arena シミュレーション言語の習得。

- ① ATMモデルの構築およびその発表。
- ② レジモデルの構築およびその発表。
- ③ 道路交通モデルの構築およびその発表。
- ④ 現実のシステムへの応用およびその発表。
- ⑤ 各自研究テーマの決定およびその発表。

卒業研究2：研究対象分野に関する情報収集および研究対象システムの現地調査。

- ① 研究対象分野に関する文情報収集およびその発表。
- ② 研究対象システムの現地調査、モデル化に必要なデータの収集、およびその発表。

卒業研究3：研究対象システムのシミュレーションモデルの構築、実験、比較・分析。

- ① 研究対象システムのシミュレーションモデルを構築。
- ② 研究対象システムのシミュレーション実験。
- ③ 改善案（代替案）の比較・分析およびその結果の発表。

＜成績評価＞

- (1) 卒業研究1は、①成果物（シミュレーションモデル）：50点、②発表会：50点により評価する。
- (2) 卒業研究2は、①成果物（収集・調査結果）：50点、②発表会：50点により評価する。
- (3) 卒業研究3は、①成果物（実験・比較・分析結果）：50点、②発表会：50点により評価する。
- (4) 卒業論文は、①成果物（卒業論文）：50点、発表（卒業論文発表会）：50点により評価する。具体的には成果物（卒業論文）は、体裁、論理構成、実行結果の解釈を重視し、発表（卒業論文発表会）は、時間、構成、質疑への応答の的確性を評価する。

＜受講に当たっての留意事項＞

夏期・春期休業期間中も継続して研究活動をおこなう。

＜学習到達目標＞

現実の問題に対して、適切な道具（SIMAN/Arena シミュレーション言語）を適時的確に使い、問題解決プロセスを適用し、結果を正しく解釈し、研究成果を適切に表現できる能力を育成する。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【白井研究室】B 分野

＜授業目的＞

金融資産の定量的評価および不確実性分析の研究

本研究室では、金融資産の定量的評価をするために、欧米諸国で活用されている Discount Cash Flow (DCF 法) を使って上場企業の価値評価を行う。あるいは、オプション評価理論の基礎となるブラック・ショールズの方程式を修得する。また、不確実性分析として事業計画策定を実現可能な計画案を策定する手法として市販のシミュレーションソフトウェアを活用する。よって、本研究室を志望する場合は、必ず、モデリング数学、オペレーションズ・リサーチ1を必ず受講すること。

＜授業内容＞

卒業研究 1（3 年後期）：DCF 法の修得およびシミュレーションソフトウェアの修得

卒業研究 1 では、経済用語の意味を理解する必要がある。DCF 法を修得するためには、経済用語の修得し、並行して、DCF 法を理解する。また、不確実性分析とはを理解する。さらに、オプション評価理論を学ぶ。

卒業研究 2（4 年前期）：卒業研究のテーマ選択と準備

卒業研究 2 では、卒論 1 で学んだ内容から卒論テーマを決める。卒論作成に必要な対象企業を選定して、各テーマに従って卒論作成を進める。卒論指導については、各テーマ毎に指導を実施する。定期的に進捗を評価するために各自プレゼンテーションを実施する。

卒業研究 3（4 年後期）：研究のまとめと卒業論文の作成

卒研 3 で進めてきたことを、卒研 3 で最終的な卒論を作成する。卒論提出を意識した内容で作成する。引き続き、定期的にプレゼンテーションを実施し、進捗を評価する。

＜成績評価＞

- (1) 卒業研究 1 は、経済ようごの理解、DCF 法の修得、不確実性分析の理解などをテーマ毎に分かれて勉強しレポートを毎週提出する (80%)。また、その内容の説明に20%で評価をする。
- (2) 卒業研究 2 は、卒論テーマに沿ったテーマでレポートを提出に100%。
- (3) 卒業研究 3 は、毎週提出するレポートに70%、プレゼンテーションに30%。
- (4) 卒業論文は、「テーマ」毎にどれだけ論理的に記述されているかを判断し100%で評価する。

＜学習到達目標＞

金融工学あるいは不確実性分析の理解と修得を具体的な事例を基に研究する。各自が事例を選定し、卒業論文の作成を通じて論理的思考能力を身につける。また、定量的評価の手法を修得する。

(関連する学習・教育到達目標：F)

【高木研究室】A 分野・C 分野

＜授業目的＞

卒業研究では、情報の人・物・金と同様に、重要な資源ととらえ、情報資源の有効活用について体系的に学びます。大量の情報に振り回されず自らの判断で情報に向き合える態度と日本語力を身につけることをめざします。

＜授業内容＞

各自興味あるテーマを設定できるよう指導します。

A 分野：SQL と Access に興味を持った人、プログラミングやシステム環境に興味のある人が対象になります。

世の中で使用されているシステムの多くがデータベースです。また情報は使われなければ意味がありません。そこで多くの人が利用できる Web 上で閲覧可能なデータベースの作成を試みます。先輩が作成した 50 以上のデータベースは高木の HP から閲覧可能になっている。

C 分野：組織と経営に情報を活用することに興味のある人が対象となります。

情報社会とは情報が新しい価値を生む社会です。そこで、新商品開発やブランド戦略、新ビジネス提案など情報を基に新しい価値を考え出すこと、あるいは、個人情報や著作権などの侵害問題などへの対応を試みます。扱う情報はテーマにより異なるので課題毎に指導する。目標規定文をもとに情報に基づいて自ら考えることができるようになるような指導を心掛ける。

卒業研究 1

共通：情報リテラシーに関する論文を輪読し情報活用の基礎知識を身につけます。また卒業論文の課題を設定するために必要な現状調査／情報収集を行い、自らの意志で価値が認識できる課題を設定する。

A 分野：主に Web に特化されたプログラミング言語 PHP とデータベース言語 SQL や、CGI の基本を学ぶ。サンプルを自分で稼働させ動的な Web ページのしくみを学ぶ。

C 分野：予備調査を行い収集した情報に基づいて自分の意志で仮テーマを設定します。同時にテーマに関する独自の仮説あるいは主張点を目標規定文として整理する。

卒業研究 2

A 分野：データベースの使用仮説を作成しプロトタイプの作成に着手する。同時に著作権に触れないようコンテンツ構造を考えてデータ収集を行う。

C 分野：個人の意見ではなく収集した既存の論文やデータを使用して、主張点を論理的に説明できるよう論文構成を考える。

卒業研究 3

正確な日本語と論拠に基づいた論理的説明で論文をまとめる知識と能力を習得する。論拠としての Web 情報は限定的に扱う。情報検索は情報収集の有力な手段として扱う。

＜成績評価＞

以下の項目で評価する。

卒業研究 1：情報リテラシー理解（50%）・仮課題設定（25%）・授業の参画態度（25%）

卒業研究 2：目標規定文の作成（25%）・中間報告と中間発表会（50%）・授業の参画態度（25%）

卒業研究 3：日本語表現（25%）・情報収集への取組（50%）・授業の参画態度（25%）

＜教科書・参考文献＞

必要に応じ資料を配布する。

＜学習到達目標＞

- ・必要な情報の範囲を認識し、情報に基づいて判断を行うことの重要性を認識できる。
- ・基本的な情報技術を理解し大量の情報に向き合える。
- ・新しい考え方を創造できる。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【谷本研究室】C分野

＜授業目的＞

企業の成長と起業のためのマーケティング活動に関する研究

企業や社会を総体的に分析し、何らかの結論を得ることは難しい。本研究室では、企業や社会を市場に存在する商品やサービスの観点から分析し、対象の企業や社会への理解を深めることを目的とする。

情報システムの学生諸氏は、マーケティングの基本的な知識を2年前期に学習し、2年後期からは科学的な分析手法（I T、O R、統計など）や組織革新や起業に関する講義を習得してきた。この研究室では、それらの講義を通して興味や疑問を持ったテーマに関して商品やサービスの観点から研究を深める。

＜授業内容＞

卒業研究1（3年後期）：長所と短所を知り個人の能力開発

卒業研究1では、情報の収集・分析、論理的な思考展開、企画・事業の立案、プレゼンテーションなどのツールを使い、個々人の長所や短所を知る。研究の進め方としては、個々人がメディアやWebを通して興味や疑問を持ったトピックに関して、情報を収集し問題提起のプレゼンを行う。これらのプレゼンに関する討議を通して研究対象を選択し、個人やグループで研究に取り組む。

卒業研究2（4年前期）：卒業研究のテーマ選択と準備

卒業研究2では、卒論のテーマを探索し選択を行う。卒研1で知った、個人の長所を生かし短所を克服するために必要なツール（情報、分析、論理的な思考展開、立案能力、プレゼンテーションなど）の準備を行う。なお、この段階以降の指導は、個別やグループ別に行う。

卒業研究3（4年後期）：研究のまとめと卒業論文の作成

卒研3では、個別やグループ別に卒業論文をまとめ執筆に取り組む。なお、11月中に卒研の中間発表を行い、相互の議論を通して内容を充実させる。

＜成績評価＞

- (1) 卒業研究1は、日常の自発的な学習態度・発言、グループワークでの活動、卒研における討論に50%、提出課題レポートとその発表に50%で評価をする。
- (2) 卒業研究2は、卒論テーマを選択するプロセスに50%、卒論テーマとその概要のレポートに50%で評価をする。
- (3) 卒業研究3は、中間発表のプレゼン内容を50%、最終発表のプレゼン内容を50%で評価する。
- (4) 卒業論文は、「テーマ」のとらえ方、情報の収集、独自調査の実施、視点・分析の独自性、論理の一貫性、文章力、提案の内容などを総合的に判断し100%で評価する。

＜学習到達目標＞

企業や社会におけるマーケティング活動を理解する能力や感度を身につけるとともに、具体的な事例研究、自身でのプラン・提案づくり、卒業論文の作成を通じて情報収集・分析能力、論理的思考力、企画力、プレゼンテーション能力を育成する。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【近山研究室】 D分野 B分野

＜授業目的＞

生命が行う複雑な情報処理には未解明のアルゴリズムが数多く潜んでいる。その謎に、コンピュータプログラム、数値計算、理論分析、実験等でアプローチする研究を行う。又は、そのような生命のアルゴリズムを応用するコンピュータプログラムの開発を行う。キーワード： 生命の数理モデル、生物物理学、生物情報科学、細胞シミュレーション、生化学シミュレーション、スーパーコンピュータ、オミックス科学、合成生物学、システム生物学、人工生命、ニューラルネットワーク、非線形科学、化学情報処理、認識や音楽・芸術のアルゴリズム。

＜授業内容＞

卒業研究 1：S. Wolfram, “A New Kind of Science”（英語）の輪講、報告資料の作成、研究報告聴講

卒業研究 2、3：研究の実施、研究データの分析、報告資料の作成、研究報告

卒業論文：研究データの分析、卒業論文の執筆、発表資料の作成、卒業研究発表会

卒業研究例

- 「Hill 式を用いた人工遺伝子回路の設計」
- 「シグモイド関数を用いた非線形関数の近似計算」
- 「スーパーコンピュータを用いた細胞シミュレータプログラムの分析」
- 「セルオートマトンを用いた粘弾性体の計算」
- 「細胞の遺伝子ネットワークの分析」
- 「代謝物質検出ソフトウェアの改良」
- 「実験室情報管理システムの Java クラス設計の最適化」

＜成績評価＞

卒業研究へ積極的に取り組んだ時間、研究成果、研究・課題報告の優劣、卒業論文、卒業論文研究発表会、研究室・学問・大学・社会への貢献度のいずれか 1 つ以上を考慮して決定する。これらのいずれも満たさない学生は単位を取得できない。

＜留意事項＞

- ・原則としてD、B分野に関わらず、プログラミング言語、数値計算、あるいは数理的分析のいずれかに関わる上記「授業目的」に関わる分野の研究のみを行う。
- ・研究テーマは教員が決定する。（ただし学生と相談しながら）
- ・コンピュータ言語を用いる場合は、Java、C/C++ が望ましい。
- ・配属前におけるコンピュータ言語のスキルは必須ではない。
- ・卒業論文履修時は、1月当り最低10時間の卒業論文作成時間を何らかの成果物で教員に証明すること。

＜学習到達目標＞

- ・教員と協調・協力しながら自発的に研究に取り組むことができる
- ・研究とは何かを説明できる
- ・自分の研究内容を他人に説明できる
- ・自分の研究内容の背景、方法、結果、考察、参考文献を卒業論文として執筆できる
- ・自分の研究内容を公の場で発表できる
- ・発表資料をワード、パワーポイント、エクセル等で作成できる
- ・発表者に対して、質問ができ、また質問者に対して、応答できる
- ・文献、教科書、専門書等を教員と協力して調査できる
- ・教員と協力しながら、研究データの分析と考察ができる

（関連する学習・教育到達目標：F）

【槻木研究室】 A 分野・D 分野

1. 卒研の方針

A 分野も D 分野も、問題を解決する手段として自ら適切なプログラムを設計し作成する。プログラムの作成過程と実行結果から、提案した解決策を考察評価する。

具体的には

(1)新しい情報システムの提案とプロトタイプを作成

興味ある分野のビジネスにおいて新しい情報システムを提案し、そのプロトタイプ（プログラム）を作成する。

その実行結果を考察して提案システムを評価する。

(2)問題解決のためのプログラムの作成

ビジネスとは直接関係しなくても、自ら興味ある分野において発見した問題を、コンピュータを利用して解決する方法を考える。その解決策を実現するプログラムを作成し、実行結果から解決策を考察評価する。

(1)、(2)とも原則として Java 言語を使用してプログラムを作成するが、特に使用言語に希望があればできるだけ考慮する。過去のテーマに関しては、本学のホームページから「卒業論文データベース」に入り、“槻木”で検索して調べること。

2. 留意事項

プログラムは必ず動くものを作成することを要求する。プログラムが動かなければ、卒論を書くことができない。卒業研究3の中間発表会では、各自が作成したプログラムのデモンストレーションを行う。

3. ゼミの選考方法

当研究室を希望する可能性のある人は、事前に必ず研究室を訪問すること。「プログラムを創る」ということの大変さと楽しさ、および開発環境の設定のため卒業研究2は「中央キャンパス」で実施することを説明するので、自分として可能かどうかを十分に納得してから希望すること。

4. 卒業研究1

＜授業内容＞

- ・オブジェクト指向技法と Java 言語の学習として、Java 関係の図書あるいは資料を輪講する。
- ・提示されたサンプルプログラム（十数個）を模倣作成し、Java プログラミングの基本を習得する。
- ・冬休みの HomeWork として、各自が個別にサンプルプログラムを作成して説明する。
- ・新しい情報システムや技術動向などに関わる参考文献を各自調査して発表説明する。
改善点や疑問点などを討論し、新しい適用分野とか代替方式などを検討する。
- ・各自が卒業研究テーマを考えて全員で討論し、卒業研究1の終了時にはテーマを概ね確定する。

＜評価方法＞

ゼミにおいて討論等への参加態度 (40%)、サンプルプログラムの作成状況 (20%)、冬休み HomeWork の実施状況 (20%)、輪講および調査文献の発表内容 (20%) で評価する。

＜受講に当たっての留意点＞

プログラミングを忘れないようにするためと、卒研テーマの確定のため、春休み中も継続してゼミを開く。

5. 卒業研究2

＜授業内容＞

- ・設定したテーマに沿ったプログラムを作成する。必要に応じて提供されたサンプルプログラムを参考にして進める。
- ・プログラム作成は各自個別に進めることを原則とし、ゼミでは進捗状況、未解決のバグの有無、改善点などを個別に、または全員で解決策を討論する。
- ・設定したテーマに関連した参考文献を調査発表し、自分のテーマに関しての足元を固める。

＜評価方法＞

プログラム開発の評価としてプログラムの進捗状況 (80%) と、ゼミでの討論への参加態度 (20%) で評価する。

進捗として卒業研究2の終了段階において、プログラムの基本部分が動作することを求める。

＜受講に当たっての留意点＞

個別のプログラム開発環境を設定するため、原則として中央キャンパスで開講する。夏休みには予定として集中ゼミを2～3回ほど開き、プログラム作成の個別指導を行う。プログラム作成の進捗の遅い人は必ず参加することを求める。

夏休み終了時にプログラムがほぼ完成していないと、中間発表および卒論作成が間に合わない。

6. 卒業研究3

<授業内容>

- ・各自、プログラムを完成させる。
- ・9月末か10月初に中間発表の場として当研究室の3年次、4年次の合同ゼミを開催する。ここで、各自が作成したプログラムのデモンストレーションを行い、他のゼミ生から評価を受ける。
- ・評価の結果、必要なプログラムの追加、修正を行う。
- ・卒業論文を作成する。

<評価方法>

中間発表におけるプログラムの完成度（60%）、中間発表会の評価（20%）、卒論作成の進捗状況（20%）で評価する。

<受講に当たっての留意点>

作成したプログラムをゼミ生全員の前でデモンストレーションすることにより、「動くプログラム」として認定する。すなわち、中間発表会で作成したプログラムのデモンストレーションができなければ、卒業研究3の単位を付与しない。

7. 卒業論文

提案するシステムや解決方法を論文にまとめる。特に注力する部分は、研究の必要性をアピールする部分と、作成したシステムや解決方法の評価の部分であり、中間発表が終了した時点で全員で討論して必要性および評価の論理を補強する。

<評価方法>

論文の記述内容（研究の必要性、解決策、実現（開発）内容、動作結果と考察・評価）の具体性、新規性、客観性において評価する。（80%）加えて、論文発表会における発表内容、スライドの分かりやすさ、発表態度において評価する。（20%）ただし、卒業論文を所定の期日に提出し、発表会に参加し、論文抄録と論文原本のデータベース登録を行わないと「卒業論文」としての単位を付与しない。

<学習到達目標>

自ら発見した問題の解決策や新しい情報システムの提案を、「実際に動くプログラム」を作成して検証、評価できる能力と、その結果を考察し自らの見解を加えて論文として記述し発表する力を育成する。

（関連する学習・教育達成目標：F）

【中田研究室】 D分野

＜授業目的＞

人の様々な活動を支援するためのコンピュータシステム（またはプログラム）について研究する。まず自ら課題を見つけ、その課題を克服するためのシステムを設計、構築する。そして構築したシステムが本当に課題を克服できているかを評価する。また、自ら行ったことを他者に分かりやすく説明するために、論文を記述して発表することを学ぶ。

＜授業内容＞

卒業研究 1：研究テーマの決定、研究テーマの発表会（卒研 1 の初回の授業で行う）

- ・プログラミング実習
- ・研究テーマの進捗発表会（卒研 1 の最後の授業で行う）

卒業研究 2：それぞれのテーマに従って研究の実施

- ・研究進捗の報告会（定期的に行う）

卒業研究 3：それぞれのテーマに従って研究の実施

- ・研究進捗の報告会（定期的に行う）
- ・卒業論文作成指導

卒業論文執筆のために120時間以上の自己学習時間を確保することと、自己学習の実績時間を記入した卒業論文執筆日誌を提出する必要がある。

＜成績評価方法＞

卒業研究 1：研究テーマ発表会10%、プログラミング実習80%、卒研進捗発表会10% の割合で評価する。

卒業研究 2：卒研進捗の報告会100% の割合で評価する。

卒業研究 3：卒研進捗の報告会100% の割合で評価する。

また授業に臨む態度が望ましくない場合、成績に反映することがある。

＜受講に当たっての留意事項＞

情報処理演習 C2程度のプログラミング技術を持っていることが必要である。

＜研究室配属の学生選択基準＞

情報論理、情報処理演習 C1、C2の(1)履修状況、(2)出席状況、(3)成績、さらに(4)研究室訪問での内容、(5)志願書の志願理由、を基準に決定する。それぞれの括弧内の数字は、基準として優先する順位である。

＜学習到達目標＞

- ・社会や人に対する課題を発見し、その課題を克服するシステムを考案する。
(卒研 1：研究テーマ発表会10%)
- ・プログラミング技術の基礎を身に付ける。
(卒研 1：プログラミング演習80%)
- ・システム構築に対して、自ら必要な技術を調査、習得することを学ぶ。
(卒研 1：卒研進捗発表会10%、卒研 2：卒研進捗の報告会100%、卒研 3：卒研進捗の報告会50%)
- ・構築したシステムの客観的な評価を実施することを学ぶ。
(卒研 3：卒研進捗の報告会50%)

(関連する学習・教育到達目標：F)

【西山研究室】A 分野

＜授業目的＞

- ① 卒業研究の意義は研究のプロセス（テーマの設定から成果の発表まで）を体得することにある。このプロセスは、研究限らず広くビジネスの一般でも極めて重要である。
- ② コンピュータを使ったシステムをソフトウェアシステムと呼ぶが、現代においてソフトウェアシステムビジネス及び個人生活の隅々にまでいきわたっている。
- ③ ソフトウェアシステムは、人間活動の一部をコンピュータに肩代わりさせるものであるため、人間の活動を正確に理解せずにソフトウェアシステムを作っても本来望んだようには動作しない。また、人間とコンピュータは異なった原理で動作（行動）しているため、人間の活動に何の変更も加えずにコンピュータに肩代わりさせても、やはり本来望んだようには動作しない。そこで、本研究室の卒業研究の主テーマは、次のように定める。
 - (ア) 人間活動の理解。ただし、単に人間活動といった場合は、きわめて広範囲の活動を指すことになる。このため、本研究室卒業研究では、主としてビジネス活動に制約することとする。
 - (イ) 人間活動とソフトウェアシステムの最適な関係に関する研究"である。ただし、単に人間活動といった場合は、きわめて広範囲の活動を指すことになる。
- ④ この枠組みの中で、各自研究テーマを設定し、問題を分析し、その解決案を提案し、その有効性を検証するという一連のプロセスを実行する。ただし、学生が独自の良いテーマを提案した場合、学生と西山の協議によりこれをテーマとすることも妨げない。
- ⑤ 卒業研究の最初に本研究室の研究の共通基盤となる"人間活動とソフトウェアシステムの係わり"をテーマに、人間活動にとってソフトウェアシステムとは何か、課題は何かを学ぶ。併せて、問題分析法、検討結果のまとめ方についても学ぶ。
- ⑥ 卒業研究のテーマは卒業研究の大枠の中で自分のアイディアや問題意識に基づいて選定する。卒業研究は、適切な課題設定、仮説設定・検証、各種手法（技法）を用いた問題分析・評価、整理によって実施する。
- ⑦ 研究成果は通常は「研究論文」にまとめる。新規事業的発想であれば「新規事業開発の事業計画書」にまとめる。

＜授業内容＞

卒業研究1：卒業論文執筆のための基礎知識の獲得と"人間活動とソフトウェアシステムの関係"の理解

- ① 論理的に考えるとはどういうことかを実習を通して体得する
- ② 論文とは何か、卒業論文とは何か、世の中でよいと評価されている論文とはどのような内容をもつのかを、指定された論文を読み、各自で分析整理して、プレゼン形式で報告する。
- ③ ソフトウェアシステムで、困難に陥ったシステムの例を調査し、ソフトウェアシステムが正しく動作するというのはどのようなことかを理解し、その理解を整理してプレゼン形式で報告する。
- ④ ビジネス分析の知識を整理したBABOK（Business Analysis Body of Knowledge）を読んで分析し、理解をプレゼン形式で報告するとともに、各種ツールについても習得する
- ⑤ 仮の論文テーマを設定する。

卒業研究2：研究テーマに対する課題分析・評価及び解決法の検討

- ① 予備調査により、課題を調査し、卒業論文のテーマを設定する
- ② 各自の研究テーマに関する研究の推進。すなわち、研究テーマに関連する先行事例や先行研究に関する文献・資料を調査・評価してその結果を発表し、各自の独自の問題を明確に設定する。
- ③ 問題の根本原因とそれを取り除く方法（解決案）を整理（仮説立案）し、発表する。
- ④ 研究進捗状況を報告し、内容に関する討論（研究計画～中間発表）を行う。

卒業研究3：各自の研究結果のとりまとめ

- ① 研究の進捗状況についての発表し、検討状況および検討内容に関して討論を行う。
- ② アンケート調査、インタビュー、シミュレーション実験、あるいは試作によって収集したデータを分析して問題点の所在を明らかにし、その解決案提示し（仮説）、さらにその有効性を実証的に検証する。
- ③ 各自の研究上の問題点とその解決策を研究室内の卒論中間報告会等で報告し、相互にコメント・議論する。卒業論文の構成内容、文章表現など、研究のまとめ方と成果の発表については個別に指導する。また、優秀な研究は、情報システム学会等の研究発表会等への報告も視野に入れる。

＜成績評価＞

1) 卒業研究1（演習）の評価要素：

- ・研究会（授業）における討論への参加態度（40%）
- ・日常の研究態度と研究への取り組み姿勢、および研究会（授業）での報告・発表の内容（20%）
- ・ソフトウェアシステムの問題点の理解（20%）
- ・BABOK に対する理解（20%）

- 2) 卒業研究2（演習）の評価要素：
 - ・研究会（授業）における討論への参加態度（40%）
 - ・設定テーマの妥当性、説明性（60%）
- 3) 卒業研究2（演習）の評価要素：
 - ・研究会（授業）における討論への参加態度（40%）
 - ・設定テーマの妥当性、説明性（60%）
- 4) 卒業論文或いは新規事業計画（成果物）の評価要素（以下全体100%）
 - ・問題設定の具体性：解決すべき問題が何であるかが明確に定義されていること。
 - ・論理の一貫性：文章／表現が明快かつ構造的であること。
 - ・新規性／独創性：自分の考え方／アイデア／事業コンセプトなどが提示できていること。
 - ・有効性：調査アンケートや実験データの分析などにより、説得力をもって客観的に有効性や事業性が示されていること。
- 5) 卒業論文発表の評価要素：
 - ・プレゼンテーションの構成スライドの表現法、口頭発表の明瞭性、質問への応答の的確性など（100%）

<学習到達目標>

①自ら情報を収集・整理し、問題を設定する。②スケジュールを立て、仮説を立てて問題解決にあたる。③解決法を論理的に考察するか、あるいは製作・実験等を行った結果に自らの見解を加えて解決法を案出する。④これらの解決法を整理された文章に記述する（論文、新規事業企画）。⑤論文、新規事業計画を発表する。⑥自己及び他者の発表に対して有効にコミュニケーションができる。

（JABEE－関連する学習・教育目標：F）

<授業の進め方>

- 1) 卒業研究1～3の期間は、卒業後のキャリア形成の第一歩を決める大事な時期でもある。そこで卒業研究では「研究会（授業）」で演習を行いながら、各自の「卒業研究遂行・卒業論文完成」と「進路決定・就職達成」を並行して指導する。これらの何れも、各人が自主的に自分の責任において行い、目標達成まで努力する。
- 2) 卒業研究3の履修生と卒業研究1の履修生が交流する機会を設け、テーマ設定や研究の進め方に関して意見交換を行い、相互に刺激を受けることができるようにする。

【藤瀬研究室】B 分野

<授業目的>

本研究室では健康スポーツ科学関連の分野について研究指導を行う。つまり、その内容は私たち人間にとって最も身近な「身体の組成や機能」に関する研究、「健康体力づくり」や「競技スポーツ」に関する研究、さらには健康の保持増進に関わる「医療システム」の問題についての研究にまで及ぶ。授業では興味のある事柄に関する文献等を精読するとともに卒業論文のテーマを決定し、実験・測定・アンケートによって必要なデータを収集し、統計的手法を用いて分析することなどを行い、最終的に卒業論文を完成させることを目的とする。以下に本研究室の過去の卒業論文などから主なキーワードを示した。

- ・身体関連：肥満度（体脂肪率、BMI、ウエスト・ヒップ比）、痩せ願望とボディイメージ
- ・体力関連：1RM（最大筋力）、筋持久力、VO2max（全身持久力）、エネルギー消費量、競技力
- ・健康関連：生活習慣病、運動不足、食生活、喫煙、性行動とAIDS、テクノストレス
- ・社会関連：オリンピック、少子高齢化、医療と介護、医療過誤と情報公開、道路交通法

- 1) 卒業研究1・・・健康スポーツ科学関連の文献抄読や実習により基礎知識を身に付ける。
- 2) 卒業研究2・・・卒業論文のテーマを決め、その研究目的及び研究方法を完成させる。
- 3) 卒業研究3・・・データ収集と分析、卒業論文の結果、考察、結語、及び要旨を完成させる。

<各回の授業内容>

- 1) 卒業研究1・・・1) ガイダンス
2) 情報検索（文献等収集のための検索方法を学ぶ：図書館）
3～4) 読書会（指定された書籍等を熟読して報告する）
5～6) ビデオ鑑賞（観賞後に感想や意見交換を行う）
7～10) 抄読会（研究論文等の文献をまとめて報告する）
11～14) 形態・体力測定実習
15) 卒業研究計画書の作成（現時点での考えをまとめる）
- 2) 卒業研究2・・・1～3) 卒業論文テーマの決定及び緒言の作成
4～8) 抄読会（論文テーマに関する文献をまとめて報告する）
9～10) ビデオ鑑賞（観賞後に感想や意見交換を行う）
11～15) 卒業論文の研究手法の作成及びデータ収集の予備テスト
- 3) 卒業研究3・・・1～4) 第1回卒業論文経過報告会のための準備と経過報告
5～9) 第2回卒業論文経過報告会のための準備と経過報告
10～13) 卒業論文の作成
14～15) 卒業論文発表会の準備と発表

<成績評価方法>

卒業研究1・2・3・・・演習点60点、課題点40点（遅刻等による減点あり）

<受講に当たっての留意事項>

課題やその他の活動に対して積極的・協力的に取り組み、遅刻や無断欠席をしない学生を望む。また、2年後期(3年時でも良い)に開講されている「生理機能と情報」を履修することが望ましい。

（関連する学習・教育到達目標：F）

【藤田研究室】A 分野 B 分野

＜授業目的＞

ICT の C はコミュニケーションです。情報を仕事や社会で使いこなすには、情報技術だけに頼るのではなく、人と人とのコミュニケーションを情報技術以上に重視することが大切です。当研究室では情報社会では忘れられがちな、社会人として最も大切な“対人コミュニケーションに長ける人材の育成”を目標とし、地域活動や卒業研究でのチーム連携を通して、コミュニケーション能力の育成をはかっていきます。「興味をもって」これらの活動に取り組む自発の姿勢があれば、社会人の基礎となる経験を積むことができます。

＜研究室の地域活動・海外プロジェクト＞

佐渡羽茂集落のお祭りに村民の一員として参加して能舞台活用と交流を促進する事業「佐渡夢プロジェクト」は当研究室が中心となって推進しており、メディアでも報道されています。この地域活動は2013年度から3年間、本学の「地域貢献事業」として佐渡市と合同で実施され、この事業には新潟大学と、本学市民講座受講の新潟市民も参加します。

本学学生教職員は「能ボランティア」として能楽を練習し、年5回の佐渡合宿（カルトピアに宿泊）、現地との交流に参加します。交通滞在費、中央キャンパスでの練習に要する経費は本学および佐渡市から補助を受けます。既に2012年から6名の研究室学生が能練習と合宿で地域交流に貢献しています。佐渡以外にも、新潟デジタルコンテンツ推進協議会の電子出版・イベント活動、市役所関連観光・地域ボランティア活動等に参加できます。「佐渡夢プロジェクト」は右の URL をチェックしてください。<http://gbs.nuis.jp/sado/>

海外ではマレーシアの大学および政府観光局が推進する観光 POI(Point of Interests) コンテンツ携帯配信プロジェクトにパートナーとして参加しており、地理情報サーバ運用、POI データベース構築では、4名の卒研究生が2年次から学科英語選択科目による口語練習および研究室でのサーバ・POI データ作成研修を受け、今年8月に実施される2週間のマレーシアプロジェクトに参加します。この活動は学科の海外研修と発展する可能性もあります。

これらの研究室地域・海外活動はメディアにて情報発信を行います。

＜授業内容＞

卒業研究1：3年前期のサブ卒研にて作成した研究計画にもとづき、序章の執筆を続け完成させます。毎週提出する論文執筆分をもとに教員との面談指導を行います。引用論文等体裁の指導も行います。また、先行研究、論文あるいは現地調査で得られたデータの収集、データ整理を終えます。3月下旬に第1回中間発表会を開催します（全員参加）。

卒業研究2：グループに分かれ、企業リサーチを行い、それぞれの企業の特徴、経営戦略等を分析してプレゼンテーション、逆インタビューの訓練を行い、調査能力およびコンセプチュアルスキル向上を目指します。卒業研究では集計表・グラフ等作成、統計処理を終え、7月中旬に「結果」の執筆を終えます。8月から、「考察」の執筆を開始します。また、9月中旬に第2回中間発表会を開催します（全員参加）。夏季休暇中は、メールにて卒論執筆分提出、添削等指導を繰り返します。

卒業研究3：論文の全体を再度チェックし、必要な修正を行います。「考察」をさらに発展させる指導を行い、論文全体の「まとめ」および「要旨」を作成します。本文以外の論文表紙、目次、図表リスト、参考文献、謝辞等を加え、卒業研究論文を完成させます。また、卒業研究発表会リハーサルを繰り返します。

＜サブ卒研の実施＞

藤田研究室に配属を希望する学生は以下の事項を遵守してください。

- ① 2年後期火曜4-5限にサブ卒研を行いますので、研究室配属希望者はこの時限を空けてください。「佐渡夢プロジェクト」「マレーシアプロジェクト」希望者は研修を行います。
- ② 3年前期火曜3限に、専門演習Bと連動して、卒業研究のサブ卒研を行います。先行研究および関連する本や論文を収集し、序章の執筆に取りかかります。研究に対象地域がある場合、生活、風土、産業、伝統等を調査します。
- ③ これらの多様な活動を消化するため、サブ卒研は春期・夏期休業期間中に行うこともあります。

＜卒業研究テーマに関わること＞

基本的に学生が自ら先行研究調査、情報収集、現地調査、解析、考察ができるテーマ研究内容であればどのような題材でも受け付け、分野は問いません。卒研究生が自らテーマをみつけるのが難しい場合は、具体的な題材を教員が提供します。

「佐渡夢プロジェクト」および「マレーシアプロジェクト」の活動を行うと同時に、佐渡やマレーシアに関わる卒業研究テーマを設定することも可能です。

＜成績評価＞

卒論執筆提出分6%×13回、中間発表会および卒論発表会の内容にて評価します。

<留意事項>

遅刻厳禁。卒業論文作成は日々の努力の積み重ねが結果となるため、卒研前日午後6時までに必ず指定枚数新規執筆分を nuis メールにて提出してもらいます。欠席する場合は、卒論指導代替日の希望および執筆分を添え、教員に直接連絡してください。

卒研では教員と対面で卒業研究進捗状況の確認・指導を行います。

サブ卒研曜日・時限に他の科目を入れるのは可能な限り避けてください。

卒研究生には準社会人として接します。責任と自覚をもって卒研に参加してください。

<教員の専門分野>

- ① GIS（地理情報システム）歴史・観光 POI（Point Of Interests）
- ② 多変量解析による顧客選好性分析
- ③ 環境データ駆動型低炭素社会システムと社会実装

<学習到達目標>

- 1 社会人として最も重要な対人コミュニケーションを育成する（特に地域活動の中で）
- 2 地域活動を行うことにより、地域を理解し、交流を深め、地域とのつながりをもつ
- 3 卒業研究プロジェクトを遂行することにより科学的な手法を身につける

（関連する学習・教育到達目標：F）

【山下研究室】C分野

＜授業目的＞

山下研究室では、管理会計と原価計算を中心とした会計学について研究します。

管理会計は、企業の目標を達成するために会計情報を認識、測定、集計、分析、解釈する一連のプロセスです。それゆえ、財務会計が企業外部への報告を目的とするのに対して、管理会計では内部報告目的が重視されます。また、コンピュータの性能と通信技術が発展したことにより、経営情報システムと会計との結びつきが一層強くなっています。なお、主な周辺学問領域として、原価計算、簿記学、経営学、生産管理など挙げられます。

管理会計で最も大切なことは、「会計情報を利用する」ことです。そして、企業の目標とは究極的には利益を獲得することです。授業では、会計情報を利用してより多くの利益を獲得する方法について議論します。

＜授業内容＞

卒業研究1

- ・管理会計のテキストを輪読して、基本的な知識を身につけます。
- ・卒業論文のテーマを検討します。

卒業研究2

- ・卒業研究1よりも発展的な内容のテキストを輪読します。
- ・卒業論文の構成について検討し、中間発表を行います。

卒業研究3

- ・卒業論文の構成及び内容について、個別に指導を行います。
- ・卒業論文発表会に向けての指導を行います。

＜成績評価＞

卒業研究1：課題レポート50%、報告及び討論50%で評価します。

卒業研究2：課題レポート50%、報告及び討論50%で評価します。

卒業研究3：課題レポート80%、報告及び討論20%で評価します。

卒業論文：卒業論文70%、卒業論文発表会20%、データベース登録5%、卒業論文執筆日誌5%で評価します。但し、4項目の全てを行った場合のみ、成績評価の対象とします。

＜留意事項＞

山下研究室では、以下のような学生、またはこれから以下のようにになりたい学生を求めています。

- ・世の中の様々な現象に深く関心を持っている人。毎日の通学で見る町並みの移り変わりなどの、身近なことでもいいのです。
- ・世の中の流行に惑わされない人。自分自身の考えを持つことが大切です。
- ・自動車・電機・機械などの製造業（物づくり）が日本の産業の中心であると考えている人。情報、金融、その他のサービス業、農業などももちろん重要なのですが、それらの産業は、製造業が築いた確固たる土台の上で成り立っています。そして、管理会計や原価計算の基本は製造業です。
- ・管理会計を真剣に学ぼうという意欲のある人。今現在の簿記や会計に関する知識や資格の有無は、選考には影響しません。但し、研究室配属後は勉強してもらいます。

山下研究室に配属が決定した後の留意事項は、以下のとおりです。

- ・卒業研究1が始まる前までの間は、日商簿記検定のテキストを使用して自習し、会計学の基本的な知識を修得してください。分からないところがあれば、個別に指導を行います。
- ・山下担当の講義科目である、財務会計と管理会計を必ず履修してください。
- ・やむを得ない理由で授業を欠席する場合は、事前に連絡をしてください。無断欠席は好ましくありません。授業に毎回出席することが、管理会計に限らず、専門的な知識を身につけることの早道です。

＜学習到達目標＞

管理会計について理解し、深く関心を持ち、大学の中だけではなく日常生活全般においても知的好奇心を絶えずはたらかせて、その中から自分自身が疑問に思っている問題点を明らかにし、それを管理会計の論文として表現できるようになることを目標とします。

（関連する学習・教育目標：F）

MEMO
